年報の発刊にあたって

令和2（2020）年度は、独立行政法人国立文化財機構の第４期５ヵ年中期計画（2016～2020年度）の最終年度にあたりますが、新型コロナウイルス感染症への国・東京都・文化庁の対応を踏まえ、国立文化財機構本部の方針に従いつつ業務を推進いたしました。緊急事態宣言下においては自宅待機を原則とし、解除後も出勤を５割程度といたしました。これにより特に海外との対面による交流事業は断念せざるをえなくなりましたが、可能な限りオンライン会議を活用するなど対応に努めました。

今期の中期計画では、東京文化財研究所の社会的使命として、①我が国の文化財研究を、有形・無形文化財等を対象に、基礎的なものから先端的、実践的なものまで総合的に行い、その成果を国内外に発信して、我が国の文化財研究の拠点としての役割を果たす。②文化財担当者の研修、地方公共団体への専門的な助言を行い文化財保護に貢献する。③保存科学・修復技術に関する我が国の中核としての役割を果たす。④世界の文化遺産保護に関する国際的な研究交流、保護事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用等を実施し、文化遺産保護における国際協力の拠点としての役割を担う、ことと定めています。

この使命を全うするため、当研究所に置かれた４研究部門のうち、文化財情報資料部では美術工芸品等に関する基礎的な研究業務に加え、有形・無形の文化財に関する様々な情報の収集と発信に関する調査研究に力点をおいて業務を推進しています。無形文化遺産部では、従来の伝統的な音楽や演劇、芸能、工芸技術といった無形文化財や民俗芸能、風俗・慣習等に加え、民俗技術などの無形民俗文化財の調査研究を進めるとともに、音声・映像による記録を作成し、文化財の保存に必要な用具や資材の生産技術等に関する保存技術についても調査研究を進めています。また、保存科学研究センターでは、文化財の保存に関する科学的な調査研究、修復のための材料・技術に関する実践的な基礎研究を行うとともに、国立文化財機構における保存修復業務に関する一体的な研究環境の構築を推進しています。さらに、文化遺産国際協力センターでは、アジア諸国からの要請に基づいて文化財専門家養成や保存修復に関する技術移転等、相手国の実情に応じた共同研究や研修事業を行うなど文化の力による国際貢献に力を注いでいます。おかげ様で各部門の研究業務が順調に進展しているといえます。

さて、東日本大震災から早くも10年、熊本地震から5年が経ちました。令和2年10月には国立文化財機構本部が中心となって開始した文化財防災ネットワーク推進室を発展的に解消し、新たに本部に「文化財防災センター」が設置され、当研究所も東日本ブロックの中核拠点として位置づけられました。引き続き近年の自然災害等の教訓を活かし、これまでの救援活動を分析し被災文化財の救援に関する技術や知識などの情報を取りまとめるとともに、無形文化遺産も含めて予防や減災の観点も取り入れた文化財の保存方法に関する研究を研究所全体で取り組んでまいります。

ところで、世界各国から要請も強い国際的な文化遺産保護支援に関する調査研究活動を行うにあたっては、国内の関係機関や関連分野の専門家との協力体制を充実・発展させることが肝要です。その意味で、「文化遺産国際協力コンソーシアム」（平成18年創設）の存在は大きく、その活動がさらに広まることが嘱望されており、事務局運営を文化庁より任されている当研究所としてもその活動に積極的に関わって行きたいと考えています。

今後とも、より効率的かつ効果的な組織運営を心がけながら、当研究所が文化財保護に関する総合的な調査研究の拠点施設としてさらに発展するよう努力してまいりますので、皆様の御支援、御協力をお願い致します。

令和３（2021）年6月

独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所
所長　齊 藤 孝 正

1．機 構　5

1．組織図 …… 7

2．組織の概要と職員 …… 8

(1)　研究支援推進部 …… 8
(2)　文化財情報資料部 …… 9
(3)　無形文化遺産部 …… 10
(4)　保存科学研究センター …… 11
(5)　文化遺産国際協力センター …… 13
(6)　特任研究員 …… 14

2．年度計画及びプロジェクト報告　15

1．年度計画(令和２年度)とプロジェクトとの対応 …… 17

新型コロナウイルス感染拡大と東京文化財研究所－令和２年度の状況－　33

2．プロジェクト報告 …… 36

① 有形・無形の文化財に関する調査研究事業 …… 39
② 保存修復に関する調査研究事業 …… 45
③ 国際協力・交流等に関する事業 …… 52
④ 情報収集・成果公開に関する事業 …… 57
⑤ 刊行物に関する事業 …… 69
⑥ 指導助言・研修等に関する事業 …… 76

3．外部資金等による研究活動　81

1．科学研究費助成事業 …… 83

2．受託調査研究・外部機関との共同研究及び外部資金による研究　111

3．その他の調査研究 …… 128

4．成果公開 …… 130

4. 個人の研究業績 133

5. 研究交流 155

6. 資 料 157

1．主な所蔵資料 …… 159

1．図書資料 …… 159
2．その他 …… 160

2．研究所関係資料 …… 161

1．設立の経緯 …… 161
2．年代別重要事項 …… 161
3．歴代所長（昭和５年～令和２年度）…… 164
4．名誉研究員 …… 165
5．令和２年度予算等 …… 166

3．東京文化財研究所関係事業索引 …… 171

1. 機 構

1．組織図 …… 7

2．組織の概要と職員 …… 8

(1) 研究支援推進部 …… 8

(2) 文化財情報資料部 …… 9

(3) 無形文化遺産部 …… 10

(4) 保存科学研究センター …… 11

(5) 文化遺産国際協力センター …… 13

(6) 特任研究員 …… 14

1．組　織　図

独立行政法人国立文化財機構　東京文化財研究所
Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Heritage
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

2．組織の概要と職員

所長　齊藤 孝正（日本陶磁史）、副所長　山梨 絵美子（日本近代絵画史）＊1

＊1 令和 3 年3月31日付退職

（1）　研究支援推進部

〈組織概要〉

研究支援推進部は、東京文化財研究所の事務部門として、管理課に総務係、企画渉外係、財務係、契約係を置き、総務、人事、他機関との渉外、国際交流、財務管理、会計、施設管理等の業務を通じ研究支援を行っている。

本年度も継続して、各係内の担当業務の整理を行うなど合理化を検討・実施し、各研究部門との連携を深め、研究所の円滑な運営に努めた。

総務係

東京文化財研究所における業務方法書の変更、中期計画及び年度計画の取りまとめ、事業年度の業務実績についての評価委員会の評価に関する事務を行っている。また、情報公開に関する事務、秘書業務に関する事務、文書の授受・発送に関する事務、文化庁等の他機関、法人本部及び各施設並びに所内の連絡調整に関する事務、人事管理に関する事務（アソシエイトフェロー、有期雇用職員、客員研究員、調査・研究アシスタントの任免に関する事務を含む）、共済組合に関する事務、栄典及び叙勲に関する事務等を行っている。

企画渉外係

海外渡航に関する事務、研修及び国際研究集会等の実施に関する事務、国際交流等に係る政府機関及び関係団体との連絡調整に関する事務等を行っている。また、外部資金に関する事務、在外日本古美術品修復協力事業に関する事務、寄付金の受入、研究所視察及び見学の受入と対応、所蔵の写真、出版物等の使用許可に関する事務、規定の制定・改廃に関する事務等を行っている。

財務係

財務諸表の作成に関する事務、決算報告書の作成に関する事務、監事及び会計監査人の監査に関する事務、予算・決算に関する事務、資金管理及び出納に関する事務等を行っている。

契約係

物品及び役務の調達、契約の執行に関する事務、給与計算及び給与の支払いに関する事務、諸謝金及び、旅費の執行に関する事務、物品、建物及び設備等の管理に関する事務等を行っている。

研究支援推進部長	川島美奈子	
管理課長	安達佳弘	
室　　長	日高信二	＊1
総務係長	井上裕介	
事務補佐員	並木沙保里	
事務補佐員	荻堂惟智乃	＊2
事務補佐員	桜井春香	＊3
事務補佐員	勝田こと	＊4
事務補佐員	内山海優	＊5
事務補佐員	岡﨑瑠美	＊1
企画渉外係長	三本松俊徳	
任期付専門職員	廣原大樹	
事務補佐員	石川絵梨子	
事務補佐員	松澤和恵	＊6
事務補佐員	上野山礼	＊7

財務係長	日高信二	＊1
事務補佐員	岸　薫美	
事務補佐員	坂田茉梨衣	
事務補佐員	高畠さやか	＊8
契約係長	鈴木道夫	＊9
事務補佐員	安藤　遥	
事務補佐員	辻　光紗	
事務補佐員	田中亜純	
事務補佐員	吉岡かいな	＊2
事務補佐員	木村諒子	＊10
事務補佐員	白木真理	＊11
事務補佐員	溝口径子	＊11
事務補佐員	福田里美	＊12
事務補佐員	高山尚美	＊13
事務補佐員	田中有花	＊14

＊1 令和 3 年 3 月 31 日付退職
＊2 令和 2 年 4 月 1 日付採用
＊3 令和 2 年 10 月 1 日付採用
＊4 令和 2 年 10 月 31 日付退職
＊5 令和 3 年 3 月 1 日付採用
＊6 令和 2 年 10 月 14 日付退職
＊7 令和 2 年 11 月 24 日付採用
＊8 令和 2 年 12 月 1 日付採用
＊9 令和 2 年 4 月 1 日付東京大学から異動
＊10 令和 2 年 4 月 15 日付退職
＊11 令和 2 年 7 月 1 日付採用
＊12 令和 2 年 9 月 30 日付退職
＊13 令和 2 年 10 月 16 日付退職
＊14 令和 2 年 11 月 1 日付採用

（2） 文化財情報資料部

〈組織概要〉

文化財情報資料部は、文化財に関する調査研究を実施するとともに、調査研究の成果・情報についてのアーカイブ化を進め、適した情報インフラストラクチャを整備し、研究の成果・情報の適宜公開を行う。また国内外の研究機関との研究交流を実施する。調査研究においては、1）黒田清輝（1866 - 1924）の遺言により造られた黒田記念館に設置された美術研究所以来の黒田周辺の作家等との交流を中心とした近現代作品の研究を進めるとともに、2）日本及び東アジアの美術に関する調査研究を行い、美術史研究に資する高質な資料や情報を作成・提供する。また、3）時代や地域などにとらわれない横断的な広領域にわたるテーマを設定し、人文学のほか、自然科学的研究手法の応用を進め、多角的な視点から研究を進める。あわせて、黒田記念館における作品と研究成果の展示について当部が担当する。4）研究情報のアーカイブ化においては、文献資料、過去の調査記録等のデジタル化を推進し、研究のための閲覧促進を目的とする画像データベースを作成・運用する。画像資料にとどまらず文献資料及び研究情報を付加した文化財の専門的アーカイブを構築する。5）研究成果の公開の一環として、『美術研究』（年 3 冊）、『日本美術年鑑』（年 1 冊）ほかの公刊、オープンレクチャーを開催する。所内各部門の研究情報の共有化のために総合研究会を企画・開催し、各年度の研究や事業を総括した年報編集の事務を取り扱う。6）研究情報発信のため、所内広報委員会の情報システム部会ならびにアーカイブ委員会下にあるアーカイブズ・ワーキンググループ協議会を運用・管理し、ウェブサイト及び外部公開データベースの充実を図る。さらに、資料閲覧室で架蔵図書等の諸資料の公開閲覧を担う。

文化財情報研究室

情報システムセキュリティの確保に留意しつつ、調査研究及びウェブを活用した成果公開のための情報基盤の整備を行うとともに、文化財情報データベースを拡充する。また、ウェブサイトの構築・運用を通じて研究成果公開を行う。さらに、文化財情報及び情報技術の文化財保護への活用について研究を行う。

画像情報室：光学理論やデジタル技術を応用した最先端の画像形成技術を開発・駆使し、視覚的な研究情報を提示する。

文化財アーカイブズ研究室

文化財に関する画像や図書等の情報・資料を収集・整理し、文化財情報統合アーカイブを作成し、全所的にとりまとめて公開する。

資料閲覧室：受け入れた文化財関連の図書や定期刊行物、展覧会カタログ、写真資料などを整理し、月・水・金曜日に一般の利用者に公開するほか、各種の書誌や研究情報のデータベースを作成する。また、所蔵資料のデジタル化と目録作成を進め、提供する。

日本東洋美術史研究室

江戸時代までの日本と東アジアの美術を研究する。また、美術の価値形成の多様性を解明するため、美術史研究のための資料学的な基盤を整備する。

近・現代視覚芸術研究室

明治以降の日本美術を研究する。近現代美術に関わる研究資料を収集・整理し、研究手法を開発するとともに、現代美術の動向を調査・研究する。

広領域研究室

美術のジャンルや時代、地域を横断する課題に取り組み、文化財に関わる諸分野と連携して、広い視野から文化財を研究し、その材料・技法・制作過程等を明らかにする。

文化財情報資料部長	塩谷　純	（日本近代絵画史）
文化財情報研究室長	二神葉子	（考古科学）
文化財アーカイブズ研究室長	江村知子	（日本絵画史）
日本東洋美術史研究室長	小林達朗	（日本中世絵画史）
近・現代視覚芸術研究室長	塩谷　純	（日本近代絵画史）
広領域研究室長	小林公治	（物質文化史）
主任研究員	小野真由美	（日本近世絵画史）
主任研究員	安永拓世	（日本近世絵画史）＊1
主任研究員	橘川英規	（美術資料）＊1
研　究　員	小山田智寛	（美学・情報学）
研　究　員	米沢　玲	（仏教美術史）
専 門 職 員	城野誠治	（画像情報・文化財写真）
アソシエイトフェロー	野城今日子	（日本近現代彫刻史）
アソシエイトフェロー	中村亮介	（音楽学・情報システム）＊2
アソシエイトフェロー	谷口毎子	（画像形成）＊3
研究補佐員	谷口毎子	（画像形成）＊4
研究補佐員	安岡みのり	（ウェブ作成）
研究補佐員	尾野田純衣	（美術資料）
研究補佐員	寺﨑直子	（日本絵画史）
研究補佐員	大前美由希	（現代美術）
研究補佐員	田村彩子	（資料保存）
研究補佐員	阿部朋絵	（美術資料）

＊1 令和 2 年 4 月 1 日付昇任
＊2 令和 2 年 4 月 1 日付採用、令和 3 年 3 月 31 日付退職
＊3 令和 2 年 11 月 1 日付採用

研究補佐員	鈴木良太	（日本近代絵画史）
研究補佐員	磯山浩美	（日本絵画史）＊2
研究補佐員	大谷優紀	（東洋美術史）＊5
研究補佐員	藤井糸子	（データベース）＊5
研究補佐員	山本祥子	（美術資料）＊5
研究補佐員	酒井かれん	（画像形成）＊5
客員研究員	三上　豊	（近現代美術）
客員研究員	丸川雄三	（情報学）
客員研究員	田中　潤	（近代史料）
客員研究員	片山まび	（東洋陶磁史）
客員研究員	田中　淳	（日本近代絵画史）
客員研究員	齋藤達也	（フランス近代美術）
客員研究員	永崎研宣	（人文情報学・仏教学）
客員研究員	津田徹英	（日本彫刻史）
客員研究員	田所　泰	（日本近代美術史）＊6
客員研究員	中野照男	（東洋絵画史）＊6
客員研究員	川瀬由照	（日本彫刻史）＊5
兼務	久保田裕道	（無形文化遺産部）
兼務	西　和彦	（文化遺産国際協力センター）
兼務	早川典子	（保存科学研究センター）
併任	皿井　舞	（東京国立博物館）

＊4 令和 2 年 4 月 30 日付退職
＊5 令和 2 年 4 月 1 日付採用
＊6 令和 3 年 3 月 31 日付退職

（3） 無形文化遺産部

〈組織概要〉

無形文化遺産部は、無形文化財（伝統的工芸技術、古典芸能）、無形民俗文化財（風俗慣習、民俗芸能、民俗技術）及び文化財保存技術という、日本における無形文化遺産の全体を対象として、その保存継承に資する基礎的な調査研究を実施している。内容は多岐にわたっており、保護対象の確定や適切な保護手法の確立のためには、無形文化遺産を構成する諸要素の専門的な調査・研究が重要である。また、人によって伝承されるために、年代や社会情勢の変化に伴って変容する要素も大きい。このため、文献的研究の蓄積に加えて、伝承の実態に即した調査研究を実施している。

重要な保護手法である音声・映像による記録については、その作成の実施とともに新たな手法開発についての研究を行っている。無形文化遺産保護にとって、音声・映像記録は、記録保存的役割はもちろんのこと、その伝承ツールとしても重要な意味を持つ。このため、無形文化遺産部では、他機関では行うことのできない希少演目等の記録保存事業を実施すると同時に、既存の記録活用のために、デジタルアーカイブ構築に向けての研究を行っている。

このほかに、無形文化遺産分野についてアジアを中心に海外との研究交流も実施している。

無形文化財研究室

古典芸能、伝統的工芸技術などの無形文化財、及び文化財保存技術について、伝承実態の調査や技法技術の変遷の研究など、その保護に資するための基礎的調査研究を行っている。

無形民俗文化財研究室

風俗慣習、民俗芸能、及び民俗技術などの無形民俗文化財について、その保護に資するための基礎的調査研究を、現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等の実地調査に基づいて行っている。また、映像記録作成、公開事業等、現実的な問題について全国の関係者との協議を実施し、その対策の検討も行っている。

音声・映像記録研究室

無形文化遺産に関する記録のアーカイブ化、記録作成手法について研究を行っている。また無形文化財、無形民俗文化財の現状を把握し、後世へ継承するために、それらの音声・映像記録を作成している。

無形文化遺産部長	山梨絵美子	（日本近代絵画史）＊1
無形文化財研究室長	前原恵美	（古典芸能）
無形民俗文化財研究室長	久保田裕道	（民俗芸能）
音声映像記録研究室長	石村　智	（文化遺産学）
主任研究員	今石みぎわ	（民俗学）
アソシエイトフェロー	佐野真規	（文化財防災センター）（映像アーカイブ）＊2
研究補佐員	牛村仁美	（工芸技術）
研究補佐員	金　昭賢	（古典芸能）
研究補佐員	鈴木昂太	（民俗芸能）＊3
研究補佐員	中田翔子	（映像人類学）＊3
客員研究員	星野厚子	（古典芸能）
客員研究員	齊藤裕嗣	（古典芸能・民俗芸能）
客員研究員	山崎　剛	（工芸技術）
客員研究員	谷垣内和子	（古典芸能）
客員研究員	伊藤　純	（民俗学）
客員研究員	俵木　悟	（民俗芸能）
客員研究員	松山直子	（工芸技術）
客員研究員	今岡謙太郎	（古典芸能）
客員研究員	永井美和子	（修復技術）
客員研究員	大西秀紀	（古典芸能）
客員研究員	菊池健策	（民俗学）
客員研究員	森下愛子	（工芸技術）
客員研究員	宮田繁幸	（民俗芸能）
客員研究員	神野知恵	（民俗芸能）
客員研究員	谷垣内和子	（古典芸能）
客員研究員	橋本かおる	（古典芸能）＊1
客員研究員	原田一敏	（工芸技術）＊1
客員研究員	鎌田紗弓	（古典芸能）＊1
客員研究員	宮澤京子	（文化財映像学）＊1
客員研究員	赤井紀美	（近代演劇）＊1

＊1 令和 3 年 3 月 31 日付退職
＊2 令和 3 年 3 月 31 日付文化財防災センターより配置替
＊3 令和 2 年 4 月 1 日付採用

（4） 保存科学研究センター

〈組織概要〉

保存科学研究センターは、文化財の保存科学・修復技術に関する調査・研究を行うナショナルセンターとしての役割を担っている。科学的な方法を用いて、文化財を取り巻く環境の調査や文化財の材料及び構造に関する調査を行い、文化財の保存や理解に役立つ知見の集積・発信を行っている。また、文化財の置かれた環境履歴を調査し、適切な修復材料・技術の改良・開発、評価及びメンテナンス手法に関する研究を行っている。得られた研究成果は紀要『保存科学』を通じて、すみやかに公開している（ウェブにてフリーアクセスコンテンツ）。これらの知見をもとに、「文化財の虫菌害に関する調査・助言」「文化財の材質・構造に関する調査・助言」「美術館・博物館等の環境調査と援助・助言」「文化財の修復及び整備に関する調査・研究」の4項目について、地方公共団体に対して協力を行い、地域の文化財保護の質的向上に寄与している。また、国立文化財機構内の2研究所・4博物館に加え、2018（平成30）年7月に設立された文化財活用センターの保存修復担当の研究員を保存科学研究センターの併任とし、文化財の構造・材質調査や文化財の保存管理上の課題解決等について、相互に連携して、随時取り組む体制を構築している。また、2020（令和2）年10月に設立された文化財防災センターの東日本ブロック中核拠点として、地域防災体制の構築や多様な文化財の防災・減災のための技術開発等に取り組んでいる。

保存環境研究室

博物館・美術館など展示・収蔵施設における文化財の安全な保存環境の確立のため、温度湿度、光、空気汚染物質などが文化財に与える影響を調べ、劣化を予防する研究を行っている。劣化因子の測定方法の基準化を図るとともに、各施設の担当者と連携し、現場での環境モニタリングや、改善のための実証研究も行っている。LED・有機ELなどの新しい光源の展示・収蔵環境に及ぼす影響や照明効果などに関する研究に重点を置いている。

分析科学研究室

様々な科学的分析手法によって文化財の構造・材質を調査し、劣化状態を含む文化財の物理的・化学的な

特徴を明らかにする研究を行っている。X線や光を使った非破壊的な手法を中心に、各種可搬型機器を用いた調査方法の開発とその応用によって、文化財の構造・制作技法のみならず美術史・工芸史・考古学等との連携により制作年代・生産地研究などへ視野を拡げ、文化財の総合研究を実現、牽引している。

生物科学研究室

昆虫やカビなど、生物による文化財の劣化機構の解明とその防除方法に関する調査研究を行っている。博物館や美術館などの展示・収蔵環境にある文化財、歴史的建造物や古墳などの屋外にある文化財の生物が原因となる劣化現象の発生原因と解決方法について調査研究を行うとともに、生物が発生・繁殖することによる観覧者や作業者などの人体への影響も視野に入れた対策の開発に力を入れている。

修復計画研究室

文化財の持つ本質的な価値をできるだけ改変することなく次の世代へと伝えていくために、その文化財を構成する材料の特性を確認し、それが置かれている環境を調査し、適切な修復と保存の方針を策定していくための研究を行っている。

修復材料研究室

膠や漆などの伝統的材料、近代になり開発され使用されてきたものなど、従来文化財修復に使用されてきた修復材料の評価と改良を行うとともに、新しい修復材料の開発評価、及び修復への適用方法の検討を行っている。併せて、安全な文化財修復を実現するために、文化財の伝統的制作技法や材料製作に関する調査研究を行っている。

近代文化遺産研究室

工場・橋梁などの大型構造物、航空機、鉄道車両などの機械器具、フィルムや洋紙などの工業製品など、日本の近代化を担ってきた文化遺産に関して、保存修復のための情報収集、技術・材料の調査及び開発を行い、次世代に適切に伝えていくための保存手法・保存計画のあり方等を研究している。

保存科学研究センター長	早川泰弘	(分析化学) *1
保存環境研究室長	秋山純子	(保存科学) *2
分析科学研究室長	犬塚将英	(物理計測)
生物科学研究室長	佐藤嘉則	(微生物生態学)
修復計画研究室長	朽津信明	(地質学)
修復材料研究室長	早川典子	(高分子化学)
近代文化遺産研究室長	早川泰弘	(分析化学) *3
研　究　員	倉島玲央	(有機化学)
研　究　員	水谷悦子	(環境工学) *4
アソシエイトフェロー	中村　舞	(保存科学) *5
アソシエイトフェロー	小峰幸夫	(応用昆虫学) *6
アソシエイトフェロー	藤井佑果	(東洋絵画修復) *7
アソシエイトフェロー	林　美木子	(文化財防災センター) (保存科学) *8
研究補佐員	山府木碧	(漆工品保存修復) *9
研究補佐員	鳥海秀実	(絵画保存修復) *8
研究補佐員	岡部迪子	(保存科学)
研究補佐員	相馬静乃	(保存科学)
研究補佐員	白石明香	(保存科学) *5
研究補佐員	中村恵里花	(染色技術) *5
研究補佐員	高橋佳久	(保存科学) *10
研究補佐員	紀　芝蓮	(保存科学) *11
研究補佐員	小野寺裕子	(保存修復) *12
研究補佐員	矢花 (篠崎) 聡子	(分子生物学) *12
研究補佐員	山田祐子	(保存科学) *13
研究補佐員	内田優花	(保存科学) *14
事務補佐員	小安友利恵	
客員研究員	酒井清文	(酵素工学)
客員研究員	藤井義久	(木材科学)
客員研究員	北原博幸	(建築環境学)
客員研究員	吉澤　望	(建築環境工学) *8
客員研究員	本多貴之	(高分子分析)
客員研究員	山本記子	(装潢修理技術)
客員研究員	貴田啓子	(保存科学)
客員研究員	岡田　健	(文化財学)
客員研究員	片山葉子	(環境微生物学)
客員研究員	宇髙健太郎	(東洋絵画材料)
客員研究員	苅田重賀	(航空史)
客員研究員	簡　佑丞	(土木史)
客員研究員	古田嶋智子	(保存科学)
客員研究員	稲葉政満	(保存科学) *5
客員研究員	山内泰樹	(視覚情報処理) *8
連携併任	冨坂　賢	(東京国立博物館)
連携併任	荒木臣紀	(東京国立博物館)
連携併任	和田　浩	(東京国立博物館)
連携併任	瀬谷　愛	(東京国立博物館)
連携併任	横山　梓	(東京国立博物館)
連携併任	大原嘉豊	(京都国立博物館)
連携併任	福士雄也	(京都国立博物館)
連携併任	降幡順子	(京都国立博物館)
連携併任	鳥越俊行	(奈良国立博物館)
連携併任	木川りか	(九州国立博物館)
連携併任	志賀智史	(九州国立博物館)
連携併任	渡辺祐基	(九州国立博物館) *5
連携併任	高妻洋成	(奈良文化財研究所)
連携併任	脇谷草一郎	(奈良文化財研究所)
連携併任	田村朋美	(奈良文化財研究所)
連携併任	松田和貴	(奈良文化財研究所)
連携併任	柳田明進	(奈良文化財研究所) *5
連携併任	吉田直人	(文化財活用センター)

客員研究員	大場詩野子	（油画修復）＊8

＊1 令和 2 年4月1日付昇任
＊2 令和 2 年4月1日付配置替
＊3 令和 2 年4月1日付兼務
＊4 令和 3 年1月1日付配置替
＊5 令和 2 年4月1日付採用
＊6 令和 2 年9月30日付退職
＊7 令和 2 年6月30日付退職

連携併任	間渕　創	（文化財活用センター）

＊8 令和 3 年3月31日付退職
＊9 令和 2 年10月31日付退職
＊10 令和 2 年8月1日付採用
＊11 令和 2 年8月21日付採用
＊12 令和 2 年9月1日付採用
＊13 令和 2 年10月1日付採用
＊14 令和 2 年10月1日付採用、令和 3 年1月31日付退職

（5） 文化遺産国際協力センター

〈組織概要〉

文化遺産国際協力センターは、文化遺産の保存修復及び調査研究の分野においてわが国が国際協力を推進するためのナショナルセンターとしての役割を担っており、国内外の教育研究機関や民間団体等とも連携しながら、世界各地で積極的な協力活動を実施している。その活動内容は、文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信、文化遺産保護国際協力事業の実施、文化遺産の保存修復に関する技術移転・人材育成協力等、多岐にわたっている。

国際情報研究室

国際社会における文化遺産に関する理念や法制度等、文化遺産の保護制度や施策に関して、国際動向や国際協力等の情報を収集・分析している。また、研究協議会等を通じて情報発信している。

保存計画研究室

アジア諸国等の文化遺産の保存・管理・整備・活用に関し、現地政府機関等と協力しながら、調査研究及び計画立案、さらには事業実施にあたっての技術的助言等を行っている。また、紛争や自然災害時における被災文化遺産の救済や復興活動にも協力している。

技術支援研究室

文化遺産の修復手法や材料及び技術に関する調査研究や人材育成への協力など、技術移転を通じて諸外国への支援を行っている。

文化遺産国際協力センター長	友田正彦	（建築学）
国際情報研究室長	西　和彦	（建築学）
保存計画研究室長	金井　健	（建築学）
技術支援研究室長	加藤雅人	（製紙科学）
研　究　員	前川佳文	（壁画保存修復）
研　究　員	安倍雅史	（考古学）
アソシエイトフェロー	牧野真理子	（考古学）
アソシエイトフェロー	松保小夜子	（文化政策）＊1
アソシエイトフェロー	境野飛鳥	（保護制度）
アソシエイトフェロー	間舎裕生	（考古学）
アソシエイトフェロー	五木田まきは	（文化資源学）
アソシエイトフェロー	後藤里架	（保存修復）＊2
アソシエイトフェロー	五嶋千雪	（現代美術）
アソシエイトフェロー	淺田なつみ	（建築学）

＊1 令和 3 年3月31日付退職
＊2 令和 2 年7月31日付退職
＊3 令和 2 年4月1日付採用

アソシエイトフェロー	牛窪彩絢	（宗教学）
アソシエイトフェロー	ヴァルエリフベルナ	（建築学）
アソシエイトフェロー	片渕奈美香	（染織品保存科学）
アソシエイトフェロー	清水綾子	（東洋絵画保存修復）＊3
研究補佐員	藤澤綾乃	（考古学）＊4
事務補佐員	石田智香子	
事務補佐員	岡崎未来	
事務補佐員	廣野都未	
事務補佐員	松本明子＊5	
客員研究員	大河原典子	（日本画）
客員研究員	杉山恵助	（東洋絵画修復）
客員研究員	山田大樹	（地域計画）
兼務	二神葉子	（文化財情報資料部）
兼務	石村　智	（無形文化遺産部）

＊4 令和 2 年7月1日付採用
＊5 令和 2 年11月1日付採用、令和 3 年3月31日付退職

（6） 特任研究員

川野邊渉　（高分子化学）＊1
高桑いづみ　（古典芸能）＊1
飯島　満　（古典芸能）
中山俊介　（船舶工学）

＊1 令和 3 年3月31日付退職

2．年度計画及びプロジェクト報告

1．年度計画（令和２年度）とプロジェクトとの対応 …… 17

新型コロナウイルス感染拡大と東京文化財研究所－令和２年度の状況－ 33

2．プロジェクト報告 …… 36

①有形・無形の文化財に関する調査研究事業 …… 39

②保存修復に関する調査研究事業 …… 45

③国際協力・交流等に関する事業 …… 52

④情報収集・成果公開に関する事業 …… 57

⑤刊行物に関する事業 …… 69

⑥指導助言・研修等に関する事業 …… 76

1．年度計画（令和２年度）とプロジェクトとの対応

凡　例

(1)　本項では、「令和２年度独立行政法人国立文化財機構に係る年度計画」から、東京及び奈良文化財研究所に関連する「２．文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施」以下を掲載し、運営費交付金による各プロジェクトとの対応関係を表した。
(2)　年度計画の各項目に対応するプロジェクトは、項目の文末に示した。なお、プロジェクトの略号については、第２章 2. プロジェクト報告　36〜37頁を参照されたい。

令和２年度独立行政法人国立文化財機構に係る年度計画

独立行政法人通則法（平成十一年法律第百三号）第三十一条の規定により、平成28年３月31日付け27受庁財第3634号で認可を受けた独立行政法人国立文化財機構中期計画に基づき、令和２年度の業務運営に関する計画を次のとおり定める。

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

（略）

２．文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施

（１）新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究

①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究

１）我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究

ア　国内外の文化財に関する様々な情報について分析し、それらの情報を文化財保護に対して活用するための調査研究を実施する。また、イギリス・セインズベリー日本藝術研究所と研究会を開催する。その他機関との連携も図りつつ、文化財情報の公開・活用のための、より望ましい手法等の研究を行う。シ01

イ　近世以前の日本を含む東アジア地域における美術作品を対象として、基礎的な調査研究及び光学調査を進め、研究の基盤となる資料情報の充実を図る。併せて、これにかかる国内外の研究交流を推進する。シ02

ウ　近現代美術を対象として日本における展開を軸としつつ、その方向付けに大きく関わった欧米等の動向も視野に入れて分析・考察する。併せて、作家や関係者及び美術館等の諸機関が所蔵する資料の調査を行い、得られた情報を近・現代美術研究の基礎資料として整備する。その事業のひとつとして日本美術家人名データベースの作成を進める。シ03

エ　美術作品を中心とする有形文化財についてのより深い理解を得ることを目的として、螺鈿や漆器等を主な対象として、その表現・技術・材料について自然科学や伝統技術、また歴史学等の隣接諸分野とも連携した多角的調査研究を実施するとともに、新たな研究手法の検討・開発に取り組む。シ04

2）建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究

法隆寺古材調査を中心とする古代建築の調査研究を推進する。また、近世・近代を中心とした我が国の文化財建造物の保存・修復・活用に関する基礎データの収集、未指定建造物の調査、歴史的建造物の今後の保存と復原に資するための調査・研究を行い、纏まったものより順次公表を行う。伝統的建造物群及びその保存・活用に関する調査研究を推進し、保存を行っている各自治体等への協力を行う。

3）歴史資料・書跡資料に関する調査研究

近畿を中心とする古寺社や旧家等が所蔵してきた歴史資料・書跡資料等に関して、原本調査、記録作成を悉皆的に実施するとともに、仁和寺等の資料について公表に向けて整理研究を行う。

【中期目標・計画上の評価指標】

・評価軸による具体的な研究成果
・（関連指標）論文等数
・（関連指標）報告書等の刊行数

【評価軸】

・我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に寄与しているか。
・有形文化財の保存修復等に寄与しているか。

②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査及び研究

1）重要無形文化財の保存・活用に関する調査研究等　ム01 ム03

無形文化財等の伝承実態に関する基礎的な調査研究及び資料の収集を行うとともに、現状記録を要する対象を精査し、記録作成を実施する。記録作成に関しては、これまで継続してきた講談等の演芸に加え、邦楽分野についても範囲を広げ実施する。

調査研究等に基づく成果の一部については、一般向けの公開講座等を通して公表する。

また、これまでに研究所で収集・保管してきた記録・資料の整理を行い、必要に応じて媒体転換等の措置を講ずる。

2）重要無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究等　ム02

我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形の民俗文化財、及び文化財の保存技術のうち、近年の変容の著しいものを中心に、現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等を明らかにするとともに、各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図る。特に災害下における伝承の復興や、後継者不足等により継承の危機にある伝承を重点的に調査研究の対象とする。

さらに、無形文化遺産の記録やその所在情報を継続的に収集し、その情報の整理・公開に努めるとともにネットワーク構築を図る。

3）無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集等　ム05

日本と関連の深いアジア諸国等との間において研究員の交流や無形文化遺産関連調査を行う等、無形文化遺産分野における研究交流事業を実施する。ユネスコ無形文化遺産保護条約に関する調査研究を進める。

【中期目標・計画上の評価指標】

・評価軸による具体的な研究成果
・（関連指標）論文等数
・（関連指標）報告書等の刊行数

【評価軸】

・無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に寄与しているか。

③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究

1）史跡・名勝の保存・活用に関する調査研究

我が国の史跡・名勝に関し、以下の調査研究を行う。

ア　遺跡等の整備に関連する国際的な動向も踏まえた資料の収集・調査・整理等を行う。また、近世等の遺跡の保存・活用に関する研究集会を開催するとともに、過年度開催した研究集会の成果の取りまとめ及び公表を行う。

イ　庭園調査を行うとともに、庭園に関する基礎資料の収集・整理を進める。

2）古代日本の都城遺跡に関する調査研究

国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。

ア　古代都城の解明のため、平城宮跡東方官衙地区、平城京跡、興福寺東金堂院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を行う。

イ　出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に行い、調査研究が纏まったものより順次公表する。

ウ　飛鳥時代の壁画古墳について東アジアを主とする古墳、壁画、絵画資料等の事例との比較研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、日中韓の古代寺院出土遺物を中心とした資料の調査を行う。また、飛鳥時代木造建築に関する研究として、藤原宮・京跡や飛鳥・藤原地域に所在する寺院の構造や出土部材の研究を行う。

エ　アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、日本の古代都城及び北魏洛陽城等に関する中国社会科学院考古研究所との共同研究と学術交流の推進、中国の生産遺跡（鞏義市黄冶窯跡・白河窯跡及び生産品）に関する河南省文物考古研究院との共同研究、三燕文化出土の金属器・陶器等の調査・分析を中心とする遼寧省文物考古研究院との共同研究、日韓古代文化の形成と発展過程に関する韓国国立文化財研究所との研究者の発掘現場交流を含む共同研究等を、協定に基づいて行う。また、調査研究が纏まったものより順次公表する。

3）重要文化的景観等の保存・活用に関する調査研究

文化的景観の調査及び保護に関する情報収集、調査研究、成果の公表を行う。また、文化的景観の保存・活用に関する研究集会を開催するとともに、前年度に開催した研究集会の成果をまとめ、報告書を刊行する。

4）全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究

我が国の埋蔵文化財及びその保存・活用に関し、以下の調査研究を行う。

ア　全国の遺跡のうち災害痕跡のみられる遺跡や、官衙・古代寺院を中心とした資料収集及び分析に有効な指標や手法についての研究を進め、その成果をデータベース化して順次公開する。

イ　古代官衙・集落遺跡に関する研究集を開催し報告書を刊行する。古代瓦に関する研究集会を開催する。

5）水中文化遺産に関する調査研究

我が国の水中文化遺産の保存と活用の体制を構築するため、水中文化遺産の保存並びに活用に関する調査研究を行う。

【中期目標・計画上の評価指標】

・評価軸による具体的な研究成果
・（関連指標）論文等数
・（関連指標）報告書等の刊行数

【評価軸】

・記念物の保存・活用に寄与しているか。
・古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与しているか。
・文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与しているか。
・埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与しているか。

（2）科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

①文化財の調査手法に関する研究開発の推進

1）デジタル画像の形成方法等の研究開発　シ05

さまざまな光源を用いた高精細デジタル撮影により、文化財が本来有する情報を目的に応じて正確・詳細に視覚化するための調査・研究を行い、その成果を公開する。その一環として、ガラス乾板等の過去に撮影された写真原版からの画像の取得手法に関する調査研究を行う。

2）埋蔵文化財の探査・計測方法の研究開発

埋蔵文化財の調査における新たな手法の開発・導入と応用に関する研究を行う。特に、情報取得手段としての遺跡探査、地質の検証、遺構・遺物の計測や記録内容情報抽出についての手法及び資料の製作技法や形態・物性に基づく資料分析、一般にむけてのＡＲ・ＶＲ、ゲーム等の利用を含めた成果を活用する方法について研究を進める。

3）年輪年代学を応用した文化財の科学的分析方法の研究開発

出土遺物、建造物、美術工芸品等の木造文化財の年輪年代調査を実施し、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の研究に資するとともに、各地の年輪データの蓄積を進める。また、マイクロフォーカスＸ線ＣＴを用いた非破壊調査手法の活用や、年輪年代学的手法による同一材推定の応用等、分析方法の研究開発を進め、これらの研究成果を公表する。

4）動植物遺存体の分析方法の研究開発

平城宮跡・藤原宮跡等、各地の遺跡から出土する動植物遺体の調査を実施して古環境や動植物資源利用の歴史を明らかにするとともに、多様な調査手法について基礎的な研究を行う。また、環境考古学研究の基礎となる現生標本を継続的に収集して、公開する。

【中期目標・計画上の評価指標】

・評価軸による具体的な研究成果
・（関連指標）論文等数
・（関連指標）報告書等の刊行数

【評価軸】

・科学技術を的確に応用し、文化財の保存･修復の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与しているか。

②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究

1）生物被害の予防と対策に関する調査研究　ホ01

歴史的建造物、古墳環境等生物制御が困難な空間にある文化財を対象として、遺伝子等を指標とした簡易・迅速な生物モニタリング手法を用いた実践研究の成果発信を行うとともに、虫菌害被害を受けた文化財に対して薬剤を用いない環境低負荷型の防除方法の普及を行う。

2）文化財の保存環境と維持管理に関する調査研究　ホ02

白色 LED 照明の展示物への影響についてより詳細な研究成果を進め、物質の応答性も加えた照明の評価方法を定めるとともに、LED 照明の技術指針について学協会と連携してガイドラインを策定する。さらに、化学物質の室内挙動と関連の深い温湿度解析の事例研究を進め、博物館内の汚染物質の改善方法の普及を行う。

3）可搬型分析機器を用いた文化財の材質・構造、及び保存状態に関する調査研究　ホ03

複数の可搬型機器を活用して、絵画・工芸品・建造物等に関する高精度な材質・構造・状態調査を行う。これまでに調査した絵画作品の調査報告書を刊行する。さらに、文化財の劣化によって生じた生成物の分析を行い、劣化要因の特定と対策法の検討を行う。

4）屋外文化財の劣化対策に関する調査研究　ホ04

屋外に所在する石造・木質文化財及び自然史資料を対象に、周辺環境等の劣化要因の究明及び修復材料・技術に関する研究を行い、それぞれの価値を人々に有効に伝えて行く適切な活用方法について検討を進める。

5）文化財の修復技法及び修復材料に関する調査研究　ホ05

美術工芸品及び建造物等の修復においてこれまでに使用されてきた伝統材料及び今後使用が想定される新しい修復材料と新規修復方法について、調査研究と評価を行う。前年度までの成果をもとに、海外から研究者を招聘し、国内の最先端の事例も含めて文化財修復に関する研究会を行う。また、前年度の研究会報告書の刊行を行う。

6）考古遺物の保存処理法に関する調査研究

種々の材料調査分析法を総合的に活用して出土遺物の材質、構造及び劣化状態に関する診断調査を行い、保存処理法の開発に資する基礎的なデータを収集する。特に、鉄製遺物の効果的な新規の脱塩法を確立するための基礎研究を行う。また、木製遺物の保存処理における薬剤含浸・固化工程を効率化する新手法を開発するための基礎研究を行う。

7）遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究

環境制御による劣化抑制の成否について検証するため、屋外に所在の石造文化財などを対象として、遺構の劣化の進行速度と周辺の環境についてモニタリング調査を行う。石造文化財等多孔質材料の劣化要因である塩析出及び乾湿繰り返しが材料の劣化に及ぼす影響に関する基礎研究を行う。さらに、埋蔵環境における金属製品の腐食プロセスを解明するため、金属腐食実験を行い、環境因子と劣化の関係を定量的に評価する。

8）建造物の彩色に関する調査研究

建造物彩色等の材料調査を行い、使用されている材料の同定と彩色技法の調査研究を行う。復元された平城宮跡大極殿において、建造物塗装彩色の経年変化に関する研究を行うため、環境調査並びに大極殿塗装の色彩測定を行う。

9）近代文化遺産の保存・修復に関する調査研究　ホ06

近代文化遺産の特徴である煉瓦・石・コンクリート・各種金属・各種合成樹脂・各種繊維等の多種多様な材料の劣化や保存手法に関する基礎的調査研究を行う。令和２年度はこれまで調査してきた建造物のその後のフォローアップを行うとともに、保存活用に関する調査研究を行う。

10）高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究

ア　文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画等の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。ホ p.51

イ　壁画の安定した保存と公開活用を行うための適切な石室内の熱水分環境について調査研究を行う。

【中期目標・計画上の評価指標】

・評価軸による具体的な研究成果
・（関連指標）論文等数
・（関連指標）報告書等の刊行数

【評価軸】

・科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与しているか。

（３）文化遺産保護に関する国際協働

①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進

1）文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信

海外、特に国際協力活動の対象となる地域の文化遺産に関する情報や国内で要望の高い情報の収集、諸外国の文化遺産保護施策等に関する調査を行う。

ア　文化遺産の調査や保護に関わる主要な国際会議に出席して情報の収集を行うとともに、国内外において文化遺産の保護をめぐる今日的課題等に関する調査研究を行う。また、収集した情報の整理・公開及び比較研究等を通じて、今後の我が国における文化遺産保護施策の検討の用に供する。コ01

イ　英国等の研究機関との間で文化遺産に関する研究交流を行う。

2）文化遺産保護協力事業の推進

国際共同研究等の実施を通じて諸外国の保存修復及び管理活用に関する考え方や手法に関する研究を進め、国際協力を推進するための基盤を強化するとともに、その成果をもとにアジア地域を主とす

る諸外国において文化遺産保護協力事業を推進する。

ア　文化遺産の保護協力事業及び国際共同研究事業を以下のように実施し、成果を広く公表する。

（ア）カンボジア・アンコール遺跡群（特に西トップ遺跡及びタ・ネイ遺跡）やミャンマーをはじめとする東南アジア地域等の文化遺産保護に関する調査研究及び保護協力事業を実施する。コ02 コ03

（イ）西アジア・中央アジア地域等の文化遺産保護に関する調査研究を実施する。特にカザフスタン等において文化遺産保護協力事業を実施する。コ02

（ウ）在外日本古美術品を対象に調査を行い、その結果をもとに修復を行う。修復経過や修復結果を国内外の専門家と共有し、日本の伝統的な保存修復技術の伝播とその応用を促す。コ04

（エ）上記各事業と連携しつつ、文化遺産の保護に関する研究会の開催等を通じて国内外の専門家との情報の共有化を図る。コ02 コ03

3）文化遺産の保存・修復に関する人材育成等

文化遺産保護の担当者や学芸員及び保存修復専門家を対象とした研修や専門家の派遣を通じて諸外国における文化遺産の保存・修復に関する人材育成と技術移転を積極的に進める。

ア　国内外の諸機関等と連携して人材育成や技術移転等の国際支援を実施する。政府間機関文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）等と協力し、紙文化遺産などに関する国際研修、国際ワークショップを通じて技術及び知識を海外の文化遺産保存担当者と共有し、且つ専門家ネットワークを構築する。コ02 コ03 コ05

イ　ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）等が実施する研修への協力を行う。

【中期目標・計画上の評価指標】

・文化遺産保護の国際協働に関する取組状況

（文化遺産保護に関する国際情報の収集等事業の実施件数、諸外国における文化遺産の保存・修復に関する研修・ワークショップ等の参加者の満足度、諸外国の研究機関等との共同研究等の実施件数）

②アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する調査研究

アジア太平洋無形文化遺産研究センターは、アジア太平洋地域における無形文化遺産の保護のための調査研究の推進拠点として、以下の事業を行う。

・アジア太平洋地域における無形文化遺産保護のための持続的研究情報収集
・無形文化遺産のＳＤＧｓへの貢献に関する研究
・無形文化遺産保護と災害リスクマネジメントに関する研究
・アジアのポストコンフリクト国等を対象とした無形文化遺産の緊急保護支援の研究
・国際会合等への出席やユネスコ及び関連機関との連携を通じた無形文化遺産保護関連の国際的動向の情報収集

【中期目標・計画上の評価指標】

・アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する取組状況（国際協力事業の実施件数）

（4）文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用

①文化財情報基盤の整備・充実

文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。

1）文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。特に全国遺跡報告総覧を充実させる。シ05

2）文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究を行う。データの長期保管および公開活用に関して、技術面・法律面含めたガイドラインを作成する。

3）被災文化財関連情報に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。シ06

4）文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。シ06

【中期目標・計画上の評価指標】

・図書、雑誌等の公開に関する取組状況
（資料閲覧室・図書資料室の開室日数、利用者数、文化財に関する資料・図書等の総件数）
・文化財に関するデータベースの公開件数（前中期目標の期間の実績以上）
・（関連指標）データベースのデータ件数
・（関連指標）データベース等へのアクセス件数

②調査研究成果の発信

文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。シ07 ム04 ホ07

1）定期刊行物の刊行
・『東京文化財研究所年報』
・『東京文化財研究所概要』
・『東文研ニュース』
・『美術研究』（年3冊）
・『日本美術年鑑』
・『無形文化遺産研究報告』
・『無形民俗文化財研究協議会報告書』
・『保存科学』
・『奈良文化財研究所紀要』
・『奈良文化財研究所概要』
・『奈文研ニュース』
・『埋蔵文化財ニュース』

2）公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等　シ08
・公開講座（オープンレクチャー）
・公開講演会
・現地説明会

3）ウェブサイトの充実・東文研総合検索システム　シ05
・東文研総合検索システム
・東京文化財研究所刊行物一覧
・学術情報リポジトリ
・なぶんけんブログ（探検！奈文研、コラム作寶樓等）

【中期目標・計画上の評価指標】

・定期刊行物等の刊行件数（前中期目標の期間の実績の年度平均以上）
・講演会等の開催回数（前中期目標の期間の実績の年度平均以上）
・（関連指標）講演会等の来場者数
・（関連指標）学術情報リポジトリ等によるウェブサイトにおける論文等の公開件数

③展示公開施設の充実

平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、日本博関連展示を行う。

1）特別展・企画展

（平城宮跡資料館）

・企画展「ならのみやこのこうこがく（仮）」（7月23日～8月30日）

・特別展「地下の正倉院展」(10月10日～11月23日)
・ミニ展示「平城京の丑」(3年1月5日～1月31日)
・特別企画展「鬼瓦展(仮)」(3年1月30日～3月29日)(仮)(平城宮いざない館企画展室で開催)

(飛鳥資料館)

・特別展「飛鳥の石造文化(仮)」(4月26日～6月16日)
・特別展　奈良国立博物館・奈良文化財研究所　合同企画「日本人と古代仏教―仏教と文字文化の考古学(仮)」(7月19日～9月1日)
・企画展「第10回写真コンテスト作品展「飛鳥の祭り」(仮)」(10月11日～12月1日)
・企画展「飛鳥の考古学2020」(3年1月24日～3月15日)

2) 定期的に勉強会や研修を開催し、平城宮跡解説ボランティアを育成するとともに、解説ボランティアとの連絡会議等を通じて、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。

(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等

①文化財に関する研修の実施 ホ08

1) 文化財の担当者研修、博物館・美術館等の保存担当学芸員研修を、文化財活用センターと協力して行う。
2) 研修受講生を対象としたアンケート及び派遣元自治体を対象とした研修成果の活用状況に関するアンケート調査を引き続き行い、その結果を踏まえ、より充実した研修計画を策定する。

②文化財に関する協力・助言等

国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。

1) 文化財活用センターを中心に地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。シ ム ホ
2) 蓄積されている調査研究の成果を活かし、他機関等との共同研究及び受託研究を行う。
3) 地震・水害等により被災した地域の復旧・復興事業に伴い、地方公共団体等が行う文化財保護事業への支援・協力を行う。

③平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力

文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。また、NPO法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動に協力する。

1) 文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力
・文化庁が行う平城宮跡、藤原宮跡の整備、管理事業への協力
・文化庁が行うキトラ古墳壁画保存管理施設の管理・運営と古墳壁画の公開事業への協力
・国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院を中心とする復原、整備・活用等への協力
・国土交通省の平城宮いざない館展示室4（詳覧ゾーン）に関する学芸業務・連絡調整への協力
2) NPO法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動への協力

④連携大学院教育の推進

連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成する。

1) 東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育等の推進
・東京藝術大学大学院：システム保存学(保存環境学、修復材料学) ホ p.80
・京都大学大学院：共生文明学（文化・地域環境論）
・奈良女子大学大学院：比較文化学（文化史論）

⑤文化財等の防災・救援等への寄与

1）体制づくり

地域の多様な文化資源の保護を目的として、文化財等の防災・救援のための連携・協力体制づくりを行う。

・文化遺産防災ネットワーク推進会議を一層充実発展させ、連携体制の強化を図る。文化遺産防災ネットワーク有識者会議を開催する。
・地方公共団体、博物館等施設、地域史料ネット等関係団体との協議、情報交換会の開催、調査の実施及び会議・シンポジウム等への参加等を通じて、地域内文化財防災ネットワーク構築を促進する。
・災害発生時の迅速な救援活動を実現するため、地域間連携・組織間連携のガイドライン策定を行う。
・国内ネットワークの推進役を担いうる機構内体制の構築に関する検討を行う。

2）調査研究等の実施

ア　文化財等の防災・救援の技術的課題に関する調査研究を行い、情報の発信を行う。

・全国の文化財防災の先進事例や地方指定等文化財情報に関する情報を収集・整理し、共有化を図る。
・文化財防災体制のあり方に関する調査研究を行う。
・国及び地方指定等文化財に関する全国文化財等データベースのデータ収集、全国文化財保護条例データベースの補完を進め、活用の方法を検討する。
・歴史災害痕跡のデータベース等の運用・活用を進め、地域文化遺産リストに関する地図作成作業等の成果を公開し、広く文化財全般の防災ネットワーク構築に寄与する。
・文化財が被災した自然災害に関する事例集を作成し、公開する。

イ　保存科学等に基づく被災文化財等の劣化診断、安定化処置及び修理、保存環境、被災現場の作業環境等に関する研究を実施し、指針の策定を目指す。

・けいはんなオープンイノベーションセンターの施設を利用し、収蔵庫機能の維持管理等を行いつつ関西地区における文化財防災の拠点としての活用について研究を行う。
・災害により被災した様々な状態の被災資料に関する劣化診断・応急処置等の方法や安定的保管のための保存環境に関する研究を行う。

ウ　無形文化遺産の防災と被災後の継承等に関する研究を実施する。

・無形文化遺産総合データベースのデータ収集と公開を進め、これを活用して無形文化遺産の防災に寄与する。
・無形文化遺産の防災に関する地域間の情報共有を促進する。
・無形文化遺産の動態記録作成調査を通じて、災害発生後の継承と無形文化遺産が地域の復興に果たす役割等に関する研究を実施する。

3）人材育成・事業啓発活動等の実施

・本事業での取組についてウェブサイト・パンフレット等を作成・更新して国内外への情報公開に努める。
・被災資料の応急処置等に関わる動画を作成し、公開する。
・文化財等の防災・救援に関する指導・助言、研修、啓発・普及活動として、シンポジウム、講演会、研究集会、地方公共団体担当者等への研修会、地域の防災体制構築のための人材育成等を実施する。
・国際研修・シンポジウム等の実施・参加を通して、諸外国の防災の取組や被災文化財の保全処置方法に関する新たな知見の入手に努めるとともに、我が国の経験を活かして諸外国の文化財防災に貢献する。
・人材育成・啓発活動等を行うための有効な教材の作成を進める。

【中期目標・計画上の評価指標】

・研修の実施件数（前中期目標の期間の実績の年度平均以上）
・研修の受講者数（前中期目標の期間の実績の年度平均以上）
・研修成果の活用状況（中期目標期間にアンケートによる研修成果の活用実績が80%以上となることを目指す。）
・専門的・技術的な援助・助言の取組状況（行政、公私立博物館等の各種委員等への就任件数、依頼事項への対応件数等）

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

1．業務改善の取組

（1）組織体制の見直し

・国際業務の推進体制の整備の一環として、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、機構内における組織体制を整備する。
・情報セキュリティの確保・維持の重要性に鑑み、本部情報担当部門の設置について、検討を継続する。

（2）人件費管理の適正化

国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数は国家公務員の水準を超えないよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。

（3）契約・調達方法の適正化

・契約監視委員会を実施する。
・施設内店舗の貸付・業務委託について引き続き企画競争を実施する。

（4）共同調達等の取組の推進

周辺の他機関を含めた共同調達について、有用性が確認された以下の案件について引き続き実施する。

上野地区　再生 PPC 用紙、トイレットペーパー、廃棄物処理、古紙等売買、複写機賃貸借、トイレ洗浄機器等賃貸借
京都地区　再生 PPC 用紙、トイレットペーパー
九州地区　再生 PPC 用紙、トイレットペーパー、ガソリン

（5）一般管理費等の削減

①機構内の共通的な事務の一元化による業務の効率化

機構のネットワークの統合を検討し、業務の効率的な運用及び情報の共有化を推進する。

②計画的なアウトソーシング

以下の業務の外部委託を継続して実施する。

（東京国立博物館）
・警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務
・資料館業務の一部
・施設内店舗業務

（京都国立博物館）
・警備業務及び設備保全業務の一部並びに清掃業務
・会場運営業務
・代表電話対応及び受付業務

（奈良国立博物館）
・建物設備の運転・管理業務
・警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務

（九州国立博物館）
・建物設備の運転・管理業務等
・警備業務、看視案内業務及び清掃業務

（東京文化財研究所・奈良文化財研究所）
・警備業務、清掃業務及び建物設備の運転・管理業務等

③使用資源の減少
・省エネルギー
光熱水量の使用状況を把握し、管理部門を中心に引き続き節減に努める。
・廃棄物減量化
使用資源の節減に努め、廃棄物の減量化に引き続き努める。
・リサイクルの推進
廃棄物の分別収集を徹底し、リサイクルを引き続き推進する。

2．業務の電子化

機構ウェブサイトにおいて、機構に関する情報の提供を引き続き行い、政府の方針に沿ってオープンデータを推進し、各事務システムの継続運用とバックアップ・インフラ増強に努める。

3．予算執行の効率化

収益化単位の業務及び管理部門の活動と運営費交付金の対応関係を明確にし、引き続き効率的な予算執行に務める。

Ⅲ　財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

1．自己収入拡大への取組

（1）博物館及び展示公開施設の平常展観覧料金を令和２年４月１日に改定する。

（2）機構全体において、展示事業等収入額について前中期目標の期間の実績の年度平均を上回ることを目指す。

（3）機構全体において、寄附金等の外部資金獲得により財源の多様化を図る。

（文化財活用センター）
・独立行政法人国立文化財機構寄附ポータルサイトを構築する。
・前年度から開始した東京国立博物館と共同した所蔵品の修理に対する寄附金募集活動を引き続き実施する。

（4）保有資産の有効利用の推進

（博物館４施設）
① 講座・講演会等を開催する。
② 講堂等の利用案内を関係団体、学校等外部に対し積極的に行う。
③ 国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサートなどを実施し、施設の有効利用を図る。

（文化財研究所２施設）
セミナー室、講堂等一般の利用に供することが可能な施設の有料貸付を実施するとともに、展示公開施設におけるミュージアムショップの運営委託等、施設の有効利用の推進を引き続き図る。

【中期目標・計画上の評価指標】

・展示事業等収入額（前中期目標の期間の実績の年度平均以上）

・（関連指標）その他寄附金等収入額

2．固定的経費の節減

固定的経費の節減のため、Ⅱ１.（５）一般管理費等の削減に関する事項に取り組む。

3．決算情報・セグメント情報の充実等

独立行政法人会計基準に従い、引き続き適切な決算情報・セグメント情報の開示を実施する。

Ⅳ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

1．予算

別紙のとおり

2．収支計画

別紙のとおり

3．資金計画

別紙のとおり

Ⅴ　その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置

1．内部統制

内部統制委員会、リスク管理委員会を開催する。また、内部監査及び監事監査等のモニタリングを実施し、必要に応じて見直しを行うとともに、各種研修を実施し、職員の意識並びに資質の向上を図る。

2．その他

（1）自己評価

運営委員会、外部評価委員会の開催等、外部有識者の意見を踏まえた客観的な自己評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。

（2）情報セキュリティ対策

情報セキュリティ対策については、政府機関の統一基準群・ガイドライン等を踏まえ、情報セキュリティをとりまく環境の変化に応じて機構として必要な対応を検討し、規定等を適時適切に見直すとともに、これに基づき対策を講じ、不正アクセスや標的型攻撃等のリスクに対する対策、攻撃に対する組織的対応能力の強化に取り組む。

また、自己点検、監査を実施し、その結果に基づいて情報セキュリティ対策を改善する。

３．施設設備に関する計画

別紙のとおり施設設備に関する計画に沿った整備を推進する。

４．人事に関する計画

（１）中長期的な人事計画の策定を検討する。その際、理事長の裁量によって、一定数の職員を配置できる仕組みを併せて検討する。

（２）職員の能力向上と組織のパフォーマンス向上を目的とした評価制度を導入する。

（３）性別、年齢、国籍、障がいの有無等にとらわれない、能力や適性に応じた採用・人事を引き続き行う。

（４）女性の活躍を推進し、制度改正を含めた就業環境の整備及び教育・研修を引き続き実施する。

（５）職員のキャリアパスの形成のため、職位に応じた研修の実施を企画・立案する。

（６）働き方改革関連法の施行に対応した取り組みを実施する。

令和 2 年度　予算

（単位：百万円）

区　　分	国立博物館等	文化財研究所等	合　計
収　入			
運営費交付金	6,153	2,480	8,633
施設整備費補助金	198	0	198
展示事業等収入	2,012	78	2,090
受託収入	125	511	636
その他寄附金等	689	91	780
計	9,177	3,160	12,337
支　出			
管理経費	1,502	466	1,968
うち人件費	613	236	849
うち一般管理費	889	230	1,119
業務経費	6,663	2,092	8,755
うち人件費	1,842	1,041	2,883
うち収集保管事業費	1,509	0	1,509
うち展覧事業費	2,549	0	2,549
うち教育普及事業費	352	0	352
うち博物館研究事業費	294	0	294
うち博物館支援事業費	117	0	117
うち基礎研究事業費	0	433	433
うち応用研究事業費	0	188	188
うち国際遺産保護事業費	0	132	133
うち情報公開事業費	0	280	280
うち研修協力事業費	0	18	18
施設整備費	198	0	198
受託事業費	125	511	636
その他寄附金等	689	91	780
計	9,177	3,160	12,337

令和２年度　収支計画

（単位：百万円）

区　　分	国立博物館等	文化財研究所等	合　計
費用の部	7,748	2,962	10,710
経常経費	7,748	2,962	10,710
管理経費	1,431	414	1,845
うち人件費	620	238	858
うち一般管理費	811	176	987
事業経費	5,747	2,404	8,151
うち人件費	1,967	1,066	3,033
うち収集保管事業費	607	0	607
うち展覧事業費	2,370	0	2,370
うち教育普及事業費	310	0	310
うち博物館研究事業費	266	0	266
うち博物館支援事業費	102	0	102
うち基礎研究事業費	0	319	319
うち応用研究事業費	0	139	139
うち国際遺産保護事業費	0	106	106
うち情報公開事業費	0	227	227
うち研修協力事業費	0	36	36
うち受託事業費	125	511	636
減価償却費	570	144	714
財務費用	0	0	0
臨時損失	0	0	0
収益の部	7,748	2,962	10,710
運営費交付金収益	4,573	2,138	6,711
展示事業等の収入	2,012	78	2,090
受託収入	125	511	636
その他寄附金等	468	91	559
資産見返負債戻入	570	144	714
財務収益	0	0	0
臨時利益	0	0	0
純利益	0	0	0
目的積立金取崩	0	0	0
総利益	0	0	0

令和 2 年度　資金計画

（単位：百万円）

区　　分	国立博物館等	文化財研究所等	合　計
資金支出	9,177	3,160	12,337
業務活動による支出	7,179	2,818	9,997
投資活動による支出	1,981	331	2,312
財務活動による支出	17	11	28
資金収入	9,177	3,160	12,337
業務活動による収入	8,979	3,160	12,139
運営費交付金による収入	6,153	2,480	8,633
展示事業等による収入	2,012	78	2,090
受託収入	125	511	636
その他寄附金等	689	91	780
投資活動による収入	198	0	198
施設整備費補助金による収入	198	0	198
財務活動による収入	0	0	0

施設整備に関する計画

（単位：百万円）

施設設備の内容	予定額	財　源
・京都国立博物館	60	施設整備費補助金
本館（明治古都館）耐震改修	60	
・奈良国立博物館	36	施設整備費補助金
文化財保存修理所空調設備改修工事	36	
・九州国立博物館	102	施設整備費補助金
空調設備改修工事	102	

新型コロナウイルス感染拡大と東京文化財研究所
ー令和２年度の状況ー

はじめに

令和２年度の東京文化財研究所の活動は、新型コロナウイルス感染症への国、東京都、文化庁の対応を踏まえつつ、第４次中期計画最終年度のまとめを含む年度計画を達成すべく工夫を凝らして行われた。

2020（令和２）年１月15日に日本で初めての新型コロナウイルス（Novel Coronavirus, COVID-19）感染者が確認された。２月１日には、那覇に寄港したクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号について、１月25日に香港で下船した同船の乗客が新型コロナウイルスに感染していたことが判明した。ダイヤモンド・プリンセス号の乗客に対しては、厚生労働省が２月３日に横浜でも再度検疫を実施したところ、複数の乗客が感染していることが明らかとなり、同船への対応が連日、ニュースで報じられた。また、東京文化財研究所が所在する東京都は１月30日、「東京都新型コロナウイルス感染症対策本部」を設置して対応に取り組み、３月26日に新型インフルエンザ等対策特措法に基づき、国において新型コロナウイルス感染症対策本部が設置されたことを踏まえ、同日、同法に基づく「東京都新型コロナウイルス感染症対策本部」を設置、「密閉」「密集」「密接」の３つの密を避ける行動を呼びかけた。

令和２年度初めの４月４日には、東京都の１日の感染者が初めて100人を超え、４月７日に７都府県に第１回目の緊急事態宣言が発出された。しかし、４月10日には東京都の１日の感染者が199人となるなど感染が拡大し、４月16日には宣言の範囲が全国に拡大された。その後、新規感染者数の減少が見られたことで５月14日に39県で宣言解除となり、５月25日をもって全国で第一次緊急事態宣言が解除となった。

以後、11月までは感染者数が比較的抑えられていたが、12月に入って再度感染拡大の兆候が見られる。2021（令和３）年１月７日に初めて東京の１日の感染者が2000人を超え、１月８日、東京都及び近隣３県（千葉・埼玉・神奈川）に２回目の緊急事態宣言が発出された。宣言は１月14日には中部、関西、九州のそれぞれ一部の府県を含む11都府県にまで拡大し、２月28日をもって６府県で解除、３月21日をもって東京都と近隣３県でも解除となった。以上が、令和２年度末までの新型コロナウイルス感染拡大に関する、東京地方を中心とした国内の状況である。

東京文化財研究所の対応

東京文化財研究所では、国立文化財機構本部の方針により、2020（令和２）年４月７日からの緊急事態宣言下においては、自宅待機を原則とし、国内外の出張も認めないこととした。研究支援推進部、文化財情報資料部の情報システム・セキュリティ担当者部署（文化財情報研究室）、その他やむを得ず出勤する職員は、入口に設置されたアルコール消毒液での手指の消毒等感染症対策を取り、推進部室前に設置された名簿に氏名を記すことを義務付けられた。

５月25日の東京都の緊急事態宣言解除後における研究所の対応については、以下の方針が示された。

１．職員の勤務等

（1）人との接触機会の５割程度低減を目途　６月以降、当面の間、各部・センターにおける勤務態勢を調整の上、ローテーション勤務や時間単位の自宅待機を活用した勤務形態（いわゆる時短勤務）を活用し、人との接触機会の５割程度低減を目途に出勤管理を行う。また、時差出勤や自転車通勤等の人との接触を低減する取組みを積極的に推進する。なお、職員が新型コロナウイルスに感染又は感染の疑いがある場合には、特別休暇で対応。家族が感染した場合には、自宅待機又は特別休暇（子の看護）で対応。

（2）職員の責務　① 定期的な検温や健康記録を実施する。② 咳エチケット、マスクの着用、手洗い・手指

の消毒を徹底して実施する。③ 職員の家族等に発熱等の風邪症状が見られるときは、当該家族等の定期的な検温や健康記録を実施する。

2．出張の取扱い

(1) 国内出張　6月18日までの間は、原則として都道府県をまたぐ移動は認めない。6月19日以降は、職員の感染リスク及び感染拡大防止の観点から、どうしても出張や会議、打合せ等が必要かどうか、相手方と調整の上、検討するとともに、代替措置についても検討する。

(2) 外国出張　当面の間、原則認めない。世界の新型コロナウイルス感染状況及び各国の入国制限・行動 制限の状況等を勘案し、段階的に検討。

3．会議室・セミナー室の利用

(1) 所内会議・研究会等　当面の間、３つの密を作り出さないため、出席者が多数（20 名以上）となる会議等は、原則実施しない。

(2) 所外会議・研究会等　３つの密を作り出す可能性が高いこと及び使用前後の消毒作業が必要になることを含め、安全性を担保できないため、当面の間、原則認めない。

4．来所者への対応

(1) 受付において、検温を実施する。

(2) マスクを着用していない場合は、入所を認めない。

このような勤務態勢をとり、人との接触を避けるため、作業机周囲にアクリル板を設置し、所内各所にアルコール消毒液を置くなど、職員の感染予防策がとられた。

研究所職員の勤務態勢としては、6 月 19 日以降は、人との接触を 2〜3 割低減することを目途に先述の方針を 12 月まで踏襲した。2021（令和 3）年 1 月 8 日からの 2 度目の緊急事態宣言を受けて、通勤ラッシュを避ける等の勤務体制の調整、20 時以降の残業や出張の原則禁止、イベントや会議などへのオンライン開催を検討、といった対策が採られた。3 月 21 日をもって宣言が解除されてからも、出勤者を通常の 7 割減とすることが目標とされている。

令和２年度の調査研究事業への影響と対応

出張が制限されたため、特に、現地に赴いて活動することができない国際協力事業を中心に、全所的に大幅な年度計画変更を余儀なくされた。渡航可能とされる地域であっても、国境を越えるたびに一定期間の隔離が条件となるため、出張は現実的ではなく、令和２年度は海外出張が一度も実施されなかった。各部センターの業務には以下に例示するような影響が及んだ。

文化財情報資料部では、

1）セインズベリー日本芸術研究所との共同研究において、同地での講演会、データベースに関する協議を取りやめ。協議はオンラインに切り替えて実施。シ01

2）タイ所在日本製漆工品に関する調査シ02、タイ・バンコクで予定していたガラス乾板に関する研究打ち合わせを次年度以降に延期。シ05

3）作業者確保が難しく、令和 2 年度中に刊行予定だった『日本美術年鑑』令和元年版の刊行時期を次年度初めに延期。刊行済の『美術研究』（431-432 号）は海外発送を見合わせ。シ07

無形文化遺産部では、

1）一龍齋貞水師の実演記録を延期したが、貞水師ご逝去によりかなわなくなった。ム01

2）例年、当所を会場として開催してきた無形民俗文化財研究協議会をオンラインで開催。ム02

3）韓国無形文化遺産院との共同研究における相互の研究員受入れを中止。例年現地に赴いている、無形文化遺産の保護に関する政府間委員会にオンラインで参加。ム05

保存科学研究センターでは、

1）生物科学研究室で実施を予定していた研究集会を、研究者間の研究会に変更。ホ01

2）文化財保護・芸術研究助成財団からの助成を受けて実施予定であった海外調査や外国人招聘を中止し、助成金を辞退。

特に影響が大きかった文化遺産国際協力センターでは、年度前半に諸事業の計画を見直し、出張せずに海外の文化遺跡保存への協力ができる体制を模索した。

1）国際情報の収集・研究・発信事業について、現地に赴いて行う調査研究や研究交流がかなわず、形式を変更。世界遺産研究協議会については、意見交換をオンライン経由で開催実施し、報告書のかたちでまとめた。コ01

2）カンボジア・アンコール遺跡群のタネイ寺院遺跡東門修復に対してオンラインによる状況確認と助言を実施。コ02 ブータンの歴史的建造物保存活用事業において民家保存の意義を説くための刊行物を作成（受託文化遺産国際協力拠点交流事業）。ミャンマー・バガン遺跡の寺院外壁及び壁画の保存については、保存方法の調査、実験などを中心に実施。コ03

3）在外日本古美術品保存修復協力事業については、海外の美術館・博物館からのクーリエを伴わない作品輸送を行い、新たな修理対象の選定には、過去の調査成果を活用。コ04

4）国際研修は、従来のような海外からの受講生の招聘はせず、オンラインでの方法を模索するとともに、教材を作成。コ05

5）文化遺産国際協力コンソーシアムでは研究会（第27回・第28回）の形式を変更、集会形式ではなく、オンラインウェビナーとして開催、同内容の動画を配信。また、シンポジウムを中止し、代替企画として我が国の文化遺産国際協力に関する動画を作成して公開、報告書の作成を取りやめた。（受託コンソーシアム）

このように、文化遺産国際協力センターはもちろんのこと、「国際」をその名称に冠していない部・センターも多様な海外交流事業を予定していた。しかし、人の往来ができないため、シンポジウム、ワークショップ、調査などが中止・延期、あるいは実施形態の変更を余儀なくされた。各研究者が行う科学研究費補助金による調査研究も、現地への出張がかなわないなどの支障があり、次年度に予算を繰り越した研究費目が複数ある。

一方で、研究部門ではそれぞれの専門領域で、文化財保存のための新型コロナウイルス感染症への対応として、当所にできることを模索した。

保存科学研究センターでは、文化庁、国立文化財機構文化財活用センターと連携し、美術館博物館における感染症対策の相談窓口を設置し、当所ウェブサイトで広報した。2020（令和2）年4月の段階では、接触感染の予防対策として手すりやドアノブなど、来館者が接触しやすい部分のアルコール消毒が一般に推奨されたが、指定あるいは登録有形文化財となっている建造物や、露出展示した文化財も来館者が触れる可能性があることから、消毒の可否やその方法などについて、多くの問い合わせが寄せられた。

感染対策として人の接触機会の低減が求められ、劇場などの閉館や入場者制限、祭りの自粛などが行われ、それが長期化したことで、古典芸能や民俗芸能への影響も深刻になった。そこで、無形文化遺産部では5月から、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による公演の中止・延期情報の収集を始め、当所ウェブサイトにて、古典芸能分野の中止・延期情報及び無形文化遺産関係者への補助金などの情報を継続的に発信している。また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響が古典楽器の制作者や修理者、楽器の材料などの生産者にまで及んでいる状況を伝えるため、フォーラム「伝統芸能と新型コロナウイルス」を開催し、オンラインでも配信した。

当所が所蔵する図書等の資料を閲覧に供している資料閲覧室は、新型コロナウイルス感染防止のため2020（令和2）年2月28日から臨時休室としたが、5月25日の首都圏を対象とした国の緊急事態宣言の解除を踏まえ、6月10日から段階的に公開を再開した。利用は予約制とし、時間帯ごとに利用可能な人数の上限を設けるとともに、閲覧者にはニトリル手袋の着用を依頼するなどの感染対策をとった。その後も感染状況を慎重に見極めつつ対応可能な範囲で開室し、利用者の便を図っている。

上記のように、新型コロナウイルス感染症による影響はあったが、各部・センターでは対面を伴わないウェブ会議等による交流や、人数制限や感染防止対策の強化によるイベントの開催、ウェブや刊行物等による情報発信の充実など、実施方法や内容を工夫し、第4次中期計画の最終年度の目標を達成すべく努めた。このような検討を通じて、新たな研究会の開催方法など得られたノウハウもあり、ポストコロナ時代においても一層の活用が期待される。

令和２年度広報委員（年報担当）　山梨絵美子

2．プロジェクト報告

凡　例

(1) プロジェクトは、年度計画との対応(17〜32頁)に従って、以下の①〜⑥の分類項目ごとに各部・センターごとに配列し、プロジェクトの略番と頁を記した。
　略番で用いられている担当部門の略号は、シ：文化財情報資料部、ム：無形文化遺産部、ホ：保存科学研究センター、コ：文化遺産国際協力センター、広：広報委員会　である。
(2) 各プロジェクト報告の掲載頁では、表題の右側に上記略番を記すとともに、頁左上にプロジェクトの担当部門を示した。
　なお、ウェブ公開版では、担当部門をシンボルカラー（文化財情報資料部：青、無形文化遺産部：黄、保存科学研究センター：緑、文化遺産国際協力センター：紫）で色分けしている。
(3) 年度計画との対応一覧への逆引きのため、右上に年度計画の記号を記した。
(4) また、各プロジェクト報告の掲載頁では、プロジェクトの目的、成果とその公表（論文、報告、発表、刊行物）及び研究組織の各項目を立てて内容をまとめた。なお、研究組織で○がついている職員はプロジェクトリーダーである。

① 有形・無形の文化財に関する調査研究事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
シ 01	文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究	2－(1)－①－1)－ア	39
シ 02	日本東洋美術史の資料学的研究	2－(1)－①－1)－イ	40
シ 03	近・現代美術に関する調査研究と資料集成	2－(1)－①－1)－ウ	41
シ 04	美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開	2－(1)－①－1)－エ	42
ム 01	無形文化財の保存・継承に関する調査研究	2－(1)－②－1)	43
ム 02	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	2－(1)－②－2)	44

② 保存修復に関する調査研究事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
ホ 01	文化財の生物劣化の現象解明と対策に関する研究	2－(2)－②－1)	45
ホ 02	保存と活用のための展示環境の研究	2－(2)－②－2)	46
ホ 03	文化財の材質・構造・状態調査に関する研究	2－(2)－②－3)	47
ホ 04	屋外文化財の劣化要因と保存対策に関する調査研究	2－(2)－②－4)	48
ホ 05	文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究	2－(2)－②－5)	49
ホ 06	近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究	2－(2)－②－9)	50
ホ 一	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力	2－(2)－②－10)	51

③ 国際協力・交流等に関する事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
ム 05	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	2－(1)－②－3)	52
コ 02	アジア諸国等文化遺産保存修復協力	2－(3)－①－2)－ア－(ア)(イ)	53
コ 03	保存修復技術の国際的応用に関する研究	2－(3)－①－2)－ア－(ア)(エ)	54
コ 04	在外日本古美術品保存修復協力事業	2－(3)－①－3)－ア	55
コ 05	国際研修	2－(3)－①－3)－ア	56

④ 情報収集・成果公開に関する事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
シ 05	文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究	2－（2）－①－1）、2－（4）－②－3）	57
シ 06	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	2－（4）－①－1）2）3）	59
シ 08	令和2年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	2－（4）－②－2）	60
ム 03	無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化	2－（1）－②－1）	61
コ 01	文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信	2－（3）－①－1）－ア	62
――	プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等		63

⑤ 刊行物に関する事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
シ 07	令和元年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業『美術研究』	2－（4）－②－1）	69
ム 04	無形文化遺産部出版関係事業	2－（4）－②－1）	69
ホ 07	『保存科学』第60号の出版	2－（4）－②－1）	69
広 ―	『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』		70
――	プロジェクトの一環として刊行された刊行物		70

⑥ 指導助言・研修等に関する事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
ホ 08	博物館・美術館等保存担当学芸員研修	2－（5）－①－1）	76
シ ―	文化財の収集・保管に関する指導助言	2－（5）－②－1）	76
ム ―	無形文化遺産に関する助言	2－（5）－②－1）	77
ホ ―	文化財の虫菌害に関する調査・助言	2－（5）－②－1）	77
ホ ―	文化財の修復及び整備に関する調査・助言	2－（5）－②－1）	78
ホ ―	文化財の材質・構造に関する調査・助言	2－（5）－②－1）	79
ホ ―	美術館・博物館等の環境調査と援助・助言	2－（5）－②－1）	79
ホ ―	東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進	2－（5）－④－1）	80

文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究(シ01)

目　　的　国内外の諸機関との連携を見据え、当研究所の文化財に関する調査研究の成果・データをより国際的標準に見合うかたちに整え、効果的に共有してゆくための研究を行う。併せて地方公共団体と文化財に関する情報の提供と共有を行うことを視野に入れる。

成　　果　1．調査研究の成果の公開と、研究情報の国際発信

・令和元年度に引き続き、当研究所刊行の論文等を国立情報学研究所が運営する学術機関リポジトリデータベース(IRDB)を通じて公開する作業を進め、『美術研究』、『無形文化遺産研究報告』、『保存科学』『在外日本古美術品保存修復協力事業報告書』など118件を今年度新たに追加し、合計13タイトル3,749件の論文・刊行物のフルテキストを搭載・公開した。

・アメリカ・ゲッティ研究所との共同研究を推進し、国際連携による共同研究事業を効果的に進めていくための協議を行った。ゲッティ研究所との共同研究を推進し、国際連携による共同研究事業を効果的に進めていくための協議を行った。

・展覧会カタログ所載記事・論文のデータを「東京文化財研究所美術文献目録」として、世界最大の共同書誌目録データベースであるOCLCのセントラル・インデックスに情報を提供し、今年度は2017（平成29）年の文献情報4,440件を追加した。

2．国内外の関連機関との共同研究・協議

・京都府所蔵昭和初期文化財調書の20,000点のデジタル画像のうち約11,100件のメタデータを追加したほか、調査撮影フィルムのデジタル化を進め、データベース構築を行い、公開活用のための協議を行った。

・イギリス・セインズベリー日本藝術研究所と日本美術及び同研究に関する英語文献・記事情報の採録に関する運用面での協議をオンラインで行った。

・資料の特性により様々な形態・プラットフォームでオープンアクセス資料を増やしてインターネット上で広く国内外に提供するとともに、成果発表を行った。

オンライン開催のアートドキュメンテーション学会での発表

発　表・橘川英規、田村彩子、阿部朋絵、江村知子、山梨絵美子：「葛飾北斎絵入り版本群・織田一磨文庫のオープンアクセス事業－ゲッティ研究所との協同による書誌情報国際発信の実践（古典籍書誌整備と資料保全）」、アート・ドキュメンテーション学会第13回秋季研究集会（オンライン開催）　20.11.28

研究組織　○江村知子、橘川英規、安永拓世、米沢玲、二神葉子、小山田智寛、小林公治、塩谷純、小林達朗、小野真由美、城野誠治、阿部朋絵、田村彩子（以上、文化財情報資料部）、久保田裕道（無形文化遺産部、文化財情報資料部兼務）、早川典子（保存科学研究センター、文化財情報資料部兼務）、西和彦（文化遺産国際協力センター、文化財情報資料部兼務）、永崎研宣（客員研究員）

日本東洋美術史の資料学的研究（シ02）

目　　的　近世以前の日本を含む東アジア地域における美術作品を対象として、基礎的な調査研究を行い、研究の基盤となる資料の整備を行う。併せて、これにかかる国内外の研究交流を推進する。

成　　果

1．美術史研究のためのコンテンツ（年紀資料集成）を作成するため1999（平成11）年以降の展覧会図録及び、美術・博物館所蔵品目録から年紀のある作品の資料を順次収集し、データベースソフトウェア FileMakerを使用して入力を行い、新たに311件を追加した。

2．本プロジェクトにかかる研究会を外部の研究者を交え、行った。

3．2018（平成30）年7月30日開催の、「ワット・ラーチャプラディットの日本製漆扉部材と伏せ彩色螺鈿に関する研究会」での発表をもとに各発表者が書き下ろした報告を主体とした、タイ・バンコク都所在の王室第一級寺院ワット・ラーチャプラディットの日本製漆扉部材に関する報告書の刊行を行った。

年紀資料集成

論　文・安永拓世：「展覧会評「紀伊田辺の画家　真砂幽泉」展を観て―地域に還元される展覧会のあり方―」『美術研究』432　pp.57-69　20.12.21

発　表・小野真由美：「 江戸初期狩野派史料の研究―探幽縮図を中心に―」　令和2年度第2回文化財情報資料部研究会　20.7.28

・安永拓世：「片野四郎旧蔵「羅漢図」の近代における一理解」　令和2年度第8回文化財情報資料部研究会　21.2.25

・米沢玲：「片野四郎旧蔵の羅漢図について―図様と表現の考察―」　令和2年度第8回文化財情報資料部研究会　21.2.25

刊行物・『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究―ワット・ラーチャプラディットの漆扉』21.3

研究組織　○小林達朗、小野真由美、塩谷純、二神葉子、城野誠治、小林公治、江村知子、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、米沢玲、（以上、文化財情報資料部）、早川泰弘（保存科学研究センター）、津田徹英（客員研究員）

近・現代美術に関する調査研究と資料集成(シ03)

目　　的　近・現代美術を対象として日本における展開を軸としつつ、その方向づけに大きく関わった欧米等の動向も視野に入れて分析・考察する。併せて、作家や関係者及び美術館等の諸機関が所蔵する資料の調査を行い、得られた情報を近・現代美術研究の基礎資料として整備する。

成　　果　○仙台城址の「伊達政宗騎馬像」で知られる彫刻家小室達の作品・資料調査に基づき、『美術研究』431号にその研究成果を論説として掲載した。
○屋外彫刻の保存状況をめぐり、部内研究会にて討議を行った(12月21日)。
○現代美術資料センターとの協力体制を刷新・発展させ、全国的な美術コレクター・ギャラリー組織との連携による現代美術資料収集の枠組み構築について協議を行い（9月9日)、試験的に関連コミュニティに当研究所での資料収集事業に関する告知を実施した。
○美術評論家の故鷹見明彦が撮影した画廊の展示風景写真の整理を進めた。
○今中期計画で継続的に遂行した日本の近現代作家情報の整備(『日本美術年鑑』「物故者記事」「名簿」所収、4,835名）が完了した（成果の一部をゲッティ研究所に提供、オンライン美術家人名事典ULANで公開予定)。
○アメリカの西洋古典絵画コレクション形成に寄与した画商ジョセフ・デュヴィーンと美術史家矢代幸雄との往復書簡（ゲッティ研究所蔵）について、部内研究会で口頭発表した(8月25日)。
○久米美術館との共同研究として、既刊『久米桂一郎日記』中のフランス語部分の和訳を進めウェブ上で公開、また黒田清輝・久米桂一郎間で交わされた書簡の概要を『美術研究』433号に研究資料として掲載した。

8月25日開催文化財情報資料部研究会の様子

論　文・野城今日子：「小室達《伊達政宗騎馬像》の制作とその社会的背景をめぐって」『美術研究』431 pp.1-24　20.8
・塩谷純・伊藤史湖・田中潤・齋藤達也：「書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流(一)」『美術研究』433 pp.25-66　21.3

発　表・山梨絵美子：「ゲッティ研究所が所蔵する矢代幸雄と画商ジョセフ・デュヴィーンの往復書簡」令和2年度第3回文化財情報資料部研究会　20.8.25

研究組織　○塩谷純、橘川英規、城野誠治、野城今日子（以上、文化財情報資料部)、山梨絵美子（副所長)、三上豊、丸川雄三、田中淳、齋藤達也、田所泰、田中潤（以上、客員研究員）

美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開（シ04）

目　的　絵画や彫刻、工芸といった美術作品は、その表現のあり方、制作に用いられた技術、そして利用された素材などが複合し一体となって成立したものである。本プロジェクトでは、こうしたそれぞれの構成要素がどのような実態を持ち、またどのように関わりあっているのか、関連する諸分野を広く渉猟しつつ多視点的に分析し、その関係の解明を目指すものである。こうした研究の実施により、美術「作品」に対するより深い理解の醸成が期待されるであろう。

成　果　○螺鈿及び漆器類に関わる調査研究等

・2020（令和 2）年9月9日に個人蔵伏彩色螺鈿箱について保存科学研究センターほか調査担当者で研究協議を行った。10月29日に東京国立博物館にて中国螺鈿漆器の調査を東博研究員の立会いで行った。2021（令和 3）年3月15日に都内にて個人所蔵螺鈿漆器ほかの調査を行った。

○研究成果公開

・10月10日より 12月13日まで大分県立埋蔵文化財センターにて開催された、令和 2 年度企画展「BVNGO NAMBAN―宗麟の愛した南蛮文化―」において、出品・図録作成に協力したほか、10月10日にはオープニング記念講演会において「キリスト教の布教と南蛮漆器―理化学的分析の検討、メダイ研究との対比から―」と題し、この展覧会の展示内容と相関する講演を行った。また、この講演内容についてまとめた資料集が同センターから発刊された。

大分市能楽堂にて開催された講演の様子

11月24日開催の第 5 回文化財情報資料部研究会において武田恵理氏が「初期洋風画と幕末洋風画、形を変えた継承―日本における油彩技術の変遷と歴史的評価の検証―」と題し発表を行った。

○研究データの整備と公開

・1965（昭和40）年の発行で230号までの掲載であった『美術研究総目録』を補完し、431号までの内容を一覧にした『美術研究』PDF版総目次を 11月に当研究所総合検索及び刊行物リポジトリ上において日本語版・英語版を同時にインターネット公開し、利用者の便宜促進を図った。また、検索用キーワードの抽出作業を実施し、今後整備のうえ公開し、文献検索と発見便宜性をより向上させる計画である。

報　告・小林公治：「キリスト教の布教と南蛮漆器―理化学的分析の検討、メダイ研究との対比から―」『BVNGO NAMBAN―宗麟の愛した南蛮文化』オープニング記念講演会資料集　pp.1-14　20.10

発　表・小林公治「キリスト教の布教と南蛮漆器―理化学的分析の検討、メダイ研究との対比から―」（「BVNGO NAMBAN―宗麟の愛した南蛮文化」企画展オープニング記念講演会　20.10.10

・武田恵理：「初期洋風画と幕末洋風画、形を変えた継承―日本における油彩技術の変遷と歴史的評価の検証―」文化財情報資料部研究会　20.11.24

研究組織　○小林公治、小林達朗、二神葉子、塩谷純、江村知子、小野真由美、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、野城今日子（以上、文化財情報資料部）、早川泰弘、倉島玲央（以上、保存科学研究センター）、中野照男、田所泰（以上、客員研究員）、

無形文化財の保存・継承に関する調査研究(ム01)

目　　的　我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承形態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。

成　　果　1．無形文化財に関する調査研究

ア）芸能分野：古典芸能（歌舞伎・文楽・三味線音楽ほか）に関する調査研究・日本伝統楽器製作を中心とした文化財保存技術の調査研究

イ）工芸分野：伊勢型紙の製作技術に関する調査（伊勢型紙技術保存会）

2．現状記録を要する無形文化遺産の記録作成

ア）諸芸：講談及び落語（正本芝居噺）の実演記録を作成（新型コロナウイルス禍により延期）

イ）平家：復元曲の実演記録を作成（新型コロナウイルス感染拡大により延期）

ウ）宮薗節：伝承曲の実演記録を作成（宮薗千碌氏ほかによる古典曲2曲）

エ）常磐津節：伝承曲の実演記録を作成（常磐津兼太夫氏、常磐津文字兵衛氏ほかによる古典曲1曲）

オ）踊り地（常磐津節）の実演記録を作成（常磐津兼太夫氏、常磐津文字兵衛氏、堅田喜代氏ほかによる復元曲2曲）

第14回公開学術講座収録の様子

3．研究調査に基づく成果の公表

ア）第14回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座「日本の伝統的な管楽器と竹材」(東京文化財研究所、2021（令和3）年3月20日収録、4月末記録映像配信、6月末報告書刊行・ウェブ公開予定)

イ）無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」(東京文化財研究所、2020（令和2）年9月25日)

フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」の様子

論　文・前原恵美：「常磐津節《子宝三番叟》の音楽分析」『桐朋学園大学研究紀要』2020年第46集 pp.1-17　20.10

報　告・前原恵美：「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響―調査研究とその課題―」『無形文化遺産研究報告』15　pp.5-11

・前原恵美・橋本かおる：「楽器を中心とした文化財保存技術の調査報告4」『無形文化遺産報告』15 pp.77-87

刊行物・パンフレット2冊「日本の芸能を支える技」(Ⅵ三味線、Ⅶ箏)　Ⅵ20.12、Ⅶ21.3

・無形文化財の保存・継承に関する調査研究プロジェクト報告書「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」をめぐる課題　21.3

・無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」報告書

・『及川尊雄収集 紙媒体資料目録』　21.3

研究組織　○前原恵美、久保田裕道、石村智、佐野真規(以上、無形文化遺産部)、早川典子(保存科学研究センター)、飯島満(特任研究員)、橋本かおる(客員研究員)

無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究(ム02)

目　的　風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで収集・保管してきた無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行う。また選定保存技術については、国により選定された技術及び未選定の技術について情報を収集し、その中で重要なものについては現地調査・記録作成を行う。

成　果

1．新型コロナウイルス感染拡大防止のため実地調査を控え、感染症が無形民俗文化財に与える影響について情報を収集するとともに、これまでの調査・記録の整理を進め、映像編集、展示、出版等による研究成果の社会還元を実施した。継続的研究として風俗慣習分野では正月儀礼等について、民俗芸能分野ではシシ系芸能や風流系芸能等について、民俗技術分野として和船製作技術や箕の製作技術等について、伝承や保護の実態についての情報収集を行っている。

コロナ禍で映像配信を行った東京讃岐獅子舞

2．災害被災地における民俗芸能、風俗慣習の調査として、宮城県女川町北浦地区、福島県浪江町苅宿地区の調査を継続し、女川町北浦地区の民俗誌を作成した。また無形文化遺産総合データベース・アーカイブスの構築とデータ収集を行った。

3．第15回無形民俗文化財研究協議会「新型コロナ禍における無形民俗文化財」を事前録画・映像配信（2020（令和2）年12月25日～2021（令和3）年1月31日公開）において開催した。8件の事例報告及び5名の登壇者による総合討議を行った。成果は『第15回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめた。また汐留メディアタワーにおいて展示「箕のかたち―自然と生きる日本のわざ」を開催し、ウェブサイト「箕のかたち 資料集成」を公開した。

4．選定保存技術については、未選定ではあるが、絹の染織品を制作するのに欠かすことのできない文化財保存技術である絹織製作技術について調査研究を進め、報告書を刊行した。また同じく未選定ではあるが、金工品の制作に欠かすことのできない文化財保存技術である金属煮色着色の技術について、富山県高岡市と東京都台東区で現地調査を行った。

論　文
- 久保田裕道：「民俗芸能を記録する―映像記録の可能性―」『継承される地域文化』臨川書店 pp.157-179　21.3
- 久保田裕道：「コロナ禍における無形の民俗文化財の現状と課題」『無形文化遺産研究報告』15 pp.11-24　21.3

報　告
- 久保田裕道：「湯立獅子舞の芸態」「湯立獅子舞（湯立神楽）の民俗芸能的特色」『箱根の湯立獅子舞調査報告書』箱根町教育委員会　pp.172-201、294-311　21.3

発　表
- 今石みぎわ：「民俗事例にみる模型―小正月のツクリモノを中心に」科研費基盤B「模する技術の発展と伝統的習俗の変容についての学際的研究」第一回研究会　リモート開催　20.9.5
- 今石みぎわ：「民俗技術における素材と加工技術―箕を中心に」令和2年度第4回総合研究会　東京文化財研究所　21.1.12

刊行物
- 東京文化財研究所編『第15回無形民俗文化財研究協議会』　21.3
- 東京文化財研究所編『おながわ北浦民俗誌』　21.3
- 東京文化財研究所編『無形文化遺産（工芸技術）の伝承に関する研究報告書　絹織製作技術』　21.3

研究組織　○久保田裕道、石村智、今石みぎわ（以上、無形文化遺産部）

文化財の生物劣化の現象解明と対策に関する研究(ホ01)

目　的　文化財の生物劣化現象は、自然災害あるいは日常の管理において生物の発育を促進する因子が存在すると起こるが、その因子の動態は文化財を取り巻く保存環境と複雑かつ密接に関連している。本研究では、この機序を理解するため保存環境と生物劣化現象について記述を重視した事例調査研究を行うとともに、適切で効果的な対処方法について検討することを目的としている。

成　果
1．新規殺虫方法である湿度制御温風処理の技術開発に関して5か年で進めてきた研究を総括し、現状の到達点と今後の課題について2020（令和2）年12月に内部向けの研究会と報告書の編集を行った。
2．国内の洞窟（風連鍾乳洞）や古墳環境（虎塚古墳他）における微生物劣化現象について基礎研究を行い、成果を学会・紀要・学術雑誌等を通して発信した。
3．簡易迅速な生物モニタリング手法の開発のために、社会実装を視野に入れた標準的な調査方法を立案し、実際の現地にて調査を実施した。
4．水損等被災文化財の生物劣化現象の記述研究と初期対応に関する基礎研究を実施した。関連して被災資料の低酸素濃度殺虫処理に用いられた脱酸素剤から発生する有機酸について緊急的に調査を実施し成果を論文にまとめた。
5．文化財害虫の分子生物学的解析手法の検討を重ね、羽や歩脚などの体節の一部から種を特定する方法を確立した。また、一部の木材害虫では、虫糞からPCR法によって特異的に検出する方法を確立した。
6．5か年の研究成果を総括したプロジェクト報告書を刊行した。

論　文
・小峰幸夫、篠崎（矢花）聡子、佐藤嘉則ほか：「文化財建造物を加害したシバンムシ科甲虫のDNAバーコーディングに基づく同定法」『保存科学』60　pp. 19-26　21.3
・Guo, Y., Sato, Y., ほか：「Mycoavidus sp. Strain B2-EB: Comparative Genomics Reveals Minimal Genomic Features Required by a Cultivable Burkholderiaceae-Related Endofungal Bacterium」Applied and Environmental Microbiology, 86(18) e01018-e01020 20.7

報　告
・佐藤嘉則、岡部迪子ほか：「低酸素濃度殺虫法に用いるRP剤Kタイプからの有機酸発生」『保存科学』60　pp. 27-32　21.3
・間渕創、佐藤嘉則：「博物館等におけるATP拭き取り検査によるカビ集落の活性評価について」『保存科学』60　pp. 41-50　21.3
・小野寺裕子、小峰幸夫、佐藤嘉則ほか：「空調設備のない収蔵施設の保存環境調査－岐阜県関市春日神社の取り組み－」『保存科学』60　pp. 151-160　21.3

発　表
・黒坂愛美、佐藤嘉則、片山葉子ほか：「人為的攪乱により形成された鍾乳洞内照明植生の微生物生態学的解析」日本土壌微生物学会2020年度大会　WEB開催　20.6.5-8
・松野美由樹、片山葉子、佐藤嘉則ほか：「虎塚古墳の壁画剥落片から分離された微生物の群集構造解析」日本文化財化学会第37回大会WEB開催　20.9.5-13
・佐藤嘉則、松野美由樹ほか：「虎塚古墳の壁画剥落片の微生物群集構造解析」文化財保存修復学会第42回大会 紙上開催　20.7.10

刊行物
・『第4期中期計画（平成28年度～令和2年度）文化財の生物劣化の現象解明と対策に関する研究』21.3

研究組織　○佐藤嘉則、小峰幸夫、小野寺裕子、矢花（篠崎）聡子、岡部迪子、犬塚将英、早川典子、朽津信明、早川泰弘（以上、保存科学研究センター）、片山葉子、藤井義久、北原博幸（以上、客員研究員）、間渕創（併任、文化財活用センター）

保存と活用のための展示環境の研究(ホ02)

目　的　開発と導入が進む白色LED、有機EL光源の文化財展示照明としての「保存と活用の両立」の観点から、保存に与える影響及び展示照明としての評価方法を検討する基礎研究を行う。また、収蔵及び展示空間に対し、文化財に影響を与える汚染物質の軽減と温湿度変化の影響を検討するためのデータを収集する。

成　果　1．令和元年度、白色光による文化財への影響を考えるうえで基礎的な指標となっている損傷度曲線について、根拠論文の採取データ数が少なく再現実験が必要と考えられたことから、各波長による損傷度を把握するため、各種材料の変退色度ΔEと曝露時間との応答性について基礎的な実験を開始した。令和2年度は展示照明の文化財に与える影響について、基準光源であるD65光源を用いて、JIS絹布を染色したものに対して曝露試験を行い、波長ごとの影響を把握した。

2．空調や建物の改修を予定している博物館・美術館等において、改修前の状況を把握するため、環境調査を実施し、改修に向けたシミュレーションの材料となるデータを収集した。

3．新型コロナウイルス感染症に対する博物館等でのウイルス除去・消毒作業に対し、文化施設等においてどのような消毒ができるのか、消毒対応の仕方、換気に関して検討した。

4．2021（令和3）年3月4日「「保存と活用のための展示環境」に関する研究会－照明と色・見えの関係－」を文化財活用センターと共催で実施した。有意義であった（100%）と高評価であった（参加者　所外13名、アンケート回収率85%）。

5．プロジェクト最終年度として、5年間の研究成果をまとめて報告書を作成した。

曝露試験の様子

発　表・吉澤望：「照明と色・質感の見え」保存と活用のための展示環境に関する研究会　東京文化財研究所　21.3.4

・山内泰樹：「リモート・ミュージアムでの色と見え　～色の見えの個人差，高画質化へのチャレンジ～」保存と活用のための展示環境に関する研究会　東京文化財研究所　21.3.4

刊行物・『保存と活用のための展示環境の研究　平成28年度～令和2年度　研究成果報告書』　21.3

研究組織　○秋山純子、相馬静乃（以上、保存科学研究センター）、水谷悦子（併任、文化財防災センター）、吉田直人、間渕創（以上、併任、文化財活用センター）、佐野千絵（名誉研究員）、吉澤望、山内泰樹（以上、客員研究員）

文化財の材質・構造・状態調査に関する研究(ホ03)

目　　的　各種の可搬型分析機器を用いた文化財の材質・構造に関する調査方法を確立し、日本絵画における顔料の変遷についての研究を進めるとともに、金工品等における黄銅（真鍮）材料の利用実態を明らかにする。新たに可搬型回折装置を導入し、各種文化財の保存状態等に関する調査研究を進める。

成　　果　1．可搬型分析装置を用いたその場分析

・可搬型蛍光Ｘ線分析装置による材料調査として、平安時代の国宝久能寺経（個人蔵）に真鍮泥が使われている新知見を見出した。

・構成元素の含有率が既知である金箔試料に関する分析データを用いて、分析の精度や確度に関する定量的な評価を行った。

・可搬型ハイパースペクトルカメラの実用化に向けた光源の選定、白色補正法の改良等を行った。また、令和２年度に新規導入したＸ線分析顕微鏡を用いた調査を開始した。

2．現代アート作品の金属製装飾部分の腐食生成物の分析、及び作品周辺の空気質の分析を行い、空気環境と金属の腐食との関係について考察を行った。

金属試料を用いた暴露試験

3．研究成果発表

・論文２件、学会発表２件の研究成果発表を行うとともに、国宝久能寺経（個人蔵）及び国宝孔雀明王像（仁和寺蔵）に関する光学調査報告書を刊行した。

・金属の腐食と空気環境に関する研究会を開催した。

・これまでの５か年の研究成果報告書を刊行した。

論　文・早川泰弘ほか：「国宝久能寺経における真鍮泥の利用について」『保存科学』60　pp.73-84　21.3

・犬塚将英ほか：「鉛金属の腐食と空気環境との関係についての調査事例」『保存科学』60　pp.33-40　21.3

発　表・早川泰弘ほか：「蛍光Ｘ線分析における分析値の信頼性－金箔試料の定量分析に関する共同実験－」　日本文化財科学会第37回大会　WEB開催　20.9.5-13

・古田嶋智子ほか：「博物館における化学物質の放散試験方法の検討－サンプリングバッグのブランク濃度低減方法」　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10

刊行物・『国宝久能寺経薬草喩品第五　光学調査報告書』　21.3

・『国宝孔雀明王像　光学調査報告書』　21.3

・『文化財の材質・構造・状態調査に関する研究　平成28年度～令和２年度　研究成果報告書』　21.3

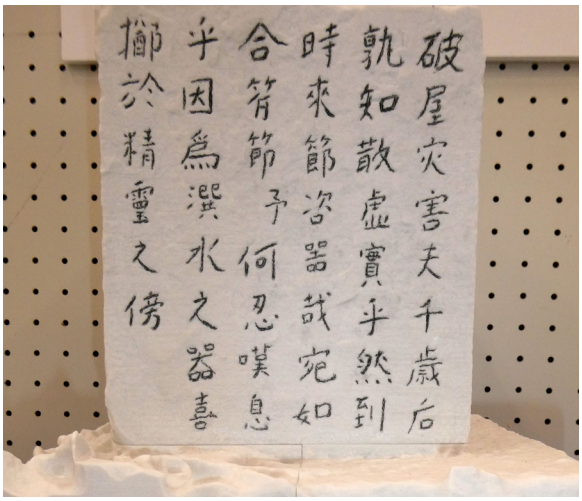
研究組織　○犬塚将英、早川泰弘、高橋佳久、紀芝蓮（以上、保存科学研究センター）、城野誠治（文化財情報資料部）、岡田健、古田嶋智子（以上、客員研究員）

屋外文化財の劣化要因と保存対策に関する調査研究(ホ04)

目　　的　屋外に所在する石造・木質文化財を対象に、覆屋の機能・遺構の露出展示に関する課題として、周辺環境等の劣化要因の究明及び修復材料・技術に関する研究を行う。また、石塔など石造文化財の災害事例及び災害対策に関する基礎的調査を行う。また、現在一時保管場所での長期的な保管を余儀なくされている被災文化財に関して、その保存・修復方法に関する研究を進める。

成　　果　屋外に位置する各種の文化財の劣化状況、保存環境、保存対策について、以下の通り調査研究を進めた。

1．和歌山県の九重慰霊碑で撮影した写真から三次元データを組み上げて三次元印刷することで、現物では解読が困難だった銘文を読み出して地域の防災意識啓発に寄与した。



三次元印刷された九重慰霊碑

2．天草市アンモナイト館で化石面の計測を行い、これまで取り組んできた保存対策によって化石面本来の状態が取り戻されるに至ったことを確認した。
3．南相馬市の薬師堂石仏において、過去の複数の時点で撮影されていた写真に基づいて、各撮影時点の形状を復元し、石仏の劣化の進行について検証を進めた。
4．臼杵市の風連鍾乳洞、香美市の龍河洞など、各地の鍾乳洞で現地調査またはオンライン診療などにより現状を解析し、鍾乳石を覆って繁茂する緑色生物を軽減する方向性などについて検討を進めた。
5．松島町の頼賢碑において、老朽化が目立つとされる、大正年間に建てられた覆屋内の現在の環境を調査し、保存施設としての覆屋の現状を評価した。

論　文・朽津信明ほか：「天草市アンモナイト館における緑色生物の制御」『保存科学』60 pp.85-98　21.3
・朽津信明「文化財の現地保存を考える」『保存科学』60　pp.111 -130　21.3
・朽津信明ほか：「天草市アンモナイト館における照明調整による緑色生物の軽減」文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10

発　表・朽津信明ほか：「三次元計測に基づく富山市大山の恐竜足跡化石の劣化評価」日本文化財科学会第37回大会　WEB開催　20.9.5-13
・朽津信明ほか：「過去の写真に基づく恐竜足跡化石の風化速度の検証」日本応用地質学会2020年度研究発表会 オンライン開催　20.10.1-2

講　演・朽津信明：「九重の土砂災害記念碑レプリカ墨入れ式」新宮市役所　20.12.5

刊行物・『屋外文化財の劣化対策に関する調査研究報告書』　21.3

研究組織　○朽津信明、白石明香（以上、保存科学研究センター）、前川佳文（文化遺産国際協力センター）

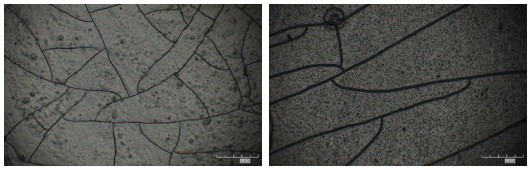
文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究(ホ05)

目　　的　美術工芸品や建造物等の修復に貢献するため、伝統的な修復材料・技法についての科学的調査を行い、その安定性についての評価を行う。伝統的に使用されており、科学的な解明が必要とされる材料についての化学的調査を行い、修復現場での明確な適用を検討する。伝統的な技法についての記録やその効果についての科学的解明を行う。また旧来の材料・技法では施工が困難とされてきたものについて、新規の材料・技法の開発に関する調査研究を行う。

成　　果　1．文化財の伝統材料と修復材料に関する調査

・絵画の基底材に関する調査

東京国立博物館との共同研究で絵画基底材料としての絹糸の形状と織組織に関する基礎データを収集した。また、自然布に関して、FT-IR の判別フローを作成し、それを元に伝世資料の識別を行なった。一部の作品ではクロスセクションによる判定が可能であり、作成したフローの精度を確定できた。



強制劣化28日後の絞漆（左）と素黒目漆（右）の電子顕微鏡写真

・漆に関する調査

日本の漆技法に関して、伝統的な工法の科学的解明を行い、絞漆などの化学的変化を利用した技術を明らかにする一方、被災漆芸品の処置や科学的再現による今後の防災上の課題について検討を行なった。

2．文化財の修復技法に関する研究

・令和元年度開催した「文化財修復処置に関するワークショップ―ゲルやエマルションを使用したクリーニング方法―」について、報告書としてまとめ、刊行した。講義内で使用した資料を全て日本語訳とし、今後の現場でクリーニング作業における参考資料として活用することを目的に作成した。また令和元年度に開催した「文化財修復処置に関する研究会―クリーニングとゲルの利用について―」についての報告書を刊行した。

・水損による被災資料の処置方法の検討や、それらの資料処置を行う機材導入など第 5 期中長期のための萌芽的研究を遂行した。

3．中長期プロジェクト「文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究」5 カ年の成果を包括した報告書を作成した。

論　文・倉島玲央ほか：「タンパク質を混和させた漆塗膜の化学構造と物性の検証」『保存科学』60 pp.61-72　21.3

発　表・Noriko Hayakawa, et al.：On-site Surface Cleaning of Japanese Architecture Using Gels Incorporating Organic Solvents, IIC Edinburgh Congress 2020　20.11.4

・倉島玲央ほか：「ミャンマーで採取された漆に関する研究」文化財保存修復学会第42回大会紙上開催　20.7.10　ほか6件

刊行物・『文化財修復処置に関するワークショップ―ゲルやエマルションを使用したクリーニング方法―』　21.3

・『文化財修復処置に関する研究会　―クリーニングとゲルの利用について―』　21.3

・『文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究』　21.3

研究組織　○早川典子、佐藤嘉則、倉島玲央、藤井佑果、山府木碧、中村恵里花、内田優花、山田祐子（以上、保存科学研究センター）、安永拓世（文化財情報資料部）、本多貴之、酒井清文、貴田啓子、稲葉政満（以上、客員研究員）

近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究(ホ06)

目　的　近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物等従来の文化財とは、規模、材質、製造方法等に大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両等の保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。

成　果　1．近代文化遺産の活用事例に関するアンケート調査の実施

2018（平成30）年4月に改正された文化財保護法により、活用に大きく舵を切った文化財保護行政を踏まえ、活用を目指した修理をどのように実施したのか、どのような活用方法を目指しているのか調査研究するために、近代文化遺産の活用に関する対応を知るために日本各地にアンケートをお願いし、回答を得た。

2．旧志免鉱業所竪坑櫓における修復に対する助言

旧志免町鉱業所の修理工事に際して、使用されている塗料に関する調査分析、及びコンクリート構造物の屋上防水に関する調査研究を実施した。

3．失われる伝統技術の記録作成

無形文化遺産部と共同で、三味線の製造元である「東京和楽器株式会社」での記録作成を実施した。

4．紙資料の保存技術の調査研究

航空資料の保存に関する調査研究を実施した。

5．近代文化遺産の保存活用に関して地方自治体が組織する調査検討の委員会への参画

全国各地の自治体が組織する近代文化遺産の保存活用に関する調査検討委員会に委嘱を受けて参加し、近代文化遺産の保存と修復に関する調査、助言を行った。

6．報告書の刊行

令和2年度に実施した近代の建造物（洋館）の内部造作の保存と修復に関する研究内容を報告書に取りまとめた。また、2018（平成30）年に発行した「鉄構造物の保存と修復」の英語版を刊行した。

報　告・中山俊介：「内部造作の保存と修復に関する事例集」『未来につなぐ人類の技 20 内部造作の保存と修復』　pp.83-105　21.3

発　表・中山俊介：「近代文化遺産の保存と活用」近代文化遺産の保存と活用に関するシンポジウム　20.12.4

・中山俊介：「第 5 福竜丸の保存について」「ふね遺産」認定記念シンポジウム　21.2.21

刊行物・『未来につなぐ人類の技 20　内部造作の保存と修復』　21.3

・『Conservation and Restoration of Steel Structures』　21.2

研究組織　○早川泰弘、中村舞、鳥海秀実（以上、保存科学研究センター）、中山俊介（特任研究員）、簡佑丞、苅田重賀（以上、客員研究員）、鈴木一義（国立科学博物館）

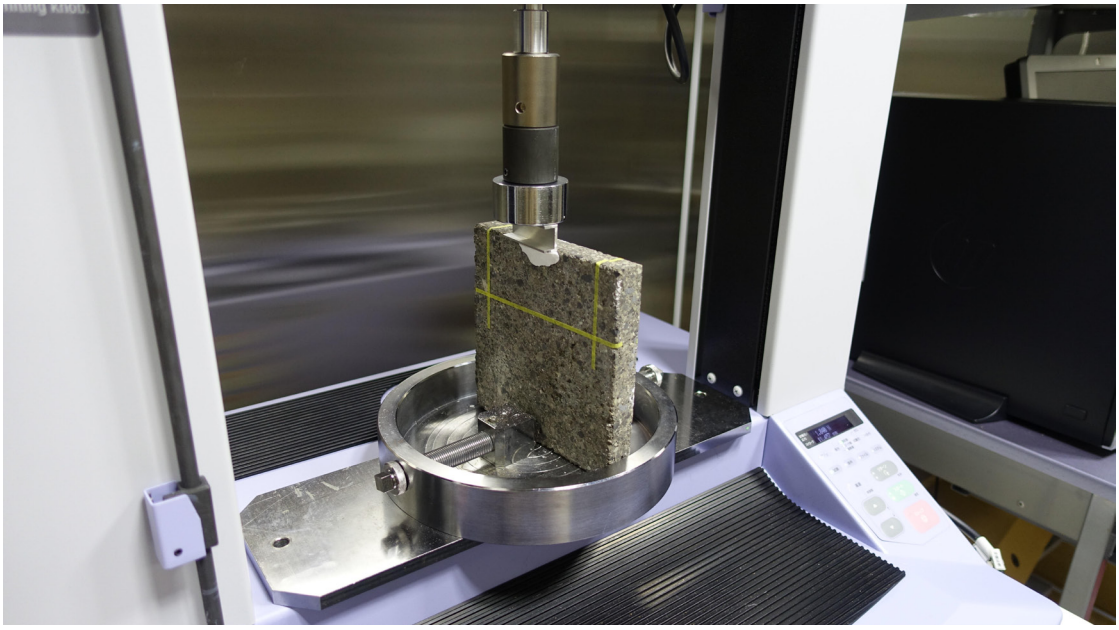
文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力(ホ)

目　　的　文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。また、キトラ古墳壁画の彩色及び漆喰の状態調査並びに展示環境の制御とモニタリング方法の調査研究を行う。

成　　果　1．高松塚古墳壁画に関しては、修理施設内での歩行性害虫調査、浮遊菌・付着菌・落下菌調査に加え、浮遊粒子数測定、ATP 測定と空気質調査を行った。温湿度推移のモニタリングを継続し、安全な保存空間の維持に努めた。また見学通路のガラス窓内部での結露リスクを検討するため、一般公開時前後の周辺の温度湿度及びガラス窓・壁の表面温度の監視を行った。さらに、一般公開時における新型コロナウイルス感染症対策に関する助言を行った。

　修復後のメンテナンス作業に関連する調査研究としては、漆喰部分・補填箇所について、その後の状態についての確認を定期的に行った。また、別置保管している目地該当部分の上の星宿金箔について、壁画と一体化させる方法について検討した。

2．キトラ古墳壁画に関しては、「四神の館」における保管及び公開の環境について調査協力し、集中メンテナンスに伴い、蓋の作成試作など、状況の改善について協議や検討を行った。また、現状は泥に覆われているが、「辰」「巳」「申」に該当すると推定される漆喰片について、令和元年度のＸ線透過撮影結果を踏まえ、テラヘルツ分光分析及び蛍光Ｘ線分析を行った。



石材目地部分充填材の付着性確認試験

発　表・犬塚将英ほか：「Ｘ線透過撮影による泥に覆われたキトラ古墳壁画の調査」日本文化財科学会第37回大会　WEB開催　20.9.5-13

研究組織　○早川泰弘、佐藤嘉則、朽津信明、犬塚将英、早川典子、秋山純子、倉島玲央、小峰幸夫、藤井佑果（以上、保存科学研究センター）、水谷悦子（併任、文化財防災センター）、川野邊渉（特任研究員）、宇高健太郎、大場詩野子、片山葉子（以上、客員研究員）

無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集(ム05)

目　的　無形文化遺産保護に関わる国際的動向の情報収集を図り、アジアを中心とする海外の研究機関等との研究交流を実施し、国内外の無形文化遺産保護に貢献する。

成　果　1．韓国文化財庁国立無形遺産院との研究交流では、本研究所の研究員の派遣と相手機関研究員の受け入れを予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため中止せざるを得なかった。代わりに両国のコロナ禍における無形文化遺産保護の現状について情報交換を行った。

2．無形文化遺産の国際的な動向に関する調査研究では、新型コロナウイルス感染症拡大のためオンラインでの開催となったユネスコ無形文化遺産条約第15回政府間委員会（議長国ジャマイカ：2020（令和2）年12月14日～19日）に2名のスタッフ（石村・二神）がリアルタイムで傍聴し、情報収集を行った。なお本調査の成果は『無形文化遺産研究報告』第15号において報告した。

3．アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）への協力では、国際シンポジウム「無形文化遺産の持続可能な開発への貢献に関する研究：教育とまちづくり」（2021（令和3）年1月28日～29日）に1名のスタッフ（石村）がリソースパーソンとして出席した。

4．新型コロナウイルス感染症拡大の状況における無形文化遺産の現状と課題について、国内外の情報を収集し、それをウェブサイト及びSNSによって発信した。またユネスコのウェブサイトにコロナ禍における日本の無形文化遺産の現状と課題の報告を掲載した。

論　文・T. Ishimura：Issues regarding the protection of intangible cultural heritage related to religion in Japan. S. L. Wang et al. eds, Heritage and Religion in East Asia. Routledge.　pp. 187-203　21.1

報　告・T. Ishimura：Performing arts, traditional craftsmanship and festive events in Japan. Living heritage experiences and the COVID-19 pandemic https://ich.unesco.org/en/living-heritage-experience-and-covid-19-pandemic-01124?id=00073　20.4

・二神葉子：「無形文化遺産の保護に関する第15回政府間委員会における議論の概要と今後の課題」『無形文化遺産研究報告』15　pp.51-74　21.3

・石村智：「コロナ禍における無形文化遺産の情報収集・発信」『無形文化遺産研究報告』15　pp.23-30　21.3

研究組織　○石村智、金昭賢（以上、無形文化遺産部）、二神葉子（文化財情報資料部）、宮田繁幸、松山直子、神野知恵（以上、客員研究員）

アジア諸国等文化遺産保存修復協力〔コ02〕

目　的　東南アジア、西アジア及びその周辺地域における文化遺産の保存活用に関する調査研究の実施及び当該地域で行われる文化遺産の保存修復事業への協力を通じて、我が国が有する文化遺産保護に関する技術移転を図るとともに、この分野での国際協力を推進する。

成　果　1．カンボジア　アンコール・タネイ寺院遺跡保存整備事業に対する支援等

ア）東門の修復工事に対する情報通信技術を活用した技術的支援の実施

アンコール・シエムレアプ地域保存整備機構（APSARA）が実施する修復工事の内容をメッセージサービス（SNS）等によりリアルタイムで把握し、工事の進捗に応じて修復や補強の方法を協議するためのオンライン会議を開催（2020（令和2）年4月21日、5月19日、7月17日、9月1日、10月6、14日、11月27日）

イ）アンコール遺跡保存国際調整委員会技術会合への参加及び事業報告

アンコール遺跡国際調整委員会（ICC-Angkor）への定期的な事業報告の提出（6月、11月）、第34回ICC技術会合への事業プレゼンテーションビデオの提出及び同会合へのオンライン参加（2021（令和3）年1月26日～27日）

ウ）東南アジア考古学会2020年度大会における「アンコール・タネイ寺院遺跡の保存整備」の報告（12月12日）

エ）研究所エントランスロビーパネル展示「カンボジア・アンコール・タネイ寺院遺跡東門の修復」（7月4日～2021（令和3）年6月2日）

2．ネパールの被災文化遺産保護に関する支援

カトマンズ・ハヌマンドカ王宮シヴァ寺の復旧工事に向けたJICA長期派遣専門家等への資料提供及び技術的助言のための協議を実施（7月29日、10月23日、12月16日、25日）

3．ペルシア湾岸諸国における協力（相手国調査）

ペルシア湾岸地域の文化遺産保護協力の需要を調査するため、サウジアラビア王国、バハレーン王国、オマーン国、アラブ首長国連合及び当該地域の水中文化遺産保護の現状を対象とした関係者へのオンラインインタビュー等を実施（11月18日、26日、12月10日、1月18日）

4．オンライン研修及び研究会

ア）研究会（ウェビナー）「東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理」の開催（11月21日）

イ）オンライン国際研修「3次元写真測量による文化遺産の記録」の開催（11月12日、25日）

論　文・森朋子、淺田なつみ、SHAKYA Lata：「カトマンズ盆地内歴史的集落保全における法的枠組み－2015年ネパール地震後の世界遺産暫定リスト・コカナにおける被災状況調査報告　その13－」日本建築学会大会学術講演梗概集　pp.955-956 20.9

発　表・SEA Sophearun, KEOV Diamand (APSARA, video presentation prepared by TNRICP), “Restoration on East Gate of Ta Nei Temple” The 34th Technical Session of ICC-Angkor 21.1.26

・友田正彦、間舎裕生、淺田なつみ、ヴァル エリフ ベルナ：「アンコール・タネイ寺院遺跡の保存整備」　東南アジア考古学会2020年度大会　20.12.12

刊行物・“Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor-Progress Report of 2020” APSARA/TNRICP, 21.3

・『東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理　研究会記録 / Conservation of Wooden Architectural Heritage in Southeast Asia Proceedings』東京文化財研究所　21.3

研究組織　○金井健、友田正彦、安倍雅史、間舎裕生、淺田なつみ、ヴァル エリフ ベルナ、岡崎未来（以上、文化遺産国際協力センター）、山田大樹（以上、客員研究員）、腰原幹雄、大石岳史、桑野玲子、大坪正英（以上、東京大学生産技術研究所）

保存修復技術の国際的応用に関する研究（コ03）

目　的　文化遺産保護に関して諸外国が有する問題は、それぞれの地域、環境に応じて多種多様であり、それらへの対応には他国で実績のある既存の手法をそのまま適用することが必ずしもできない。そこで、本プロジェクトでは文化遺産の現地における持続可能な保存・修復・活用のための維持管理を目標に、各国における問題を分析し、現地に即した修復技法、材料を研究するとともに、当研究所を中心に諸外国の専門家ネットワークを構築し、意見交換、技術移転をすることで、現地担当者の育成を図る。

成　果　1．ミャンマー　バガン遺跡における煉瓦造寺院外壁及び壁画の保存に向けた調査と修復方法の研究
当初計画では、2020（令和 2）年 7 月と 2021（令和 3）年 1 月に同遺跡 Me-taw-ya 寺院及び Lokahteikpan 寺院での現地専門家を対象とした人材育成事業ならびに保存修復事業を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響から当初計画を変更し、リモート会議を通じた維持管理に係る技術指導を行った。（オンライン会議：2020（令和2）年9月18日）
2．旧和宇慶家墓の保存に向けた石垣市教育委員会文化財課及び外部専門家との共同研究（2020（令和2）年10月1日）
3．イタリア　ウルビーノ大学との壁画及び石造文化財の保存修復に係る共同研究に向けた合同会議（オンライン会議：2021（令和3）年2月28日）

論　文・前川佳文、ダニエラ・マリア・マーフィーほか：「ミャンマー共和国バガン遺跡ロカティーパン寺院壁画の保存修復と国際協力事業」『保存科学』60　pp.99-110　21.3

刊行物・Capacity Building; a Conservation Project for the Repair, Strengthening and Recovery of Temple 1205a Archaeological Area and Monuments of Bagan, Myanmar 2016–2020,　令和 2 年度成果報告書 東京文化財研究所　197p　21.3
・Lokahteikpan Wall Painting Project, Pagoda 1580 Capacity Building Report, 令和 2 年度成果報告書 東京文化財研究所　177p　21.3
・旧和宇慶家墓の保存に向けた調査研究　令和 2 年度成果報告書 東京文化財研究所　50p　21.3

研究組織　○加藤雅人、前川佳文、牛窪彩絢（以上、文化遺産国際協力センター）、小峰幸夫（保存科学研究センター）

在外日本古美術品保存修復協力事業〔コ04〕

目　　的　日本の文化財は欧米を中心に海外でも多く所蔵されている。しかし、日本文化財の保存修復専門家は海外にほとんどおらず、多くの博物館などで適切な処置に窮している。そこで、本事業では海外で所蔵されている日本文化財の保存修復に関する助言等の協力を行う。また本格的な修復が必要な美術作品に関しては日本で修復して返還する。さらに、特殊な条件にある海外作品に関して、その保存修復方法の研究を行い、成果を公開、共有する。

成　　果　1．作品修復

ア）ナショナル・ギャラリー・オブ・ビクトリア（オーストラリア）所蔵「親鸞聖人絵伝」、絹本着色、掛軸4幅、修復完了、輸出

イ）ナショナル・ギャラリー・オブ・ビクトリア（オーストラリア）所蔵「般若図」、絹本着色、掛軸1幅、輸出

ウ）モントリオール美術館（カナダ）所蔵「女房三十六歌仙貼交屏風」、紙本金地着色、屏風6曲1双、輸入

エ）モントリオール美術館（カナダ）所蔵「熊野曼荼羅」、絹本着色、掛軸1幅、輸入

2．報告書の作成・刊行

ア）在外日本古美術品保存修復協力事業概要

イ）インディアナポリス美術館（アメリカ）所蔵「檜・八橋図」、紙本金地着色、屏風6曲1双

ウ）インディアナポリス美術館（アメリカ）所蔵「林和靖・太公望図」、紙本墨画、掛軸2幅

エ）インディアナポリス美術館（アメリカ）所蔵「煙寺晩鐘図・平沙落雁図」、紙本墨画、掛軸2幅

刊行物・『在外日本古美術品保存修復協力事業』、東京文化財研究所　21.3

・『在外日本古美術品保存修復協力事業　檜・八橋図　No.2017-1』、東京文化財研究所　21.3

・『在外日本古美術品保存修復協力事業　林和靖・太公望図　No.2017-2』、東京文化財研究所　21.3

・『在外日本古美術品保存修復協力事業　煙寺晩鐘図・平沙落雁図　No.2017-3』、東京文化財研究所　21.3

研究組織　○加藤雅人、友田正彦、片渕奈美香、清水綾子（以上、文化遺産国際協力センター）、江村知子、安永拓世（以上、文化財情報資料部）、三本松俊徳、廣原大樹（以上、研究支援推進部）、大河原典子、杉山恵助（以上、客員研究員）

国際研修（コ05）

目　的　近年日本の材料や道具、保存修復の理念が諸外国の文化財修復に応用されるようになってきた。このような状況において、海外の保存修復関係者に直接日本の技術や知識を伝える場が求められている。そこで、国際及び各国の機関と共催、あるいは協力を得て、研修等を国内外において開催することで、保存修復関係者への技術移転、情報共有を行う。

成　果　1．国際研修「紙の保存と修復（International Course on Conservation of Japanese Paper）」
開催を予定して準備を進めていたが、新型コロナウィルス感染症拡大のため中止とした。

・参考（当初予定）
期日：2020（令和2）年8月31日～9月18日
主催：東京文化財研究所、文化財保存修復協力国際センター（ICCROM）
会場：東京文化財研究所他国内
参加者：10名

2．オンラインセミナー「国際研修『ラテンアメリカにおける紙の保存と修復2012-2019』（Online Seminar International Course on Paper Conservation in Latin America 2012-2019）」
期日：2020（令和2）年12月4日～11日
主催：メキシコ文化省国立人類学歴史機構 国立文化遺産保存修復機関（CNCPC-INAH）、東京文化財研究所、ICCROM
会場：オンライン開催
参加者：2012 - 2019年の研修修了者
内容：複数のセッションに分けて、終了後の実践や経験の報告とそれを基にした和紙、装こう修理技術などとその応用に関する討議を行った。セッションテーマ（技術の応用、クリーニング、教育普及、接着剤、補修、裏打ち、フラットニング）

3．記録作成
2019（令和元）年に開催した国際研修「紙の保存と修復」の記録として、報告書とその補助資料としての装こう修理技術実習の動画を作成した。

刊行物・『国際研修「紙の保存と修復」2019』東京文化財研究所　21.3

研究組織　○加藤雅人、友田正彦、後藤里架（2019年7月まで）、五木田まきは（以上、文化遺産国際協力センター）、早川典子（保存科学研究センター）、三本松俊徳、廣原大樹（以上、研究支援推進部）

文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究（シ05）

目　　的　東京文化財研究所で行われている調査研究に関する情報及び国内外の文化財に関するさまざまな情報について分析し、それらの情報を文化財保護に対して活用するための調査研究を実施する。また、それらの情報の効果的な公開の手法に関する調査研究を行う。

成　　果　1．デジタル画像の形成方法の研究開発

ア）運営費交付金や外部資金による他プロジェクトの一環として、東京文化財研究所内外において、准胝観音像（東京国立博物館所蔵）、扇面法華経（四天王寺所蔵）など多数の文化財の光学的調査を実施、一部は成果報告書を刊行した。また、調査研究の成果を論文等で発表した。

イ）『春日権現験記巻九・巻十　光学調査報告書』を2021（令和3）年3月16日付で刊行した。

ウ）ガラス乾板に記録された色情報に関する調査を沖縄県立博物館・美術館等で実施した。

2．文化財情報に関する調査研究

ア）文化財情報の適切な発信のための情報の扱い、特に過去に収集された情報の再活用に関する調査研究を進め、学会や論文を通じて発表した。

イ）展示収蔵施設の学芸員、自治体の担当者などの文化財の実務家を対象に、文化財の記録作成についての1回のセミナー、2回のハンズオン・セミナーを開催した。

3．東京文化財研究所が行う調査研究成果の発信

ア）研究情報の発信の一環としてウェブサイトを運用した。令和2年度は、3件のウェブデータベースの新規公開、既存データベースへのデータ追加や機能改善、ウェブサイトの適宜更新を実施した。また、メールマガジン、ソーシャルメディアを通じて、国内外の文化財関係者に対し活動報告や催事などウェブサイトの更新情報、及び新型コロナウイルス感染症拡大に伴う国際機関を中心とした取組みに関する情報を発信した。

イ）2020（令和2）年9月30日付で『東京文化財研究所年報2019』を刊行した。編集にあたっては、各部・センターの年報部会員の協力を得た。

ウ）研究成果紹介のためのパネル展示をエントランスロビーで行った。令和2年度は文化遺産国際協力センターによる「カンボジア・アンコール・タネイ寺院遺跡東門の修復」を展示した。

4．調査研究及び研究成果発信のための文化財情報基盤の整備・充実

ネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を実施、国立文化財機構内他施設の担当者と情報交換を行いセキュリティ水準の維持・向上に努めた。また、職員の情報セキュリティへの意識向上を目的に、「情報システム部会研修会」を1回開催した。なお、所内の情報基盤整備及びセキュリティ関連業務は、各部・センターの情報システム部会員と連携して実施している。

ウェブサイトアクセスランキング

1	ガラス乾板データベース	6	『美術画報』所載図版データベース
2	書画家人名データベース	7	黒田清輝日記
3	東京文化財研究所トップ	8	年紀資料集成
4	『日本美術年鑑』所載物故者記事	9	写真原板データベース（4×5カラー）
5	『日本美術年鑑』所載美術界年史彙報	10	『保存科学』

（令和2年度　上位10位まで）

ウェブサイトの主な更新履歴

（定期刊行物の公開、活動報告、公募情報を除く）

年月日	更新内容	関係部局
20.4.24	新型コロナウイルス感染症予防にかかる美術館博物館等の作品消毒の窓口	保存科学研究センター
20.5.1	新型コロナウイルスと無形文化遺産	無形文化遺産部
20.5.21	文化財修復の現状と諸問題に関する研究会報告書 公開	保存科学研究センター
20.6.3	ご来所の皆様へ（手指消毒や検温、マスク着用のお願い）	研究支援推進部
20.6.5	資料閲覧室の再開	文化財情報資料部
20.6.16	台湾における近代化遺産活用の最前線 公開	保存科学研究センター
20.6.25	資料閲覧室予約方法の変更	文化財情報資料部
20.7.13	『船大工那須清一と長良川の鵜舟をつくる』公開	無形文化遺産部
20.7.14	展覧会「日本美術の記録と評価―調査ノートにみる美術史研究のあゆみ―」開催	文化財情報資料部
20.7.15	デジタルブック版『未来につなぐ人類の技 19　コンクリート造建造物の保存と修復』公開	保存科学研究センター
20.7.21	エントランスロビー展示「カンボジア・アンコール・タネイ寺院遺跡東門の修復」	文化遺産国際協力センター
20.8.6	文化財の記録作成とデータベース化に関するハンズオン・セミナー 「文化財写真入門　ー文化財の記録としての写真撮影実践講座」開催	文化財情報資料部
20.8.12	『かりやど民俗誌』公開	無形文化遺産部
20.9.1	ゲッティ・リサーチ・ポータルでの江戸時代版本（織田文庫）公開	文化財情報資料部
20.9.4	第54回オープンレクチャー 開催	文化財情報資料部
20.9.30	デジタルブック版『未来につなぐ人類の技』1 ～ 12 公開	保存科学研究センター
20.10.12	【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」動画公開	無形文化遺産部
20.10.15	研究会「東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理」開催	文化遺産国際協力センター
20.10.30	「箕のページ」公開	無形文化遺産部
20.11.11	本研究所における新型コロナウイルス感染者の発生	研究支援推進部
20.11.30	第15回無形民俗文化財研究協議会の動画視聴ページのご案内	無形文化遺産部
20.12.28	第15回無形民俗文化財研究協議会の動画視聴ページ公開	無形文化遺産部
21.1.13	資料閲覧室開室日の変更	文化財情報資料部
21.1.15	「売立目録作品情報」公開	文化財情報資料部
21.1.26	『日本の芸能を支える技Ⅵ　三味線　東京和楽器』刊行	無形文化遺産部
21.2.1	「斎藤たま　民俗調査カード集成」公開	無形文化遺産部

論　文・二神葉子：「尾高鮮之助撮影バーミヤーン西大仏の写真による三次元空間画像の作成」『保存科学』60　pp.131-144　21.3　ほか4件

発　表・小山田智寛ほか：「デジタルコンテンツと継続性：明治大正期書画家番付データベースを例に」デジタルアーカイブ学会第4回研究大会スピンオフ研究発表会　20.7.5　ほか5件

刊行物・『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 春日権現験記絵 巻九・巻十 光学調査報告書』　21.3

研究組織　○二神葉子、塩谷純、江村知子、小林公治、小林達朗、小野真由美、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、米沢玲、城野誠治、中村亮介、谷口毎子、安岡みのり、磯山浩美、酒井かれん（以上、文化財情報資料部）

広報委員・情報システム部会：早川泰弘（保存科学研究センター長）　**各部署情報システム部会員**：安達佳弘、鈴木道夫（以上、研究支援推進部）、橘川英規（文化財情報資料部）、石村智（無形文化遺産部）、倉島玲央（保存科学研究センター）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター）　**広報委員・年報部会**：山梨絵美子（副所長）　**各部署年報部会員**：井上裕介、三本松俊徳（以上、研究支援推進部）、小林公治（文化財情報資料部）、前原恵美（無形文化遺産部）、犬塚将英（保存科学研究センター）、安倍雅史（文化遺産国際協力センター）

専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充（シ06）

目　　的　当研究所が行う文化財の調査・研究の成果を集約するとともに、専門性の高い資料や情報を蓄積・整理する。あわせてデータベースの継続的拡充を行い、資料閲覧室を窓口にして文化財に関する総合的レファレンスを充実させる。

成　　果　1．全所的な文化財情報の発信：通常は年4回アーカイブズワーキンググループ協議会を開催してきたが、第1四半期は新型コロナウイルス感染症の影響により、メールによる意見集約・情報共有を行い、第2四半期以降は3回（2020（令和2）年7月16日、12月3日、3月16日）、アーカイブの拡充及び積極的に情報発信を行うための協議を行った。また円滑な研究業務推進と資料の保存活用を両立させるため、図書や画像資料等の利用規定についても協議を行った。

2．売立目録デジタルアーカイブの改良と報告書の作成：令和元年度より資料閲覧室にて公開しているデジタルアーカイブの校正作業を進め、昨年度開催した研究会の内容を拡充した報告書を刊行した。また売立目録に収載されたテキスト情報に基づくデータベースのインターネット公開を2021（令和3）年1月より開始した。

報告書『売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望』

3．ゲッティ研究所が構築している語彙データベースとの連携のため、当研究所が蓄積してきた日本の美術家1,758名分の人名情報をゲッティ研究所に提供した。

4．通常は資料閲覧室を週に3回公開してきたが、新型コロナウイルス感染症の影響により2020（令和2）年2月28日から資料閲覧室は閉室し、その後事前予約制を導入し6月10日より週に2回の公開を再開した。さらに2021（令和3）年1月の緊急事態宣言発出により、週1回の開室に変更した。開室日・利用者数は減少したが、デジタル資料のオープンアクセス化の増加や、インターネット公開のデータベースの拡充、遠隔複写サービスなどを積極的に行い、研究支援を実践した。

閲覧室事業の運営

1．年度内資料受け入れ数
和漢書1,853件、洋書777件、展覧会図録・報告書等1,355件、雑誌2,720件（合計6,705件）

2．年度内閲覧室利用状況
公開日総数125日・年間利用者合計988人

刊行物・『東京文化財研究所 研究報告書 売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望―売立目録の新たな活用を目指して―』東京文化財研究所　21.3

研究組織　○江村知子、橘川英規、安永拓世、米沢玲、二神葉子、小山田智寛、小林公治、塩谷純、小林達朗、小野真由美、城野誠治、寺﨑直子、尾野田純衣、大前美由希、田村彩子、阿部朋絵、鈴木良太（以上、文化財情報資料部）、久保田裕道（無形文化遺産部、文化財情報資料部兼務）、早川典子（保存科学研究センター、文化財情報資料部兼務）、西和彦（文化遺産国際協力センター、文化財情報資料部兼務）、永崎研宣、片山まび、川瀬由照（以上、客員研究員）

令和２年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）(シ08)

目　　的　文化財情報資料部の研究成果の一部を外部講師を交えて広く一般に公開する。

成　　果　1．2020（令和2）年10月30日、専門家はもとより広く一般からも聴講者を募集し、オープンレクチャー「かたちからの道、かたちへの道」を開催した。研究所内部より2名の講演を行った。それぞれの講演テーマは次の通りである。

・塩谷純（文化財情報資料部長）「近代日本画の“新古典主義”―小林古径の作品を中心に」

・二神葉子（文化財情報資料部文化財情報研究室長）「タイに輸出された日本の漆工品―王室第一級寺院ワット・ラーチャプラディットの漆扉を中心に―」

2．外部からの聴講者は新型コロナウイルス感染症予防に鑑み、抽選制とし、34人の参加を得た。参加者からのアンケート結果では、26名の回答者のうち、「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせ92.3%の回答を得ることができた。

オープンレクチャーの様子

研究組織　○小林達朗、小野真由美、塩谷純、二神葉子、小林公治、江村知子、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、米沢玲、中村亮介、野城今日子（以上、文化財情報資料部）

無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化 (ム03)

目　　的　無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。無形文化遺産部所蔵のアナログ資料を中心に、これまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、デジタル化を済ませた音声資料は、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には資料のデータベース公開と音声・画像等の配信を目指すものである。

成　　果　1．映像資料については、再生不可となることが危惧されるHi 8、DVCを中心に媒体変換を行った。
2．音声記録のデジタル化は、前年度に引き続き、1960年代に放送された純邦楽関連のテープ録音を中心に収録内容を確認した。また民謡のオープンリールテープ録音についてもデジタル化を実施し、収録内容の確認を行った。
3．カセットテープに関しては、旧芸能部所蔵テープの内、寺事の現地録音を中心に内容確認を行った。
4．無形文化遺産関連の音声映像資料11点（作成DVD10点・作成BD 1点）を所蔵資料として新たに登録した。

報　告・飯島満：「資料紹介：新内節四曲―昭和三十二年度文化財保護委員会作成記録より―」『無形文化遺産研究報告』15　pp.120-136　21.3
・星野厚子：「資料紹介：東京文化財研究所所蔵フランス・パテ社製SPレコード―長唄『寒行雪の姿見』『筑摩川』を中心に―」『無形文化遺産研究報告』15　pp.138-150　21.3

研究組織　○石村智、牛村仁美、金昭賢、中田翔子（以上、無形文化遺産部）、飯島満（特任研究員）、星野厚子、大西秀紀、宮澤京子（以上、客員研究員）

文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信〔コ01〕

目　的　海外の文化遺産に関する情報の収集、諸外国の文化遺産保護施策等に関する調査を行う。国際情勢に鑑みつつ優先度の高い国の文化遺産保護関連の法令について条文を和訳し、法令集として刊行する。また世界遺産委員会などユネスコ等が行う主要な国際会合へ出席して情報の収集を行うとともに、文化遺産の保護をめぐる今日的な課題等に関する調査研究を行い、その成果をインターネットなど多様な媒体を通じて国内外に情報発信する。

成　果　1．文化遺産保護に関する情報収集のための国際会議やシンポジウム等については、世界遺産委員会等のように新型コロナウイルス感染症拡大の影響により開催されなかった、あるいは第94回国際文化財保存修復研究センター理事会のようにオンライン開催に変更された。オンライン開催については、これに参加して情報収集を行った。

2．文化遺産保護関連の法令の収集・分析及び翻訳作業を実施し、英国政府担当者に依頼した英国の文化財保護制度の概説を含む『各国の文化財保護法令シリーズ[25]英国(グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)』として刊行した。

3．例年行っている「世界遺産研究協議会」については開催せず、次年度と併せた2カ年での実施として、今年度は概念及び論点の整理を行って報告書の形で刊行した。

刊行物・『各国の文化財保護法令シリーズ［25］英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）』東京文化財研究所　21.3
・『世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか（第1部）』東京文化財研究所　21.3
・『Attributes -a way of understanding OUV-』Japan Center for International Cooperation in Conservation, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties　21.3

研究組織　○西和彦、境野飛鳥、藤澤綾乃、石田智香子（以上、文化遺産国際協力センター）、二神葉子（文化財情報資料部）、石村智（無形文化遺産部）

プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

文化財情報資料部

「文化財の記録作成とデータベース化に関するセミナー」シリーズ「ディジタル画像の圧縮～画像の基本から動画像まで～」(④シ05の一部として実施)

文字や写真による文化財や収蔵品の記録作成（ドキュメンテーション）は、調査研究・保存活用のための基礎的なデータを取得する活動である。文化財の形と色の記録は、今日ではディジタル媒体で行われることが多いが、ディジタル画像の構造や画像圧縮の原理などの基礎についての情報は、十分に提供されているとは言いがたい。そこで、ディジタル画像の圧縮に関する標記のセミナーを開催した。セミナーは3回を予定しており、今回は第1回目として「ディジタル画像の基礎」を開催した。

日　時：2020（令和2）年12月23日（水）　13:00～17:30
会　場：東京文化財研究所　セミナー室
参加者：35名（所外参加者）
プログラム：今泉祥子（千葉大学）「ディジタル画像の基礎　講演1」
　　城野誠治（東京文化財研究所）「ディジタル画像の基礎　講演2」

文化財情報資料部

ハンズオンセミナー「文化財写真入門―文化財の記録としての写真撮影実践講座」(④シ05の一部として実施)

本セミナーは、「文化財の記録作成とデータベース化に関するセミナー」の実習形式（ハンズオン）版として、写真撮影に特化したものである。令和2年度には下記の2回を開催した。

第1回
日　時：2020（令和2）年8月24日（月）　10:00～17:00
会　場：上原美術館
主　催：東京文化財研究所
後　援：静岡県博物館協会
協　力：上原美術館
参加者：11名
プログラム：田島整（上原美術館）「寺院調査の事例紹介」
　　城野誠治（東京文化財研究所）「文化財写真で大切なこと」
　　城野誠治（同）「撮影実習」

第2回　（宮城県博物館等連絡協議会令和2年度第2回研修会としても開催）
日　時：2021（令和3）年3月12日（金）　10:00～17:00
開　場：東北歴史博物館
主　催：東京文化財研究所、宮城県博物館等連絡協議会、東北歴史博物館
参加者：14名
プログラム：二神葉子（東京文化財研究所）「文化財の記録作成の意義」
　　秋山純子（同）「文化財防災センターについて」
　　城野誠治（同）「文化財写真撮影の基本」
　　城野誠治（同）「撮影実習」

第14回無形文化遺産部公開学術講座（ム01 の一部として実施）

無形文化遺産部では、無形文化財ならびに文化財保存技術の伝承形態を把握し、その保護に資するため、毎年、公開学術講座を行っている。今年は、「日本の伝統的な管楽器と竹材」を2021（令和3）年3月20日に開催した。本講座は、日本の伝統的な管楽器（篳篥、龍笛、笙、能管、篠笛、尺八等）の材料である竹材が抱える課題を、竹の生産・販売者、楽器製作者、演奏家の共通課題として整理することを目的とし、分野を横断した研究者による成果報告と、演奏家による試演を行った。

日　時：2021（令和３）年３月20日（木）　13：00〜17：00
会　場：東京文化財研究所　セミナー室、地下ロビー
主　催：東京文化財研究所
参加者：本講座は新型コロナウイルス感染症拡大を鑑みて無観客収録とした。今後、記録映像を当研究所ホームページより配信、別途報告書を刊行・同ホームページ上で公開予定。

内　容：第一部
【研究成果報告】
小峰幸夫（東京文化財研究所）「竹材の虫害についての報告」
犬塚将英（東京文化財研究所）「煤竹と白竹の基本的な物性の違い」
倉島玲央（東京文化財研究所）「白竹の一次加工についての報告」
前原恵美（東京文化財研究所）「様々な竹材、代替材の使用感についての報告」
亀川徹（東京藝術大学）「様々な竹材、代替材の音響測定についての報告」
【総括】「竹で拡がる、竹で深まる」
司会：前原恵美（東京文化財研究所）
亀川徹（東京藝術大学）
小峰幸夫（東京文化財研究所）
倉島玲央（東京文化財研究所）

第二部　実演ー伝統的な竹の管楽器いろいろ
中村仁美　篳篥（煤竹古管／煤竹新管）：《萬歳楽》、《五常楽》、《双調調子》より
纐纈拓也　龍笛（煤竹／合竹（ごうちく）／花梨／プラスチック管）：典型的なフレーズ、《春鶯囀》より（笙との合奏）
八槻純子　笙（煤竹の新管／プラスチック管）：立ち上がり、《春鶯囀》より（龍笛との合奏）
松田弘之　能管（煤竹古管／煤竹新管）：《平調音取》、《千歳之舞》より
善養寺惠介　尺八（白竹／メタル尺八）：《無住心曲（むじゅうしんきょく）》
福原徹　篠笛（白竹／煤竹）：長唄《明の鐘》
能管（プラスチック管／煤竹）：長唄《小鍛冶》のセリより

保存科学研究センター

「保存と活用のための展示環境」に関する研究会－照明と色・見えの関係－
（②ホ02の一部として実施）

保存環境研究室ではこれまで展示照明に焦点をあて、文化財の保存を考えた照明のあり方に関する研究会を開催してきた。今回の研究会では少し視点を変え、これまであまり文化財の分野では触れられてこなかった、保存とは少し違う観点の「照明」について知ることを目的に本研究会を開催した。

日　時：2021（令和3）年3月4日（木）13：30～16：50
会　場：東京文化財研究所　セミナー室
主　催：東京文化財研究所、文化財活用センター
参加者：27名
講　演：佐野千絵（東京文化財研究所名誉研究員）
「ごあいさつ・導入」
溝上陽子（千葉大学 大学院工学研究院）
「照明と色・質感の見え」
吉澤望（東京理科大学 理工学部 建築学科）
「輝度から予測される絵画の見え」
山内泰樹（山形大学大学院 理工学研究科）
「リモート・ミュージアムでの色と見え　～色の見えの個人差、高画質化へのチャレンジ～」

保存科学研究センター

文化財に用いられている鉛の腐食と空気環境（②ホ03の一部として実施）

保存科学研究センターの研究プロジェクトである「文化財の材質・構造・状態調査に関する研究」では、様々な科学的分析手法によって文化財の材質・構造を調査し、劣化状態を含む文化財の物理的・化学的な特徴を明らかにするための研究を行っている。本研究会では、文化財における鉛の使用例、近年全国で顕在化している鉛の腐食に関する問題、空気環境と鉛の腐食に関する調査及び修復の事例報告等を通じて、情報の共有とディスカッションを行った。

日　時：2020（令和2）年12月14日（月）　13：30～16：30
会　場：東京文化財研究所　地下会議室
参加者：20名
講　演：犬塚将英（東京文化財研究所）
「趣旨説明」
長谷川祥子（静嘉堂文庫美術館）
「鉛を使用した作品の紹介－静嘉堂文庫美術館の所蔵品を中心に」
伊東哲夫（文化庁）
「文化財に用いられている金属の腐食に関する最近の状況」
早川泰弘（東京文化財研究所）
「鉛とその腐食に関する材料工学的な概論」
古田嶋智子（国立アイヌ民族博物館）
「空気環境と鉛の腐食に関する調査の事例報告」
室瀬祐（目白漆芸文化財研究所）
「鉛の腐食と修復に関する事業報告」
総合討論

文化遺産国際協力センター

世界遺産研究協議会（④コ01の一部として実施）

「文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信」プロジェクトで行っている諸研究のうち、世界遺産に関する制度と最新の動向についての情報を提供するための研究協議会については、我が国の文化財保護における「整備」を対外的にどのように説明するかというテーマに関して開催する予定であったが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の状況を考慮して開催せず、次年度と併せて２カ年の予定とし、今年度は必要となる概念や論点の整理について専門家に寄稿を依頼して、報告書として刊行した。

文化遺産国際協力センター

研究会「東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理」（③コ02の一部として実施）

平成28年度から東南アジアの木造建築をテーマに連続して開催してきた研究会の最終回として、東南アジアにおいて木造建築遺産の保存修理に用いられている手法の特徴やその背景にある考え方などを明らかにすることを目的に開催した。当初は2020（令和2）年3月の開催を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う渡航制限により延期を余儀なくされ、11月にオンラインでの開催となった。研究会には当地で文化遺産保護に携わる実務家の参加を得て、実際に行われている木造建築保存の様々な方法や技術に関する講演を行ってもらい、パネルディスカッションでは東南アジア各国だけでなく日本の木造建築保存の考え方や双方での方法論の違いを比較分析する観点からの議論を行った。

日　時：2020（令和2）年11月21日（土）14:00 ～ 17:10
会　場：オンライン（Zoom）／東京文化財研究所　地下会議室
使用言語：日本語・英語（逐次通訳　山内奈美子、金出ミチル）
参加者：56名（最大同時視聴者数46名）
プログラム：趣旨説明　金井健（東京文化財研究所）
講　　演　ポントーン・ヒエンケオ（タイ王国文化省芸術局建造物課）
「タイにおける木造建築遺産の保存修理」
セントン・ルーヤン（ルアンパバーン世界遺産事務所）
「ラオスにおける木造建築遺産の保存修理」
モンティーラー・ウナークン（ユネスコバンコク事務所）
「国際的視点から見た東南アジア木造建築遺産保存修理の現状と課題」
パネルディスカッション
モデレーター　友田正彦（東京文化財研究所）
パネラー　中内康雄（公益財団法人文化財建造物保存技術協会）、ポントーン・ヒエンケオ、セントン・ルーヤン、モンティーラー・ウナークン

刊行物：『東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理　研究会記録／Conservation of Wooden Architectural Heritage in Southeast Asia Proceedings』東京文化財研究所　21.3

文化財情報資料部

総合研究会（④シ）

総合研究会は、各研究部・センターの研究員がプロジェクトの成果や経過を発表し、その内容に関して所内の研究者間で自由に討論する場である。令和2年度は下記のスケジュールで開催した。

・第１回　2020（令和2）年9月1日（火）
　　発表者：秋山純子（保存科学研究センター）「九州国立博物館における環境保全について」
・第２回　2020（令和2）年11月10日（火）
　　発表者：間舎裕生（文化遺産国際協力センター）「イスラエル・パレスチナの考古学と文化遺産」
・第３回　2020（令和2）年12月1日（火）
　　発表者：塩谷純・小山田智寛（文化財情報資料部）「黒田清輝と久米桂一郎―日本洋画界を支えた交流」
・第４回　2021（令和3）年1月12日（火）
　　発表者：今石みぎわ（無形文化遺産部）「民俗技術における素材と加工技術―箕を中心に」

文化財情報資料部

文化財情報資料部研究会（④シ）

文化財情報資料部では、ほぼ月に1回のペースで美術史研究者を中心とする研究会を開催して、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに討議によって充実を図っている。なお令和2年度は、緊急事態宣言下の年度当初を除き9回を開催、2021（令和3）年に入ってからはオンラインも活用した。2020（令和2）年度の開催内容は下記の通り。（肩書は発表時のもの）

6月23日（火）田中潤（文化財情報資料部客員研究員）「近代の大礼と有職故実」
7月28日（火）小野真由美（文化財情報資料部主任研究員）「江戸初期狩野派史料の研究―探幽縮図を中心に―」
8月25日（火）山梨絵美子（副所長）「ゲッティ研究所が所蔵する矢代幸雄と画商ジョセフ・デュヴィーンの往復書簡」
10月　8日（火）丸川雄三（文化財情報資料部客員研究員）「近代美術研究における関係資料の発信と活用」
11月24日（火）武田恵理（東洋美術学校非常勤講師）「初期洋風画と幕末洋風画、形を変えた継承―日本における油彩技術の変遷と歴史的評価の検証―」
　　コメンテーター：坂本満（美術史家）、佐藤則武（日光社寺文化財保存会）
12月21日（月）野城今日子（文化財情報資料部アソシエイトフェロー）「屋外彫刻を中心とした「文化財」ならざるモノの保存状況についての報告と検討―シンポジウム開催を見据えて―」
　　コメンテーター：田中修二（大分大学）、篠原聰（東海大学）
1月28日（木）大西純子（神奈川大学国際日本学部非常勤講師）「上野直昭資料について―日本美術史との関係を中心として―」
　　田代裕一朗（五島美術館学芸員）「上野直昭資料から発見された高裕燮直筆原稿について」
2月25日（木）米沢玲（文化財情報資料部研究員）「片野四郎旧蔵の羅漢図について―図様と表現の考察―」
　　安永拓世（文化財情報資料部主任研究員）「片野四郎旧蔵「羅漢図」の近代における一理解」
3月25日（木）山梨絵美子（副所長）「白馬会の遺産としての『日本美術年鑑』編纂事業」

文化財情報資料部

東文研　総合検索（④シ05の一部として実施）

東京文化財研究所が所蔵する図書や雑誌、展覧会カタログ、画像等の資料、東京文化財研究所の定期刊行物、国内外の美術関係文献等について、メタデータを横断的に検索することが可能なウェブデータベースで、デジタルデータを公開する「研究資料データベース」も含め、29件のデータベース、約168万件のデータを検索対象とする。検索画面は日英両言語に対応している。当研究所の定期刊行物については、本文のPDFデータを閲覧することも可能である。なお、日本国外における美術展覧会・映画祭開催情報、及び日本国外で出版された書籍情報に関しては、英国セインズベリー日本藝術研究所が採録した情報を受け入れている。
www.tobunken.go.jp/archives/

文化財情報資料部

研究資料データベース（④シ05の一部として実施）

東京文化財研究所が作成、収集した研究資料の画像データやテキストデータを検索・閲覧することができるウェブデータベース。現在、20件のデータベース、10万件余りのデータを公開しており、すべてのデータベースを横断的に検索可能で、一部を除き「東文研　総合検索」からの横断検索にも対応している。
www.tobunken.go.jp/materials/

無形文化遺産部

インターネット公開「国の選定保存技術 邦楽器原糸製造の記録〈短編〉」（①ム01 の一部として実施）

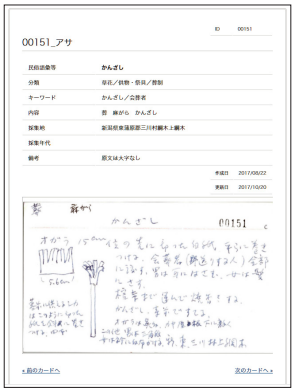
国の選定保存技術である「邦楽器原糸製造」は、邦楽器の絹糸弦に用いられる特殊な原糸を繰糸する技術である。無形文化遺産部では、この技術を保持団体・木之本町邦楽器原糸製造保存会（会長・佃三恵子）の協力を得て2020（令和2）年7月に記録撮影、〈長編〉と〈短編〉に編集し、〈短編〉を2021（令和3）年2月より公開している。

木之本町幇楽器原糸製造保存会の繰糸技術

無形文化遺産部

「斎藤たま　民俗調査カード集成」（①ム02 の一部として実施）

民俗学者 斎藤たま氏（1936〜2017）が作成した調査カードのアーカイブ。カードの内容は植物、動物、まじない、遊び、言葉などに関わる民俗事例を調査収集・整理したもので、総数約4.7万枚。2017（平成29）年に東文研に寄託された。カード内容の概要、キーワード、スキャン画像などが検索できるアーカイブを2021（令和3）年2月に開設。2021年3月末時点で約8,079件を公開、毎月更新予定。



斎藤たま民俗調査カード集成

無形文化遺産部

インターネット公開「箕のかたち　資料集成」（①ム02 の一部として実施）

2020年（令和2）年12月〜1月にかけて開催した「箕のかたち―自然と生きる日本のわざ」展にあわせて開設したサイト。民具の「箕」に関わる映像等の収集・公開を目的とし、各地の箕に関する14件の映像を公開（2021（令和3）年3月末時点。うち1件は公開期間終了）。14件のうち7件は東文研で制作した映像、7件は既刊の映像で公開許可を得たもの。

箕のかたち　資料集成

文化財情報資料部　2－(4)－②－1)

令和元年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業『美術研究』(シ07)

『日本美術年鑑』

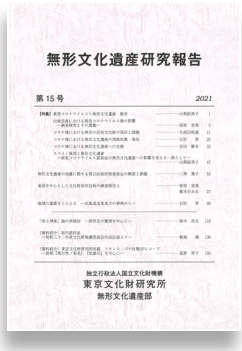
日本美術年鑑は、我が国の各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録した刊行物である。文化財情報資料部では当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が1936（昭和11）年から始めた『日本美術年鑑』の編集を引き継ぎ、刊行を継続してきた。令和2年度は、令和元年版の編集を行い、令和3年5月に刊行。出版に際し、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。

『美術研究』

1932（昭和7）年1月、当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所の初代所長・矢代幸雄の提唱により第1号を刊行。以来、80年以上にわたり、日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関する西洋美術についての論説、研究ノート、書評、展覧会評、研究資料・図版解説等を掲載している。令和2年度は431号、432号、433号を刊行した。出版に際して、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。

無形文化遺産部　2－(4)－②－1)

無形文化遺産部出版関係事業(ム04)



『無形文化遺産研究報告』第15号

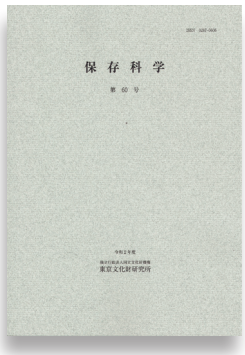
無形文化財や無形民俗文化財、文化財保存技術に関する研究論文、調査報告、資料紹介等を掲載している。

『第15回無形民俗文化財研究協議会報告書』

無形文化遺産部では毎年テーマを定め、保存会関係者・行政担当者・研究者などが一堂に会して無形の民俗文化財の保護と継承について研究協議する会を開催している。第15回にあたる令和2年度は、「新型コロナ禍の無形民俗文化財」と題してリモートで開催し、報告・総合討議の内容などを報告書にまとめた。

保存科学研究センター　2－(4)－②－1)

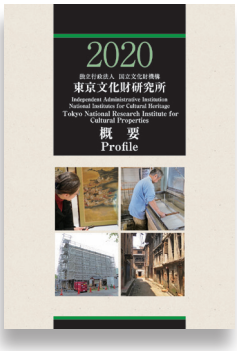
『保存科学』第60号の出版(ホ07)



『保存科学』第60号

早川泰弘、友田正彦、間渕創（文化財活用センター）、貴田啓子（東京藝術大学）の4名からなる編集委員会を編成、投稿された14件全ての原稿に対して、査読委員による査読を実施、報文2件、報告10件、資料2件、計14件の掲載を決定した。2021年3月刊行、160ページ。

『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』



『東京文化財研究所概要』は研究所の組織や活動内容を、写真を多用して日英２ヶ国語により簡潔に紹介している。令和２年度の概要はA4判37ページ。

『TOBUNKENNEWS』はウェブサイトに公開した毎月の「活動報告」から、紙媒体に適した記事を精選し、文化財保存に関するコラム、刊行物紹介等とともに掲載している。A4判。令和２年度はNo.72（7月刊、36ページ）、73（2月刊、44ページ）を刊行した。

『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』はそれぞれ、各部・センターからの部会員で構成される東京文化財研究所広報委員会の概要部会、ニュース部会が作成し、編集事務はいずれも研究支援推進部企画渉外係が担当している。

プロジェクトの一環として刊行された刊行物

『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究―ワット・ラーチャプラディットの漆扉―』

本書は、東京文化財研究所が実施しているタイに所在する日本製漆工品に関する調査研究のひとつとして、タイ・バンコク所在の王室第一級寺院ワット・ラーチャプラディットの漆扉部材に関するこれまでの調査研究成果を報告するものである。2021年3月刊行、144ページ。

（①シ02の一環として実施）

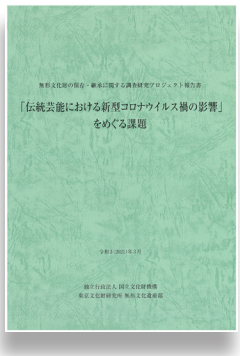
『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　春日権現験記絵　巻九・巻十　光学調査報告書』

東京文化財研究所が宮内庁三の丸尚蔵館と共同で2003（平成15）年から実施してきた、鎌倉時代を代表する絵巻物「春日権現験記絵」全20巻のうち、巻九・巻十を対象とした光学調査報告書である。高精細画像と蛍光Ｘ線分析による彩色材料調査結果を併せて収録した。日本語・英語、2021年3月刊行、104ページ＋口絵135ページ。

（④シ05の一環として実施）

『東京文化財研究所　研究報告書
売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望―売立目録の新たな活用を目指して―』

2015（平成27）年4月から東文研と東京美術倶楽部が共同で行ってきた売立目録デジタル化事業が2019（令和元）年3月に完了し、同年5月からその成果として「売立目録デジタルアーカイブ」を東文研資料閲覧室で公開した。そのアーカイブに関して、2020（令和2）年2月に実際の利用者や入力者等による研究発表を行ったが、本報告書は、その研究発表の内容に一部の報告を追加して刊行したもの。2021年3月刊行、168ページ。



無形文化財の保存・継承に関する調査研究プロジェクト報告書『「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」をめぐる課題』

無形文化遺産部無形文化財研究室が、2016（平成28）～2020（令和2）年度の中期計画に基づいて行ってきた「無形文化財の保存・継承に関する調査研究」の報告書。特に2020（令和2）年から行っている古典芸能を中心とした伝統芸能への新型コロナウイルス禍の影響調査を中心に採録した。2021年3月刊行、41ページ。
（①ム01の一環として実施）

『フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」報告書』

2020（令和2）年9月25日に東京文化財研究所で行われた、【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」をもとに、一部追録し、報告書として刊行。2021年3月刊行、97ページ。
（①ム01の一環として実施）

パンフレット『日本の芸能を支える技』VI 三味線　株式会社 東京和楽器

2017（平成29）年より継続的に行っている、楽器を中心とした文化財保存技術の調査と並行して、楽器製作者とその技術に焦点を当てたパンフレットを順次刊行している。2020年12月刊行、12ページ。
（①ム01の一環として実施）

パンフレット『日本の芸能を支える技』VII 箏　国井久吉

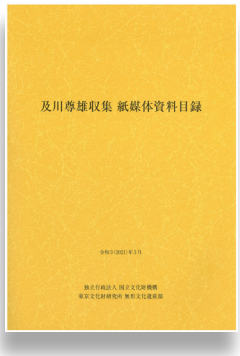
2017（平成29）年より継続的に行っている、楽器を中心とした文化財保存技術の調査と並行して、楽器製作者とその技術に焦点を当てたパンフレットを順次刊行している。2021年3月刊行、8ページ。（①ム01の一環として実施）

『箕のかたち　自然と生きる日本のわざ』

2020（令和2）年12月～1月にかけて東京汐留メディアタワーで開催した「箕のかたち―自然と生きる日本のわざ」展のパネルを整理してまとめた冊子。民具の「箕」について、製作技術や素材を中心に多数の写真とともに紹介。日本語。2021年3月刊行、14ページ。
（①ム01の一環として実施）

無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書『絹織製作技術』

2015（平成27）～2018（平成30）年度年度にかけて調査を行った勝山織物株式会社絹織物製作研究所（長野県飯島町）における絹の製作技術に関する報告書。本報告書では絹織物製作研究所における製作理念の基となる資料、在来の蚕種と桑を用いた養蚕、製糸、製織の全工程の技術を記録した。そのほか、東京国立博物館・東京文化財研究所の研究員による画絹についての論考も掲載されている（DVD付）。2021年3月刊行、101ページ。
（①ム03の一環として実施）

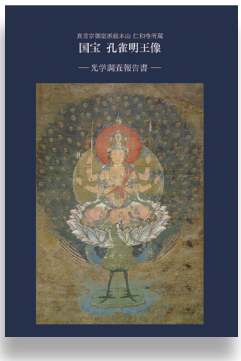


『及川尊雄収集 紙媒体資料目録』

無形文化遺産部では、日本の伝統楽器や関連資料の収集家であり及川鳴り物博物館館長であった及川尊雄氏（1942-2018）の遺した3,515点に及ぶ紙媒体資料の調査を2018（平成30）年より行ってきた。その成果として、『及川尊雄収集 紙媒体資料目録』として各論4本と共に目録を収めて刊行。2021年3月刊行、158ページ。
（①ム01の一部として実施）

『国宝 法華経（久能寺経）薬草喩品第五 光学調査報告書』

国宝「法華経（久能寺経）薬草喩品第五」に関する光学調査が2020（令和2）年に実施され、界線に真鍮泥が用いられていることが明らかになった。本報告書では、その調査結果を広く周知することを目的に、カラー・近赤外・蛍光写真及び蛍光エックス線分析による調査結果を収録した。2021年3月刊行、80ページ。
（②ホ03の一環として実施）



『真言宗御室派総本山仁和寺所蔵　国宝 孔雀明王像 光学調査報告書』

真言宗御室派総本山仁和寺が所蔵する国宝 絹本著色「孔雀明王像」に関する光学調査が2019（令和元）年に実施された。本報告書では、カラー・近赤外・蛍光写真及び蛍光エックス線分析による調査結果を収録した。2021年3月刊行、152ページ。
（②ホ03の一環として実施）

『文化財修復処置に関するワークショップ —ゲルやエマルションを使用したクリーニング法—』

本報告書は、2019（令和元）年10月8日～10日の3日間にわたり保存科学研究センターが開催した「文化財修復処置に関するワークショップ　—ゲルやエマルションを使用したクリーニング法—」の記録である。講師には、イタリアから保存科学者パオロ・クレモネージ氏を招待した。文化財のクリーニング方法は2000年代初めから欧米で変革的な進化を遂げ、この10年ほどの間に世界各地でワークショップや研究会が開催されていたが、本ワークショップはアジアで初めてのゲルクリーニングに関するワークショップとなった。

　ワークショップは、クレモネージ氏の英語による講義を日本語に逐語通訳して行われた。午前に理論的な座学、午後に実技研修を行なった。今回のワークショップは通訳の時間の関係もあり、有機溶媒以外の主に水を用いるクリーニングに焦点を当てた講義と実演を行って頂いた。2021年3月刊行、104ページ。
（②ホ05の一環として実施）

『文化財修復処置に関する研究会
—クリーニングとゲルの利用について—』

本報告書は、イタリアの保存科学者パオロ・クレモネージ氏をお招きし、2019（令和元）年10月11日に日本及び西洋における文化財のクリーニングについて、現場における問題提起と最新の研究紹介を目的に、「文化財修復処置に関する研究会　—クリーニングとゲルの利用について—」を開催した講演記録である。

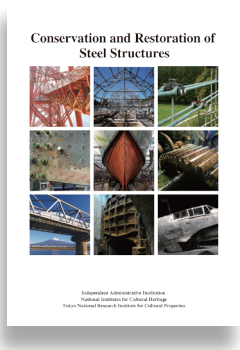
研究会においては、クレモネージ氏からのご発表のほか、国宝修理装潢師連盟理事長の山本記子氏、写真修復家の白岩洋子氏から近年のそれぞれの分野における修復事例の紹介があり、さらに保存科学研究センター早川典子、鳥海秀実から関連の事例報告を行った。日本語・英語、2021年3月刊行、74ページ。

（②ホ05の一環として実施）

『未来につなぐ人類の技20—内部造作の保存と修復』

本書は、近代文化遺産研究室が令和２年度に実施した「内部造作の保存と修復に関する調査研究」を取りまとめた報告書である。文化財所有者・修復技術者等が、保存と修復の実務で利用することを念頭において、国内の有識者の論考を加え、同室が実施した事例調査の結果をまとめた事例集を収めている。2021年3月刊行、106ページ。

（②ホ06の一環として実施）



『Conservation and Restoration of Steel Structures』

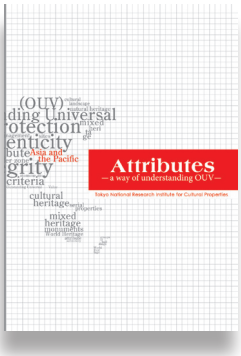
本書は、近代文化遺産研究室が平成30年度に刊行した「鉄構造物の保存と修復」の英訳版である。国内外の鉄構造物の保存と修復に関して、各分野の専門家の論考や、国内の修復事例をまとめたものを広く海外の専門家にも紹介し、日本の近代文化遺産への取り組みを広めるために刊行した。英語、2021年2月刊行、130ページ。

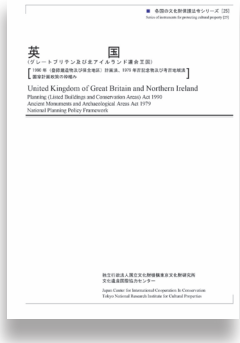
（③コ03の一環として実施）

『Attributes –a way of understanding OUV–』

顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value ／ OUV）の「属性」については、近年世界遺産の保全に関連して求められることの多い遺産影響評価においてその整理が必要となる一方で、国内外でその整理の方法に関して少なからざる混乱が見られる。このため、世界遺産に関わる各国の専門家にそれぞれの理解についての寄稿を求め、当面の理解の一助とするとともに、さらなる議論を惹起することを目的としたもの。英語、2021年3月刊行、168ページ。

（④コ01の一環として刊行）



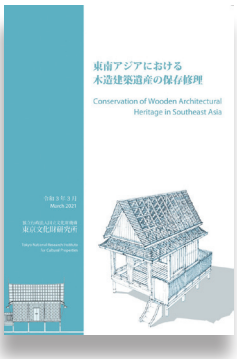


『各国の文化財保護法令シリーズ[25]英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）』

イングランドを中心とする英国の文化財保護に関する法令について、その中核をなす法律２種（1990年計画（登録建造物及び保存地域）法、1979年古記念物及び考古地域法）、これと関連する枠組文書（国家計画政策の枠組み）を和訳し、さらに英国政府担当者に依頼して英国の文化財保護制度の概説を付して刊行した。（日本語・英語、2021年3月刊行、1028ページ。
（④コ01の一環として刊行）

『世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか(第一部)』

新型コロナウイルス感染症の影響で開催を断念した研究協議会に代わり、２ヵ年で行うプロジェクトとした表題のテーマに関連して、史跡・名勝等と建造物、国内と国際という二つの観点の軸を設定し、４名の専門家に寄稿を依頼するなどして概念及び論点の整理を行って報告書として刊行したもの。日本語、2021年3月刊行、57ページ。
（④コ01の一環として刊行）

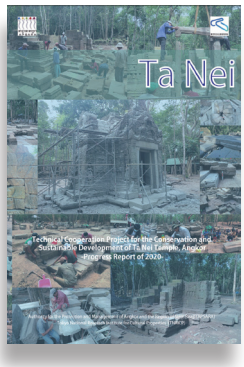


『東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理』

2020（令和２）年11月にオンラインで開催した研究会の議事録。東南アジアで実際に行われている木造建築保存の様々な方法や技術に関する報告及びそれらを日本の木造建築保存の考え方や方法論と比較分析する観点で行った討議の内容を収録。日本語・英語併記、2021年3月刊行、74ページ。
（③コ02の一環として刊行）

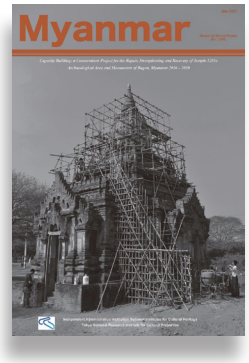
『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor -Progress Report of 2020-』

2020（令和２）年に東京文化財研究所がアンコール・シエムリアプ地域保存整備機構（APSARA）と共同で実施した、カンボジアのタネイ寺院遺跡における保存整備事業に関する報告書。同遺跡東門の修復における再構築工事の経過、修復及び補強の方法に関する議論の記録等を収録。英語、2021年3月刊行、147ページ。APSARAと連名による刊行。
（③コ02の一環として刊行）



『Lokahteikpan Wall painting Project, Pagoda 1580』

平成29（2017）年から令和2（2020）年にミャンマーのバガン遺跡で実施した寺院壁画の保存修復に関する事業報告書。近年、現地で議論がつづく保存修復材料の経年劣化に伴う問題点への対処法を示すなど、継続性を有する文化遺産保護活動とは何かに着目して行われた活動の成果を報告書としてまとめたもの。英語、2021年3月刊行、177ページ。
（③コ03の一環として刊行）



『Me-taw-ya Temple Project (No.1205) “Capacity Building; a Conservation Project for the Repair, Strengthening and Recovery of Temple 1205a, Archaeological Area and Monuments of Bagan, Myanmar 2016–2020』

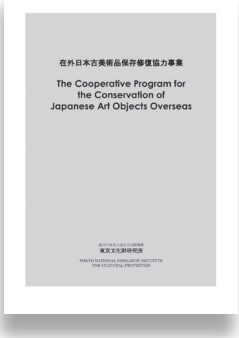
平成28（2016）年から令和2（2020）年にミャンマーのバガン遺跡で実施した煉瓦造寺院外壁の保存修復に関する事業報告書。東京文化財研究所による同国宗教文化省との協力事業に関するこれまでの経緯、事業概要について収録したもの。 英語、2021年3月刊行、197ページ。

（③コ03の一環として刊行）

『在外日本古美術品保存修復協力事業』

在外日本古美術品保存修復協力事業の基本情報を掲載した報告書である。現地調査、修復作品などのリストを更新した。日本語・英語、2021年3月刊行、20ページ。

（③コ04の一環として実施）



『在外日本古美術品保存修復協力事業
檜・八橋図　No.2017-1』

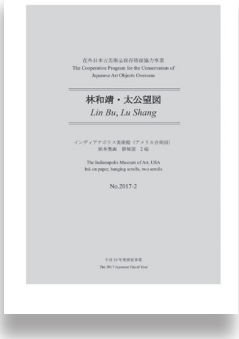
当該事業で行ったインディアナポリス美術館所蔵「檜・八橋図」（屏風、6曲1双）の保存修復報告書である。日本語・英語、2021年3月刊行、48ページ。

（③コ04の一環として実施）

『在外日本古美術品保存修復協力事業
林和靖・太公望図　No.2017-2』日

当該事業で行ったインディアナポリス美術館所蔵「林和靖・太公望図」（掛軸、2幅）の保存修復報告書である。日本語・英語、2021年3月刊行、35ページ。

（③コ04の一環として実施）



『在外日本古美術品保存修復協力事業
煙寺晩鐘図・平沙落雁図　No.2017-3』

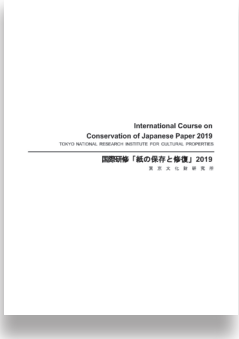
当該事業で行ったインディアナポリス美術館所蔵「煙寺晩鐘図・平沙落雁図」（掛軸、2幅）の保存修復報告書である。日本語・英語、2021年3月刊行、31ページ。

（③コ04の一環として実施）

『国際研修「紙の保存と修復」2019』

2019年9月9日から27日にかけてICCROMと共催した国際研修「紙の保存と修復」の報告書である。講義、実習、スタディーツアーにおける研修内容に加えて、研修中の質疑応答、参加者に対して行ったアンケート結果なども収録した。日本語・英語、2021年3月刊行、192ページ。

（③コ05の一環として実施）



保存科学研究センター　2－(5)－①－1)

博物館・美術館等保存担当学芸員研修(ホ08)

目　的　1）文化財の担当者研修、博物館・美術館等の保存担当学芸員研修を行う。
2）研修の体系を完成させるとともに、研修受講生を対象としたアンケート及び派遣元自治体を対象とした研修成果の活用状況に関するアンケート調査を行い、その結果を踏まえ研修計画を策定する。

成　果　1．第37回博物館・美術館等保存担当学芸員研修を、文化財活用センターと共催で実施した（2020（令和2）年10月5～15日、受講者17名）。
2．1週目の基礎的な内容の講習を文化財活用センターが担当し、2週目を当所の各研究室がおよそ半日単位で受け持ち、以下の講義を実施した：文化財の科学調査（分析科学研究室）、生物被害対策（生物科学研究室）、屋外文化財の保存（修復計画研究室）、温熱環境制御（保存環境研究室）、近代文化遺産の保存（近代文化遺産研究室）、修復材料の種類と特性/紙資料・日本画の保存修復（修復材料研究室）、博物館の防災（文化財防災センター）。

研修の様子

3．研修終了後にカリキュラム各項目の理解度や有用度、また今後の要望等に関するアンケート調査を行った。参加者から有益と評価された。
4．第36回博物館・美術館等保存担当学芸員研修受講者の所属長あてに、研修成果の活用実績やカリキュラム、応募手続き等に関する要望を問うアンケート調査を行った。

研究組織　○秋山純子、相馬静乃、小安友利恵（以上、保存科学研究センター）、水谷悦子（併任、文化財防災センター）、吉田直人、間渕創（以上、併任、文化財活用センター）

文化財情報資料部　2－(5)－②－1)

文化財の収集・保管に関する指導助言(シ)

令和2年度は以下の組織等において指導助言を行った（24件）。
1．国立歴史民俗博物館運営委員・資料収集委員会
2．文化審議会世界文化遺産部会での世界遺産条約の履行に関する助言
3．北区文化振興財団による中高生のためのレベルアップワークショップへの協力
4．大分県立埋蔵文化財センターでの企画展協力及び講演
5．北区文化振興財団によるアトリエ館での特別解説
6．首里城火災で被災した文化財の記録作成
7～24以下、所蔵作品調査に関する協力・助言
国友鉄砲ミュージアム、甲賀市水口歴史民俗資料館、多久市郷土資料館、茨木市文化財資料館、南蛮文化館、神戸市立博物館、長崎市教育委員会、藤基神社（新潟県村上市）、大田区立勝海舟記念館、逸翁美術館、敦井美術館、新潟市歴史博物館

無形文化遺産に関する助言(ム)

無形文化遺産の保存・伝承・活用に関する各種委員会等へ出席し、以下の指導・助言を実施した。

・文部科学省の教科用図書検定調査審議会第６部会音楽小委員会に関する助言
・文化庁の文化審議会無形文化遺産部会等に関する助言
・文化庁の伝統芸能用具・原材料に関する調査委員会における当該調査及び助言
・文化庁の工芸技術記録映画製作監修委員としての助言
・文化庁の伝統文化親子教室事業に関する助言
・文化庁の調査員としての楽器を中心とした文化財保存技術に関する助言
・文化庁の調査員としての無形民俗文化財に関する助言
・山形県の文化財保護審議委員会に関する助言
・山梨県の文化財保護審議会に関する助言
・神奈川県の民俗芸能記録保存調査企画調整委員会に関する助言
・千葉県の博物館資料審査委員会に関する助言
・東京都の東京都民俗芸能大会実行委員会に関する助言
・愛媛県の石鎚黒茶製造技術調査委員会における当該調査に関する助言
・島根県の古代文化センターに関する助言
・静岡市の文化財保護審議会に関する助言
・武蔵野市の文化財保護委員会に関する助言
・京都市の京都芸術センター伝統芸能文化創成プロジェクト推進会議に関する助言
・岐阜市・関市の長良川鵜飼総合調査専門委員会における当該調査に関する助言
・草津市への青花紙保存継承懇話会における青花紙保存に関する助言
・箱根町への箱根湯立獅子舞調査に関する助言
・公益社団法人全日本郷土芸能協会への運営に関する助言
・一般財団法人日本青年館への第69回全国民俗芸能大会企画に関する助言
・讃岐獅子舞保存会への獅子舞王国さぬき2020に関する助言

文化財の虫菌害に関する調査・助言(ホ)

目　　的　これまでに蓄積された文化財の生物被害対策に関する調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等からの要請に応じて専門的な見地から生物被害対策の技術的な協力・助言を行うことにより、文化財の保存に関する質的向上に貢献する。

成　　果　これまでに蓄積された文化財の生物被害対策に関する調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等からの要請に応じて専門的な見地から技術的な協力・助言を行うことにより、文化財の保存に関する質的向上に貢献した。

主な虫菌害問題の相談元は、国や地方公共団体の博物館、美術館、図書館、教育委員会や社寺などの文化財保存担当あるいは文化財修復関係機関等であった。

対応件数は41件あり、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための緊急事態宣言中はメール等で対応し、現地での調査が必要な案件については、緊急事態宣言が解除された6月から10月まで集中して行った。

11月以降は新型コロナウイルス感染症の再拡大に対応するため、インターネットを介して生物劣化を診断したり、試料採取方法をあらかじめインターネットを介して指導し、採取された試

料を研究所で解析したりするなど新しい対応方法を試みた。

相談内容は、殺虫・殺菌処理に使用する薬剤に関することなどの一般的な相談案件ほか、木造建造物、遺構や古墳などの屋外施設での虫害やカビの発生に関する案件など多岐にわたる相談があった。特に梅雨時期が長かったことと、自粛期間中に日常点検が出来なかった博物館等があったことなどからカビによる被害相談が多かった。

現場の対応とあわせて、啓発・普及活動の一環で生物被害に関する研修講師を1件担当した。その際に生物科学研究室で作成した啓発普及ポスターを配布し、広報普及活動を行った

研究組織　○佐藤嘉則、小峰幸夫、小野寺裕子、矢花（篠崎）聡子、岡部迪子、早川泰弘（以上、保存科学研究センター）

保存科学研究センター　2－(5)－②－1)

文化財の修復及び整備に関する調査・助言(ホ)

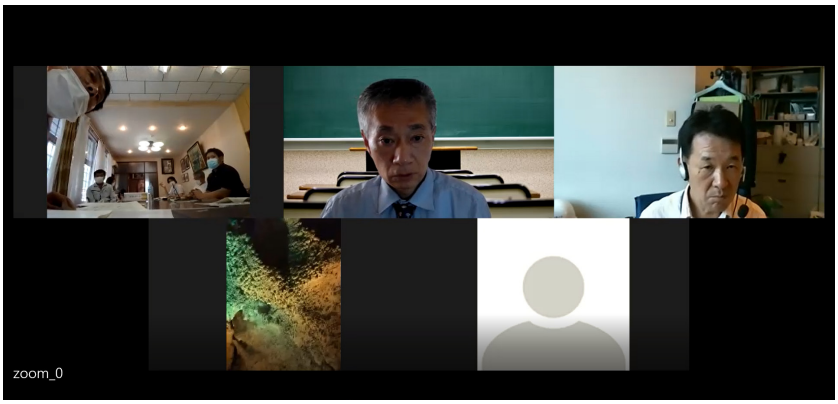
目　的　国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。

成　果　1．令和2年度に実施した各地の国宝、史跡や重要文化財等の保存や修復に関する指導助言は以下のとおりである。

国宝高松塚古墳壁画、国宝臼杵磨崖仏、国宝平等院鳳凰堂、特別史跡キトラ古墳壁画、特別史跡王塚古墳、史跡端島炭鉱跡、史跡佐渡金銀山遺跡、史跡足尾銅山、史跡韮山反射炉、史跡高島炭坑跡、史跡原爆ドーム、史跡原城跡、史跡日野江城跡、史跡下藤キリシタン墓地、史跡屋形古墳群、重要文化財通潤橋、重要文化財旧志免鉱業所竪坑櫓、重要文化財通潤橋、重要文化財熊野磨崖仏、重要文化財頼賢碑、重要文化財・祇園橋、重要文化財厳島神社大鳥居、重要文化財菊蒔絵手箱、重要文化財日光二荒山神社本殿、重要文化財琉球芸術調査写真（鎌倉芳太郎撮影）、重要文化財「松浦武四郎関係資料」、重要文化財高千穂神社所蔵狛犬、特別天然記念物秋芳洞、天然記念物風連鍾乳洞、天然記念物龍河洞、熊本県内被災古墳。

2．地方自治体指定その他の文化財の保存と修復に関する指導助言は以下のとおりである。

首里城、川崎市民ミュージアム、東京都「第5福竜丸」、日本航空協会航空関連紙資料、長崎県史跡日本二十六聖人殉教地、富山市大山恐竜足跡化石群、栃木市星野遺跡、さぬき市海女の墓、北方領土関連資料、日本民藝館所蔵厨子甕資料。



龍河洞についてのオンライン診療風景

研究組織　○朽津信明、早川典子、倉島玲央、中村舞（以上、保存科学研究センター）、中山俊介（特任研究員）

保存科学研究センター　2－(5)－②－1）

文化財の材質・構造に関する調査・助言（ホ）

目　　的　様々な文化財資料について、その材質や構造を明らかにするために、科学的調査を実施する。可搬型の機器を用いて、文化財資料が置かれている場所での現地調査も実施する。

成　　果　令和2年度は、蛍光X線分析による材質調査、及びX線透過撮影による構造調査などの調査・助言を実施した。調査を行った作品、所蔵先、調査月は以下の通りである。

1．材質調査
- 日本画（龍安寺）
- 日本画（宇和島伊達文化保存会）
- 日本画（絵金蔵保存会）
- 漆工品（総持寺）
- 考古資料（東京国立博物館）
- 建造物塗装（東京都庭園美術館）
- 金箔（中尊寺）
- 経典（四天王寺）
- 画材（秋田県立近代美術館）
- 金工品（平等院）

2．構造調査
- 木彫像（最勝寺）

木彫像の構造調査

研究組織　○犬塚将英、早川泰弘（以上、保存科学研究センター）

保存科学研究センター　2－(5)－②－1）

美術館・博物館等の環境調査と援助・助言（ホ）

目　　的　国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。

成　　果　1．国指定品の所有者以外による公開、公開承認施設申請に係る資料保存環境調査の相談窓口は令和元年度より文化財活用センターに一本化された。

当所では、公立美術館・博物館、社寺等から保存環境に関する相談を受け、新型コロナウイルス感染症対策のため現地で環境計測できた箇所は少なかったが、今後の改修を見据えた環境測定を実施することができた。

2．新型コロナウイルス感染症に対する博物館等でのウイルス除去・消毒作業に対し、消毒による文化財への影響が懸念されたため、文化庁・文化財活用センター・東京文化財研究所保存科学研究センターの三者が協力し、対応に当った。博物館、美術館、文書館等の展示室や収蔵庫

における消毒のみならず、建造物に対する消毒やお祭りに使用する民俗文化財への消毒など多岐にわたる相談を受けた。それらの相談に対し、できる限り薬剤による消毒をせず、他の感染防止対策を講じること、消毒をしなければならない場合についても対処の仕方や換気などについてそれぞれの状況に応じた助言を行った。

研究組織　○秋山純子（保存科学研究センター）、水谷悦子（併任、文化財防災センター）

保存科学研究センター　2－(5)－④－1)

東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進（ホ）

目　　的　連携大学院教育の推進
連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成する。
・東京藝術大学大学院：システム保存学（保存環境学、修復材料学）

成　　果　緊急事態宣言中から他専攻に先んじてオンライン講義を始め、解除後には対面講義と併用して教育を進めた。全ての講義で受講生は例年よりも多く受け入れ、オンラインの特性を活かして演習や教員会議などへの貢献も例年より多く行うことができた。

オンライン講義風景

1．今年度開講した授業及び担当教員、受講者数
保存環境計画論（前期、火曜１限）　２単位　朽津信明・犬塚将英・佐藤嘉則　20 人（聴講 2 人）
修復計画論　　（前期、木曜１限）　２単位　朽津信明・安倍雅史　9 人（聴講 3 人）
修復材料学特論（前期、木曜２限）　２単位　早川泰弘・早川典子　12 人（聴講 3 人）
保存環境学特論（後期、火曜１限）　２単位　犬塚将英・佐藤嘉則　7 人（聴講 1 人）
文化財保存学演習
講師：朽津信明　「自宅で文化財を見学しよう」
日時：2020（令和2）年5月26日（火）13～17時　21人（聴講2人）
講師：安倍雅史　「Metashape（旧 PhotoScan）を使った 3 次元測量実習」
日時：2020（令和2）年10月20日（火）13～17時　21人
2．今年度在籍学生
修士課程2年　1名（指導教官：佐藤嘉則）
博士課程1年　1名（指導教官：早川典子）
3．成績評価等、文化財保存学専攻運営への協力
教室会議（11回）、入試合同判定会議（2回）、博士・修士学位審査会への協力

研究組織　○朽津信明、早川泰弘、犬塚将英、早川典子、佐藤嘉則（以上、保存科学研究センター）、安倍雅史（文化遺産国際協力センター）、渡邉尚恵（東京藝術大学）

3. 外部資金等による研究活動

1．科学研究費助成事業…… 83

2．受託調査研究・外部機関との共同研究及び外部資金による研究 111

3．その他の調査研究…… 128

4．成果公開 …… 130

1. 科学研究費助成事業

研究種目	研究課題	研究代表者	頁
基盤研究（A）	アジア螺鈿文化交流史の構築―物質文化史の視点から	小林公治	85
基盤研究（B）	対外交流史の視点によるアジア螺鈿の総合的研究―大航海時代を中心に―	小林公治	86
〃	日本美術の記録と評価についての研究―美術作品調書の保存活用	江村知子	87
〃	白鳳時代の壁画の構造と材料に関する研究	犬塚将英	88
〃	絵画に使用された絹・自然布の非破壊分析方法の開発製法・修復に関する総合的調査	早川典子	89
〃	ポンペイ遺跡壁画における無機物を主体とした保存修復材料による補強技法の確立	前川佳文	90
特別研究員奨励費（外国人）	日本の無形文化遺産保護におけるジェンダーに関する研究	久保田裕道	91
基盤研究（C）	常磐津節の音楽分析のための基盤研究	前原恵美	92
〃	江戸時代の絵画における基底材に関する基礎的研究	安永拓世	93
〃	ポスト1968年表現共同体の研究：松澤宥アーカイブズを基軸として	橘川英規	94
〃	DNA 塩基配列情報に基づく文化財害虫の新規データベース構築	佐藤嘉則	95
〃	博物館 IPM への ATP 拭き取り検査活用に向けた基礎的な研究	間渕　創	96
〃	白色 LED 光照射に伴う蛍光性有機染料の変退色挙動とその抑制	吉田直人	97
〃	鍾乳洞における照明植生を軽減する光環境に関する実験的研究	朽津信明	98
〃	様々な文化財に使用された彩色材料への赤外線画像による面的調査の検討	秋山純子	99
〃	地域文化の表象としての「箕」の形態に関する学際的研究	今石みぎわ	100
〃	従属栄養性微生物による硫黄化合物の分解とそれに伴う腐食性ガス生成	片山葉子	101
若手研究	マヤ地域の博物館における文化遺産保全と地域発展に向けた文化資源マネジメントの研究	五木田まきは	102
〃	中世日本における中国美術の受容と羅漢の作例に関する調査研究	米沢　玲	103
〃	木材からの化学物質放散挙動の解明と博物館における選定指標の提案	古田嶋智子	104
〃	古典的膠の製造方法と各用途適性の体系化	宇髙健太郎	105
〃	南西諸島における風葬の定着過程に関する研究	牛窪彩絢	106
〃	組積造建造物の通電による脱塩の適応可能性に関する検討	水谷悦子	107
研究活動スタート支援	近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に向けた基礎的研究	金井　健	108
〃	歴史的煉瓦造建造物の保存に資する、煉瓦の電気的特性が塩類風化に及ぼす影響の解明	水谷悦子	109

アジア螺鈿文化交流史の構築──物質文化史の視点から

目　的　本研究では、唐の螺鈿をアジア螺鈿史の始発点として位置付け、それが東・東南・南アジアなどにいつどのように伝わり、それぞれの地域でどのような発展を遂げたのかを具体的に検証する。また始発点たる唐の螺鈿がどのように形成されたのか、その系譜を探るため西・中央アジアや殷周代の螺鈿との関係性についても検討を行う。

本研究は代表者に加え、研究分担者・協力者らが行う様々な個別的学際研究を総合化することで、実証的にアジア螺鈿史全体像の構築と各地各時代それぞれの文化交流実態を明らかにしていくものである。

成　果　令和2年度は、年度当初から年度末まで一貫して新型コロナウイルス感染症拡大が継続していたことにより、ほとんどの調査計画が実施できずに終わった。こうした中で、感染状況が小康化した際や依頼された講演のタイミングに合わせて、国内何カ所かにおいて以下の調査を実施したほか、研究協力者によるタイ国立図書館での経典表板に表されたタイ近世螺鈿の第1次調査などを行った。

- 2020（令和2）年8月21日、国友鉄砲ミュージアムにて、翌22日に甲賀市水口歴史民俗資料館にて17世紀代のネジに関する調査を行った。
- 10月1日から11月27日にかけて、タイ国立図書館にて同館所蔵貝多羅葉経典螺鈿表板の調査を行った。
- 10月9日に多久市郷土資料館にて蒔絵螺鈿箏の調査を行った。
- 11月10日に茨木市内個人宅にて漆塗り聖龕、12日に神戸市立博物館にて南蛮漆器ほかの調査を行った。
- 11月30日には長崎市教育委員会にてキリスト教聖器物入れの調査を行った。

タイ国立図書館での調査風景

論　文・小林公治：「キリスト教具南蛮漆器の制作技術とその由来―書見台、聖餅箱の木胎構造を中心に―」『研究紀要』4、大分県立埋蔵文化財センター　pp.1-28　21.3

研究組織　○小林公治（文化財情報資料部）、倉島玲央（保存科学研究センター）、吉田邦夫（東京大学総合研究博物館）、能城修一（明治大学）、本多貴之（明治大学）、猪熊兼樹（東京国立博物館）、末兼俊彦（京都国立博物館）、神谷嘉美（金沢大学）、高田知仁（研究協力者、サイアム大学）

対外交流史の視点によるアジア螺鈿の総合的研究―大航海時代を中心に―

目　　的　「アジアの特産物」である「螺鈿」は、多源独立的に発生発展したのでは無く、中心的・先進的地域の影響や技術・工人の移動を伴いながら消長を繰り返してきたと見られる。本研究ではこの問題を具体的に跡付ける事を目的とし、人類が地球的規模で移動を開始した15～17世紀（大航海時代）を中心として、日本本土や朝鮮半島、また沖縄や中国の螺鈿を取り上げ、人文学及び自然科学的方法により、螺鈿器に内包される交流の実態を明らかにしようとするものである。

成　　果　2020年度は中国において顕在化した新型コロナウイルス感染症拡大により延期を余儀なくされた海外調査を実施予定であったが、本年度もこの問題が解決しなかったため再度の繰越となった。

研究組織　○小林公治（文化財情報資料部）、吉田邦夫（東京大学総合研究博物館）、能城修一（明治大学）、末兼俊彦（京都国立博物館）、早川典子（保存科学研究センター）、城野誠治（文化財情報資料部）

日本美術の記録と評価についての研究－美術作品調書の保存活用

目　的　本研究では、田中一松（1895–1983）及び土居次義（1906–1991）の研究資料のデジタル化による保存活用を実施しながら、日本美術の記録のあり方と評価プロセスを明らかにすることを目的とする。田中、土居、さらに相見香雨（1874–1970）の調査記録などとも比較検討を行いながら、この100年間にどのように日本美術は記録され、語られてきたのか解明する。本研究で主に扱う田中一松と土居次義は、自らの足と、手と、眼の力を駆使して精力的なアナログ調査活動を展開し、目を見張るような質・量の調査を実施し研究基盤を形成した。本研究はこうしたアナログ研究資料をデジタルの特質を活かして保存活用し、未来にも活かすことを目指す。デジタル化作業と各種資料との比較・考察により、田中と土居による半世紀以上に及ぶ文化財関係業務、日本絵画の調査研究の実態を把握することができる。個々の作品研究において有益な情報が集約できるばかりでなく、数多くの作品がどのように評価・位置付けがなされ、日本美術史が語られてきたか、という問題を本研究課題によって明らかにすることを目指す。

成　果　令和元年度に引き続き、田中一松資料の調査研究とデジタル化を進め、保存状態に問題のある資料については修復を行った。概要を通覧するためにはデジタル画像での閲覧を、原本に当たらなければわからない調査研究の用途には現物を提供できるような体制とした。

土居次義資料についても、調査研究と写真資料を中心にしたデジタル化を進めた。細部を比較するために撮影された大量の写真のデジタル化の進行に伴い、調査ノートの記録との照合で評価の観点を具体的に再現することができる形を構築した。さらに土居と同時期に日本美術史研究で大きな成果を残した源豊宗の資料約500件を購入し、整理を行った。

また当研究所には今泉雄作（1850-1931）、平子鐸嶺（1877-1911）による調査研究ノートも所蔵されている。田中一松・土居次義のものとともに、4者の調査ノートを中心に、調査対象となった実際の絵画作品も交えながら、令和2年度に東京国立博物館の特集展示として展覧会「日本美術の記録と評価―調査ノートにみる美術史研究のあゆみ―」を開催した。展覧会開催期間中の総合文化展の入館者数は15,737人、同期間に開催していた特別展「きもの展」をあわせた総入館者数は86,543人であった。また調査ノートの書き下し文なども読めるように工夫したウェブ展覧会も同時に公開し、ウェブコンテンツは展覧会終了後も公開を継続している。https://www.tobunken.go.jp/info/info200714/

論　文
- 並木誠士：「和歌浦図研究－名所風俗図・試論」『デザイン理論』（意匠学会誌）76　pp.7-20　20.7
- 江村知子：「研究ノート　田中一松の眼と手」『美術研究』432　pp.39-56　20.12
- 並木誠士：「地方美術館打造的新」『世界、東亜及多重的現代視野 台湾藝術史進路』（黄蘭翔編、国立台湾美術館刊）、pp.225-260　20.12
- 多田羅多起子：「京狩野研究と土居次義の眼―調査資料に残された研究の断片」『芸術の価値創造―京都の近代からひらける世界』pp.94-109　昭和堂　21.03

展覧会
- 「日本美術の記録と評価―調査ノートにみる美術史研究のあゆみ―」展　東京国立博物館本館14室　20.7.14～8.23

発　表
- 多田羅多起子：「作品調査の記録をたどる －土居次義によるモレッリ法の応用－」広島芸術学会第132回例会　オンライン開催（担当：広島大学）　21.3.7

刊行物
- リーフレット「日本美術の記録と評価―調査ノートにみる美術史研究のあゆみ―」展　4p　20.7

研究組織　○江村知子（文化財情報資料部）、並木誠士（京都工芸繊維大学）、多田羅多起子（広島大学）

白鳳時代の壁画の構造と材料に関する研究

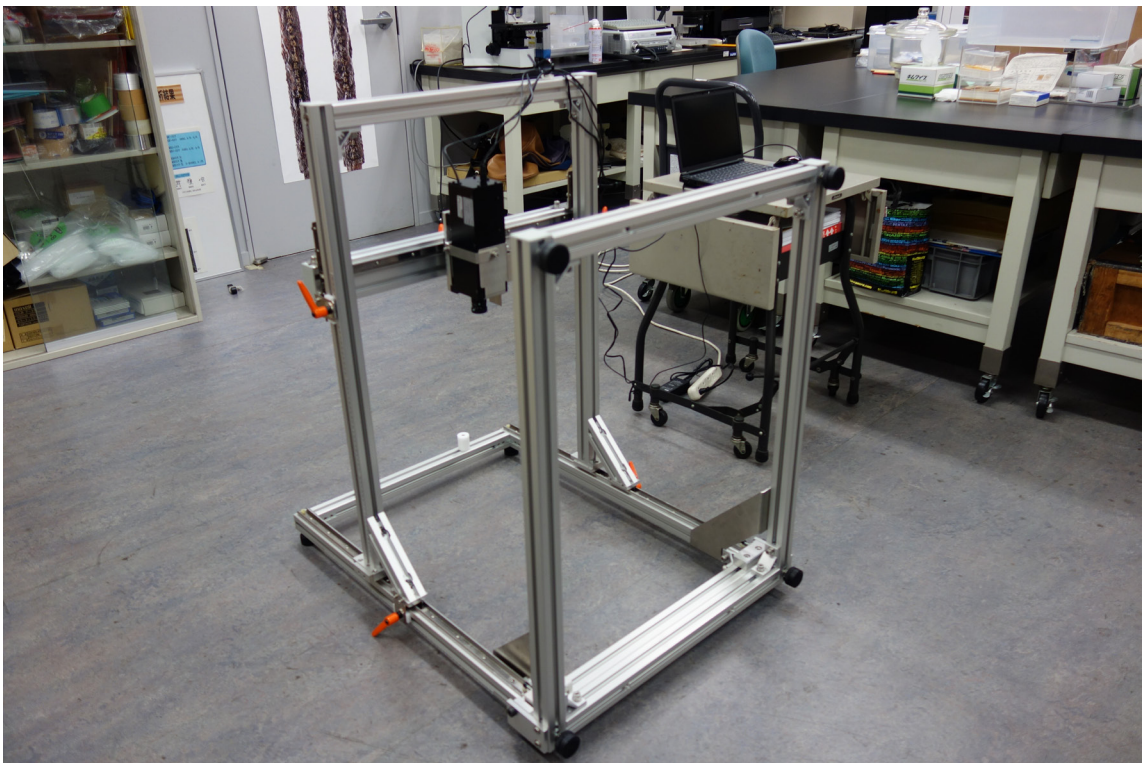
目　的　我が国の絵画史において重要な位置を占める法隆寺金堂壁画の今後の保存・活用に関する検討を行うために必要な壁体、下地層、彩色材料の構造・材質及び劣化状態を正確に把握することを目的とする。法隆寺金堂壁画及び関連する白鳳時代の壁画を調査対象とし、可搬型分析装置を用いてそれらの構造・材質を非破壊・非接触な手法で明らかにする。

成　果　法隆寺金堂壁画のうち、火災に遭った壁画の現時点での劣化状態や火災の影響を研究する上で、火災を免れた内陣小壁の分析結果は基準とすることができるので重要である。内陣小壁のうちいくつかを調査対象の候補とし、現地調査を数回実施することを予定していた。現地調査では、テラヘルツイメージングを用いた下地層の構造調査や可視分光分析等を用いた彩色材料の材質調査を想定していた。

また、次年度以降に法隆寺金堂壁画との比較を行うために、白鳳時代に描かれた法隆寺金堂壁画以外の仏教壁画の分析調査も予定していた。

しかし、令和2年度は新型コロナウィルスの感染状況や東京都に緊急事態宣言が発令されたこと等の影響により、これらの現地調査を実施することができなかった。

一方、本研究では可搬型分析装置を用いた非破壊・非接触な手法による分析調査を実施するのだが、そのためには安全を確保するための分析装置の治具の設計及び製作が本研究の中で重要な位置を占める。令和2年度は、本研究で可視分光分析を行うために使用するハイパースペクトルカメラを固定するための治具の開発と製作を行った。



可視分光分析のための治具

研究組織　○犬塚将英、早川泰弘（以上、保存科学研究センター）、高妻洋成（奈良文化財研究所）、降幡順子（京都国立博物館）

絵画に使用された絹・自然布の非破壊分析方法の開発製法・修復に関する総合的調査

目　的　本研究は、絵画の基底材を科学的に調査し、その情報を美術史的に、あるいは保存修復上で活用することを目的とする。主に絹繊維と自然布を対象とする。

絹については、繊維断面形状の測定を非破壊で行い系統的にデータベース化することで、時代的変遷や産地の同定を可能とし、さらに、修復材料の基礎資料とすることを目的とする。

自然布については、近年は赤外分光分析による非破壊分析が可能になったが、セルロースとは判定されるものの、その植物種の識別は不可能とされてきている。本研究では、多変量解析の手法を用いることで植物繊維の非破壊同定を可能とすることを目指す。

成　果　令和2年度は研究開始2年目になるため、絹と自然布それぞれについて、基礎データの収集を目的として研究を遂行した。

絹については、令和元年度に引き続き製作年代の明らかな作品についてHiROXデジタルマイクロスコープRH-8800を用いて、35倍、50倍、200倍、500倍で複数箇所を撮影し、三次元形状の記録を行った。令和2年度調査点数は、現在21点以上になり、令和3年度以降はこの調査を継続するとともに、形状データの統計処理を行う予定である。特に編年を行うにあたりデータの少ない中世の時期を中心に今後の測定を検討する。

自然布については、多変量解析の基礎データベースを作成するために、試料の収集を行った。群馬県の岩島の大麻など由来の明瞭な自然布材料を収集した。また、これらのデータベースを用い、多変量解析を利用した判別フローを作成した。

葛と伝世されてきた資料について、このフローを用いて非破壊分析したところ、芭蕉と識別された。これを確定させるために、脱落片のクロスセクションを観察したところ、芭蕉と確定し、判別フローの有効性が示された。

現在までの成果を6月と11月に学会発表した。

発　表
- 早川典子ほか：「呉春「白梅図」に使用された絵画基底材料と自然布系基底材に関する研究」第 42 回文化財保存修復学会大会　20.7.10
- 八木千尋ほか：「赤外分光法による植物性染織品に使用された地入れ材料の非破壊判別」第 36 回近赤外フォーラム　オンライン開催　20.11.25

研究組織　○早川典子（保存科学研究センター）、安永拓世（文化財情報資料部）、高柳正夫（東京農工大学）

ポンペイ遺跡壁画における無機物を主体とした保存修復材料による補強技法の確立

目　的　近年、ポンペイ遺跡に残る壁画は、主に 19 世紀以降、繰り返し行われてきた修復で使用された材料が原因となり様々な傷みが発生している。中でも、彩色層や漆喰層の補強を目的に塗布された補強材には基本的に合成樹脂などの有機修復材料が使われており、経年劣化に伴い発生する変色や、壁画が本来有する通気性能を低下させるなど、保存及び鑑賞するうえでの大きな妨げとなっている。

本研究ではこの問題点に着目し、無機物を主体とする保存修復材料を用いた壁画の彩色層及び漆喰層の補強技法確立を目指す。

成　果　5 年計画の第 1 年次にあたる令和 2 年度は、新型コロナウイルス感染症による影響から当初計画にあった現地調査が実施できなかった。そこで計画を変更し、文献資料を活用したポンペイ及びエルコラーノ遺跡における保存修復史に着目した研究を行った。

交付された補助金の一部は令和 3 年度へと繰越し、本年度に実施できなかった研究内容も含め計画を見直し、現地調査を実施する予定である。

発　表・前川佳文、グイド・ボッティチェッリ、ステファーニア・フランチェスキーニほか：ポンペイ遺跡「アポロの家」における壁画クリーニング法の施工実験　日本文化財科学会第 37 回大会 20.9.5-7

刊行物・MAEKAWA Yoshifumi, GUIDO Botticelli, STEFANIA Franceschini, MONICA M. Castaldi, LUIGI Soroldoni : Casa di Apollo Project Progetto di studio e ricerca scientifica sulle metodologie di intervento per la conservazione, restauro e manutenzione di pitture murali e finiture di superficie nell'area Pompeiana, Novembre 2016-Dicembre 2019 Grants-in-Aid for Scientific Research JAPAN 20.8

研究組織　○前川佳文、牛窪彩絢（以上、文化遺産国際協力センター）、朽津信明（保存科学研究センター）

日本の無形文化遺産保護におけるジェンダーに関する研究

目　　的　日本での法的に保護された無形文化遺産に関して、包括的なジェンダー分析を行う。その研究目的は、性別の状況（男女比率、性別の表現、性別による制限された参加の頻度、及びその他の関連要因）を分析し、無形文化遺産における男女間ギャップを評価することにある。そして既存のシステムの長所と短所から教訓を引き出し、その教訓に基づき男女平等を主流化できるシステムを提案する。

成　　果　研究開始にあたって、まず日本の無形文化遺産に関する基礎的文献及び、ジェンダー研究に関する文献資料を収集し、研究史等を明らかにした。そして本研究において調査地として想定した都県における国指定・選択の無形の文化財の基礎的情報を収集した。

実地調査については、本年度は新型コロナウイルス感染防止を鑑み控えた。代わりに、能楽について関係者にアンケート調査を行い、また奈良県の無形文化遺産について行政担当者にリモートによる調査を行った。

論　文・ヤンセ ヘルガ：「The Grey Area of Gender in Intangible Cultural Heritage: Analysis of Japan's Inscribed Elements on the Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity」『New Approach to Cultural Heritage: Profiling Discourse Across Borders』, edited by Le CHENG, Jianping YANG and Jianming CAI, Zhejiang University Press, Hangzhou　pp. 123-151　20.11

発　表・ヤンセ ヘルガ：「無形文化遺産におけるジェンダーに基づく役割分担のダイナミクス―日本の山・鉾・屋台行事を事例として」 文化資源学会第10回博士号取得者研究発表会　20.12.19

・ヤンセ ヘルガ：「ユネスコ無形文化遺産保護条約とジェンダー―日本の記載文化遺産を分析対象として」 芸能文化研究会第15回研究会　20.9.19

・ヤンセ ヘルガ：「Intangible cultural heritage as a mirror of societal gender structures: a discussion based on case studies」 Association of Critical Heritage Studies 5th Biennial Conference (ACHS 2020: Futures)　20.8.27

研究組織　○久保田裕道（無形文化遺産部）、ヤンセ ヘルガ（日本学術振興会特別研究員）

常磐津節の音楽分析のための基盤研究

目　的　常磐津節は素浄瑠璃（演奏会形式）のほか、歌舞伎や日本舞踊とも緊密に関連してきた代表的な三味線音楽であるが、音楽そのものの研究は進んでいない。その原因の一つは、公刊譜がほとんどないことにあると考える。そこで本研究では、①常磐津節音楽分析の基礎となる「譜」を五線譜及び文化譜（三味線音楽で最も汎用性のある記譜法）で提示し、②「譜」を用いた音楽分析によって音楽構造を明らかにする手法を確立すること、を目的とする。

成　果　令和2年度は、引き続き対象視聴覚資料の情報収集を行うとともに、以下の二点を進めた。

まず、儀式性の高い祝儀ものに着目し、音声・映像資料が比較的多く残る《子宝三番叟》について、音源より五線譜に採譜し、「場」及び「芸系」の多様性を前提として作品の「骨格部分」（「場」や「芸系」により変わらない共通部分）を抽出して基本的な音楽構造を明らかにする試論を執筆した。

また、祝儀ものとは異なる音楽性を持つ作品として、所作事（舞踊曲）に着目し、音声・映像資料が多く残り、大曲でありながら音楽構成がはっきりしている《忍夜恋曲者》を取り上げ、音源から五線譜に採譜し、「オトシ」と「ナガシ」という小段落を区切る役割を果たす音型が、各構成部分にどのように配置され、構成部分によりどのように変化しているかを分析、体系化した。このことによって、「オトシ」と「ナガシ」が、それぞれ音楽構成上果たす機能とその多様性を明らかにする試論を執筆した（令和3年度公表予定）。

なお本研究は、新型コロナウイルス感染症拡大により資料収集及び聞き取り調査に大幅な遅れが生じたため、研究期間を一年延長し、令和3年度を最終年度とすることになった。

論　文・「常磐津節《子宝三番叟》の音楽分析」『桐朋学園大学研究紀要』第46集、pp.1-17　20.10

研究組織　○前原恵美（無形文化遺産部）

江戸時代の絵画における基底材に関する基礎的研究

目　　的　日本の絵画の基底材（下地になる素材）は、江戸時代以降、中国の書画の影響を受けて、絖や金箋などの特殊な素材も用いられた。日本の文人画（南画）において、絖を使用した早い例としては、与謝蕪村がよく知られるものの、蕪村に師事した呉春が描いた「白梅図屏風」（逸翁美術館蔵）には、より特殊な基底材が用いられている。国の重要文化財指定では、その基底材を絹とみなしているが、明らかに絹とは異なる繊維が確認できる。本研究の目的は、この特殊な基底材を解明し、その時代性や地域性を検討することにある。

成　　果　１．令和２年度は３年計画の第３年次で、最終年度であったが、新型コロナウイルスの感染拡大のため、当初計画の通りには進捗せず、調査・出張等も行えなかったため、計画を１年間繰り下げることとした。

２．そのため、昨年度までの成果を公表し、学会発表や報告書にまとめることで、令和２年度の研究成果とした。

３．江戸時代の中期、与謝蕪村よりも少し前の時期に、京都や新潟で活躍していた五十嵐浚明という画家の書画作品について、絵画表現や画業に関する調査とともに基底材に関しても調査を行い、その成果の一部を講演で発表した。

報　告・安永拓世：「江戸時代に用いられた特殊な支持体」『無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書　絹製作技術』　pp.80-83　21.3

発　表・早川典子、菊池理予、仙海義之、安永拓世：「呉春「白梅図」に使用された絵画基底材料と自然布系基底材に関する研究」　文化財保存修復学会第42回大会　紙面開催　20.7.10

・安永拓世：「江戸時代中期の画壇と五十嵐浚明―上方と新潟の交流と往来―」　新潟市歴史博物館「生誕320年記念特別展五十嵐浚明―越後絵画のあけぼの―」特別講演会　新潟市歴史博物館　セミナー室　20.12.6

研究組織　○安永拓世（文化財情報資料部）

ポスト1968年表現共同体の研究：松澤宥アーカイブズを基軸として

目　的　ベトナム反戦運動が世界的に広がり、アメリカではキング牧師暗殺、フランスでは「五月革命」、社会主義圏では「プラハの春」が起こり《20世紀の転換点》と称される「1968年」、日本では戦後日本の政治的・経済的枠組みを問う声が高まり、全国で様々な社会運動が広がり、美術では関根伸夫《位相・大地》によって「もの派」が誕生し、写真では思想状況を色濃く反映した『プロヴォーク』が創刊されるなど表現活動においても大きな分岐点であった。ただ、1960年代末から70年代の日本地域特有の表現活動に関する研究は、個人作家やグループの個別研究が多く、表現者たちの緩やかな人的ネットワーク「表現共同体」を主眼においた研究はまだ少ない。本研究では、国際的なコンセプチュアル・アートの先駆者で、東洋的な宗教観、宇宙観、現代数学、宇宙物理学等を組み入れ、かつ同時代の人物（美術、建築、音楽、文学、舞踏）との交渉も多岐にわたる作家・松澤宥（1922-2006）のアーカイブズから見出せる「表現共同体」を検証することで、1968（昭和43）年以後を中心とした時代における表現者たちの相互関連性、表現活動のジャンル越境性を明らかにする。

成　果　・令和２年度は第３年次（最終年度）であったが、新型コロナウィルス感染症拡大のため、当初計画から、すべて１年間繰り下げることとした。

・そのため、本年度は、より緊急性が高く、以下の発表・調査等に限定して遂行した。

◎ 20/11/2-15　展覧会「日比野克彦を保存する」（東京藝術大学大学美術館陳列館）に、本科研課題における作家アーカイブズの組織化・保存の取り組みについてパネルで紹介した。
◎21/1/18、2/15　故宮澤壮佳（1933-2019、『美術手帖』編集人1968年～1971年）資料調査。
◎21/2/3　本年度を期限としていた松澤宥アーカイブズの借用について、補助事業期間延長に合わせて、松澤宥氏の遺族と協議して、１年間延長することとした。

論　文・河合大介：「芸術行為と犯罪行為――偽千円札事件の場合」、美学会編『美学の事典』丸善出版 pp.636-637　20.12

研究組織　○橘川英規、塩谷純（以上、文化財情報資料部）、三上豊（和光大学）、河合大介（岡山県立大学）

DNA塩基配列情報に基づく文化財害虫の新規データベース構築

目　的　文化財の虫害を未然に防ぐ予防的保存の実践において、文化財害虫の発生を早期に把握することは重要である。本研究は、文化財害虫について形態的特徴による同定法では分類が困難な幼虫や脱皮殻あるいは排泄物から遺伝子(DNA)を抽出し、DNA情報に基づき文化財害虫を同定する手法を確立することを目的とする。

成　果

1．文化財害虫の標本コレクションの整備：先に選定した日本国内で文化財への加害事例の多い昆虫の網羅的な収集を行った。最終的に69種133個体を収集した。収集した文化財害虫は、DNA塩基配列解析に供し、DNA情報証拠標本として整備を進めた。

2．標本コレクションの形態同定：収集した文化財害虫（DNA情報証拠標本）について、それぞれの文化財害虫が属する分類群ごとに特有の形態学的な特徴を記載し、種の同定を行った。同定の正確さは本研究にとって非常に重要な要素であるため、文化財害虫の分類同定に長く携わっている研究者（小峰幸夫）が担当した。種の同定とあわせて害虫の形態写真及び生態学的情報（生息地、食性など）を記録・記載し、昨年度に続いてデータベース構築を進めた。

3．標本コレクションのDNA塩基配列解析：形態同定を終えた文化財害虫（DNA情報証拠標本）の同一試料から、形態分類の指標とならない体節の一部を採取しDNA抽出に供した。最終的にはDNA塩基配列解析が完了したのは42種60個体となった。

4．DNA塩基配列情報の登録とデータベース構築：本研究で得られたDNA塩基配列情報は、国立遺伝学研究所（DDBJ）への登録を行った。また、国際的なバーコードオブライフ・イニシアチブにも情報（形態写真、採集データ（採集地、採集年月日、採集者名）、同定データ（分類群名、同定者名、同定年）、DDBJ登録番号、東京文化財研究所での証拠標本番号）を登録し、世界中から検索が可能な基礎情報として登録を行い、公開活用が開始されている。

5．脱皮殻・排泄物からのDNA解析手法の確立：排泄物（フラス）からのDNA抽出については、竹の害虫である2種の甲虫についてPCRによって検出が可能な種特異的プライマーを設計し、人工飼育中のフラスを用いて評価したところ、高い精度で検出することが出来た。種特異的プライマーを他の文化財害虫でも設計することで他の文化財害虫のフラスからの種同定が可能になると期待される。

研究組織　○佐藤嘉則、小峰幸夫、矢花（篠崎）聡子（以上、保存科学研究センター）、二神葉子、小山田智寛（以上、文化財情報資料部）、斉藤明子（千葉県立中央博物館）、Ubaldo Cesareo（Central Institute for the restoration/conservation of archival and library heritage）

博物館IPMへのATP拭き取り検査活用に向けた基礎的な研究

目　的　近年、博物館施設や資料に発生している汚損がカビ集落によるものかの判定や、カビ集落であった場合の活性調査、表面汚染度評価等にATP拭き取り検査などが導入されはじめている。博物館IPMでは、このATP拭き取り検査の結果をもとに、その後の処理や管理の方針を決定する。しかし現状では、博物館IPMにおけるATP拭き取り検査についての合理的なATP発光量の基準はなく、測定者の経験によって判断されている。

本研究では、保存環境や資料表面で許容されうるATP拭き取り検査の合理的な発光量の基準を、カビ集落が死滅または活性が低いと判断できる単位面積当たりのATP発光量として設定し、この範囲について生理学的、光学的なアプローチによる基礎的な知見を得ることを目的とする。

成　果　本研究では、今後博物館IPMにおけるATP拭き取り検査における合理的なATP発光量の基準を設定していくための基礎的な知見として、保存環境や資料表面で許容されうる、カビ集落が死滅または活性が低いと判断できる単位面積当たりのATP発光量の範囲を検討した。カビの活性は増殖相の区分により評価し、遅滞期から静止期までを活性が高い、生菌数が自然減少する死滅期を活性が低いと規定することで、供試菌の集落が死滅期にあると判断できるATP発光量の範囲を求めた。また使用するATP拭き取り検査機器についても比較を行うことで、この発光量の範囲の適用性についても検討を行った。

カビの活性については、博物館等で採取されたカビをPDA培地上で培養しながら、定期的にATP拭き取り検査を行い、集落のATP発光量の経時的な変化を測定することで増殖相の変遷を評価した。供試菌には博物館4館、水損資料1件、新規搬入された木彫像1件について採取された50菌株とした。採取にあたっては好湿性カビ用培地を使用したが、好乾性，耐乾性とされる菌種も検出されており、ある程度は博物館環境に存在する菌種を幅広く採取しているものと考えられる。ATP拭き取り検査は、供試菌を最大239日間保管しながら定期的に3M社製Clean-Trace NG Luminometer / UXL100を用いて測定し、得られたATP発光量（RLU）をサンプリング面積（cm^2）で除し単位面積当たりの発光量（RLU/cm^2）を算出した。本手法により、供試菌によって増殖曲線の形状に違いが見られたが、ATP発光量が減少に転じる死滅期については見て取ることができた。すべての供試菌の測定結果から、培養初期から対数期、静止期までの単位面積当たりのATP発光量は2.0×10^4～1.0×10^7 RLU/cm^2の範囲、死滅期は1.6×10^2～9.9×10^6 RLU/cm^2の範囲であった。またATPのみを測定する機種・高感度スワブによるATP発光量の機器比較を行い、単位当たりのATP発光量に数倍程度の差がみられた。

本研究で得られた実験結果から、実際の博物館等の収蔵庫、展示室や資料表面でカビ様の汚損等が見られ、その汚損についてATP拭き取り検査を行った場合、大まかな目安として10^4 RLU/cm^2以上であれば，活性が高く今後被害が拡大・拡散する可能性があり、10^3 RLU/cm^2のオーダーであれば活性が低い、10^2 RLU/cm^2以下で死滅または，汚損はカビによるものではない可能性が高いと判断できることになる。このATP発光量の目安は、博物館IPMにおいてATP拭き取り検査に基づいた適切なカビへの対処に資するものと考えられる。

論　文・間渕創、佐藤嘉則：「博物館等におけるATP拭き取り検査によるカビ集落の活性評価について」『保存科学』60　pp.41-50　21.3

研究組織　○間渕創（併任、文化財活用センター）

白色LED光照射に伴う蛍光性有機染料の変退色挙動とその抑制

目　的　白色LEDによって、蛍光性有機染料を照射した場合、青色波長帯に発光ピークを有するという特徴から、従来のハロゲンランプや蛍光ランプによる照射と比較し、反射光に対する蛍光の割合が増加し、その結果として、特異的な変退色挙動を示すと予想される。本研究は、その変退色挙動を、長期照射試験を通じて明らかにし、これを抑制するための照射条件を見出し、近年展示照明への導入が進んでいる白色LEDによる、より保存性の高い文化財活用に寄与しようとするものである。

成　果　本研究の初年度である平成30年度に、白色LEDで蛍光性有機染料を照射した場合、相対的に青色発光の大きい低い色温度ほど、色彩への蛍光の影響が大きい傾向があることを認める結果を得た。このことを受け、平成31年度、令和元年度より、照射波長帯と変退色挙動の関係をより詳細に検証するため、新たに作成した実験システムを使い、吸収スペクトルの異なる3種類の黄色染料（クルクミン、サフラワーイエロー、カルミン酸）による絹布への染色サンプル（明礬媒染）に、バンドパスフィルターにD65標準光源蛍光ランプの白色光を通した、特定波長域の光を長期照射した際の、可視反射スペクトル（吸光度）と色差の経時変化の測定に着手した。これは、短波長になるほど染料分子の励起と蛍光が増加し、その影響で長波長側とは異なる変退色挙動を示すのではとの想定に基づくものであり、最終年度である令和2年度まで、この測定を継続し、以下の結果を得た。

- クルクミン及びサフラワーイエローでは、それぞれの吸収波長帯より短波長側の光を照射した際には、漸次吸光度が減少すること、これに合わせて、色差が増大することが認められた。一方、吸収波長帯より長波長側の光照射では、吸光度の変化はみられなかった。
- 上記 2 種のサンプルでは、吸収ピークと重なりの大きい波長帯の光で照射した際に、より吸光度減少と色差増大のスピードが大きくなることを示唆するデータが得られた。
- カルミン酸では、照射波長域によらず、吸光度及び色差の変化は、他の 2 種と比較して、非常に小さかった。この色素は、一般的にも光に対して堅牢とされているが、明礬のアルミニウムとの結合により、励起状態から基底状態への遷移時間が極めて短くなることが理由である可能性がある。これについては、異なる媒染剤の場合での検証などがさらに必要である。

上記結果について、論文及び学会での発表を行った。

論　文・相馬静乃、吉田直人、佐野千絵：「特定波長域を遮光した光照射下における黄色系染料を主とした有機染料の変退色挙動」『保存科学』60　pp.51-60　21.3

発　表・相馬静乃、吉田直人、佐野千絵：「バンドパスフィルターで抽出した特定波長による有機染料の変退色挙動」文化財保存修復学会第42回大会 紙上開催　20.7.10

研究組織　○吉田直人（併任、文化財活用センター）、相馬静乃（保存科学研究センター）

鍾乳洞における照明植生を軽減する光環境に関する実験的研究

目　的　鍾乳洞では、見学者のために人工照明が当てられている場所に藻類や蘚苔類などの緑色生物が繁茂し、鍾乳石などの鑑賞を妨げる場合があり、これらの生物は総称して「照明植生」と呼ばれている。本研究では、照射する照明を工夫することにより、見学者に違和感を与えることのない光源を選定しながら、また見学者の安全性を十分確保する照度を前提とし、その中でなるべく照明植生の繁茂を制御できるような条件を模索することにより、鍾乳洞の保存・活用に寄与することを目標とする。

成　果　1．国の天然記念物・風連鍾乳洞において、緊急事態宣言中の閉洞期間後の状態を観察し、従来に比べてシアノバクテリアが減少していることを確認した。

2．関連洞窟として、秋芳洞、龍河洞、などについても、緊急事態宣言以降の状態をオンライン診療などで把握し、照明照射と緑色生物繁茂との関係性について把握した。

3．関連調査として、天草市アンモナイト館で照明制御の対策を行った後の化石面を調査し、照明制御で緑色生物を実際に軽減できることを定量的に示した。

画像１　照明制御対策前のアンモナイト館
（緑色生物の繁茂が著しい）

画像２　照明制御対策後のアンモナイト館
（緑色生物は目視では認められない）

論　文・朽津信明ほか：「天草市アンモナイト館における緑色生物の制御」『保存科学』60　pp. 85-98　21.3

発　表・朽津信明ほか：「天草市アンモナイト館における照明調整による緑色生物の軽減」文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10

研究組織　○朽津信明、佐藤嘉則、犬塚将英（以上、保存科学研究センター）、片山葉子（客員研究員）、西山賢一（徳島大学）、西澤智康（茨城大学）

様々な文化財に使用された彩色材料への赤外線画像による面的調査の検討

目　　的　本研究の目的は様々な文化財に使用された彩色材料の面的調査に赤外線画像を適用し、その有効性を明らかにすることである。本研究では歴史資料や浮世絵などの刷物、染織品等に使用された彩色材料に対して、赤外線画像を使った調査が有効であるか検討を行う。赤外線画像の適用事例を増やして、簡便かつ安全な調査法として確立することができれば、文化財を「活用」する際の情報提供に役立てることができると考えられる。そのためには赤外線画像で何がどこまで分かるのかをしっかりと押さえ、様々な文化財に対し赤外線画像の検証を重ねていく必要がある。

成　　果　令和２年度から所属が東京文化財研究所に変わり、これまで使用してきた機材を使用できない状況にあったため、まずは最も必要な機材である赤外線カメラを購入し、顔料・染料の標準となる自作カラーチャートを撮影して、これまでのカメラと比較できる画像を得た。

また、今年度は昨年度に引き続き、歴史資料である「博物図譜」の調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、当初予定していた調査を進めることができなかった。来年度はこれまで行ってきた「博物図譜」の調査をできる範囲で進め、得られたデータを今後に生かせる形でまとめたい。そして、今年度始められなかった染織作品等の調査を九州国立博物館の所蔵作品を中心に進めていく予定である。

研究組織　○秋山純子（保存科学研究センター）

地域文化の表象としての「箕」の形態に関する学際的研究

目　的　穀物の脱穀調整に不可欠な実用具として先史時代より使われてきた箕は、その歴史的・空間的広がりと、基本構造における高い共通性と明確な地域差を根拠に、日本列島の文化系譜を読み解く材料として注目されてきた。しかし従来の研究においては、箕の素材・製作技術・使用方法などの細かな地域的差異は捨象され、片口箕か丸箕かというきわめて大雑把な形態把握をもとに議論がなされてきた。そこで本研究は箕の形態の地域的多様性に着目し、民俗学・考古学・デザイン工学からのアプローチにより、箕の形態・機能と地域社会の在り方がどのように相互連関しているかを分析する。これにより、従来の箕の形態のみに拠った文化論を、地域社会の在り方も含めた比較研究として発展的に継承することを目指す。

成　果　令和２年度は新型コロナウイルス感染防止の観点から、現地調査を中心に計画していた事業がほとんど実施できなかった。このため予定を変更し、①文献の収集や②情報発信（社会還元）など、コロナ禍においても実施可能な事業を行った。

１．文献等の収集

①　文献研究の専門家である桂眞幸氏の協力を得、近世～近代における箕に関わる文献を網羅的に収集・整理した。対象としたのは「近世農書」「明治農具絵図」「明治七年府県物産表」「内国勧業博覧会資料」「農家副業ニ関スル調査」など。これにより、箕の産地の広がりや時代ごとの価格、流通範囲など、流通民具としての箕の実態について、その全体像を把握することが可能となった。

②　関係者に呼びかけ、箕の製作技術等を記録した未公開映像（西日本の箕に関わる映像15件、新潟・青森の箕に関わる映像各１件）を収集した。

③　弥生時代前期以降、全国の遺跡から出土する箕について、文献を中心に情報を収集し、素材や地域性など、年代ごとのおおまかな傾向について把握した。

２．情報発信

①　箕の素材や加工技術を中心に、研究成果を一般にわかりやすく発信する下記展示を開催した。展示パネルは冊子にまとめて年度末に刊行した。
「箕のかたち―自然と生きる日本のわざ」展
会場：汐留メディアタワー（共同通信社本社ビル）
会期：2020（令和２）年 12 月２日～ 2021（令和３）年１月 28 日

②　箕の製作過程を記録した未編集映像を編集し、記録編（長尺版）５本・普及編（短編）８本を制作した。また上記①の展示にあわせて開設したウェブページにおいて、編集した普及版映像及び、既刊映像作品のうち公開許可を得たものを公開した。
（３月末現在 13 件の映像を公開中　https://www.tobunken.go.jp/ich/mi）

刊行物・今石みぎわ：『箕のかたち―自然と生きる日本のわざ』東京文化財研究所　21.3

研究組織　○今石みぎわ（無形文化遺産部）、久保光徳、植田憲（以上、千葉大学）、松永篤知（金沢大学資料館）、桃井宏和（元興寺文化財研究所）

従属栄養微生物による硫黄化合物の分解とそれに伴う腐食性ガス生成

目　的　硫化カルボニルは金属腐食性を有し、低濃度の混在も精密機器や顔料などに含まれる金属を腐食することから、空気中の濃度は500 pptv前後と低いものの、注意する必要のある物質である。生物発生起源には細菌や真菌からの放出が知られるがその詳細は未だ不明である。本研究では微生物による硫化カルボニルの消長を調べ劣化軽減に資する知見を得る事を目的とする。

成　果　令和2年度は新型コロナウイルス感染症予防の影響で、培養を伴う微生物実験の実施に支障があったため、今後の培養実験を円滑に行うための準備、並びに新年度以降に導入される予定のガスクロマトグラフ設置に向けた準備を中心に行った。

1．硫化カルボニル代謝微生物株の遺伝子解析：これまでに硫化カルボニル分解微生物として土壌から分離されてきた保存微生物株の中から、真菌として *Trichoderma* sp. THIF08 株を、また硫化カルボニル発生細菌として9株について、同定を行うことを目的として遺伝子解析を行った。
2．形態的特徴と遺伝子解析の結果、THIF08 株を *Trichoderma harzianum* と同定し、その ITS 及び TEF 1a 配列の情報を DDBJ に登録した。9 株は *Rhizobium* 属に属する細菌であることが明らかとなった。
3．硫化カルボニル分解真菌の培養条件の確認：T. harzianum THIF08 株の生育条件を確認するために、硫黄源を中心とする培地組成の検討、振とう培養槽での培養条件などについての確認を行った。
4．これまでの研究で硫化カルボニルの発生が確認された唯一の菌株が *Mortierella* 属に属する真菌であったことから、*Mortierella* 属の既知菌種 10 菌株を菌株保存施設（NBRC）より譲り受け、復元並びに今後の培養試験への供試のための保存を行った。
5．令和3年度より FPD- ガスクロマトグラフによる硫化カルボニルの分析が可能となることから、分析に必要な周辺器具を揃え、分析を実施するための環境を整えた。

論　文・Kato H. et al. :「Enumeration of chemoorganotrophic carbonyl sulfide (COS)-degrading microorganisms by the most probable number method」『Microbes & Environ.』35, ME19139　ほか3報

発　表・松野美由樹ほか：「虎塚古墳の壁画剥落片から分離された微生物の群集構造解析」 日本文化財化学会第37回大会　WEB開催　20.9.5-13　ほか1件

研究組織　○片山葉子（客員研究員）、佐藤嘉則（保存科学研究センター）

マヤ地域の博物館における文化遺産保全と地域発展に向けた文化資源マネジメントの研究

目　的　本研究は、ユネスコ世界文化遺産であり、古代マヤ文明を代表する遺跡の 1 つであるコパン遺跡を有するホンジュラス共和国コパン・ルイナス市を対象としている。地域住民と共に実践する博物館を拠点とした活動を通じて地域社会の新たな価値を活用して地域の課題に対峙する文化資源マネジメントの在り方を実践的に検証することを目的とする。対象地の地域資源を掘り起こすためのフィールド調査、博物館を拠点とした教育的活動に加え、その過程における住民の意識変容や活動プロセスを分析するための聞き取り調査や参与観察に基づき、持続可能な社会への発展可能性も視野に入れた保存と発展の共存モデルの提示を目指す。

成　果　研究第3年次である令和2年度は、これまでに収集した資料・データの整理と分析を行った。特にホンジュラス共和国における文化遺産保護に関する制度、及び関連法規成立の歴史、主たる調査地であるコパン・デジタル博物館の設立背景等について、調査と整理を行った。また、国内の研究会、国際学会での研究発表と情報収集を行った。なお、当初予定していた2週間程度の現地調査、及び国外での学会・シンポジウム等への参加は、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響によりすべて中止となった。

研究発表：2020（令和2）年12月5日にオンラインで開催された古代アメリカ学会第25回研究大会において研究発表を行った。

情報収集：以下 3 つの国内における研究会、学会に参加し、中南米における博物館活動、考古学・文化遺産の調査研究に関する情報の収集、関係者との意見交換を行った。
・古代アメリカ学会第25回研究大会（2020（令和2）年12月5-6日、オンライン開催）
・文化遺産に関わる国際会議「博物館と地域社会」（2020（令和2）年12月22日、オンライン開催）
・金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」オンライン・シンポジウム 世界の古代文明をめぐる最新調査研究（2021（令和3）年2月28日、オンライン開催）

発　表・五木田まきは：「ホンジュラス共和国コパン・ルイナス市における文化遺産の利用実態と課題」古代アメリカ学会第25回研究大会　20.12.5　オンライン開催

研究組織　○五木田まきは（文化遺産国際協力センター）

中世日本における中国美術の受容と羅漢の作例に関する調査研究

目　　的　本研究は、中世日本の仏教美術における中国美術の受容について、造形作品の様式的側面とあわせて、その信仰背景における儀礼や安置空間を考証し、礼拝対象としての絵画あるいは彫刻の、宗教的意味や機能との関連性を考察するものである。考察の対象とするのは、中世（鎌倉～室町時代）に制作された羅漢（らかん）の造形作品である。羅漢信仰は中世に大陸からの影響を色濃く受けて日本国内でも隆盛し、絵画・彫刻など数多くの造形作品が制作された。それらの制作には大陸からもたらされた造形作品が大きく関わっていると考えられる。南宋時代の代表的な作例に、中世に日本へと伝えらえた大徳寺伝来の五百羅漢図がある。本研究では、その図様を継承して制作されたと考えられる国内の作例に関して、実地調査を行ったうえで図様や様式の側面を検討し、さらにそれらの作例が制作された場において、どのような信仰の実態があったのかを考証する。

成　　果　令和２年度前半は移動制限のため、予定していた作品調査を行わず文献資料や作品情報の収集に努めた。後半には、都内の寺院で羅漢図の調査を実施し、高精細画像・赤外線・蛍光Ｘ線画像の撮影を行った。文化財情報資料部研究会（21.2.25）において、調査で得られた画像を交えながら図像や様式的な検討を行い、当該作品が中世に大陸で制作された可能性を報告した。

発　表・米沢玲：「片野四郎旧蔵の羅漢図について―図様と表現の考察―」令和２年度第８回文化財情報資料部研究会　21.2.25

研究組織　○米沢玲（文化財情報資料部）

木材からの化学物質放散挙動の解明と博物館における選定指標の提案

目　的　博物館では、展示室や展示ケース、収蔵庫や収納箱などに使用される木材からの酢酸やギ酸の放散が資料に有害な影響を及ぼすために深刻な問題となっている。資料保全のためには酢酸などの放散が小さい木材を使用するべきだが、木材の種類により放散量やその経時変化が異なり、材の選定を困難にしている。本研究は、博物館で木材を安全に使用するために木材からの酢酸、ギ酸の放散挙動の解明、及び放散挙動を考慮した木材の選定指標の確立を目指す。

成　果　1．木材試験片による放散試験

令和元年度に引き続き、試験体に国産のナラ、ブナ、キリ、スギ材 * を用いて、小型チャンバー法による放散試験を実施した（*試験環境及び設備が前年度より変更となったため、再試験を実施した材を含む）。放散試験は 32 ～ 35 日間、一定の間隔をあけて継続して行い、試験体からの酢酸、ギ酸の放散、及び時間の経過による放散量の減少の差異について確認した。

2．木材からの化学物質放散挙動の数値解析

建築材料からの化学物質放散挙動において提案されている数値モデルを用いて、放散試験で得た各試験体の化学物質放散量におけるデータ解析を進めた。本モデルへの試験データの適合は、試験体で用いた各材の放散挙動の予測、及び相対的比較を可能とする。

3．パーミエーションチューブを発生源とした試験の検討

前年度に引き続き、サンプリングバッグを用いた各種試験実施のための基礎試験を進めた。サンプリングバッグ内で指標とする化学物質を一定濃度で放散させるために、パーミエーションチューブを発生源とした手法の検討を進めた。

研究組織　○古田嶋智子（客員研究員）

古典的膠の製造方法と各用途適性の体系化

目　的　古典的膠について、各用途適性までを含め広範に体系化する。該材料は、従来の膠製品には見られなかった、淡色かつ不光沢、高浸透性、といったその性状から、多くの文化財修復案件等において活用されている。本研究では、こうした材料の継続的かつ恒常的な利用を可能たらしめるべく、より安定的な製造方法の検討を進める。また膠の応用材料である墨等について、製造条件がその性状等に及ぼす影響を明らかにする。これらの材料の差異が書画表現等に及ぼす影響について検証し、関連知見の一般化とさらなる応用展開を目指す。

成　果　過年度に開発した牛剃毛後表皮除去生皮由来膠の製造方法について、様々な条件でさらに試行を重ね、処理の好適条件について検証を行った。牛剃毛生皮に皮革用熱鏝を用いて次掲条件で表皮層の熱処理を行った。[(1) 熱鏝載置単位時間: 0 秒（加熱時間: 0 秒）（対照標準）/ (2) 熱鏝載置単位時間: 15 秒（加熱時間: 30 秒）/ (3) 熱鏝載置単位時間: 35 秒（加熱時間: 70 秒）/ (4) 熱鏝載置単位時間: 70 秒（加熱時間: 140 秒）/ (5) 熱鏝載置単位時間: 120 秒（加熱時間: 240 秒）] その結果、牛生皮の剃毛後に表皮層のみを予め選択的に熱変性させることが、毛根組織を含む表皮層の破壊除去に効果的であることが改めて確認された。条件（3）及び（4）において企図の効果が良好に認められた。条件(2)では処理が不十分であり、一方、条件（5）では真皮層にまで熱変性が起きてしまい処理過剰であった。またこの結果から、熱鏝を使用する代わりに皮をまるごと熱湯に浸漬するといった方法は不適であることが覗われた。

膠の光沢等質感は含有油脂分量と関連し、特に装潢用途においては書画彩色層の濡れ色化等発色への影響を管理するうえでも重要な要素である。このため、乾燥膠の表面微細構造の実態や差異に関して、走査型電子顕微鏡を用いて観察と検証を行った。その結果、油脂分を比較的多く含む試料には総じて、直径数μm～数十μm程度の擬円形起伏乃至収縮皺が多く認められた。こうした試料は目視観察においても低光沢であり、明色のものであっても透明度は低い傾向にあった。一方、油脂分の比較的少ない試料については上記のような起伏乃至収縮皺等は殆ど認められず、概ね平滑であった。膠表面におけるこうした微細な構造が、目視における質感や、顔料等の発色に及ぼす視覚的影響と関連していたものと考えられる。

膠の最も代表的な応用材料として墨が挙げられる。その色料である煤は、粒子径、凝集規模、表面官能基等が原材料や製造条件によって様々であり、またそうした煤の特性は水中分散系としての墨液における膠との相互作用や書画材料としての性能とも大きく関わっている。これらを勘案し、現在生産されている各種煤製品に関する調査記録を行なった。さらに各製品について走査型電子顕微鏡による一次粒子観察とレーザー回折・散乱法による凝集体規模の測定を行なった。得られた結果について、過年度に試作及び分析を行なった各種煤試料と比較照合等を行ない、当該材料についてより広範な体系化を進めた。

発　表・宇髙健太郎、早川典子、藤井佑果、大場詩野子、岡部迪子：「古典的膠の調製方法及び性状」文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10
・UDAKA Kentaro、Jinnifer A. Giaccai：「Research on Properties of Soot for Inkstick Productions」 文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10

刊行物・宇髙健太郎：第18章「墨および古典的膠」 東京農工大学硬蛋白質利用研究施設（編）『コラーゲン基礎から応用』株式会社インプレスR&D　pp.181-191　20.10

研究組織　○宇髙健太郎（客員研究員）

南西諸島における風葬の定着過程に関する研究

目　的　南西諸島には、戦後に火葬が普及するまで広く風葬の習慣があったことが知られている。風葬を含む同地域の葬墓制の研究は、近年では考古学が中心となり、徐々にその変遷が解明されてきたが、地域制や多様性に富む同地域の葬墓制は一概に類型化が出来ず、確固たる学説がないまま膠着している。また、多様な葬制が近世になぜ風葬に収斂するのか、その理由については未だ明確な答えはない。本研究は、土葬から風葬への変化が明確な八重山列島に注目し、考古学とは異なる宗教史学的アプローチを用いて風葬が諸島に定着する社会基盤を考察する。また、今や急速に失われつつある風葬文化を後世に残すため、伝承の記録保存を行うことも目的とする。

成　果　新型コロナウイルス感染拡大の影響により、八重山列島方面への往訪を予定通り行うことができなかったため、文献資料によって南西諸島の葬墓制史や死生観を丹念に調査した。その結果、概略以下のことが分かった。なお、予算の殆どが未使用の状態であるため、次年度に繰り越しする。

1．17世紀から18世紀というのは沖縄において社会的転換期にあたり、そのことが同地の庶民における葬墓制に大きな影響を与えている。

2．琉球王朝における葬墓制は15世紀から16世紀にかけて過渡期を迎え、17世紀から18世紀にかけて確立に向かう。

3．琉球王朝において、17世紀には洗骨は次の被葬者が葬られる時に便法上行うものへと成り代わっており、葬送儀礼として重要な意味を有していたものは、「殯」の期間と風葬（シルヒラシ）であったと言える。一方、庶民においては王府・明治政府のテコ入れにより、風葬（シルヒラシ）をして洗骨するという葬送儀礼に落ち着く。

4．琉球王朝においても庶民においても、二重葬の形態を獲得して落ち着いていることから、南西諸島における葬送儀礼には「死霊」を「祖先」へ転換する構造が見られると言える。

5．洗骨改葬の習俗を取り入れる以前は単葬の社会であったと考えられ、それが二重葬へと変換する背景には何があったのか、検討を行う必要がある。

論　文・牛窪彩絢：「琉球国における「殯葬」の展開に関する一考察」『東洋文化研究』第24号　22.3（刊行予定）

発　表・牛窪彩絢：「沖縄における「殯葬」の展開に関する一考察」　日本民俗学会第72回年会　20.10.4

研究組織　○牛窪彩絢（文化遺産国際協力センター）

組積造建造物の通電による脱塩の適応可能性に関する検討

目　的　歴史的組積造建造物の塩類風化の抑制と構造補強も含めた維持管理手法を構築するうえで、適切な脱塩により蓄積塩を減らし、潜在的な劣化リスクを低減することが望ましい。電気的脱塩工法は通電による電気泳動を利用してイオンを材料から除去する方法であり港湾部のRC構造物の維持管理に用いられている（図1）。コンクリートとは細孔構造や表面の電気的特性が異なる煉瓦と石材への適応に向けては、これらの材料中における通電時の水分やイオンの移動性状を考慮し極材、通電量、通電時間、電解質溶液の種類と濃度、溶液温度、脱塩前の壁面の濡らし具合など多くのパラメータの最適化が必要性になる。

本研究は将来的に組積造建造物に適応可能な脱塩手法の開発に向けて、まずは単体の煉瓦と石材を対象に実験室実験と理論解析により電気的脱塩による脱塩効果の検証と、脱塩条件の最適化に向けて通電時のイオン輸送メカニズムを明らかにすることを目的とする。

成　果　令和2年度は文献調査及び塩類風化の専門家との情報交換を主に実施した。

組積造を対象とした電気的脱塩手法の研究は非常に限られるものの、Ottosen(2017)らが実施した実証実験では電気的脱塩により煉瓦内の塩分濃度の減少が確認された一方で脱塩可能なイオン量に問題があることが指摘されており、実用化にむけては現状の工法からの改良が必要とされる。また国内の組積造において、金属が埋め込まれている場所において金属の腐食に伴う亀甲上の煉瓦の割れが発生している事例が確認されており（図2）、組積造建造物に使用されている金属腐食防止の観点でも適切な脱塩手法の開発が望まれる。

2010（平成22）年から継続して実施しているハギア・ソフィア大聖堂における塩類風化による内装材の剥落に関する調査、研究の成果を論文（Journal of Building Physics）にまとめ、オンラインで開催されたInternational Hagia Sophia Symposium: Architecture and Preservationにて口頭発表した。

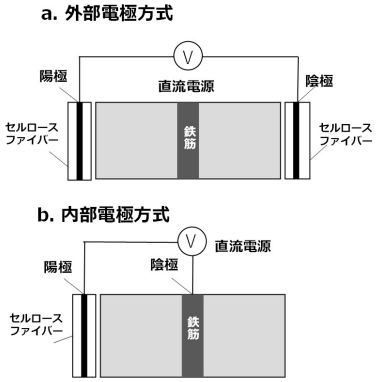


図1　電気的脱塩工法の概要

図2　内部の金属の腐食に伴う煉瓦の亀甲状の割れ

論　文・E. Mizutani et al., Influence of wall composition on moisture related degradation of the wall surfaces in Hagia Sophia, Istanbul, Journal of Building Physics, 31p, 21. 3. 1, https://doi.org/10.1177/1744259121996017

発　表・E. Mizutani et al., Environmental Research on Conservation Conditions of the Hagia Sophia Part 2: Numerical Analyses of Heat and Moisture Transfer to Study Deterioration of Outer Walls, International Hagia Sophia Symposium: Architecture and Preservation, ウェビナー, 20.9.24　（他2報）

研究組織　○水谷悦子（文化財防災センター）

近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に向けた基礎的研究

目　的　日本の近現代建造物は世界の文化芸術の一翼を担う重要な存在として評価され、文化財としての理解も進んでいる。しかし、近現代建造物を実際に保存しようとすると、従来の文化財の考え方では費用と時間がかかりすぎる、どう保存するのが適切かの物差しがはっきりしない、そもそも所有者が文化財とすることを好まないなど、往々にして様々な障害につきあたる。また、近現代建造物が保存に至る経緯は時々の社会情勢や善意の出資者の登場など偶然によるところが大きく、保存の考え方や方法もまちまちであり、社会が共有する文化財としてのコンセンサスが得られているとはいいがたい。

本研究の目的は、現代社会において近現代建造物が文化財として積極的に捉えられる共通認識として、文化財の保存理念を近現代建造物の関係者（ステークホルダー）間で共有しうるかたちに敷延していくための諸条件を明らかにすることである。

成　果　令和2年度は、政府等による新型コロナウイルスの感染拡大防止に関する要請を受け、原則として当研究に係る現地調査や関係者へのインタビューなど全ての活動を自粛した。これまでの研究成果を論文にとりまとめ、日本建築学会計画系論文集に投稿した。

論　文・金井健：「近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に関する基礎的研究（その1）：文化財保護法下における「文化財」概念の創出と変容」『日本建築学会計画系論文集』第86巻784号（掲載予定）21.6

研究組織　○金井健（文化遺産国際協力センター）

歴史的煉瓦造建造物の保存に資する、煉瓦の電気的特性が塩類風化に及ぼす影響の解明

目　　的　塩類風化は多孔質材料中の塩析出によって材料が物理的に破壊される現象であり、歴史的煉瓦造建造物の劣化要因の一つである。材料中での結晶生成やそれに伴う劣化を再現する数値解析モデルは、異なる環境条件下におかれた煉瓦造建築物の劣化メカニズムやその保存対策を考える上で有効なツールであるといえるが、そもそも材料内での塩輸送及び塩の析出性状を定量的に把握することの難しさからその妥当性の検証及び実建造物に対する適用は限定的である。特に煉瓦のように粘土鉱物を含む材料においては、材料表面の電気的特性がイオン輸送に影響する可能性が高いが、この影響は明らかにされていない。そこで本研究は煉瓦における塩溶液の輸送現象と塩析出性状を定量的に明らかにし、劣化予測モデルの実用化に向けて必要な物性の整理を行う。

成　　果　負の表面電荷を有する国産の焼成煉瓦を対象に、溶液に含まれる塩及び塩の結晶が材料中の物質の移動特性に及ぼす影響について実験室実験による検討を行い以下の成果を得た。

１．塩を含むことによる溶液の移動特性の変化

塩溶液の移動特性を把握するため、塩化ナトリウムと硫酸ナトリウムの２種類の塩溶液を用いて毛管吸水実験を行い、煉瓦における塩溶液の移動速度はバルク溶液の特性（密度、粘性、表面張力）から想定されたものより著しく遅くなることが確認した。これは表面電荷の作用による表面張力の大幅な低下の影響を示唆する結果である。

２．放射光Ｘ線CTによる煉瓦における塩性出とそれに伴う空隙構造変化の定量化

材料中での結晶生成は直接劣化に影響するとともに空隙構造を変化させることで水蒸気及び溶液の移動特性を著しく変化させる。煉瓦における塩析出性状及び塩析出に伴う水分の移動性状の変化を解明することを目的に放射光Ｘ線 CT(CT; BL20B2, SPring-8) を用いて塩溶液を含ませた煉瓦の乾燥過程の三次元画像を撮影した。画像解析により、空隙、実質部、塩の結晶の３値化を行い、材料内外の析出塩分布の経時変化を定量的に示した。また塩析出前後の画像に対して 3DMA 法による空隙構造解析を行い、屈曲度、比表面積、細孔径分布を算出した。解析結果をもとに結晶生成量と移動物性の関係を整理し、塩類風化予測モデルの実用化に寄与する成果を得た。

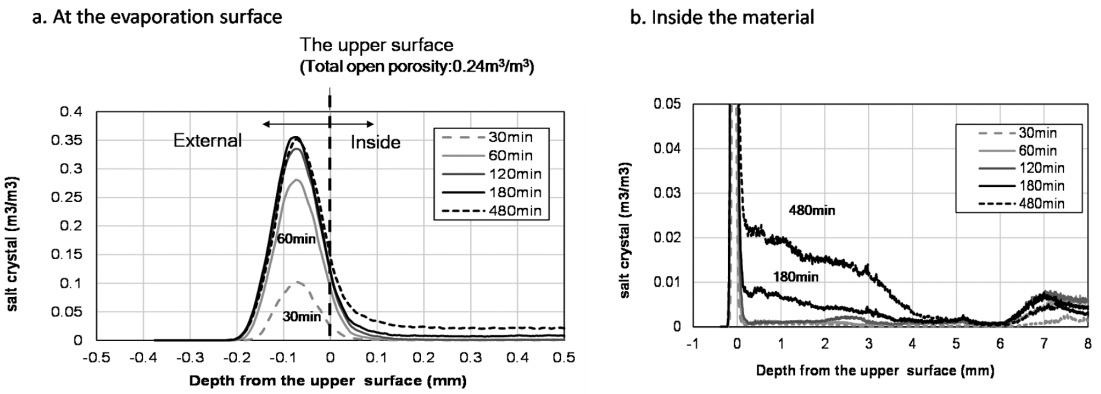


図　画像解析により同定した煉瓦における塩の析出量の経時変化

論　文・E. Mizutani et al., Preliminary investigation of change of pore structure due to salt precipitation during evaporation in brick with X-ray computed tomography, 2020, Monument Future: Decay and Conservation of Stone, pp.455-460, 20. 9

研究組織　○水谷悦子（併任、文化財防災センター）

2．受託調査研究・外部機関との共同研究及び外部資金による研究

（1）受託調査研究

研　究　課　題	研究担当者	依　頼　元	頁
国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務	早川泰弘	文化庁	113
特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務	早川泰弘	文化庁	114
被災資料有害物質発生状況調査業務	早川泰弘	陸前高田市	115
文化遺産国際協力コンソーシアム事業	友田正彦	文化庁	116
ブータン王国の歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業	金井　健	文化庁	117
「日本美術の魅力 (在外古美術品保存修復協力事業による修復作品里帰り展)」	江村知子	独立行政法人 日本芸術文化振興会	118

（2）共同研究

研　究　課　題	研究担当者	相　手　先	頁
文化財修理に使用する膠の製造に関する技術開発、研究	早川典子	一般社団法人 国宝修理装潢師連盟	119
航空資料保存の研究	早川泰弘	一般財団法人日本航空協会	120
ゲッティ・リサーチ・ポータルへのデジタル資料の提供・公開	江村知子	The J. Paul Getty Trust	121

（3）助成金による研究

研　究　課　題	研究代表者	助　成　元	頁
近世の奄美・沖縄諸島における風葬の普及に関する文献史学的研究	牛窪彩絢	公益財団法人髙梨学術奨励基金	122 *
北海道における災害リスクおよび減災に関するネットワーク構築と研修	林美木子	文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）	123
「鉄構造物の保存と修復」の英語版翻訳	中山俊介	公益財団法人東芝国際交流財団	124
山西省仏教彩塑像の制作材料と技法に関する調査 ―日中共同による保存修復に向けての基礎研究―	岡田　健	公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団	**
外国人研究者招致（レミー・ドレフュス＝デュセーニュ氏）	早川典子	公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団	**
無形文化遺産における木材の伝統的な利用技術および民俗知に関する調査研究	今石みぎわ	公益財団法　三菱財団	125
バガン遺跡群（ミャンマー）寺院祠堂壁画の保存修復	前川佳文	公益財団法人住友財団	126 *
琉球国における中国式葬墓制の受容―殯を中心として―	牛窪彩絢	学習院大学東洋文化研究所	127

* 新型コロナウイルス感染症拡大により実施不可のため次年度に繰越
** 新型コロナウイルス感染症拡大により実施不可のため辞退

3. その他の調査研究

研　究　課　題	研究担当者	頁
文化財防災センター事業	早川泰弘	128

4. 成果公開

事業の一部として実施した研究集会・講座等	頁
第27回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「コロナ禍における文化遺産国際協力のあり方」	130
第28回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「文化遺産とSDGs Ⅲ―地域社会における文化遺産の役割を考える―」	130

インターネット公開	頁
コミュニティサイト、データベース	131

受託調査研究の一環として刊行された刊行物	頁
『第27回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「コロナ禍における文化遺産国際協力のあり方」報告書』	132
『第28回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産とSDGs Ⅲ―地域社会における文化遺産の役割を考える―」報告書』	132
『文化遺産の国際協力』	132
『文化遺産国際協力コンソーシアム 国際協力調査　海域交流ネットワークと文化遺産 令和2年度 調査報告書』	132
『VERNACULAR HOUSES in Bhutan, Western Central Area, Thimphu, Punakha, Paro, Haa』	132

国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務

目　　的　国宝高松塚古墳壁画の恒久的な保存方針に基づき、壁画の修理、修理環境の保全及び壁画の保存・活用に係る調査・研究業務を実施した。

成　　果　1．壁画の制作技法に関する事項

・可搬式のハイパースペクトルカメラを用いて壁画を安全に分析を行うための基礎実験等を実施した。また、テラヘルツ波イメージング装置を用いて、天井石２を対象として壁画の保存・活用に資する調査を予定していたが、コロナ禍の影響のため中止した。

・高松塚古墳壁画の保存活用に資するため、模擬壁画を作成し、壁画構成部材の耐久性の評価手法を検討した。

・壁画の維持管理の方針や内容について科学的・学術的な助言を文化庁へ行う。また、維持管理作業に関する事項を検討するため、月に１回程度、修理施設等で文化庁及び関係者との協議を行う。

　別置保管されている天井２と３の隙間に在った星宿金箔を石材と一体化させて保管させる方法について、検討や材料強度試験を行なった。修復処置を施した代表的な箇所４点につき、目視状態観察と測色を含めた経過観察を継続的に行った。（2020（令和２）年８月７日、12月11日、2021（令和３）年３月12日）

・壁画の修理作業に関する各種データの整理とアーカイブ化を行い、報告書の作成準備を行う。修復の記録及び修理材料の記録などに関するデジタルデータを整理し、検索可能な状態とした。

2．壁画の保存環境の維持管理に関する事項

・高松塚古墳壁画を良好な環境で保存活用するため、修理施設の温湿度、並びに空気質（8月17日、11月5日）、浮遊粒子、浮遊微生物、付着微生物、並びに落下微生物（8月25日、2021（令和３）年２月18日）、生息生物のモニタリング調査（6月17日、8月25日、11月13日、2021（令和３）年２月３日）を実施し、適切な保存環境の維持管理を行った。

・高松塚古墳壁画が当分の間、適切な場所で保存管理・公開が行われることを見据え、これまでの環境調査データをもとにして古墳壁画の保存環境管理指針の策定に関する研究を行った。

3．その他

・今年度行われた国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設（国営飛鳥歴史公園内）の一般公開に際して、延べ８名を派遣し、立会い説明等を行った。また、一般公開にあたりコロナ対応について助言を行った。

・古墳壁画保存関連の事業全般について情報共有を行い、効率的で正確な作業を行うために、９月４日、2021（令和３）年２月16日の２回にわたり、奈良文化財研究所と古墳壁画保存対策プロジェクトチーム会議を開催した。

・９月23日と2021（令和３）年３月23日に開催された文化庁の「古墳壁画の保存活用に関する検討会」（第27、28回）に、奈良文化財研究所とともに事務局として出席した。

研究組織　○早川泰弘、佐藤嘉則、朽津信明、犬塚将英、秋山純子、早川典子、倉島玲央、小峰幸夫、藤井佑果（以上、保存科学研究センター）、水谷悦子（併任、文化財防災センター）、川野邊渉（特任研究員）、宇髙健太郎、大場詩野子（以上、客員研究員）

備　　考　本事業は、文化庁より依頼された。

特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務

目　　的　キトラ古墳壁画の彩色及び漆喰の状態調査並びに展示環境の制御とモニタリング方法の調査研究を行う。

成　　果　特別史跡キトラ古墳の取り外した壁画の保存修復措置に係る資料整備、古墳・壁画の保存・活用に係る調査・研究の業務を実施した。

1．キトラ古墳壁画の制作技法に関する事項

・壁画を安全に測定できる可搬式の蛍光Ｘ線分析装置を用いて、東壁青龍を対象として壁画の保存・活用に資する調査を実施した。

・キトラ古墳壁画の保存活用に資するため、壁画構成部材の物性評価 (熱線膨張率・水蒸気吸脱着等温線) を行った。

・漆喰表面におけるカルサイトの再結晶を再現するための実験を行った。

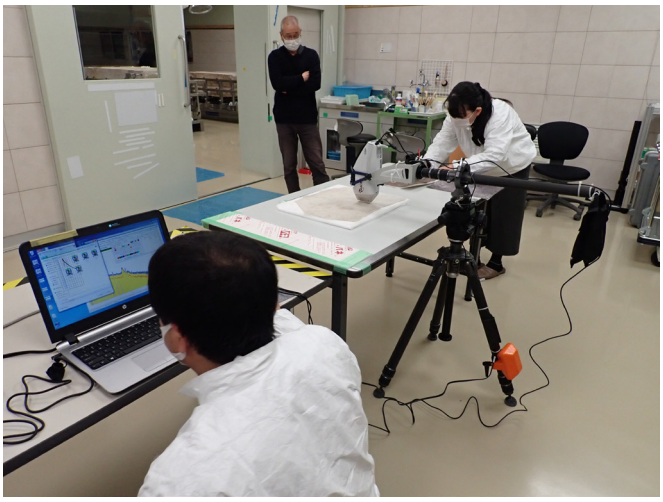
・壁画の修理作業に関する各種データの整理とアーカイブ化を行い、報告書の作成準備を行う。2004（平成16）年の発掘調査直後からの修復の報告書原稿を作成し、印刷作業の準備も行った。併せて保管している関連資料全てをリスト化し、検索可能な状態とした。

2．キトラ古墳壁画の保存環境の維持管理に関する事項

・再構成されなかった漆喰片を含むキトラ古墳壁画（５面）を新環境で保管するに耐えうる最適な保存処置方法の検討を行い、保存処置について、キトラ古墳壁画保存管理施設（キトラ古墳壁画体験館四神の館内）等で月１回程度、関係者の協議を行い、必要な指示を行う。

　年間４回行われるメンテナンス作業と、毎週の点検作業において報告の多かった埃対策として、今後の保管に蓋を作成する可能性を検討し、複数の材料で試作を行った。

・キトラ古墳壁画の保存管理に最適な設備環境に関し、保存科学・生物学等の観点から、必要な検討を行い、壁画の適切な保存・活用のための知見を提供した。



泥の下に隠れていると推定される十二支像の存在を確認する調査

研究組織　○早川泰弘、佐藤嘉則、朽津信明、犬塚将英、秋山純子、早川典子、倉島玲央、小峰幸夫、藤井佑果（以上、保存科学研究センター）、水谷悦子（併任、文化財防災センター）、川野邊渉（特任研究員）、宇髙健太郎、大場詩野子（以上、客員研究員）

備　　考　本事業は、文化庁より依頼された。

被災資料有害物質発生状況調査業務

目　　的　岩手県陸前高田市博物館で津波被災した文化財の安定化処理及び処理後の資料から発生する異臭と一時保存中に発生するようになった揮発性有機化合物について自然科学的方法で調査し、今後の保管及び安定化処理等の進め方について改善方法を提案することと、廃校利用の保存環境における生物被害対策について検討することを業務の目的とした

成　　果

1．保管環境の有害物質発生状況に関する事項

安定化処理後の被災資料から発生する異臭として当初処理に用いたナフタレンを対象としていたが、現地調査を行う中で、ナフタレンのほかに有機酸が望ましい値を超える濃度であることを検知した。これは被災資料からの発生ではなく、同封されていた脱酸素剤からの発生であることがその後の調査で明らかとなった。

ナフタレンを含むこれらの有害物質の対処として、ナフタレン、有機酸の両者に対して高い吸着能を有する活性炭を利用して除毒するシステムを考案した。除毒システムでは、密閉チャンバー（1m × 1m × 2m ＝ 2m^3）を用いて、チャンバー内部で試料を開封し、資料からの脱ガス化を行いながら空気を循環させて活性炭を充填した処理部分で有害物質を吸着させる仕組みである。これを陸前高田市博物館の現地に運搬し、実際の試験運用を行った。運用前後でエアーサンプリングを行い、密閉チャンバー内の有機酸量の減退について調査した結果、運転時間の経過とともに有機酸が活性炭に吸着され、チャンバー内の濃度が低下することを確認した。

2．陸前高田市博物館（旧生出小学校）内の生物生息状況調査善

陸前高田市博物館内のほぼすべての収蔵空間を対象として、浮遊菌、付着菌、落下菌の計測を実施し、現況について把握した。また過去の調査結果から浮遊菌量が比較的高かった収蔵空間について、外部業者に除塵清掃作業を委託し、環境改善を行った。清掃の効果を評価するため、1月に当該収蔵庫の調査を計画していたが、新型コロナウイルスによる影響を受けて調査を実施することができなかった。

論　文・『被災資料有害物質発生状況調査報告書』　21.3

研究組織　○早川泰弘、佐藤嘉則、岡部迪子（以上、保存科学研究センター）、林美木子（文化財防災センター）

備　　考　本事業は、陸前高田市立博物館より委託された。

文化遺産国際協力コンソーシアム事業

目　　的　文化遺産国際協力コンソーシアム（以下、コンソーシアム）が掲げる、「海外の文化遺産保護に関する国内の連携・協力を推進する」という目標のもと、事務局として各種分科会活動や情報データベースの構築、シンポジウム・研究会の開催等を行うことによって日本の文化遺産国際協力を支援・促進する役割を担う。

成　　果　（1）コンソーシアムの会議の開催

ア）運営委員会を2回開催し、活動方針を協議したほか、総会の開催に代えて、本年度の事業報告を会員に送付した。

イ）企画分科会、東南アジア・南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会、欧州分科会、アフリカ分科会、中南米分科会を計16回開催した。また、国際協力調査ワーキンググループを5回開催した。

＊上記の会議等については全てオンライン（運営委員会はメール審議）にて行った。

（2）情報収集と情報発信

ア）文化遺産国際協力事業の基礎情報データベースに新たな情報を追補した。

イ）文化庁と協力し、文化遺産の不法輸出入等防止のための情報収集を行った。

ウ）コンソーシアム紹介パンフレットと文化遺産国際協力紹介冊子の作成及び配布等を通じて、コンソーシアム活動のPRを行った。

エ）研究会「コロナ禍における文化遺産国際協力のあり方」、「文化遺産とSDGs Ⅲ―地域社会における文化遺産の役割を考える―」をオンラインにて開催するとともに動画を配信した。

オ）シンポジウム代替企画として我が国の文化遺産国際協力の歩みを紹介する動画「人類の宝を未来につなぐ～日本の文化遺産国際協力～」を作成して公開した。

カ）会員向けのメールニュース（コンソーシアムイベント告知、国内外文化遺産関連イベントの案内等）を配信したほか、Twitter等のSNSを通じて関連情報の周知を図った。

キ）会員向けウェブサイトに分科会議事録・配布資料などを掲載し会員との情報共有を図った。

（3）文化遺産国際協力の推進に資する調査

「海域交流ネットワークと文化遺産」をテーマに、世界各地域の現状を把握するため、アンケート調査を行い、回収結果をもとに各地域の状況を報告、意見交換会を開催した。

刊行物・小冊子『文化遺産の国際協力』　21.3

・『第27回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「コロナ禍における文化遺産国際協力のあり方」報告書』　21.3

・『第28回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産とSDGs Ⅲ―地域社会における文化遺産の役割を考える―」報告書』　21.3

・『文化遺産国際協力コンソーシアム　国際協力調査　海域交流ネットワークと文化遺産令和2年度　調査報告書』　21.3

研究組織　○友田正彦、西和彦、松保小夜子、牧野真理子、五嶋千雪、廣野都未、松本明子（以上、文化遺産国際協力センター）

備　　考　本事業は、文化庁より委託された。

文化遺産国際協力拠点交流事業「ブータン王国の歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業」

目　　的　これまでに蓄積したブータンとの協力事業の成果と文化遺産保護における我が国の経験をもとに、ブータン政府が成立を目指している文化遺産基本法（新法）によって新たに保護の対象となる民家を含む歴史的建造物全般について、文化遺産としての適切な保存と自立的かつ持続的な活用を推進することができるよう、必要な技術的支援及び人材支援を実施する。

令和2年度当初は、前年度事業から引き続き、保護すべき伝統的民家の選別方法を検討する指定調査支援を中部地域及び東部地域に広げて実施するとともに、現地調査で見出された保存候補民家等に対する修理技術支援及び活用検討支援を行うことを計画していた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の収束が見通せないことから10月に計画を変更し、以下に記す各事業を実施した。

成　　果　1．民家建築参考書の作成：文化遺産保護行政担当者等の専門家間に伝統的民家のみかた・調べ方の共通理解を醸成するための基礎資料を提供することを目的に、これまでの協力事業等による合同調査を通じて全体像が把握されているブータン西部の伝統的民家について、典型的な特徴をもつ伝統的民家41件を題材として、ブータンの伝統的集落や民家建築の特徴をまとめた図書を作成した。

2．社会教育教材の作成：未だ民家建築が文化遺産として広く認知されていないブータン社会において、民家建築の文化遺産としての価値や社会的資産としての意義を一般に啓発するための図書を作成した。ブータンの教育システムに適したものとするため、中学生程度の教材としての使用を想定した絵本の体裁とし、本年度は絵本の基軸となる筋書の調整と、プロット及び無着彩の原画制作までを行った。

3．オンライン研修の実施：ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所（ACCU奈良）がブータン内務文化省文化局職員を対象に実施した国別テーマ研修「リビングヘリテージの管理活用」と連携し、リビングヘリテージとしての伝統民家の保存と活用をテーマとしたオンライン研修を行った（2021（令和3）年1月11日～22日）。

なお、研修システムはACCU奈良が11月に行った寺院所有の文化遺産の管理運営をテーマとしたオンライン研修とプラットフォームを共有し、eラーニングコンテンツによる個別学習とリアルタイムセッションによる総合討議による構成とした。

受講生：11名　内務文化省文化局遺産保存課職員　講師：5名　津村泰範（長岡造形大学）、岡本公秀（文化庁）、福嶋啓人（奈良文化財研究所）、松本継太（白川村教育委員会）、喜多順三（建築家）

発　表・KANAI Ken: "Brief Guidance of Next Training Course and Architectural Heritage Protection System in Japan", Thematic Training Course for Mid-Career Professionals on Cultural Heritage Protection in the Asia-Pacific Region 2020: Management in Use of Heritage, ACCU Nara 20. 11

刊行物・"VERNACULAR HOUSES in Bhutan, Western Central Area, Thimphu, Punakha, Paro, Haa" Department of Culture, Ministry of Home and Cultural Affairs, Royal Government of Bhutan/Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 21.3

・『令和2年度文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業―ブータン王国の歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業―報告書』東京文化財研究所　21.3

研究組織　○金井健、友田正彦、西和彦、淺田なつみ、ヴァル エリフ ベルナ（以上、文化遺産国際協力センター）、福嶋啓人（奈良文化財研究所）、江面嗣人（岡山理科大学）、津村泰範（長岡造形大学）、海野聡（東京大学）、マルティネス アレハンドロ（京都工芸繊維大学）、菅澤茂、金出ミチル、向井純子（以上、文化財建造物保存修理技術者）

備　　考　本事業は文化庁より委託された。

「日本美術の魅力（在外古美術品保存修復協力事業による修復作品里帰り展）」

目　　的　本事業は文化庁及び日本芸術文化振興会が主導する日本博の一事業として行うものである。東京文化財研究所では30年間にわたり「在外日本古美術品保存修復協力事業」を行い、欧米をはじめとする15カ国の約60館の美術館・博物館で所蔵する、日本の絵画・工芸品約385点を修復してきた。本事業ではこれまでに修復を行った作品の中から、日本博のテーマである「日本人と自然」という観点で作品を精選し、令和元年度から準備を進め、令和2年度に東京国立博物館平成館企画展示室を会場に展覧会を行う予定をしていたが、新型コロナウィルス感染症拡大の影響により、人や物の移動が難しい状況に鑑み、展覧会は延期とし、企画内容や在外日本古美術品保存修復協力事業を紹介するウェブサイトの制作に変更した。日本絵画の修復の概要や、実際の修復で用いられている伝統的な材料を紹介し、日本の伝統文化の理解向上につなげることを目的とした。

成　　果　上記の通り、展覧会を延期せざるを得なくなってしまったため、特設ウェブサイトの制作に計画変更した。新型コロナウィルス感染症の影響下での各美術館での対応などについて調査を行い、本来、展覧会に出陳予定であった美術館や作品、在外日本古美術品保存修復協力事業を紹介するページを東京文化財研究所のウェブサイト内で公開した。さらに実際の修復で用いられ、選定保存技術にも指定されている、宇陀紙と補修紙の制作についての動画コンテンツを制作し、このウェブサイト内で公開した。さらに在外日本古美術品保存修復協力事業で修復を行った作品の総合的なリストを制作し、作品名や所蔵館名で検索できるデータベースを構築し、修復報告書のPDFデータにリンクを備えた形に整えた。
https://www.tobunken.go.jp/exhibition/202103/

研究組織　○江村知子、安永拓世、米沢玲（以上、文化財情報資料部）、佐野真規（無形文化遺産部）、山梨絵美子（副所長）

備　　考　本事業は日本芸術文化振興会より委託された。

文化財修理に使用する膠の製造に関する技術開発、研究

目　　的　文化財修理に使用する膠について調査研究を実施し、その古典的製造方法について技術開発を行う。文化財修理においてより好適な古典的膠の利用と、その製造及び利用の継続性安定化を目指し、国宝修理装潢師連盟への製造技術供与を指導助言等する。

成　　果　鹿角及び牛剃毛後表皮除去生皮由来の古典的膠の製造実験を、国宝修理装潢師連盟の修復技術者らと共に行った。

これらの諸実験は『煤及び膠に関する研究』(宇髙健太郎 / 文化財保存修復学会第37回大会研究発表, 2015)の試料R-S1～4及び『膠の調製等に関する研究（膠製造における諸条件と製品の性状の関連(9)）』（宇髙健太郎、早川典子、藤井佑果、大場詩野子、岡部迪子、柏谷明美/ 文化財保存修復学会第41回大会研究発表, 2019）の試料Aα04-SLLの製造方法等に準拠したものである。

装潢においては、彩色部の発色や質感等鑑賞性を維持するうえで淡色不光沢な膠が有用である状況が多い。また施工性の観点から、粘度や浸透性等についても屡々重要視される。本研究で扱った各方法により、膠のそうした特性を各々調整して製造することが可能である。

中近世の膠製造方法に関して、『墨経』(伝 晁貫之、宋代)「膠」項及び『墨譜』(李孝美（伯揚）、宋代)「鹿角膠一」項には、鹿角を原料として洗浄、裁断等の後、水漬を経て熱水抽出を行う方法が記されている。

本研究においては鹿落角(春期に自然に抜け落ちた角)表面の褐色付着物を洗浄除去し、数cm程度に破砕した。次いで微細片を排除した後、質量比約1：1で淡色片と濃色片(血合を多く含む)に選別のうえ濃色片を排除した。これを10℃程度で一定期間流水に晒した後、乾燥分質量と同量の抽出溶媒を加えて90℃、18ｈで抽出を行った。なお既報において、鹿落角由来膠は、粘度とゼリー強度は三千本膠(清恵商店)と同程度ながら、接着強さは各種市販製品と比して高い値を示した。当該試料は非常に淡色清澄かつ柔軟であり、また一般的な膠とは異なり一部宗教教義上の禁忌である殺生を回避して製造可能であることから、仏画や寺院建造物彩色等への活用も特に期待される。

また、『墨譜』(李孝美、宋代)「膠二」項には牛原皮剃毛処理後に表皮層除去を行う方法を示唆した記録がある。本研究においては、こうした記録を勘案のうえ諸実験による検証を経て開発した方法を実施した。

まず、牛の未塩漬生皮を水で洗浄し、表皮の熱処理を含む下処理を経て、主に生の真皮層のみからなる組織を得た。該組織を数cm角程度に裁断した後、再度洗浄したものを原料として80℃、48hで膠抽出を行った。抽出後、濾過を行い、凝固及び裁断の後、10℃程度で送風乾燥を行った。なお当該方法により、一定の油脂分を含みかつ明色の古典的に皮を安定的に得ることが可能である。膠の光沢等質感は含有油脂分量等と関連しており、分散油脂分が微細な起伏等界面を形成し、それが生じた乱反射が巨視的な質感にも影響している。こうした膠の質感は、装潢用途においては特に書画彩色層の濡れ色化等発色への影響を抑制等管理するうえでも重要な要素である。

諸工程を国宝修理装潢師連盟への製造技術供与のために記録した。

研究組織　○早川典子（保存科学研究センター）、宇髙健太郎（客員研究員）

備　　考　本研究は、一般社団法人国宝修理装潢師連盟と共同で実施した。

航空資料保存の研究

目　　的　航空に関する資料は多様な材料が使用され、活用に重点が置かれてきたこともあり保存状態が悪いものが多く、このままでは貴重な資料の散逸を免れない状況にある。したがって、原資料を損わずに有効に活用するために、令和元年度に引き続き資料の種類や劣化の状態を調査し保存方法・修復方法の開発を行った。

成　　果　1．膨大な個人資料の記録・保存

平成24年度から続いている、以下の資料に関する整理、記録、デジタル化、保存処置を実施した。

・旧文部省奉職時にグライダーの開発に携わった山崎好雄氏が遺した、日本で開発・設計された各種グライダーの図面や文献等各種一式。日本におけるグライダーの歴史を知る上で非常に貴重な資料群である。令和2 年度は継続して整理、選別、保存処置を行った。整理された資料の中からは、昨年度とは別の新たな「DFSオリンピア」型グライダーなどの図面の青焼きや原紙が確認されたため、図面に関しては、可能な限り平滑化し現状の記録撮影を実施した後、平滑な状態で保管できるように保存環境を整えた。写真に関しては、デジタル化を行った上で中性紙の包材に入れて保管することにした。

・日本の民間航空史の研究をライフワークとした作家・平木國夫氏が遺した資料一式。遺された資料は主として執筆する際に調査、収集した戦前の民間航空の資料からなり、写真や聞き取り調査の記録等多岐にわたる貴重な資料群である。今年度は継続して整理、選別を行った。

・これらのうち山崎好雄氏が遺した資料の中に、戦時中、今村化学研究所（現セメダイン株式会社）が販売していた「セメダインB号」、「同C号」が新たに確認された。これらは、戦略物資であった金属材料を節約するために鉛製チューブではなくガラス瓶に入れられているもので、現在他に現存例は知られておらず、特にB号は販売時期が短かったとされ希少である。また、B号についてはその組成についての資料は同社にも残っておらず、戦時下においてどのような製品開発が行われていたかを解明する手がかりとなる。さらに、外箱も程度が良い状態で残っており、蓋に書かれた〇に「公」の字は、価格等統制令に基づく公定価格で販売される商品だったことを示し、それ自体も軍国主義の戦時体制下において模型製作が国家の管理しようとするものだったことを示す歴史資料である。いずれもクリーニングの後、記録撮影を行い、中性紙の封筒に移し保存環境を整えた。

発見された「セメダインB号」、「同C号」（中身は固化している）

研究組織　〇早川泰弘、中村舞、鳥海秀実（以上、保存科学研究センター）、中山俊介（特任研究員）、苅田重賀（客員研究員）

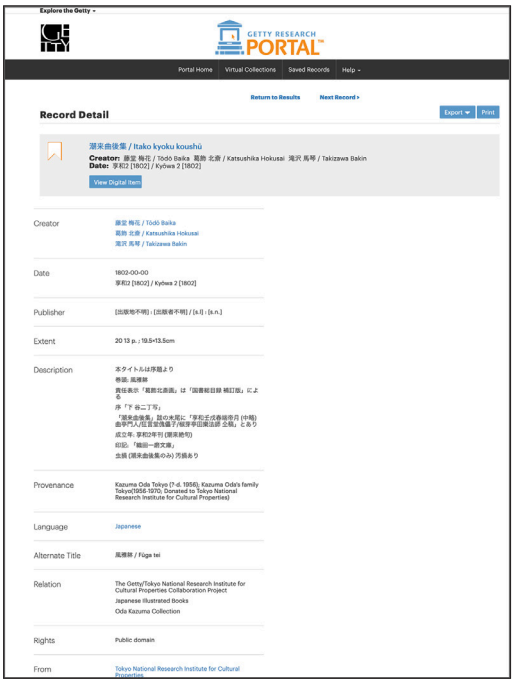
備　　考　本研究は、一般財団法人日本航空協会と共同で実施した。

ゲッティ・リサーチ・ポータルへのデジタル資料の提供・公開

目　　的　本事業はゲッティ研究所との共同研究によって、東京文化財研究所が所蔵する明治・大正・昭和前期の展覧会目録や江戸期の版本などのデジタル化とウェブ公開を行うものである。近代の美術展覧会資料には内国勧業博覧会、万国博覧会、主要美術団体によるものが含まれ、設立から90周年を迎えた当研究所ならではの貴重なコレクションである。また本事業はその発展性・効率性が認められたことにより、さらにデジタル化の対象として、江戸時代の版本についても取り上げることとした。いずれも稀観本であり、これらのデジタル化資料がオープン・アクセスで世界中のインターネット・ユーザーに提供できることの意義は大きい。ゲッティ・リサーチ・ポータルを通じて日本美術に関する情報を国内外に発信することで、日本美術への理解向上に貢献することを目的とする。

成　　果　2016（平成28）年2月に締結したゲッティ研究所と日本美術の共同研究に関する協定書に基づき、共同研究と研究協議を実施した。令和2年度は東京文化財研究所が所蔵する江戸時代版本の貴重書のデジタル化とメタデータ付与を共同事業として行い、版画家・織田一磨（1882〜1956）旧蔵の葛飾北斎絵入り版本135種類318冊についてゲッティ・リサーチ・ポータルに情報提供した。作業を進める際にゲッティ研究所副所長のKathleen Salomon氏、プロジェクト責任者のAnne Rana氏らとメタデータの形式について協議し、ゲッティ・リサーチ・ポータルに掲載可能なデータ形式についての情報共有を行った。また来年度に予定しているARLIS/NA(北米美術図書館協会)の年次大会にて、ゲッティ研究所と共同で研究発表を行うための準備を進め、今後の共同事業についての研究協議を行った。

葛飾北斎画『潮来絶句』の PDF 画面



ゲッティ・リサーチ・ポータルでの表示画面

研究組織　○江村知子、橘川英規、阿部朋絵、田村彩子（以上、文化財情報資料部）、山梨絵美子（副所長）

備　　考　本研究は、ゲッティ研究所と共同で実施した。

近世の奄美・沖縄諸島における風葬の普及に関する文献史学的研究

目　　的　本調査研究の目的は2つある。第一の目的は、近世の奄美・沖縄諸島において風葬がなぜ普及するのかを総合的に検討することで、特に不明点の多い17世紀前後の同地域における葬墓制の歴史の一端を明らかにすることである。第二の目的は、戦後まで行われていた風葬が急速に火葬へと変わる中、消滅しつつある奄美・沖縄諸島の風葬文化を後世に残せるよう、本研究で得た情報を積極的に記録保存・発信していくことである。

成　　果　コロナ禍の影響により、奄美・沖縄方面へ往訪することができず、フィールドワークによってデータ収集することを見越していた、以下計画の②、④については実行することが叶わなかった。また、本研究の第二の目的である、「風葬の積極的記録保存」についても、フィールドワークによる現況の情報収集が出来なかったため、果たすことが叶わなかった。よって、研究期間の1年の延長、及びフィールドワークに充てる予定であった予算の繰り越しを行い、来年度より本格的な調査を実施していく。

【今年度実施予定だった計画／来年度計画】

奄美・沖縄諸島では、17世紀の過渡期を経て風葬が定着するとされることから、同地域において風葬が「なぜ」、「どのように」定着したかを明らかにすることを目指す。

葬法が変わる背景には、幾つかの仮説を立てることができる。例えば、①何か政治的な力が働いた、②社会的に大きな変革があった、③文化や技術が外部から持ち込まれた、④大きく死生観の変わる出来事が起きた、等である。これら仮説をそれぞれ、「①当時の琉球王府との関わり」、「②社会構造」、「③外部との交流史」、「④死生観」、を調べることで検証し、風葬が定着する社会基盤を考察する。

文献資料・先行研究によって情報収集を行うとともに、特に②や④については、近現代まで風葬・洗骨を行っていた（いる）とされる、与論島、粟国島、与那国島にてフィールドワークを行うことでデータ収集をし、葬送儀礼の意味の解析、及び風葬が普及し得る社会基盤の考察を行う。

研究組織　○牛窪彩絢（文化遺産国際協力センター）

備　　考　本研究は、公益財団法人髙梨学術奨励基金の助成を得た。

北海道における災害リスクおよび減災に関するネットワーク構築と研修

目　　的　本事業は、ICCROM（文化財保存修復研究国際センター）の「First Aid and Resilience for Cultural Heritage in Times of Crisis」「Capacity building project on Culture Cannot Wait: Heritage for Peace and Resilience」のプログラムの枠組みで実施された。北海道において地域内連携体制の確立促進を目的とし、「文化財レスキューと心理社会的支援」というテーマで研修会を開催する。また、グループディスカッションを通じ意見交換をすることで様々な分野を含めた地域ネットワークの構築や防災対策の強化を図る。

成　　果　本研修会は、国立文化財機構文化財防災センターと東京文化財研究所が主催、国立アイヌ民族博物館が共催、北海道博物館協会が協力する形で実施した。

日　時：2020（令和 2）年10月19日（月）　13時00分～17時00分
会　場：国立アイヌ民族博物館　交流室　（北海道白老郡白老町若草町 2 丁目 3-1）
プログラム：
　挨拶　佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館長）
　開催趣旨　早川泰弘（国立文化財機構文化財防災センター 副センター長）
　「歴史資料保存と災害支援～歴史資料保存活動がなぜ、災害に強い地域づくりに貢献できるか」
　　J. F. モリス（東北大学災害科学国際研究所客員教授 人間・社会対応研究部門災害文化研究分野）
　「歴史資料レスキュー活動と心理社会的支援」
　　上山眞知子（東北大学災害科学国際研究所客員教授 人間・社会対応研究部門歴史資料保存研究分野）
　参加型セッションと話し合い
　まとめ

道内の文化財行政担当者から博物館・美術館関係者等様々な分野の方々、15 名が参加した。

参加者からは「心理社会的支援」は新たな視点であり、文化財や歴史資料の意義を個人から地域へ広げることができる、また、東日本大震災での事例もあり大変分かりやすく勉強になったとの感想が寄せられた。心理社会的支援という考え方は、少子高齢化が招く地域社会や未指定の文化財を未来に残す意義を見出すことにもつながり、文化財防災という枠組みの中でも非常に重要な切り口となることを感じる研修会であった

発　表・林美木子ほか：「ICCROMの非常時における文化財の救出と応急処置研修とその展開」　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10

研究組織　○林美木子、佐野真規（以上、文化財防災センター）、早川泰弘、秋山純子（以上、保存科学研究センター）、二神葉子（文化財情報資料部）

備　　考　本研究は、文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）の助成を得た。

「鉄構造物の保存と修復」の英語版翻訳

目　　的　東京文化財研究所保存科学研究センター近代文化遺産研究室では、2017（平成29）年から毎年文化財建造物の構造体の構成種類ごとに保存と修復に関する調査研究を進め、その成果を報告書の形で発行してきた。今年度は、東芝国際交流財団からの助成を受けて、2018（平成30）年に発行した「鉄構造物の保存と修復」の報告書の英文版を発行すべく令和2年度中に翻訳作業を実施し、広く海外に所在する研究機関や保護団体、博物館、図書館、大学及び研究者に向けて配布する。

成　　果　東京文化財研究所保存科学研究センター近代文化遺産研究室では、2017（平成29）年 から「煉瓦建造物の保存と修復」「鉄構造物の保存と修復」「コンクリート造構造物の保存と修復」と毎年文化財建造物の構造体の構成種類ごとに保存と修復に関する調査研究を進め、その成果を報告書の形で発行してきた。それらの和文の報告書を英文に翻訳し、広く海外に所在する研究機関や保護団体、博物館、図書館、大学及び研究者に向けて配布してきた。今回は、東芝国際交流財団からの助成を受けて、2018（平成30）年に発行した「鉄構造物の保存と修復」の報告書の英文版を発行すべく令和2年度中に翻訳作業を実施した。英文翻訳に関しては、これまでも従事してもらっている建築関係に詳しい翻訳家に依頼し、全文を翻訳している。翻訳終了後は著者及び所内にて固有名詞や専門用語及び専門的な表現などについて念入りに校正作業を実施している。

校正終了後、2021（令和3）年2月には英文版報告書が完成し、日本における近代文化遺産の保護と修復の現状を周知、紹介するために、前述した関係団体などに広く配布し、世界各地で、日本の近代文化遺産に対する調査研究の資料として活用してもらうことを目的としている。

また、当所ウェブサイト上でも報告書を公開しており、広く一般の方々にも日本における近代文化遺産の保護と修復の現状を理解してもらえるように努めている

刊行物・『Conservation and Restoration of Steel Structures』　21.2

研究組織　○早川泰弘、中村舞、鳥海秀実（以上、保存科学研究センター）、中山俊介（特任研究員）

備　　考　本事業は、公益財団法人東芝国際交流財団の助成を得た。

無形文化遺産における木材の伝統的な利用技術および民俗知に関する調査研究

目　　的　日本の無形文化遺産（芸能や伝統的な技術）を支える樹木（木材、樹皮、その他の副産物）の採取・加工の技術に着目し、失われつつあるこれらの技術・民俗知の意義を再評価し、関係者間のネットワークを構築することで、文化の継承に繋げることを目的とする。

成　　果　本研究では目的遂行のため、1. 伝統的な樹種利用の技術について全般的に情報を収集・整理し、その全体像を明らかにする。あわせて、2. 1年に3～4件の特定の樹木もしくは竹を選定し、それぞれに関して①基礎調査（文献調査）、②現地調査、③科学分析を行う。
（令和2年度は10月より事業開始）

1．情報収集：民俗技術の基礎文献から、樹木利用に関する情報（地域、樹種、樹種の地域名称、用途、採集・加工技術の概要、キーワード等）を収集・整理し、一覧表の作成を進めている。今年度収集対象とした文献は『日本民俗文化体系　技術と民俗』上下巻（小学館）、『諸職関係民俗文化財調査調査書』（各都道府県発行）で、現在までに『技術と民俗』及び『諸職調査』の北海道～栃木まで入力完了し、2847件の事例を整理した。
　来年度以降、収集したデータをもとに、樹種利用の全国的傾向等についての分析を行う。

2．文献及び現地調査：今年度はイタヤカエデのヘギ材を用いた編組技術、フジを用いた編組技術に関して①基礎調査 ②現地調査を進める予定で調整していたが、新型コロナウイルス感染防止のため、現地調査は1件のみの遂行となった。
　具体的にはイタヤカエデのヘギ材を用いて籠を編む技術に関して、滋賀県余呉町で調査を行った。調査はイタヤカエデの採集に合わせて行い、適材の特徴や材の生育環境、伐採方法などを調査し、その様子を映像で記録した。

研究組織　○今石みぎわ、前原恵美（以上、無形文化遺産部）、犬塚将英（保存科学研究センター）、蒔田明史（秋田県立大学）、村上由美子（京都大学総合博物館）

備　　考　本研究は、公益財団法人三菱財団人文科学研究助成を得て実施した。

バガン遺跡群（ミャンマー）寺院祠堂壁画の保存修復

目　　的　ミャンマーのバガン遺跡は、11世紀から13世紀にかけて栄えたビルマで初めての統一王朝バガン朝の時代に建てられた仏教遺跡群である。遺跡内には煉瓦造の仏塔や寺院が約3,000基建ち並んでおり、その中のひとつであるロカティーパン（Loka-Hteik-Pan）寺院の内壁は12世紀前半に描かれた仏教壁画で埋め尽くされている。本研究では、このうち南壁に描かれた壁画を対象にその技法材料や損傷傾向の調査を行い、適切な保存修復方法を確立することを目的とする。

成　　果　本事業は、対象の寺院祠堂壁画の保存修復を目的とするが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症による影響から現地への渡航が困難であったことから、事業全体を令和3年度に繰越すこととした。これまでの成果をまとめた報告書は、当該事業がプロジェクトと連携して実施していることから、保存修復技術の国際的応用に関する研究（コ03）より刊行した。

研究組織　○前川佳文（文化遺産国際協力センター）、ダニエラ・マリア・マーフィー（文化協会バスティオーニ）、ステファーニア・フランチェスキーニ（壁画保存修復士）、マリア・レティッツィア・アマドーリ（ウルビーノ大学）

備　　考　本研究は、公益財団法人住友財団の助成を得て実施した。

琉球国における中国式葬墓制の受容―殯を中心として―

目　　的　本研究の目的は、殆ど学術的研究の進んでいない沖縄における「殯（もがり）」の実態、及び源流を解明することである。殯とは、人が死んで葬るまでの間、遺体を棺に納めて仮に安置しておくことであるが、中国古代の儒教的な葬送儀礼に起源があり、明清時代から近代にかけても規格化されつつ受け継がれてきたとされる。日本古代でも行われていたことは知られているが、筆者は、琉球王家の墓に納められた誌版にも、葬る前に数日～2週間「殯葬」を行ったと記されていることを知った。沖縄では戦後に火葬が定着するまで風葬が行われていたことは広く知られているが、上記誌版から、風葬の前段階に「殯葬」を行うことが明白であり、また、古琉球に関する朝鮮等の資料にも、葬礼時に山等に仮屋を建てたなど、日本本土の殯に酷似する描写が表れる。よって、琉球国で風葬とは区別され得る「殯」が行われていた可能性を十分指摘できることから、本研究では、その実態と源流を明らかにすることを目指す。

成　　果　文献資料調査及び、2020（令和2）年9月28日から10月4日にかけて沖縄本島においてフィールドワークを実施した。フィールドワークでは、14世紀に明朝から下賜されたとされる中国人職能集団「閩人三十六姓」の子孫の親睦団体である、久米崇聖会と久米国鼎会の方々と面会し、直接葬制を聞き取ることができた。その結果、概略以下のことが分かった。

1．玉陵では1620年から1723年まで6例の「殯」が確認でき、1753年以降は首里城や尚家私邸内（中城御殿）の「寝廟殿」で遺体が安置されていた。また、17～18世紀には新たな被葬者の「殯」の間に、前の被葬者の洗骨を行っていた。
2．寝廟殿ができる以前は、山中で屋のようなものを造って「殯」を行っていた。その初期は、巌を掘削した中に木板で屋を造って柩を安置する形態（例：第Ⅰ期浦添ようどれ）であり、やがて、巌で屋の形を造り為して木板で戸を造り、中に柩を安置する形態（例：玉陵）へと変化した。
3．「殯」の場はその後そのまま墓として使用された。つまり原初、「殯」の場は墓であり、それがある時、葬家の庭（寝廟殿）に移動するという変化が起きた。
4．「殯」は琉球庶民における喪屋でのトギの習俗と照応するものであり、喪屋とは墓成立以前の葬地、つまり墓の前身である。「殯」の場所が庭に移るのは、トギ・マブイワカシ儀礼（死霊をこの世から切り離し、あの世に閉じ込める儀礼）・「あの世」が全て喪屋という同空間で起きていたところ、墓が成立したことにより死者はその最終葬地たる墓に向かって旅立たなければならなくなり、「あの世」がトギ・マブイワカシの場と切り離された結果、「殯」の空間が墓と分離されるに至ったからと考えることが可能。
5．「殯」の流入経路は、葬墓制の関連が指摘される近世の福建・浙江・江蘇地方に見出せる。
6．琉球王朝においても庶民においても、葬礼は二重葬の形態を獲得して落ち着いていることから、南西諸島における葬送儀礼には「死霊」を「祖先」へ転換する構造が見られると言える。琉球国における歴史的な「殯」の展開は、構造面からも裏書できる。

論　文・牛窪彩絢：「琉球国における「殯葬」の展開に関する一考察」『東洋文化研究』第24号　22.3（刊行予定）
報　告・牛窪彩絢：「琉球国における中国式葬墓制の受容―殯を中心として―」　2020年度学習院大学東洋文化研究所プロジェクト研究年次報告会　20.9.18
発　表・牛窪彩絢：「沖縄における「殯葬」の展開に関する一考察」　日本民俗学会第72回年会　20.10.4

研究組織　○牛窪彩絢（文化遺産国際協力センター）

備　　考　本研究は、学習院大学東洋文化研究所の助成を得て実施した。

文化財防災センター事業

目　　的　2020（令和2）年10月に国立文化財機構に設立された文化財防災センターの東日本ブロック中核拠点として、地域防災体制の構築、災害時ガイドライン等の整備、レスキュー及び収蔵・展示における技術開発、普及啓発、さらには文化財防災に関係する情報の収集と活用を進める。

成　　果　1．地域防災体制の構築

北海道及び東北6県を対象に、文化財防災に関する研究協議会（書面開催）を開催し、意見交換及び情報収集を行うとともに、その内容をまとめて報告書を刊行した。

2．災害時ガイドライン等の整備

①無形文化財の防災事業の検討

無形文化財の防災・減災について検討するための情報収集と、記録映像を基に分析する準備を行った。

3．レスキュー及び収蔵・展示における技術開発

①被災資料の一時保管環境の研究

東日本大震災によって被災した文化財が一時保管されている福島県文化財センター（白河館まほろん）において、施設内でのアセトアルデヒド濃度の上昇について、改善方法を模索するための環境調査と改善に向けた協議を行った。

4．普及啓発

①文化財防災に関する研修

2020（令和2）年10月19日に、北海道内の文化財担当職員や学芸員等を対象として下記の研修会を開催した。

日　時：2020（令和2）年10月19日（月）13:00～17:00
場　所：国立アイヌ民族博物館
参加者：15名
テーマ：文化財レスキューと心理社会的支援
・歴史資料保存と災害支援―歴史資料保存活動がなぜ災害に強い地域づくりに貢献できるか―
（J.F.モリス）
・歴史資料レスキュー活動と心理社会的支援
（上山眞知子）

文化財防災に関する研修「文化財レスキューと心理社会的支援」

5．文化財防災に関係する情報の収集と活用

①文化財総合データベースの構築とネットワークの確立

・文化財防災の基礎情報となるデータベース構築と、文化財防災に貢献できる行政担当者のネットワーク構築を継続した。

・国（文化庁）及び都道府県の情報提供による「全国文化財等データベース」（非公開）の作成を継続して行った。令和 2 年度は有形約 7,600 件、美術工芸約 2,800 件、無形約 3,800 件の入力を行った。

・「全国文化財等データベース」に連動した「無形文化遺産総合データベース」（公開）の作成を継続した。令和 2 年度は約 9,500 件を公開した。

・「無形文化遺産総合データベース」に連動したアーカイブスに動画等データを収集・運用するための検討を行った。

・全国都道府県の民俗文化財担当者間でメーリングリスト等を用いた情報共有を行った。

・全国文化財保護条例データベース及び無形文化遺産情報収集ウェブサイト「いんたんじぶる」を継続的に運用した。

②阪神・淡路、東日本両震災の救援委員会記録の整理・分析研究

・阪神・淡路大震災での被災文化財等救援委員会の活動に係る記録資料の分析を実施し、東日本大震災、平成 28 年熊本地震の記録との比較を行った。

・阪神・淡路大震災当時の文化庁、東文研、全国美術館会議、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会の関係者に、救援活動について聞き取り調査を実施した。

③無形文化遺産の防災のための動態記録作成に関する調査研究

・無形文化遺産の防災・減災のための動態記録作成の方法論構築を目的に、各調査地域において撮影された映像とその編集方法について、モデル的に検討を行い、防災・減災のための映像記録作成について調査研究・情報収集を実施した。

・無形文化遺産の減災・伝承に資する映像記録作成として、鵜飼船製造技術記録映像の編集を行い公開した。

・「無形文化遺産の防災のための動態記録作成に関する調査研究事業」事業報告書を刊行した。

論　文・Mikiko HAYASHI el al.：Amélioration du procédé de stabilisation des documents altérés par le tsunami sous l'angle du contrôle microbiologique『Support/Tracé』　21.2

・村井源ほか：「阪神・淡路大震災の日報分析と三つの震災における文化財レスキュー活動の比較」『保存科学』60　pp.1-18　21.3

発　表・林美木子ほか：「ICCROMの非常時における文化財救出と応急処置研修とその展開」　文化財保存修復学会第42回大会　オンライン　20.7.10

・『令和二年度 文化財防災に関する研究協議会（書面開催）』東京文化財研究所　21.3

刊行物・『無形文化遺産の防災のための動態記録作成に関する調査研究事業　民俗技術の記録作成事業報告書 3』東京文化財研究所　21.3

研究組織　○早川泰弘、秋山純子（以上、保存科学研究センター）、水谷悦子、林美木子（以上、文化財防災センター）、二神葉子、小山田智寛（以上、文化財情報資料部）、久保田裕道、佐野真規（以上、無形文化遺産部）

事業の一部として実施した研究集会・講座等

第27回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「コロナ禍における文化遺産国際協力のあり方」

文化遺産保護に関する国際協力に関連して、各機関・プロジェクトがコロナ禍中においてどのように対応しているのかについて、文化遺産国際協力プロジェクトに携わってきた専門家が講演し、コロナ禍における文化遺産国際協力のあり方とその可能性についてパネルディスカッションを行った。

日　時：2020（令和2）年9月5日（土）　14：00～15：30
会　場：オンライン（Zoomウェビナー）
主　催：文化遺産国際協力コンソーシアム
参加者：151名
講　演：・長岡正哲（UNESCOプノンペン事務所 文化部主任）
「コロナ禍におけるアンコール遺跡保存事業の状況」
・渡部展也（中部大学人文学部歴史地理学科 准教授）
「デジタルツールを利用したリモート国際協力事業の例」
パネルディスカッション：
司会　關雄二（国立民族学博物館 副館長／文化遺産国際協力コンソーシアム 副会長）
パネリスト
山内和也（帝京大学文化財研究所 教授）
長岡正哲
渡部展也
友田正彦（文化遺産国際協力コンソーシアム 事務局長／東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター長）

（受託「文化遺産国際協力コンソーシアム事業」の一部として実施）

事業の一部として実施した研究集会・講座等

第28回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「文化遺産とSDGs Ⅲ ―地域社会における文化遺産の役割を考える―」

本研究会は、2015（平成27）年9月に国連総会で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）に関連して、2018（平成30）年度からシリーズ開催してきた研究会「文化遺産とSDGs」の最終回として実施した。「共存・共生」をキーワードに生業支援、教育、歴史的・文化的環境保全といった観点から、持続可能な地域コミュニティの形成と文化遺産の双方向的な関係について議論を行った。

日　時：2021（令和3）年1月31日（日）　13：30～15：15
会　場：オンライン（Zoomウェビナー）
主　催：文化遺産国際協力コンソーシアム
参加者：134名
講　演：・チャンタソン・インタヴォン（女性技能開発ホアイホンセンター 代表）
「ラオスにおける女性技能開発のための伝統工芸技術の継承と普及」
・チア・ノル（アンコール人材養成支援機構（JST）代表）
「アンコール遺跡周辺地域の持続的発展のための地域支援活動及び遺跡保全活動」
・中村浩二（金沢大学 名誉教授・石川県立自然史資料館 館長）
「持続的発展のための人材育成：世界農業遺産（GIAHS）「フィリピン・イフガオ棚田」と「能登の里山里海」の連携事業」

パネルディスカッション：

ファシリテーター　飯田卓（国立民族学博物館 教授）

パネリスト

チャンタソン・インタヴォン

チア・ノル

中村浩二

飯田卓

佐藤寛（アジア経済研究所 上席主任調査研究員）

・まとめ

佐藤寛

（受託「文化遺産国際協力コンソーシアム事業」の一部として実施）

インターネット公開

「いんたんじぶる」

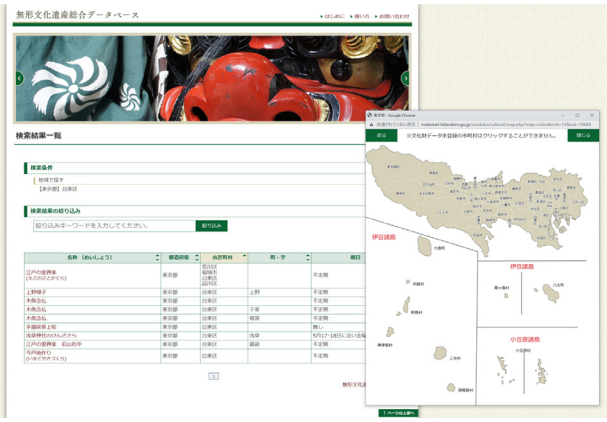
防災をはじめとする無形文化遺産の情報収集・情報発信を目的として作成した、一般向けサイト。「コレクション欄」の「動画アーカイブ」「ブックス」のページから無形文化遺産関連動画、関連PDFへのアクセスが可能。「無形文化遺産総合データベース」への導入的役割を果たすとともに、伝承者と研究者や関係者とのネットワーク構築を目指す。

（文化財防災ネットワーク推進事業の一部として実施）

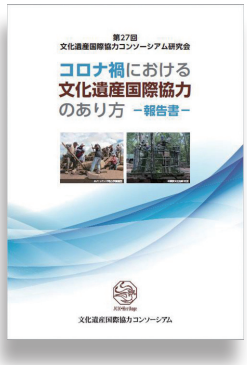
「無形文化遺産総合データベース」

文化庁および都道府県からの提供を受け、文化財防災を目的とした「全国文化財等データベース」（非公開）を無形文化遺産部・文化財情報資料部とで作成している（無形の文化財：約7,100件、有形文化財：約4,500件）。その中から無形文化遺産を抽出した公開用の「無形文化遺産総合データベースを作成、今年度は約6,000件を入力・整理して公開している。

（文化財防災ネットワーク推進事業の一部として実施）



受託調査研究の一環として刊行された刊行物



『第27回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「コロナ禍における文化遺産国際協力のあり方」報告書』

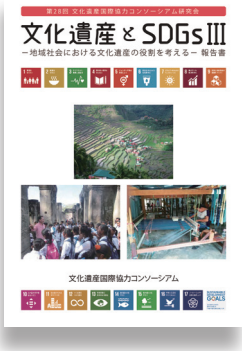
本冊子は、2020（令和2）年9月5日に開催された第27回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「コロナ禍における文化遺産国際協力のあり方」の内容をまとめた報告書である。2021年3月刊行、27ページ。

（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として実施）

『第28回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産とSDGs Ⅲ―地域社会における文化遺産の役割を考える―」報告書』

本冊子は、2021(令和3)年1月31日に開催された第28回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「文化遺産とSDGs Ⅲ―地域社会における文化遺産の役割を考える―」の内容をまとめた報告書である。2021年3月刊行、138ページ。

（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として実施）



『文化遺産の国際協力』

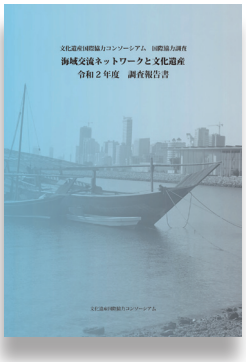
本冊子は、国際協力分野における我が国の貢献及び文化遺産国際協力コンソーシアムの活動について理解が深まるよう、文化遺産の国際協力についてまとめたものである。2021年3月刊行、10ページ。

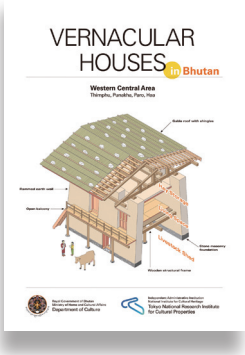
（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として実施）

『文化遺産国際協力コンソーシアム　国際協力調査　海域交流ネットワークと文化遺産令和2年度 調査報告書』

本冊子は、文化遺産国際協力コンソーシアムが令和2年度に行った国際協力調査「海域交流ネットワークと文化遺産」の報告書である。世界各地域の現状を把握するため行ったアンケート調査の結果をもとに、各地域の状況について掲載している。2021年3月刊行、73ページ。

（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として実施）





『VERNACULAR HOUSES in Bhutan, Western Central Area, Thimphu, Punakha, Paro, Haa』

ブータンの文化遺産保護関係者の伝統的民家に対する認識を高めることを目的とした民家建築の参考図書。ブータン内務文化省文化局（DoC）との共同調査を通じて把握した顕著な特徴をもつ同国内西部地域の民家41件の解説を中心に、集落と民家の考察、民家の保存に向けた措置と提案、民家建築保存のためのワークショップの記録を収録。英語、2021年3月刊行、238ページ、DoCと連名による刊行。

（ブータン王国の歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業の一環として実施）

4. 個人の研究業績

凡　例

氏　名

（1 公刊図書等）

（2 報告）

（3 論文）

（4 解説、翻訳等）

（5 学会発表）

（6 講演会、研究会発表等）

（7 所属学会、委員等）

（8 教育等）

秋山 純子 AKIYAMA Junko（保存科学研究センター）

（4 編集）保存の活用のための展示環境の研究 平成28年度～令和2年度　研究成果報告書　pp.1-3　東京文化財研究所　21.3

（4 解説）研究協議会の趣旨（秋山純子、林美木子）　令和2年度文化財防災に関する研究協議会 北海道・東北地方　pp.4-6　東京文化財研究所　21.2

（5 学会発表）伝統的な灰汁を利用した固着被災文書等の修復処置と効果の検討（木川りか、久保憲司、有吉正明、秋山純子、早川典子）　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10

（5 学会発表）ガラス外壁を有する博物館建造物における衝突野鳥の傾向分析と照明・音声を利用した対策について（木川りか、渡辺祐基、富松志帆、松尾実香、秋山純子、岡部海都、柿本大典、大城戸博文）　第32回日本環境動物昆虫学会年次大会　オンライン　20.11.29

（6 発表）「九州国立博物館における環境保全について」令和2年度第1回総合研究会　東京文化財研究所　20.9.11

（6 講演）身近に迫る危機への備え「博物館における災害対応」　日本博物館協会第68回大会　横浜市開港記念館　20.11.25-26

（6 講演）文化財防災センターの活動（二神葉子、城野誠治、秋山純子）　文化財の記録作成とデータベース化に関するハンズオン・セミナー「文化財写真入門―文化財の記録としての写真撮影実践講座」　東北歴史博物館　21.3.12

（6 司会）「保存と活用のための展示環境」に関する研究会　「保存と活用のための展示環境」に関する研究会　東京文化財研究所　21.3.4

（7 所属学会）日本文化財科学会、東アジア文化遺産保存学会、文化財保存修復学会

（7 委員会等）「法隆寺金堂壁画　保存活用委員会」保存環境ワーキング・グループ専門委員、文化財保存修復学会理事、国立アイヌ民族博物館運営会議　構成員、文化財保存修復学会42回大会実行委員

淺田 なつみ ASADA Natsumi（アソシエイトフェロー）

（2 報告）Proceedings of Restoration Work (TOMODA Masahiko, KANAI Ken, ASADA Natsumi, VAR Elif Berna, SEA Sophearun, THAI Yamang) *Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor, Progress Report of 2020*, pp.5-24, Authority for the Protection and Management of Angkor and Region of Siem Reap/Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, 21.3

（3 論文）カトマンズ盆地内歴史的集落保全における法的枠組み－2015年ネパール地震後の世界遺産暫定リスト・コカナにおける被災状況調査報告　その13－（森朋子、淺田なつみ、Lata Shakya）　日本建築学会大会学術講演梗概集　pp.955-956　20.9

（3 論文）カトマンズ盆地内歴史的集落における建築条例―2015年ネパール地震後の世界遺産暫定リスト・コカナにおける被災状況調査報告　その14―（Lata Shakya、森朋子、淺田なつみ）　日本建築学会大会学術講演梗概集　pp.957-958　20.9

（5 学会発表）アンコール・タネイ寺院遺跡の保存整備（友田正彦、間舎裕生、淺田なつみ、ヴァル エリフ ベルナ）　東南アジア考古学会2020年度大会　オンライン　20.12.12

（7 所属学会）ICOMOS、都市史学会、日本建築学会

安倍 雅史 ABE Masashi（文化遺産国際協力センター）

（1 公刊図書）「西アジア・北アフリカ（古代オリエント）2」『史学雑誌 2019年の歴史学界－回顧と展望－』公益財団法人史学会　pp.294-298　20.5

（1 公刊図書）「失われた遺産 アフガニスタン/シリア/イエメン他」『TRANSIT第48号 美しき古代文明への旅』講談社　pp.130-136　20.6

（1 公刊図書）「18 研究・支援・普及で世界をむすぶ シリア文化財の支援」『シリーズ遺跡を学ぶ 別冊05 ビジュアル版考古学ガイドブック（小野昭著）』新泉社　pp.74-75　20.11

（2 報告）レバノン・ベイルートにおける被災文化遺産の現状と国際支援　『ICOMOS Japan Information』11(7)　p.24　ICOMOS Japan　20.12

（2 報告）（金井健、安倍雅史、間舎裕生）『ペルシア湾岸諸国に対する相手国調査』　東京文化財研究所　21.3

（2 報告）「西アジア地域」『文化遺産国際協力コンソーシアム国際協力調査　海域ネットワークと文化遺産 令和2年度調査報告書』文化遺産国際協力コンソーシアム　pp.33-36　21.3

（3 論文）Excavations at Wadi al-Sail, Bahrain 2015-2019 (Takeshi Gotoh、Kiyohide Saito、Masashi Abe、Akinori Uesugi) Proceedings of the Seminar for Arabian Studies, 50, pp.169-186, 20.7

（3 論文）شواهدی جدید از کاسهٔ لبه‌واریختهٔ از مجموعهٔ کلهکوب، استان خراسان جنوبی (Beveled Rim Bowls from Eastern Iran)（Mohammad Hossein Azizi Kharanaghi、Sepideh Jamshidi Yeganeh、Masashi Abe、Afshin Akbari）Parseh Journal of Archaeological Studies, 4(12), pp.29-48, 20.8

（3 論文）Challenges of the Fars Neolithic Chronology: An Appraisal（Morteza Khanipour, Kamalaldin Niknami, Masashi Abe) Radiocarbon Online, pp.1-20, 20.12

（3 論文）Reconsidering the Date of Riffa Type Burial Mounds in the Early Dilmun Period: New Radiocarbon Data from Wadi al-Sail, Bahrain (Masashi Abe、Akinori Uesugi)『ラーフィダーン』42　pp.75-85　21.3

（3 論文）ディルムンを掘る－バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト2020－（安倍雅史、上杉彰紀、岡崎健治、佐々木蘭貞、間舎裕生）『第28回

西アジア発掘調査報告会報告集』 日本西アジア考古学会　pp.85-88　21.3
（5 学会発表）前期ディルムンの未成人墓に関する予備的考察（安倍雅史、上杉彰紀、岡崎健治） 日本西アジア考古学会第25回大会　オンライン　20.11.25
（6 発表）バハレーンに栄えたディルムンの考古学―ディルムンをめぐる最新研究動向― You Tube 日本西アジア考古学会チャンネル 西アジアオンライン講義　オンライン　20.5
（6 発表）イラン南ホラーサーン州、カレ・クブ遺跡の発掘調査―最果てのウルク交易拠点の発見― You Tube 日本西アジア考古学会チャンネル 西アジアオンライン講義　オンライン　20.5
（6 発表）西アジア地域　文化遺産国際協力コンソーシアム令和2年度国際協力調査「海域ネットワークと文化遺産」意見交換会　オンライン　21.1.26
（6 発表）バハレーンにおける新石器時代研究の現状 基盤研究（S）「中東部族社会の起源」第3回研究会　オンライン　21.3.13
（6 講演）Excavations at Kale Kub in Southern Khorasan, Eastern Iran（Masashi Abe, Hossein Azizi Kharanaghi) Online International Conference for the Iranian Archaeological Webinar, 2020（駐日イラン大使館主催）オンライン　20.11.28
（6 講演）How Kaleh Kub Was Established and Survived from the Fifth to the Second Millennium BCE in the Middle of a Desert? (Hossein Azizi Kharanaghi、Masashi Abe) Iranian Highlands, Concepts of Resilience for the Study of Premodern Societes（German Research Foundation主催）オンライン　20.12.6
（6 講演）ディルムンを掘る ーバハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2020ー（安倍雅史、上杉彰紀、岡崎健治、佐々木蘭貞、間舎裕生） 第28回西アジア発掘調査報告会　オンライン　21.3.28
（6 講義）考古学と発掘調査報告書　国宝修理装潢師連盟報告書講習　オンライン　20.10.27
（6 パネリスト）コメント　考古学における教育の在り方―イラク、シリアなどの紛争地の文化遺産を軸に―（特定非営利活動法人メソポタミア考古学教育研究所主催） オンライン　20.12.12
（7 所属学会）日本オリエント学会、日本西アジア考古学会、The International Association for Archaeological Research in Western and Central Asia
（8 教育）東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学研究室連携准教授、金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター客員准教授

飯島 満 IJIMA Mitsuru（特任研究員）
（4 資料紹介）新内節四曲―昭和三十二年度文化財保護委員会作成記録より 『無形文化遺産研究報告』15 pp.15-31（縦書） 21.3
（7 委員会等）芸術文化振興基金運営委員会専門委員、文化審議会専門委員（文化財分科会）、文化庁令和2年度「次世代の文化を創造する新進芸術家育成事業」協力者会議委員、令和2年度「地域文化財総合活用推進事業」に係る協力者会議委員、令和2年度「伝統芸能用具・原材料に関する調査事業」実施業務に係る技術審査委員、令和3年度「邦楽普及拡大推進事業管理運営業務」企画選定委員会委員

石村 智 ISHIMURA Tomo（無形文化遺産部）
（1 公刊図書）『地形と歴史から探る福岡』MdN新書 272p　20.10
（3 論文）文化遺産―ナンマトル遺跡の保存と活用―『オセアニアで学ぶ人類学』 pp.239-253　昭和堂　20.12
（3 論文）Issues regarding the protection of intangible cultural heritage related to religion in Japan. *Heritage and Religion in East Asia*, pp.187-203, Routledge, 21.1
（3 論文）コロナ禍における無形文化遺産の情報収集・発信 『無形文化遺産研究報告』15　pp.23-30　21.3
（3 論文）地域の遺産をとらえる―北海道道東地方の事例から― 『無形文化遺産研究報告』15　pp.87-96　21.3
（5 学会発表）環境への適応と階層化のゆりもどし―アオテアロア（ニュージーランド）を例に―（石村智、北川瑞季） 考古学研究会第66回研究集会　オンライン　20.7.18
（5 学会発表）ポリネシアにおける社会階層化と人口・環境との関連　日本オセアニア学会第38回研究大会　オンライン　21.3.18
（6 発表）「趣旨説明」 新型コロナウイルスと無形文化遺産・フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」東京文化財研究所　20.9.25
（6 発表）「オセアニアへの移動」 出ユーラシアの統合的人類史学第三回全体会議　オンライン　20. 8.22
（6 発表）「泉靖一の見た済州島とその後」 国立民族学博物館共同研究会「沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討」 オンライン　20.11.28
（6 発表）「なぜアオテアロア（ニュージーランド）の芸術は独特なのか」 出ユーラシアの統合的人類史学第4回全体会議　オンライン　21.1.10
（6 発表）「ポリネシアにおける社会階層化と人口・環境との関連」 金沢大学シンポジウム「世界の古代文明をめぐる最新調査研究」 オンライン　21.2.28
（6 パネリスト）国際シンポジウム「無形文化遺産の持続可能な開発への貢献に関する研究：教育とまちづくり」 オンライン　21.1.28-29
（6 パネリスト）金沢大学シンポジウム「文化遺産を見つけ、育て、生業とする」 オンライン　21.2.7
（7 所属学会）ICOMOS、考古学研究会、史学研究会、東南アジア考古学会、日本オセアニア学会
（7 委員会等）滋賀県草津市「青花紙保存継承懇話会」専

門家委員
（8 教育）金沢大学大学院人間社会環境研究科客員准教授、東京大学大学院人文社会系研究科非常勤講師

稲葉 政満 INABA Masamitsu（客員研究員）
（4 エッセイ）文声人語 ～文化財に声あり、人をして語らしむ～ (12)　文化財保存学教育に携わって　文化財保存修復学会通信　167　pp.1-5　20.5
（6 講演）楮紙の湿潤引張強さに関する研究（韓知佑、稲葉政満）　和紙文化研究会　月例会　オンライン　20.12.19
（7 所属学会）ICOM、ICOM-CC、特定非営利活動法人文化財保存支援機構、日本文化財科学会、文化財保存修復学会、マテリアルライフ学会、紙パルプ技術協会
（7 委員会等）青梅市文化財保護審議会、（公）美術文化振興協会 常務理事

犬塚 将英 INUZUKA Masahide（保存科学研究センター）
（2 報告）鉛金属の腐食と空気環境との関係について（犬塚将英、古田嶋智子、高橋佳久、紀芝蓮）『保存科学』60　pp.33-40　21.3
（2 報告）低酸素濃度殺虫法に用いる脱酸素剤からの有機酸発生（佐藤嘉則、岡部迪子、犬塚将英）『保存科学』60　pp.27-32　21.3
（2 報告）牛久石奈坂1号墳出土の金属製品の調査（犬塚将英、朽津信明）『市原市牛久石奈坂1号墳・石奈坂遺跡』　pp.77　千葉県市原市　21.3
（2 報告）ワット・ラーチャプラディットの螺鈿扉部材の構造調査　『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究』　pp.57-62　東京文化財研究所　21.3
（4 解説）文化財の保存修復における光学調査の役割『OPTRONICS』481　pp.60-61　20.5
（4 解説）虎塚古墳の保存のための取組み『ひたちなか埋文だより』53　pp.5　20.10
（4 解説）美術工芸品分析の最前線　『月刊文化財』686　pp.9-10　20.12
（4 編集）『文化財の材質・構造・状態調査に関する研究　平成28 ～令和2年度　研究成果報告書』　東京文化財研究所　21.3
（5 学会発表）X線透過撮影による泥に覆われたキトラ古墳壁画の調査（犬塚将英、早川典子、大場詩野子、早川泰弘、高妻洋成）　日本文化財科学会第37回大会　Web開催　20.9.5-13
（5 学会発表）蛍光X線分析における分析値の信頼性ー金箔試料の定量分析に関する共同実験ー（早川泰弘、田村朋美、脇谷草一郎、犬塚将英、荒木臣紀、降幡順子、渡邊緩子）　日本文化財科学会第37回大会　Web開催　20.9.5-13
（5 学会発表）虎塚古墳の壁画剥落片から分離された微生物の群集構造解析（松野美由樹、片山葉子、犬塚将英、稲田健一、矢島國雄、佐藤嘉則）　日本文化財科学会第37回大会　Web開催　20.9.5-13
（5 学会発表）博物館における化学物質の放散試験方法の検討ーサンプリングバッグのブランク濃度低減方法（古田嶋智子、犬塚将英）　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10
（5 学会発表）虎塚古墳の壁画剥落片の微生物解析（佐藤嘉則、松野美由樹、犬塚将英、稲田健一、矢島國雄）　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10
（6 発表）趣旨説明　文化財に用いられている鉛の腐食と空気環境　東京文化財研究所　20.12.14
（6 発表）結露が古墳壁画に及ぼす影響に関する基礎研究　保存科学研究集会「遺跡保存に関する最近の動向」奈良文化財研究所　21.3.22-28
（6 発表）煤竹・白竹の物性に関する報告　公開学術講座「竹材と日本の代表的な管楽器」　東京文化財研究所　21.3.20
（7 所属学会）IIC、日本建築学会、日本物理学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
（7 委員会等）「法隆寺金堂壁画保存活用委員会」壁画ワーキング・グループ材料調査班専門委員、ひたちなか市史跡保存対策委員、文化財の保存と公開における熱湿気環境ＷＧ委員、岩手県立博物館における文化財への不適切な行為事案に係る調査チームアドバイザー
（8 教育）東京藝術大学大学院連携教授

今石 みぎわ IMAISHI Migiwa（無形文化遺産部）
（2 報告）「趣旨説明　コロナ禍における無形民俗文化遺産」『第15回無形民俗文化財研究協議会　新型コロナ禍における無形民俗文化財』　pp.1-2　東京文化財研究所　21.3
（2 報告）『箕のかたち―自然と生きる日本のわざ』14p　東京文化財研究所　21.3
（2 報告）「海に生きる女性たち」『女川北浦民俗誌』pp.49-57　東京文化財研究所　21.3
（4 解説）「ツクリモノ」『民具学事典』日本民具学会編、丸善出版　pp.414-415　20.4
（4 解説）「書評　金田久璋著『ニソの杜と若狭の民俗世界』」『日本民俗学』　304　pp.86-90　20.11
（4 編集）（映像記録制作）「映像資料 日置箕をつくる」（約140分）「日置の飾り箕（約8分）「映像資料戸隠箕をつくる」（約360分）「戸隠箕」（約12分）「映像資料 阿波箕をつくる」（約180分）「阿波箕」（約14分）「映像資料皮箕をつくる」（約180分）「皮箕」（約7分）「北条箕」（約10分）「伊勢箕」（約9分）「鹿場の箕」（約21分）　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）（映像記録制作）「長良川の鵜舟をつくる」（約17時間40分）　東京文化財研究所　21.3
（6 発表）「民俗事例にみる模型―小正月のツクリモノ

を中心に」 科研費基盤B「模する技術の発展と伝統的習俗の変容についての学際的研究」令和2年度第1回研究会　オンライン　20.9.5
（6 発表）「民俗技術における素材と加工技術―箕を中心に」 令和2年度第4回総合研究会　東京文化財研究所　21.1.12
（7 所属学会）東北民俗の会、日本民具学会、日本民俗学会
（7 委員会等）岐阜市・関市長良川鵜飼総合調査専門委員会、石鎚黒茶製造技術調査委員会、文化庁調査員、山形県文化財保護審議会委員、国立民族学博物館共同研究員

ヴァル エリフ ベルナ　VAR Elif Berna（アソシエイトフェロー）
（4 編集）（TOMODA Masahiko, KANAI Ken, VAR Elif Berna, KIM Sothin) Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor *-Progress Report of 2020-*, 108p, TNRICP, APSARA, 21.3020　162　東京文化財研究所　21.3.21
（4 編集）（友田正彦、金井健、ヴァル エリフ ベルナ）『東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理　研究会記録』 73p　東京文化財研究所　21.3
（4 記事）「日本とトルコの伝統建築の比較 」『近代建築』2020 (12)　pp.86-87　20.12.201
（5 学会発表）アンコール・タネイ寺院遺跡の保存整備（友田正彦、間舎裕生、淺田なつみ、ヴァルエリフベルナ）　東南アジア考古学会2020年度大会　立正大学オンライン　20.12.12
（6 講演）トルコ・トラブゾンにおける風土建築保存大学院 美術研究科 文化財保存学専攻 システム保存学研究室 【修復計画論】授業　東京藝術大学　オンライン　20.6.18
（6 発表）Vernacular Architecture in Turkey: Potentials and Challenges for Architectural Conservation　29th Archfest　Rizvi College of Architecture　オンライン　20.8.26
（7 所属学会）日本建築学会、Chamber of Architects of Turkey
（7 委員会等）日本建築学会 比較居住文化小委員会

牛窪 彩絢　USHIKUBO Saaya（アソシエイトフェロー）
（2 報告）旧和宇慶家墓の保存に向けた調査研究　令和2年度成果報告書，50 p　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）Me-taw-ya Temple Project (No.1205). *Capacity Building; a Conservation Project for the Repair, Strengthening and Recovery of Temple 1205a Archaeological Area and Monuments of Bagan, Myanmar 2016–2020*, 197p, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, 21.3
（6 発表）旧和宇慶家墓の人文学的調査研究　2019年度RIIS個人型共同利用・公募型共同研究合同報告会「島嶼地域研究への多様なアプローチ」 オンライン　20.9.8
（5 学会発表）沖縄における「殯葬」の展開に関する一考察　日本民俗学会第72回年会　ウェブ開催　20.10.4-11
（6 発表）琉球国における中国式葬墓制の受容―殯を中心として―　2020年度学習院大学東洋文化研究所プロジェクト研究年次報告会　オンライン　20.9.18
（7 所属学会）日本民俗学会、文化財保存修復学会、日本文化人類学会、日本宗教学会

宇髙 健太郎　UDAKA Kentaro（客員研究員）
（1 共著）第18章「墨および古典的膠」（東京農工大学硬蛋白質利用研究施設（編）、西山敏夫、水野一乗、野村義宏、K. L. Goh、宮田真路、石川善弘、多賀祐喜、山内三男、寺嶋雅彦、稲田全規、伊藤義文、黒田一稀、小出隆規、佐藤健司、重村泰毅、田中啓友、服部俊治、石原賢司、平岡芳信、新井克彦、吉村圭司、土居昌裕、宇高健太郎、鈴木哲、小泉聖子、松下綾、大門桃茄、姫野愛、天野聡、藤本一朗、西山敏夫（著））『コラーゲン 基礎から応用』株式会社impress R&D　181-191p　20.10
（4 解説）解説映像『日本博2020 日本文学展 ～文学とメディアの千年譚～文化財リマスター / Japanese Literature Convention -The Millenium Epic of Literature and Media- Cultural Properties Remaster / Convention sur la Littérature Japonaise -L'épopée Millénaire de la Littérature et des Médias- Remasterisation des Biens Culturels』（文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会、凸版印刷株式会社、株式会社シンクコミュニケーションズ、ジット株式会社、宇髙健太郎、有限会社シーズクリエイティブオフィス、株式会社古梅園、黒谷和紙協同組合、他）　文化庁日本博シンポジウム 解説映像　文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会、凸版印刷株式会社　20.9.22
（5 学会発表）古典的膠の調製方法及び性状（宇髙健太郎、早川典子、藤井佑果、大場詩野子、岡部迪子）文化財保存修復学会 第42回大会研究発表　紙上開催　20.7.10
（5 学会発表）Research on Properties of Soot for Inkstick Productions（UDAKA Kentaro, Jinnifer A. Giaccai）文化財保存修復学会 第42回大会研究発表　紙上開催　20.7.10
（6 講演）墨と書画の構造と材料　文化庁 日本博シンポジウム 日本文学展 ～文学とメディアの千年譚～文化財リマスター　六本木ヒルズ及びオンライン　20.9.22
（7 所属学会）文化財保存修復学会
（7 委員会等）膠文化研究会運営委員会

江村 知子　EMURA Tomoko（文化財情報資料部）
（3 論文）Ausdrucksform und Ikonographie des Paravents Szenen an der Shijo-straße nahe des Fussufers in GRASSI

Museum für Völkerkunde zu Leipzig. *Spurenlese*, 3, pp.60-75, Staatlichen Kunstsammlungen Dresden, Museen für Völkerkunde zu Leipzig, 20.4
（3 論文）田中一松の眼と手　『美術研究』432　pp.39-56　20.12
（4 解説）「日本美術の記録と評価―調査ノートにみる美術史研究のあゆみ―」展リーフレット　4p　東京国立博物館・東京文化財研究所　20.7
（4 解説）作品解説　『在外日本古美術品保存修復協力事業　煙寺晩鐘図・平沙落雁図　No.2017-3　修復報告』　pp.23-25　東京文化財研究所　21.3
（4 解説）作品解説　『在外日本古美術品保存修復協力事業　檜図・八橋図　No.2017-1　修復報告』　pp.19-22　東京文化財研究所　21.3
（5 学会発表）「葛飾北斎絵入り版本群・織田一磨文庫のオープンアクセス事業ーゲッティ研究所との協同による書誌情報国際発信の実践（古典籍書誌整備と資料保全）」（橘川英規、田村彩子、阿部朋絵、江村知子、山梨絵美子）　アート・ドキュメンテーション学会第13回秋季研究集会　オンライン　20.11.28
（7 所属学会）アート・ドキュメンテーション学会、美術史学会
（7 委員会等）国立歴史民俗博物館運営委員

大河原 典子　OKAWARA Noriko（客員研究員）
（7 所属学会）日本美術院、文化財保存修復学会
（8 教育）鎌倉女子大学児童学部児童学科准教授

岡田 健　OKADA Ken（客員研究員）
（3 論文）Influence of Environmental Factors on Deterioration of Mural Paintings in Mogao Cave 285, Dunhuang (D. Ogura, T. Hase, Y. Nakata, A. Mikayama, S. Hokoi, H. Takabayashi, K. Okada, B. Su and P. Xue) *Case Studies in Building Rehabilitation,* pp.105-109, Springer, 20.7
（6 発表）平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究　令和２年度「第１回平泉学研究会」　岩手大学（リモート発表）　21.2.6
（6 発表）平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究　令和２年度「第１回平泉学フォーラム」　一関文化センター（リモート発表）　21.2.7
（6 講演）文化財防災のための連携体制構築の現状と課題　奈良県文化財防犯・防火・防災関係者連絡会議　奈良県立橿原考古学研究所　20.8.5
（6 講義）発災時の情報収集と支援団体のアレンジメント　令和２年度　文化財保存修復を目指す人のための実践コース～被災した文化財の第一次レスキュー（水損資料を中心に）～　特定非営利活動法人文化財保存支援機構事務局　20.8.18
（6 講義）中国龍門石窟の初唐造像（一）　東京藝術大学文化財保存学専攻集中講義　東京藝術大学　21.1.15
（6 講習会）災害時の文化財への対応　長野県「文化財の防火・防災研修会」　長野県総合教育センター（リモート講演）　21.1.22
（7 所属学会）東アジア文化遺産保存学会、美術史学会、文化財保存修復学会
（7 委員会等）文化庁文化財等災害対策委員会、大分県文化財保存活用大綱策定委員会、東京都文化財保護審議会、平泉文化の総合的研究（第３期）共同研究員
（8 教育）奈良大学文学部非常勤講師、中国・復旦大学国土與文化資源研究中心客員教授

小野 真由美　ONO Mayumi（文化財情報資料部）
（6 発表）江戸初期狩野派史料の研究 ―探幽縮図を中心に―　文化財情報資料部研究会　企画情報資料部研究会室　20.7.28
（6 講演）江戸の色彩 ―江戸時代の画法書と琳派作品から読み解く―　アストライアの会（日本セカンドライフ協会協賛）　IKE・Bizuとしま区産業振興プラザ第一会議室
（7 所属学会）美術史学会

小山田 智寛　OYAMADA Tomohiro（文化財情報資料部）
（2 報告）Report of the Present Situation of Cultural Property Information Database　*2020 IEEE 9th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE)*, pp.164-167　20.10
（2 報告）「売立目録デジタル化事業におけるシステムの役割について」『東京文化財研究所　研究報告書売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望―売立目録の新たな活用を目指して』　pp.147-156　21.3
（5 学会発表）デジタルコンテンツと持続性：明治大正期書画家番付データベースを例に（小山田智寛、二神葉子、逢坂裕紀子、安岡みのり）　デジタルアーカイブ学会第４回研究大会　学術総合センター　20.4.26
（5 学会発表）デジタルコンテンツと継続性：明治大正期書画家番付データベースを例に（小山田智寛、二神葉子、逢坂裕紀子、安岡みのり）　デジタルアーカイブ学会第４回研究大会スピンオフ研究発表会　オンライン　20.7.5
（5 学会発表）Report of the Present Situation of Cultural Property Information Database. 2020 IEEE 9th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE)　オンライン　20.10.13-16
（6 発表）黒田清輝と久米桂一郎―日本洋画界を支えた交流（塩谷純、小山田智寛）　東京文化財研究所総合研究会　東京文化財研究所　20.12.1
（7 所属学会）アート・ドキュメンテーション学会、デジタルアーカイブ学会、美学

片渕 奈美香　KATAFUCHI Namika（アソシエイトフェロー）
（4 編集）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日

本古美術品保存修復協力事業　檜・八橋図　No.2017-1』 48p　東京文化財研究所　21.3
（4 校閲）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日本古美術品保存修復協力事業　檜・八橋図　No.2017-1』 48p　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）（加藤雅人、清水綾子、片渕奈美香）『在外日本古美術品保存修復協力事業　林和靖・太公望図　No.2017-2』 35p　東京文化財研究所　21.3
（4 校閲）（加藤雅人、清水綾子、片渕奈美香）『在外日本古美術品保存修復協力事業　林和靖・太公望図　No.2017-2』 35p　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日本古美術品保存修復協力事業　煙寺晩鐘図・平沙落雁図　No.2017-3』 31p　東京文化財研究所　21.3
（4 校閲）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日本古美術品保存修復協力事業　煙寺晩鐘図・平沙落雁図　No.2017-3』 31p　東京文化財研究所　21.3
（4 翻訳）1 Restoration Report（KATAFUCHI Namika, KATO Masato）『在外日本古美術品保存修復協力事業　檜・八橋図　No.2017-1』 pp.4-18　東京文化財研究所　21.3
（4 翻訳）1 Restoration Report（KATAFUCHI Namika, KATO Masato）『在外日本古美術品保存修復協力事業　煙寺晩鐘図・平沙落雁図　No.2017-3』 pp.4-21　東京文化財研究所　21.3
（7 所属学会）文化財保存修復学会

片山 葉子 KATAYAMA Yoko（客員研究員）
（3 論文）Microbial diversity and composition of the Preah Vihear temple in Cambodia by high-throughput sequencing based on genomic DNA and RNA (Meng Han, Zhang Xiaofeng, Katayama Yoko, Ge Qinya, Gu Ji-Dong) *International Biodeterioration & Biodegradation*, 149, 104936, 20.4
（3 論文）Enumeration of chemoorganotrophic carbonyl sulfide (COS)-degrading microorganisms by the most probable number method (Kato Hiromi, Ogawa Takahiro, Ohta Hiroyuki, Katayama Yoko) *Microbes & Environments*, 35, ME19139, 20.4
（3 論文）Microbiome and nitrate removal processes by microorganisms on the ancient Preah Vihear temple of Cambodia revealed by metagenomics and N-15 isotope analyses (Ding Xinghua, Lan Wenshen, Wu Jiapeng, Hong Yiguo, Li Yiliang, Ge Qingya, Urzi Clara, Katayama Yoko, Gu Ji-Dong) *Applied Microbiology and Biotechnology*, 104, 9823-9837, 20.9
（3 論文）Microbial deterioration and sustainable conservation of stone monuments and buildings (Liu Xiaobo, Koestler Robert J, Warscheid Thomas, Katayama Yoko, Gu Ji-Dong) Nature Sustainability, 3, 991-1004, 20.9
（5 学会発表）虎塚古墳の壁画剝落片から分離された微生物の群集構造解析（松野美由樹、片山葉子、犬塚将英、稲田健一、矢島國雄、佐藤嘉則）　日本文化財化学会第37回大会　オンライン　20.9.5-13
（5 学会発表）木材腐朽菌による硫化カルボニル分解挙動の調査（飯塚瑠翔、小坂優介、吉田誠、片山葉子、大津巌生）　日本木材保存協会第36回年次大会　オンライン　20.10.27-28
（7 所属学会）日本土壌微生物学会、日本微生物生態学会、環境バイオテクノロジー学会、日本水環境学会、日本環境科学会、日本生化学会、日本農芸化学会、日本微生物資源学会、ASM、ISME
（7 委員会等）経済産業省産業構造審議会臨時委員、公益財団法人クリタ水・環境科学振興財団理事・選考委員、認定NPO法人富士山測候所を活用する会理事
（8 教育）法政大学理工学部・生命科学部非常勤講師、早稲田大学理工学術院先進理工学部ゲストスピーカー、早稲田大学理工学術院創造理工学部非常勤講師

加藤 雅人 KATO Masato（文化遺産国際協力センター）
（2 報告）日本の文化財保護と装潢修理技術（加藤雅人）『国際研修紙の保存と修復 2019』 pp.10-20　東京文化財研究所　21.3
（2 報告）紙の基礎（加藤雅人）『国際研修紙の保存と修復 2019』 pp.36-54　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日本古美術品保存修復協力事業　檜・八橋図　No.2017-1』 48p　東京文化財研究所　21.3
（4 校閲）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日本古美術品保存修復協力事業　檜・八橋図　No.2017-1』 48p　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）（加藤雅人、清水綾子、片渕奈美香）『在外日本古美術品保存修復協力事業　林和靖・太公望図　No.2017-2』 35p　東京文化財研究所　21.3
（4 校閲）（加藤雅人、清水綾子、片渕奈美香）『在外日本古美術品保存修復協力事業　林和靖・太公望図　No.2017-2』 35p　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日本古美術品保存修復協力事業　煙寺晩鐘図・平沙落雁図　No.2017-3』 31p　東京文化財研究所　21.3
（4 校閲）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日本古美術品保存修復協力事業　煙寺晩鐘図・平沙落雁図　No.2017-3』 31p　東京文化財研究所　21.3
（4 翻訳）1 Restoration Report（KATAFUCHI Namika, KATO Masato）『在外日本古美術品保存修復協力事業　檜・八橋図　No.2017-1』 pp.4-18　東京文化財研究所　21.3
（4 翻訳）1 Restoration Report（KATAFUCHI Namika, KATO Masato）『在外日本古美術品保存修復協力事業　林和靖・太公望図　No.2017-2』 35p　東京文化財研究所　21.3
（4 翻訳）1 Restoration Report（KATAFUCHI Namika,

KATO Masato）『在外日本古美術品保存修復協力事業 煙寺晩鐘図・平沙落雁図　No.2017-3』 pp.4-21　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）（加藤雅人、五木田まきは）『国際研修紙の保存と修復 2019』 192p　東京文化財研究所　21.3
（4 校閲）（加藤雅人、五木田まきは）『国際研修紙の保存と修復 2019』 192p　東京文化財研究所　21.3
（5 学会発表）知知覧特攻平和会館における近現代紙資料の製紙原料と劣化の関係（坂元恒太、八巻聡、加藤雅人、大林賢太郎、有吉正明、本田光子、松尾かをる）文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10
（6 講演）芸術文化原論（加藤雅人）　東北芸術工科大学大学院講義　東北芸術工科大学　20.7.28
（6 講習会）報告書作成のための講習会（加藤雅人）　報告書作成のための講習会、国宝修理装潢師連盟主催　オンライン　20.10.27
（7 所属学会）日本文化財科学会、日本木材学会、文化財保存修復学会
（8 教育）東洋美術学校保存修復科非常勤講師

金井 健　KANAI Ken（文化遺産国際協力センター）
（2 報告）日越の集落町並み保存協力30年　『月刊文化財』686　pp.41-44　20.12
（2 報告）OVERVIEW. *VERNACULAR HOUSES in Bhutan, Western Central Region, Thimphu, Punakha, Paro, Haa*, pp. 12-17, TOBUNKEN, DoC MoHCA, 21.3
（2 報告）PROCEEDINGS: Workshop on the Conservation of Rammed Earth in Bhutan (KAMEI Nobuo, Nagtsho Dorji, KANAI Ken) *VERNACULAR HOUSES in Bhutan, Western Central Area, Thimphu, Punakha, Paro, Haa*, p.452 東京文化財研究所　20.3
（2 報告）Introduction. *Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor - Progress Report of 2020* -, pp.1-3, TNRICP, APSARA, 21.3
（2 報告）Proceedings of Restoration Work (TOMODA Masahiko, KANAI Ken, ASADA Natsumi, VAR Elif Berna, SEA Sophearun, THAI Yamang) *Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor - Progress Report of 2020* -, pp.5-23, TNRICP, APSARA, 21.3
（2 報告）Proceedings of Discussion (TOMODA Masahiko, KANAI Ken, ABE Masashi, KANSHA Hiroo, ASADA Natsumi, VAR Elif Berna, KIM Sothin, IM Sokrithy, EA Darith, SEA Sophearun, THAI Yamang, TANN Sophal, DOJ Pichjira) *Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor - Progress Report of 2020* -, pp.33-108, TNRICP, APSARA, 21.3
（3 論文）近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に関する基礎的研究（その１）：文化財保護法下における「文化財」概念の創出と変容　『日本建築学会計画系論文集』86/784　日本建築学会（掲載予定）　21.6
（4 編集）(TOMODA Masahiko, KANAI Ken) *VERNACULAR HOUSES in Bhutan, Western Central Area, Thimphu, Punakha, Paro, Haa*, 238p, TOBUNKEN, DoC MoHCA, 21.3
（4 編集）『令和２年度文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業：ブータン王国の歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業』 53p　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）(TOMODA Masahiko, KANAI Ken, VAR Elif Berna, KIM Sothin) *Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor - Progress Report of 2020* -, 108p, TNRICP, APSARA, 21.3
（4 編集）(友田正彦、金井健、ヴァル エリフ ベルナ)『東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理　研究会記録』 73p　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）（友田正彦、金井健、マルティネス アレハンドロ、ヴァル エリフ ベルナ）『大陸部東南アジアにおける木造建築技術の発達と相互関係　研究会記録』 87p　東京文化財研究所　20.3
（4 記事）「物故者（平成30年）柳澤孝彦」『日本美術年鑑』2018　p.452　東京文化財研究所　20.3
（6 発表）Brief Guidance of Next Training Course and Architectural Heritage Protection System in Japan ACCU Nara Thematic Training Course 2020: Management in Use of Heritage　オンライン　20.11.20
（6 講義）民家の保存・再生　日本女子大学大学院講座：保存再生居住論　オンライン　20.10.28
（6 司会）研究会：東南アジアの木造建築遺産の保存修理　東京文化財研究所／オンライン　20.11.21
（6 司会）Thematic Training Course on Cultural Heritage Protection: Bhutan - Preservation and Utilisation of Traditional Houses, focusing on the Aspect of Living Heritage -　オンライン　21.1.11-22
（7 所属学会）ICOMOS、日本建築学会、日本遺跡学会
（7 委員会等）旧長崎英国領事館修理委員会、長崎市水源地水道施設保存・整備委員会、長崎市伝統的建造物群保存審議会、旧佐世保無線電信所（針尾送信所）施設整備検討委員会、常願寺川砂防施設（本宮堰堤）保存管理計画検討委員会

川野邊 渉　KAWANOBE Wataru（特任研究員）
（7 所属学会）日本文化財科学会、文化財保存修復学会
（7 委員会等）国宝臼杵摩崖仏修理委員会委員長、史跡備前陶器窯跡整備員会委員、ICCROM（文化財保存修復研究国際センター）理事、田川市世界記憶遺産保存事業等指導委員会委員、法隆寺金堂壁画保存活用調査委員会専門委員、日本航空協会評議員
（8 教育）東京藝術大学非常勤講師

間舎 裕生 KANSHA Hiroo（アソシエイトフェロー）

（4 翻訳）謝辞 『戦争と文化遺産―イラク戦争による文化遺産の破壊―』 pp. vi-vii 国士舘大学イラク古代文化研究所 21.3

（4 翻訳）前言 『戦争と文化遺産―イラク戦争による文化遺産の破壊―』 pp. viii-xi 国士舘大学イラク古代文化研究所 21.3

（4 翻訳）イラク紛争時の文化遺産の特定と保護：イギリス特有の物語 『戦争と文化遺産―イラク戦争による文化遺産の破壊―』 pp.79-92 国士舘大学イラク古代文化研究所 21.3

（4 翻訳）バグダードの盗賊 『戦争と文化遺産―イラク戦争による文化遺産の破壊―』 pp.116-147 国士舘大学イラク古代文化研究所 21.3

（4 翻訳）古代都市ウルの受けた被害 『戦争と文化遺産―イラク戦争による文化遺産の破壊―』 pp.163-167 国士舘大学イラク古代文化研究所 21.3

（5 学会発表）中期青銅器時代・後期青銅器時代南レヴァントの都市における市門の位置づけ―市門の形態と機能の分析を通して― 日本オリエント学会第62回大会 名古屋大学 オンライン 20.12.6

（5 学会発表）アンコール・タネイ寺院遺跡の保存整備（友田正彦・間舎裕生・淺田なつみ・ヴァル エリフ ベルナ） 東南アジア考古学会2020年度大会 オンライン 20.12.12

（5 学会発表）アナハラトの歴史解明へ向けて―イスラエル、テル・レヘシュ第12時発掘調査（2019年）―（間舎裕生、桑原久男、長谷川修一、橋本英将、小野塚拓造、津本英利） 日本西アジア考古学会オンライン講義 オンライン 20.05.17

（6 発表）イスラエル・パレスチナの考古学と文化遺産 令和2年度第2回総合研究会 東京文化財研究所セミナー室 20.11.10

（7 所属学会）日本オリエント学会、日本建築学会、日本西アジア考古学会、文化財保存修復学会、三田史学会

苅田 重賀 KANDA Shigeyoshi（客員研究員）

（4 テレビ出演）「横浜ミストリー」（YOUテレビ（株）制作）「日本初! 横浜で初飛行!? 幻のヘリコプター「特殊蝶番レ号」」の回 20.11

（7 所属学会）日本航空協会

（7 委員会等）岐阜かかみがはら航空宇宙博物館A26調査委員会

貴田 啓子 KIDA Keiko（客員研究員）

（3 論文）楮紙の湿潤強さへの煮熟方法の影響（韓知佑、貴田啓子、半田昌規、稲葉政満） 紙パ技術誌 74（9） pp.61-75 20.9

（5 学会発表）裏打ち層にみられる紙の緑青焼け（貴田啓子、柏谷明美、稲葉政満、早川典子） 日本文化財科学会第37回大会 紙上開催 20.7.10

（5 学会発表）ナノセルロース製造法を応用した修復用楮繊維材料の開発（貴田啓子、加瀬谷優子、半田昌規、稲葉政満、西田典由、藤本真人、殿山真央、小瀬亮太、岡山隆之） 文化財保存修復学会第42回大会 Web開催 20.9.5-13

（7 所属学会）セルロース学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会、マテリアルライフ学会、ナノセルロースジャパン

（8 教育）東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻准教授

橘川 英規 KIKKAWA Hideki（文化財情報資料部）

（1 共著）「靉光、竣介、その周辺の画家たちの文献案内―画集・回顧展カタログ・著述」『無辜の絵画：靉光、竣介と戦時期の画家』広島市現代美術館、中国新聞社 pp.307-313 20.5

（1 共著）野見山暁治年譜 『100歳記念 すごいぞ！野見山暁治のいま』青幻舎 pp.106-109 21.1

（5 学会発表）葛飾北斎絵入り版本群・織田一磨文庫のオープンアクセス事業 ゲッティ研究所との協同による書誌情報国際発信の実践（古典籍書誌整備と資料保）（橘川英規、田村彩子、阿部朋絵、江村知子、山梨絵美子） アート・ドキュメンテーション学会第11回秋季研究集会 オンライン 20.11.28

（7 所属学会）アート・ドキュメンテーション学会

（7 委員会等）文化庁アートプラットフォーム事業翻訳プロジェクト アドバイザー

朽津 信明 KUCHITSU Nobuaki（保存科学研究センター）

（2 報告）屋外文化財の劣化要因と保存対策に関する調査研究報告書 東京文化財研究所 21.3

（3 論文）天草市アンモナイト館における緑色生物の制御（朽津信明、森井順之、柳沼由可子、廣瀬浩司） 『保存科学』60 pp.85-98 21.3

（3 論文）文化財の現地保存を考える 『保存科学』60 pp.111-130 21.3

（5 学会発表）天草市アンモナイト館における照明調整による緑色生物の軽減（朽津信明、森井順之、柳沼由可子、廣瀬浩司） 文化財保存修復学会第42回大会 紙上開催 20.7.10

（5 学会発表）三次元計測に基づく富山市大山の恐竜足跡化石の劣化評価（朽津信明、酒井修二、藤田将人） 日本文化財科学会第37回大会 Web開催 20.9.5-13

（5 学会発表）過去の写真に基づく恐竜足跡化石の風化速度の検証（朽津信明、酒井修二、藤田将人） 日本応用地質学会2020年度研究発表会 オンライン 20.10.1-2

（5 学会発表）多視点3次元復元を用いた恐竜足跡化石の経年変化の解析（酒井修二、朽津信明、藤田将人） Vision Engineering Workshop 2020 オンライン

20.12.3
（6 講演）石造文化財の保存とレプリカの意義　九重の土砂災害記念碑レプリカ墨入れ式　新宮市役所　20.12.5
（6 講習会）文化財の劣化と保存　令和2年度香川県文化財保護管理指導事業巡視報告会　香川県社会福祉総合センター　21.3.12
（7 所属学会）日本応用地質学会、日本地質学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
（7 委員会等）特別史跡王塚古墳保存活用計画策定委員会委員、清戸迫横穴保存委員会委員、臼杵磨崖仏保存修理査委員、臼杵市内キリシタン遺跡調査指導委員会委員、大悲山石仏保存修理指導委員会委員,「通潤橋」保存活用検討委員会委員、大野窟古墳の復旧方法等に対する意見聴取委員会、屋形古墳群整備基本計画策定委員会委員、小豆島町「世界遺産化」運営委員会委員、史跡原城跡、日野江城跡専門委員会委員、歴史遺産の地盤工学研究に関する研究委員、嘉島町史跡保存整備検討委員会委員、長崎市出島史跡整備審議会委員、高島炭鉱整備活用委員会委員、金沢市石製文化財保存検討委員会委員、熊野磨崖仏 附 本宮磨崖仏及び鍋山磨崖仏保存活用計画策定検討委員会委員、日本文化財科学会将来構想委員会委員
（8 教育）東京藝術大学大学院併任教授、東京大学非常勤講師

久保田 裕道　KUBOTA Hiromichi（無形文化遺産部）
（1 公刊図書）「民俗芸能を記録する―映像記録の可能性―」　日高真吾、政岡伸洋、小谷竜介、川村清志、加藤幸治、伊達仁美、葉山茂、石垣悟、久保田裕道、和高智美、末森薫、橋本沙知、加藤謙一、河村友佳子、武知邦博『継承される地域文化』臨川書店　pp.157-179　21.3
（2 報告）三匹獅子舞の系譜　『葛尾三匹獅子舞』 pp.8-16　郡山女子大学短期大学部　21.3
（2 報告）湯立獅子舞の芸態　『箱根の湯立獅子舞調査報告書』　pp.172-201　箱根町教育委員会　21.3
（3 論文）湯立獅子舞（湯立神楽）の民俗芸能的特色　『箱根の湯立獅子舞調査報告書』　pp.172-201　箱根町教育委員会　21.3
（3 論文）コロナ禍における無形の民俗文化財の現状と課題　『無形文化遺産研究報告』15　pp.11-24　21.3
（4 編集）『おながわ北浦民俗誌』　東京文化財研究所　21.3
（4 連載）座布団獅子のちから　『神社新報』6月8日号　p.3　神社新報社　20.6
（4 連載）北の国から　『神社新報』9月7日号　p.3　神社新報社　20.9
（4 連載）ユネスコの無形文化遺産　『神社新報』12月7日号　p.3　神社新報社　20.12
（4 連載）十一年目の鹿舞　『神社新報』3月15日号　p.3　神社新報社　21.3
（6 パネリスト）全国の祭りと獅子舞現状について　獅子舞王国さぬき　サンポートホール高松（映像配信）　20.11.1
（6 司会）総合討議「新型コロナ禍の無形民俗文化財」　第15回無形民俗文化財研究協議会　映像配信　20.12.9
（6 発表）東日本大震災と郷土芸能　郷土芸能ストリーム「東北よるべ」芸能語り　全日本郷土芸能協会事務局（映像配信）　21.3.12
（7 所属学会）静岡県民俗学会、日本宗教民俗学会、日本民俗学会、民俗芸能学会、儀礼文化学会
（7 委員会等）文化審議会無形文化遺産部会臨時委員、文化庁非常勤調査員、山梨県文化財保護審議会委員、神奈川県民俗芸能記録保存調査企画調整委員会委員、千葉県博物館資料審査委員会委員、東京都民俗芸能大会実行委員会委員、島根県古代文化センター客員研究員、静岡市文化財保護審議会委員、武蔵野市文化財保護委員、京都芸術センター伝統芸能文化創成プロジェクト推進会議委員、箱根町箱根湯立獅子舞調査委員、公益社団法人全日本郷土芸能協会理事、一般財団法人日本青年館第 69 回全国民俗芸能大会企画委員

倉島 玲央　KURASHIMA Reo（保存科学研究センター）
（3 論文）タンパク質を混和させた漆塗膜の化学構造と物性の検証（倉島玲央、早川典子）『保存科学』60　pp.61-72　21.3
（4 記事）Micro Slurry-jet Erosion 試験を用いた漆塗膜の硬度試験（倉島玲央、早川典子）『うるしNEWS』21　p.1　漆を科学する会　20.4
（4 記事）修復材料としての漆　『TOBUNKEN NEWS』74　pp.55-59　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）『「文化財修復処置に関するワークショップ―ゲルやエマルションを使用したクリーニング法―」報告書』　21.3
（5 学会発表）ミャンマーで採取された漆に関する研究（倉島玲央、早川典子）　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10
（5 学会発表）深さ方向による紫外線劣化させた漆塗膜の強度変化（倉島玲央、早川典子）　漆サミット2020　オンライン　20.11.21
（6 発表）白竹の一次加工についての報告　第14回公開学術講座「日本の伝統的な管楽器と竹材」　東京文化財研究所　21.3.20
（7 所属学会）高分子学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会、漆を科学する会

五木田 まきは　GOKITA Makiha（アソシエイトフェロー）
（2 報告）Ⅳスタディーツアー　2訪問先　『国際研修紙の保存と修復　2019』　pp.139-142　東京文化財研

究所　21.3
（4 編集）（加藤雅人、五木田まきは）『国際研修　紙の保存と修復　2019』 192p　東京文化財研究所　21.3
（4 校閲）（加藤雅人、五木田まきは）『国際研修　紙の保存と修復　2019』 192p　東京文化財研究所　21.3
（5 学会発表）ホンジュラス共和国コパン・ルイナス市における文化遺産の利用実態と課題　古代アメリカ学会第25回研究大会　オンライン開催　20.12.5
（6 講義）博物館展示の理論と技術　金沢大学　オンライン　20.5.29
（6 講義）地域における博物館：地域博物館とエコミュージアム　金沢大学　オンライン　20.6.26
（6 講義）美術館の展示　金沢大学　オンライン　20.7.10
（7 所属学会）古代アメリカ学会、日本ラテンアメリカ学会、文化財保存修復学会

五嶋 千雪　GOSHIMA Chiyuki（アソシエイトフェロー）
（4 編集）『第28回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産とSDGs Ⅲ―地域社会における文化遺産の役割を考える―」報告書』 138p　文化遺産国際協力コンソーシアム　21.3
（7 所属学会）ICOM

古田嶋 智子　KOTAJIMA Tomoko（客員研究員）
（2 報告）鉛金属の腐食と空気環境との関係について（犬塚将英、古田嶋智子、高橋佳久、紀芝蓮）『保存科学』60　pp.33-40　21.3
（5 学会発表）博物館における化学物質の放散試験方法の検討－サンプリングバッグのブランク濃度低減方法－（古田嶋智子、犬塚将英）　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10
（5 学会発表）Air Quality and Naphthalene Concentrations in a Temporary Storage Facility for Museum Collections Damaged in a Tsunami (Tomoko Kotajima, Toshitami Ro, Chie Sano) The 16th Conference of the International Society of Indoor Air Quality & Climate　オンライン　20.11.1-4
（7 所属学会）ICOM-CC、室内環境学会、日本建築学会、文化財保存修復学会
（7 委員会等）室内環境学会　出版委員会

小林 公治　KOBAYASHI Koji（文化財情報資料部）
（2 報告）キリスト教の布教と南蛮漆器―理化学的分析の検討、メダイ研究との対比から―　『「BVNGO NAMBAN―宗麟の愛した南蛮文化―」オープニング記念講演会資料集』 pp.1-14　大分県立埋蔵文化財センター　20.10
（3 論文）キリスト教具南蛮漆器の制作技術とその由来―書見台、聖餅箱の木胎構造を中心に―　『研究紀要』4　pp.1-28　大分県立埋蔵文化財センター　21.3
（6 講演）キリスト教の布教と南蛮漆器―理化学的分析の検討、メダイ研究との対比から―　「BVNGO NAMBAN―宗麟の愛した南蛮文化―」オープニング記念講演会　大分県立埋蔵文化財センター　20.10.10
（7 所属学会）考古学研究会、漆工史学会、東南アジア考古学会、日本考古学協会、早稲田大学考古学会
（8 教育）武蔵野美術大学造形学部非常勤講師

小林 達朗　KOBAYASHI Tatsuro（文化財情報資料部）
（4 解説）鳥獣人物戯画ほか　令和2年度 図画工作　教師用指導書アート・カード　5・6上／5・6下　作品カード　No. 32ほか　日本文教出版株式会社　20.4
（7 所属学会）美術史学会、九州藝術学会

小峰 幸夫　KOMINE Yukio（アソシエイトフェロー）
（5 学会発表）湿度制御温風処理に用いる供試虫の熱耐性と殺虫効果判定への適用（小峰幸夫、佐藤嘉則、原田正彦、北原博幸、木川りか、藤井義久）　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10
（7 所属学会）都市有害生物管理学会、日本環境動物昆虫学会、文化財保存修復学会

齊藤 孝正　SAITO Takamasa（所長）
（7 所属学会）東洋陶磁学会
（7 委員会等）東洋陶磁学会常任委員、文化庁文化審議会文化財分科会専門委員、文化庁文化審議会無形文化遺産部会作業部会構成員、法隆寺金堂壁画保存活用委員会委員、芸術文化振興基金運営委員会運営委員、文化財虫菌害研究所評議員、文化財保護・芸術研究助成財団事業委員、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員

齋藤 達也　SAITO Tatsuya（客員研究員）
（4 解説）展覧会評『フレデリック・バジール、印象派の揺籃期』展、『ファンタン=ラトゥール、鋭敏な画家』展　『西洋美術研究』20　pp.216-221　三元社　20.9
（4 翻訳）久米桂一郎日記　東京文化財研究所研究資料データベース　https://www.tobunken.go.jp/materials/kume_diary　東京文化財研究所　21.3
（4 資料紹介）書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流（一）（塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也）『美術研究』433　pp.25-66　21.3
（6 発表）黒田清輝と久米桂一郎の滞仏期　日仏会館主催 若手研究者セミナー（日仏文化講演シリーズ第340回）　オンライン　20.7.18
（6 講演）ジョルジュ・ビゴーの時代のジャポニスム　「ジョルジュ・ビゴー展」展覧会記念講演会　宇都宮美術館　21.2.21
（7 所属学会）ジャポニズム学会、日仏美術学会、美術史学会、明治美術学会
（8 教育）明治学院大学文学部フランス文学科非常勤講師、立教大学異文化コミュニケーション学部非常

勤講師、一橋大学全学共通教育センター非常勤講師、東京都立大学人文社会学部人文社会学科非常勤講師、名古屋外国語大学非常勤講師

境野 飛鳥 SAKAINO Asuka（アソシエイトフェロー）

（4 編集）『世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか（第一部）』 57p　東京文化財研究所　21.3

（4 編集）『各国の文化財保護法令シリーズ[25] 英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）』 1028p　東京文化財研究所　21.3

（4 編集）Attributes-a way of understanding OUV-, 168p, Japan Center for International Cooperation in Conservation Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, 21.3

（7 所属学会）ICOMOS、日本建築学会、日本歴史学会

（8 教育）東京学芸大学非常勤講師

佐藤 嘉則 SATO Yoshinori（保存科学研究センター）

（2 報告）低酸素濃度殺虫法に用いるRP剤Kタイプからの有機酸発生（佐藤嘉則、岡部迪子、犬塚将英）『保存科学』60　pp. 27-32　21.3

（2 報告）博物館等におけるATP拭き取り検査によるカビ集落の活性評価について（間渕創、佐藤嘉則）『保存科学』60　pp. 41-50　21.3

（2 報告）空調設備のない収蔵施設の保存環境調査ー岐阜県関市春日神社の取り組みー（小野寺裕子、小峰幸夫、森島一貴、佐藤嘉則）『保存科学』60　pp. 151-160　21.3

（3 論文）*Mycoavidus* sp. Strain B2-EB: Comparative Genomics Reveals Minimal Genomic Features Required by a Cultivable Burkholderiaceae-Related Endofungal Bacterium (Yong Guo, Yusuke Takashima, Yoshinori Sato, Kazuhiko Narisawa, Hiroyuki Ohta, Tomoyasu Nishizawa) *Applied and Environmental Microbiology*, 86(18), e01018-e01020, 20.7.2

（3 論文）文化財建造物を加害したシバンムシ科甲虫のDNAバーコーディングに基づく同定法（小峰幸夫、篠崎（矢花）聡子、佐藤嘉則、原田正彦、斉藤明子、木川りか、藤井義久）『保存科学』60　pp. 19-26　21.3

（5 学会発表）人為的攪乱により形成された鍾乳洞内照明植生の微生物生態学的解析（黒坂愛美、佐藤嘉則、片山葉子、朽津信明、西澤智康）　日本土壌微生物学会2020年度大会　オンライン　20.6.5-6.8

（5 学会発表）虎塚古墳の壁画剥落片から分離された微生物の群集構造解析（松野美由樹、片山葉子、犬塚将英、稲田健一、矢島國雄、佐藤嘉則）　日本文化財化学会第37回大会　オンライン　20.9.5-9.7

（5 学会発表）虎塚古墳の壁画剥落片の微生物群集構造解析（佐藤嘉則、松野美由樹、犬塚将英、稲田健一、矢島國雄）　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10

（5 学会発表）湿度制御温風処理に用いる供試虫の熱耐性と殺虫効果判定への適用（小峰幸夫、佐藤嘉則、原田正彦、北原博幸、木川りか、藤井義久）　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10

（5 学会発表）収蔵庫内で実施したカビ除去事例ー重要文化財 大蔵経（元版）に対する保存修理事業から一（池田和彦、井上さやか、藤元裕二、佐藤嘉則）　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10

（6 講義）有害生物対策　令和2年度　アーカイブズ研修Ⅲ/公文書管理研修Ⅲ　国立公文書館　20.9.16

（7 所属学会）International Biodeterioration & Biodegradation Society、日本土壌微生物学会、日本微生物生態学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会

（7 委員会等）ひたちなか市史跡保存対策委員会、日本文化財科学会編集委員、国立民族学博物館共同研究員、日本土壌微生物学会事務局企画幹事、（公財）文化財虫菌害研究所文化財IPMコーディネータ委員会委員、AIを利用した文化財建造物の見守りシステム事業に係る有識者会議委員、文化財保存修復学会第42回大会プログラム作成委員会委員、国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、「法隆寺金堂壁画 保存活用委員会」保存環境ワーキング・グループ専門委員、文化財保存修復学会理事

（8 教育）東京芸術大学大学院文化財保存学専攻連携准教授

佐野 真規 SANO Masaki（アソシエイトフェロー）

（2 報告）付属DVD収録映像「『絹織製作研究所の実践ー映像記録ー』について」無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書 絹織制作技術　PP.61　21.3

（4 映像撮影・映像編集・構成）DVD『絹織製作研究所の実践ー映像記録ー』　無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書 絹織制作技術　21.3

（4 映像撮影・映像記録作成）「映像資料 日置箕をつくる」（約140分）「日置の飾り箕」（約8分）「映像資料戸隠箕をつくる」（約360分）「戸隠箕」（約12分）「映像資料阿波箕をつくる」（約180分）「阿波箕」（約14分）「映像資料 皮箕をつくる」（約180分）「皮箕」（約7分）（今石みぎわ、佐野真規）　東京文化財研究所　21.3

（4 映像撮影・編集）「京の国宝展　伝統の紙」　文化庁、東京文化財研究所　20.4

（4 映像撮影・編集）「京の国宝展　伝統の技」　文化庁、東京文化財研究所　20.4

（4 映像撮影・映像記録作成）「長良川の鵜舟をつくる」（17時間40分）（今石みぎわ、佐野真規）　東京文化財研究所　21.3

（4 映像撮影・監修）「邦楽器原糸製造の記録（短編）」、「邦楽器原糸製造の記録（長編）」（前原恵美、佐野真規）東京文化財研究所　21.2

（4 映像監修）「元書紙・連史紙探訪～現代の中国・竹紙製作の記録～」　国宝修理装潢師連盟　21.3

（4 映像撮影・監修）「琵琶製作の記録（長編） 石田克佳」（前原恵美、佐野真規） 東京文化財研究所 21.3

塩谷 純 SHIOYA Jun（文化財情報資料部）

（2 コメント）公募論文の査読結果について 『近代画説』29 pp.120-121 明治美術学会 20.12

（4 解説）師・菊池容斎との絆について―省亭の初期作品から 『渡辺省亭画集』 pp.278-279 小学館 21.3

（4 解説）渡辺省亭作品解説7点 『渡辺省亭画集』 p.295、p.299、p.300、p.303、p.304、p.305 小学館 21.3

（4 資料紹介）書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流（一）（塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也）『美術研究』433 pp.25-66 21.3

（6 発表）黒田清輝と久米桂一郎―日本洋画界を支えた交流（塩谷純・小山田智寛） 総合研究会 東京文化財研究所 20.12.1

（6 講演）近代日本画の"新古典主義"―小林古径の作品を中心に 第54回オープンレクチャー 東京文化財研究所 20.10.30

（7 所属学会）美術史学会、明治美術学会

（8 教育）沖縄県立芸術大学非常勤講師、金沢美術工芸大学芸術学専攻非常勤講師

清水 綾子 SHIMIZU Aayako（アソシエイトフェロー）

（4 編集）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日本古美術品保存修復協力事業 檜・八橋図 No.2017-1』 48p 東京文化財研究所 21.3

（4 校閲）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日本古美術品保存修復協力事業 檜・八橋図 No.2017-1』 48p 東京文化財研究所 21.3

（4 編集）（加藤雅人、清水綾子、片渕奈美香）『在外日本古美術品保存修復協力事業 林和靖・太公望図 No.2017-2』 35p 東京文化財研究所 21.3

（4 校閲）（加藤雅人、清水綾子、片渕奈美香）『在外日本古美術品保存修復協力事業 林和靖・太公望図 No.2017-2』 35p 東京文化財研究所 21.3

（4 編集）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日本古美術品保存修復協力事業 煙寺晩鐘図・平沙落雁図 No.2017-3』 31p 東京文化財研究所 21.3

（4 校閲）（加藤雅人、片渕奈美香、清水綾子）『在外日本古美術品保存修復協力事業 煙寺晩鐘図・平沙落雁図 No.2017-3』 31p 東京文化財研究所 21.3

（4 翻訳）1 Restoration Report（KATAFUCHI Namika, KATO Masato）『在外日本古美術品保存修復協力事業 檜・八橋図 No.2017-1』 pp.4-18 東京文化財研究所 21.3

城野 誠治 SHIRONO Seiji（文化財情報資料部）

（2 報告）仁和寺所蔵 国宝孔雀明王像の蛍光X線分析（早川泰弘、城野誠治）『仁和寺所蔵 国宝孔雀明王像光学調査報告書』 pp.144-151 東京文化財研究所 21.3

（2 報告）国宝法華経（久能寺経）薬草喩品第五に用いられている彩色材料について（早川泰弘、城野誠治）『国宝法華経（久能寺経）薬草喩品第五 光学調査報告書』 pp.65-72 東京文化財研究所 21.3

（2 報告）国宝法華経（久能寺経）薬草喩品第五における真鍮の利用について（早川泰弘、城野誠治）『国宝法華経（久能寺経）薬草喩品第五 光学調査報告書』 pp.73-79 東京文化財研究所 21.3

（2 報告）春日権現験記絵の彩色材料調査（巻九・巻十）（早川泰弘、城野誠治）『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 春日権現験記絵 巻九・巻十 光学調査報告書』 pp.29-63 東京文化財研究所 21.3

（2 報告）ワット・ラーチャプラディット漆扉部材の撮影 『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究―ワット・ラーチャプラディットの漆扉』 pp.49-56 東京文化財研究所 21.3

（3 論文）国宝久能寺経における真鍮泥の利用について（早川泰弘、城野誠治）『保存科学』60 pp.73-83 21.3

（6 講義）文化財写真で大切なこと 文化財の記録作成とデータベース化に関するハンズオン・セミナー「文化財写真入門―文化財の記録としての写真撮影実践講座」 上原美術館 20.8.24

（6 講演）ディジタル画像の基礎 講演2 文化財の記録作成とデータベース化に関するセミナー シリーズ「ディジタル画像の圧縮～画像の基本から動画像まで～」その1 ディジタル画像の基礎 東京文化財研究所 20.12.23

（6 講義）文化財写真の基礎 文化財の記録作成とデータベース化に関するハンズオン・セミナー「文化財写真入門―文化財の記録としての写真撮影実践講座」 東北歴史博物館 21.3.12

（7 所属学会）日本写真家協会、日本写真学会

杉山 恵助 SUGIYAMA Keisuke（客員研究員）

（7 所属学会）Institute of Conservation、文化財保存修復学会、American Institute for Conservation

（8 教育）東北芸術工科大学文化財保存修復学科准教授（文化財保存修復研究センター研究員兼務）

高桑 いづみ TAKAKUWA Izumi（特任研究員）

（1 共著）『観世文庫所蔵能楽資料解題目録』 観世清和監修・松岡心平編 分担執筆 檜書店 768p 21.1

（2 報告）with コロナの能舞台―能楽界の新型コロナウイルス対応報告― 『年刊 芸能』27 pp.190-196 芸能学会 21.3.31

（3 論文）〈半部〉の作り物と立花 『銕仙』703 pp.5-7 銕仙会 20.71

（3 論文）扉絵に描かれた楽器の意匠 『タイ所在日本製漆工芸品に関する調査研究―ワット・ラーチャプ

ラディットの漆扉―』 pp.31-36 東京文化財研究所 21.3
(4 連載) 能・狂言の萃点 『花もよ』49-54 ぶんがく社 20.5-21.3
(4 ラジオ出演) FM能楽堂 NHKFM 20.10.4、10.11、21.3.7、3.14
(4 エッセイ) 批評と感想「コロナ禍での思い―近年の舞台から―」『能楽タイムス』819 pp.4-5 能楽書林 20.6
(4 エッセイ) 批評と感想「素の魅力」『能楽タイムス』824 pp.4-5 能楽書林 20.11
(4 エッセイ)「この人に聞く 一語り継ぐ能楽の世界」インタビュー聞き手(一噌庸二)『国立能楽堂』パンフレット441 pp.21-28 独立行政法人日本芸術文化振興会 20.7
(4 エッセイ)「赤江瀑さんと出会って」インタビュー聞き手(白坂信行)『花もよ』52 pp.3-7
(6 講演)「道行の摂取」(坂真太郎、日吉栄寿) 日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画シンポジウム オンライン 20.11.1〜30
(6 講演) 囃子の魅力―楽器の役割― 国立能楽堂特別講座「能楽囃子講座」 国立能楽堂 21.1.28
(7 所属学会) 楽劇学会、能楽学会
(7 委員会等) 法政大学能楽研究所専門委員

田所 泰 TADOKORO Tai (客員研究員)
(3 論文) 柿内青葉と月耀会 『女子美術大学美術館コレクション 柿内青葉展』 pp.81-89 女子美術大学美術館 21.3
(4 記事) 作品解説 上村松園筆《紅葉可里図》(名都美術館蔵)上 『紫陽花』3 pp.27-31 美人画研究会 20.6
(4 記事) 作品解説 上村松園筆《紅葉可里図》(名都美術館蔵)下 『紫陽花』4 pp.23-29 美人画研究会 21.3
(4 記事) 作品解説5点、コラム1点 『女子美術大学美術館コレクション 柿内青葉展』 pp.15、19、21、23、25、38 女子美術大学美術館 21.3
(7 所属学会) 美術史学会、明治美術学会、早稲田大学美術史学会
(8 教育) 東京家政大学服飾美術学科非常勤講師

田中 淳 TANAKA Atsushi (客員研究員)
(1 共著)「迎えいれる絵画ー松本竣介《画家の像》から《Y市の橋》まで」(寺口淳治、宇多瞳、大谷省吾、江川佳秀、出原均、藤崎綾、田中淳、小此木美代子、長門佐季、橘川英規)『無辜の絵画 霧光、竣介と戦時期の画家』国書刊行会 pp.141-152 20.5

田中 潤 TANAKA Jun (客員研究員)
(2 報告) 春日権現験記絵 巻九・巻十にみられる装束表現―女性の装束を中心に― 『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 春日権現験記絵 巻九・巻十 光学調査報告書―調査結果―』 pp.100-104 東京文化財研究所 21.3
(4 解説) 大礼のご装束 『皇室』86 pp.56-79 扶桑社 20.4
(4 解説)「香川家文書と桂宮家旧蔵御宸翰」『学習院大学史料館ミュージアムレター』43 pp.2-3. 20.10
(4 解説)「有栖川御流・昭和天皇直筆御製草稿」『学習院大学史料館ミュージアムレター』43 pp.6-7. 20.10
(4 資料紹介) 書簡に見る黒田清輝・久米桂一郎の交流(一)(塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也)『美術研究』433 pp.25-180 21.3
(4 資料紹介)「桂宮家旧蔵本・個人蔵本広沢切について」『学習院大学史料館紀要』27 pp.43-46. 21.3
(4 資料紹介)「旧華族家資料目録Ⅲ 福羽家資料目録」(西山直志・田中潤・那須香織)『学習院大学史料館紀要』27 pp.1-62 21.3
(6 講演) 公家・女房装束と有職故実―令和に伝えられた日本服飾の美 奈良県立美術館特別展みやびの色と意匠展関連講座 奈良県立美術館 20.8.23.
(6 講演)「筆が織りなす皇室の美」展の楽しみ方 学習院桜アカデミー 学習院大学 20.11.7.
(6 発表) 近代の大礼と有職故実 第1回文化財情報資料部研究会 東京文化財研究所 20.6.23
(7 所属学会) 衣紋道研究会
(7 委員会等) 国指定天然記念物平林寺境内林保存管理推進委員会
(8 教育) 学習院大学史料館EF共同研究員、学習院大学学芸員取得課程非常勤講師、お茶の水女子大学生活文化学部非常勤講師、杉野服飾大学非常勤講師、國學院大學校史・学術研究センター客員研究員

友田 正彦 TOMODA Masahiko (文化遺産国際協力センター)
(2 報告) THE JAPANESE APPROACH TO WOODEN HERITAGE CONSERVATION. 1st IIWC Course on Wooden Heritage Conservation, *Proceedings*, pp.45-54, ICOMOS International Wood Committee, https://static1.squarespace.com/static/5cad2053da50d37b4c2cfd70/t/601b110a3452917b25194263/1612386576068/San+Sebastian+Proceedings+2020.pdf
(2 報告) ARCHITECTURE (TOMODA Masahiko, UNNO Satoshi, EZURA Tsuguto, MAEKAWA Ayumi, FUKUSHIMA Hirohito, MARTINEZ Alejandro, Pema Wangchuk) *VERNACULAR HOUSES in Bhutan, Western Central Area, Thimphu, Punakha, Paro, Haa*, pp. 31-201, TOBUNKEN, DoC MoHCA, 21.3
(2 報告) HERITAGE CONSERVATION: Three Candidate Traditional Houses of National Designated Cultural Heritage. *VERNACULAR HOUSES in Bhutan, Western Central Area, Thimphu, Punakha, Paro, Haa*, pp.204-207, TOBUNKEN, DoC

MoHCA, 21.3
（3 論文）ミャンマー・バガン遺跡群の煉瓦造建築技法に関する研究（その3） アーチの構築技法について（友田正彦、金善旭、マルティネス・アレハンドロ） 日本建築学会大会学術講演梗概集 20.7
（4 編集）(TOMODA Masahiko, KANAI Ken) *VERNACULAR HOUSES in Bhutan, Western Central Area, Thimphu, Punakha, Paro, Haa*, 238p, TOBUNKEN, DoC MoHCA, 21.3
（4 編集）(TOMODA Masahiko, KANAI Ken, VAR Elif Berna, KIM Sothin) *Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor -Progress Report of 2020-*, 108p, APSARA/TNRICP, 21.3
（4 編集）（友田正彦、金井健、ヴァル・エリフ・ベルナ）『東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理 研究会記録』 73p 東京文化財研究所 21.3
（5 学会発表）アンコール・タネイ寺院遺跡の保存整備（友田正彦、間舎裕生、淺田なつみ、ヴァル・エリフ・ベルナ）東南アジア考古学会大会 オンライン 20.12.12
（6 パネリスト）第27回文化遺産国際協力コンソーシアム「コロナ禍における文化遺産国際協力のあり方」 オンライン 20.9.5
（6 パネリスト）研究会「東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理」 オンライン 20.11.21
（6 司会）第28回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産とSDGsIII 一地域社会における文化遺産の役割を考える一」 オンライン 21.1.31
（7 所属学会）東南アジア考古学会、日本建築学会、一般社団法人日本イコモス国内委員会理事、文化遺産国際協力コンソーシアム事務局長

中村 舞 NAKAMURA Mai（アソシエイトフェロー）
（2 報告）『文化財（近代文化遺産）の活用に関するアンケート調査結果』 30p 東京文化財研究所 21.3
（4 編集）『未来につなぐ人類の技⑳ 内部造作の保存と修復』 106p 東京文化財研究所 21.3
（7 所属学会）産業考古学会、日本金属学会、文化財保存修復学会

中村 亮介 NAKAMURA Ryosuke（アソシエイトフェロー）
（6 講習会）東京文化財研究所におけるIT資産管理について 令和2年度第1回情報システム部会研修会 東京文化財研究所 21.3.29

中山 俊介 NAKAYAMA Shunsuke（特任研究員）
（2 報告）内部造作の保存と修復 『内部造作の保存と修復』 pp.83-105 東京文化財研究所 21.3
（6 発表）近代文化遺産の保存と活用 近代文化遺産の保存と活用に関するシンポジウム 龍谷大学 20.12.5
（6 発表）第5福竜丸の保存について 「ふね遺産」認定記念シンポジウム 東京スポーツ文化館 21.2.21
（7 所属学会）日本船舶海洋工学会、文化財建造物保存修理研究会、文化財保存修復学会
（7 委員会等）高島炭坑整備活用委員会、伊豆の国市史跡等整備調査委員会韮山反射炉部会、佐渡市建造物保存活用に関する専門家会議、史跡原爆ドーム保存技術委員会、国立科学博物館重要科学技術史資料登録委員会、第五福竜丸船体等保存検討委員会
（8 教育）公立大学法人長岡造形大学非常勤講師

西 和彦 NISHI Kazuhiko（文化遺産国際協力センター）
（4 編集）『各国の文化財保護法令シリーズ[25]英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）』 1028p 東京文化財研究所 21.3
（4 解説）本報告書の経緯と内容、今後のための論点整理 『世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか（第一部）』 pp.7-12 東京文化財研究所 21.3
（4 編集）『世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか（第一部）』 57p 東京文化財研究所 21.3
（4 解説）Why Attributes? *Attributes -a way of understanding OUV-*, pp.9-13, Japan Center for International Cooperation in Conservation Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, 21.3
（4 編集）*Attributes -a way of understanding OUV-*. 168p, Japan Center for International Cooperation in Conservation Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, 21.3
（6 講義）建築空間における文化遺産の考え方 東京大学 東京大学 オンライン 21.5.29
（6 講義）和室を巡る話題2題 日本建築和室の世界遺産的価値WG 日本建築学会 オンライン 21.8.25
（6 講演）世界遺産の動向と立山砂防 立山砂防防災遺産シンポジウム 富山国際会議場 21.11.8
（6 パネリスト）パネルディスカッション 立山砂防防災遺産シンポジウム 富山国際会議場 21.11.8
（6 発表）COVID-19 and heritage in Japan. 2020 HeritAP Webinar, Impact of COVID-19 on World Cultural Heritage Sites and Moving Forward オンライン 21.11.19
（6 発表）Protection and Utilisation of Japanese Castle. International symposium
Academic Exchange between Iran and Japan in Cultural Heritage Field 帝京大学文化財研究所 オンライン 21.1.13
（6 講義）文化遺産を守るための取り組み 帝京大学 オンライン 21.1.18
（7 所属学会）ICOMOS、日本建築学会、建築史学会
（7 委員会等）彦根城世界遺産登録にかかる学術検討委員会、平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会、「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群一」の遺産影響評価基準等策定検討委員会、（公財）ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所

文化遺産保護協力事業委員会、国立西洋美術館活用・公開方針検討委員会、東京国立博物館本館保存活用計画検討WG、萩反射炉整備委員会
(8 教育) 東京理科大学理工学部非常勤講師

早川 典子 HAYAKAWA Noriko（保存科学研究センター）
(2 報告) 絵文化財クリーニング手法の開発 ―近年の研究紹介―『文化財修復処置に関する研究会 ―クリーニングとゲルの利用について―』 pp.15-24 21.3
(3 論文) On-site Surface Cleaning of Japanese Architecture Using Gels Incorporating Organic Solvents (Noriko Hayakawa, Yuka Fujii, Noriko Yamamoto and Chie Sano) *Studies in Conservation*, 65 (sup1), pp.139-141, 20.4
(3 論文) タンパク質を混和させた漆塗膜の化学構造と物性の検証（倉島玲央、早川典子）『保存科学』 60 pp.61-72 21.3
(4 解説) 伝統材料と技法の関連性について―科学的視点から― 『月刊文化財』684 pp.28-31 20.10
(4 解説) 文化財クリーニングに関する近年の動向 『月刊文化財』686 19-21 20.12
(4 解説) 画絹における在来技法と現代技法の科学的な差異について 無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書Ⅲ『絹織製作技術』 pp.64-67 21.3
(4 編集)『「文化財修復処置に関するワークショップ ―ゲルやエマルションを使用したクリーニング法―」報告書』 21.3
(4 編集)『「文化財修復処置に関する研究会 ―クリーニングとゲルの利用について―」報告書』 21.3
(5 学会発表) 呉春「白梅図」に使用された絵画基底材料と自然布系基底材に関する研究（早川典子、安永拓世、菊池理予、仙海義之） 文化財保存修復学会第42回大会 紙上開催 20.7.10
(5 学会発表) 伝統的な灰汁を利用した固着被災文書等の修復処置と効果の検討（木川りか、富川敦子、久保憲司、有吉正明、秋山純子、早川典子） 文化財保存修復学会第42回大会 紙上開催 20.7.10
(5 学会発表) 古典的膠の調製方法及び性状（宇高健太郎、早川典子、藤井佑果、大場詩野子、岡部迪子） 文化財保存修復学会第42回大会 紙上開催 20.7.10
(5 学会発表) 作製条件の異なる補修絹の劣化特性評価（岡部迪子、早川典子） 文化財保存修復学会第42回大会 紙上開催 20.7.10
(5 学会発表) 漆塗膜上の油脂系汚損除去を目的としたゲルクリーニングの検討（藤井佑果、早川典子、山府木碧） 文化財保存修復学会第42回大会 紙上開催 20.7.10
(5 学会発表) ミャンマーで採取された漆に関する研究（倉島玲央、山府木碧、早川典子） 文化財保存修復学会第42回大会 紙上開催 20.7.10
(5 学会発表) X線透過撮影による泥に覆われたキトラ古墳壁画の調査（犬塚将英、早川典子、大場詩野子、早川泰弘、高妻洋成） 日本文化財科学会第37回大会 Web開催 20.9.5-13
(5 学会発表) On-site Surface Cleaning of Japanese Architecture Using Gels Incorporating Organic Solvents (Noriko Hayakawa, Yuka Fujii, Noriko Yamamoto and Chie Sano) IIC Edinburgh Congress 2020 オンライン 20.11.4
(5 学会発表) 深さ方向による紫外線劣化させた漆塗膜の強度変化（倉島玲央、早川典子） 漆サミット2020 オンライン 20.11.21
(5 学会発表) 赤外分光法による植物性染織品に使用された地入れ材料の非破壊判別（八木千尋、吉村季織、高柳正夫、菊池理予、安永拓世、早川典子） 第36回近赤外フォーラム オンライン 20.11.25
(6 講義) 国宝修理装潢師連盟新任者研修会、「修理技術者に必要な科学（初級）」 20.7.17
(6 講義) 国宝修理装潢師連盟中級者研修会、「修理技術者に必要な科学（中級・上級）」 20.7.17
(7 所属学会) IIC、高分子学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
(7 委員会等)「法隆寺金堂壁画 保存活用委員会」壁画ワーキング・グループ 材料調査班専門委員、国宝修理装潢師連盟修理技術者資格制度委員会委員、厳島神社修理委員会委員、鎌倉芳太郎資料修理委員会委員
(8 教育) 東京藝術大学大学院連携教授

早川 泰弘 HAYAKAWA Yasuhiro（保存科学研究センター）
(2 報告) 仁和寺所蔵 国宝孔雀明王像の蛍光X線分析（早川泰弘、城野誠治）『仁和寺所蔵 国宝孔雀明王像 光学調査報告書』 pp.144-151 東京文化財研究所 21.3
(2 報告) 国宝法華経（久能寺経）薬草喩品第五に用いられている彩色材料について（早川泰弘、城野誠治）『国宝法華経（久能寺経）薬草喩品第五 光学調査報告書』 pp.65-72 東京文化財研究所 21.3
(2 報告) 国宝法華経（久能寺経）薬草喩品第五における真鍮の利用について（早川泰弘、城野誠治）『国宝法華経（久能寺経）薬草喩品第五 光学調査報告書』 pp.73-79 東京文化財研究所 21.3
(2 報告) 春日権現験記絵の彩色材料調査（巻九・巻十）（早川泰弘、城野誠治）『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 春日権現験記絵 巻九・巻十 光学調査報告書書』 pp.29-63 東京文化財研究所21.3
(2 報告) ワット・ラーチャプラディットの彩漆蒔絵・螺鈿扉の蛍光X線分析 『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究―ワット・ラーチャプラディットの漆扉』 pp.73-78 東京文化財研究所 21.3
(3 論文) 国宝久能寺経における真鍮の利用について（早川泰弘、城野誠治）『保存科学』60 pp.73-83

21.3
（4 解説）蛍光Ｘ線分析による文化財の非破壊調査 『OPTRONICS』5 （株）オプトロニクス社 pp.62-66 20.5
（4 解説）文化財の科学的調査・研究について 『月刊文化財』686 pp.4-5 20.12
（5 学会発表）蛍光Ｘ線分析における分析値の信頼性―金箔試料の定量分析に関する共同実験―（早川泰弘、田村朋美、脇谷草一郎、犬塚将英、荒木臣紀、降幡順子、渡邊緩子） 日本文化財科学会第37回大会 Web開催 2020.9.5-13
（5 学会発表）Ｘ線透過撮影による泥に覆われたキトラ古墳壁画の調査（犬塚将英、早川典子、大場詩野子、早川泰弘、高妻洋成） 日本文化財科学会第37回大会 Web開催 2020.9.5-13
（6 発表）鉛とその腐食に関する材料工学的な概論 「文化財に用いられている鉛の腐食と空気環境」研究会 東京文化財研究所 2020.10.12
（7 所属学会）日本文化財科学会、日本分析化学会、文化財保存修復学会
（7 委員会等）首里城美術工芸品等管理委員会委員、法隆寺金堂壁画保存活用委員会壁画ワーキンググループ材料調査班専門委員、岩手県立博物館における文化財への不適切行為事案に係る調査チームアドバイザー、石川県文化財保存修復工房運営委員会委員、九州国立博物館文化財保存修復施設運営委員会委員、京都国立博物館文化財保存修理所運営委員会委員、奈良国立博物館文化財保存修理所運営委員会委員
（8 教育）東京藝術大学大学院美術研究科連携教授、金沢美術工芸大学非常勤講師

林 美木子 HAYASHI Mikiko（アソシエイトフェロー）
（3 論文）Mapping Climate Change, Natural Hazards and Tokyo's Built Heritage（Peter Brimblecombe, Mikiko Hayashi, Yoko Futagami）, *Atmosphere*, 11(7), 680 (16p), 20.6
（3 論文）Amélioration du procédé de stabilisation des documents altérés par le tsunami sous l'angle du contrôle microbiologique (Mikiko HAYASHI, Yuka UCHIDA, Chie SANO, Hideo AKANUMA) *Support/Tracé*, 20, pp.29-34, 21.3
（3 論文）阪神・淡路大震災の日報分析と三つの震災における文化財レスキュー活動の比較（村井源、林美木子、二神葉子、内藤百合子、山梨絵美子）『保存科学』60 pp.1-18 21.3
（5 学会発表）ICCROM の非常時における文化財救出と応急処置研修とその展開（林美木子、Aparna Tandon、Yasmin Hashem） 文化財保存修復学会第42回大会 紙上開催 20.7.10
（6 司会）令和2年度文化財防災研修会「文化財レスキューと心理社会的支援」 国立アイヌ民族博物館 20.10.19
（7 所属学会）空気調和・衛生工学会、特定非営利活動法人文化財保存支援機構、日本建築学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会

二神 葉子 FUTAGAMI Yoko（文化財情報資料部）
（2 報告）ワット・ラーチャプラディットと漆扉部材、調査研究の経緯 『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究―ワット・ラーチャプラディットの漆扉―』 pp.13-20 東京文化財研究所 21.3
（2 報告）ワット・ラーチャプラディット伏彩色螺鈿扉部材のうち花鳥の図柄の概観 『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究―ワット・ラーチャプラディットの漆扉―』 pp.37-48 東京文化財研究所 21.3
（3 論文）デジタルコンテンツと持続性：明治大正期書画家番付データベースを例に（小山田智寛、二神葉子、逢坂裕紀子、安岡みのり）『デジタルアーカイブ学会誌』4（2） pp.154-157 20.4
（3 論文）Mapping Climate Change, Natural Hazards and Tokyo's Built Heritage (Peter Brimblecombe, Mikiko Hayashi, Yoko Futagami) *Atmosphere*, 11(7), 680 (16p), 20.6
（3 論文）阪神・淡路大震災の日報分析と三つの震災における文化財レスキュー活動の比較（村井源、林美木子、二神葉子、内藤百合子、山梨絵美子）『保存科学』60 pp.1-16 21.3
（3 論文）尾高鮮之助撮影バーミヤーン西大仏の写真による三次元空間画像の作成 『保存科学』60 pp.131-144 21.3
（3 論文）無形文化遺産の保護に関する第15回政府間委員会の概要と課題 『無形文化遺産研究報告』15 pp.53-76 21.3
（5 学会発表）デジタルコンテンツと継続性：明治大正期書画家番付データベースを例に（小山田智寛、二神葉子、逢坂裕紀子、安岡みのり） デジタルアーカイブ学会第4回研究大会スピンオフ研究発表会 オンライン 20.7.5
（6 講義）記録作成の意義 文化財の記録作成とデータベース化に関するハンズオン・セミナー「文化財写真入門―文化財の記録としての写真撮影実践講座」 東北歴史博物館 21.3.12
（6 司会） 文化財の記録作成とデータベース化に関するハンズオン・セミナー「文化財写真入門―文化財の記録としての写真撮影実践講座」 上原美術館 20.8.23
（7 所属学会）ICOMOS、地理情報システム学会、日本第四紀学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
（7 委員会等）文化審議会世界文化遺産部会臨時委員

米沢 玲 MAIZAWA Rei（文化財情報資料部）
（1 共著）「コラム 仏教美術と茶―羅漢図に見る喫茶文化」 山地純、永井晋、大澤泉、張名揚、福島金治、

沢村信一、桐山秀穂、岩田澄子、芳澤元、祢津宗伸、岩間眞知子、宮田眞、米沢玲、小田部家秀、池谷初恵、佐々木清匡、平野寛之、白川宗源、橋本雄、永井晋編『中世日本の茶と文化　生産・流通・消費をとおして（アジア遊学252）』勉誠出版　pp.162-168　20.9
（2 報告）仏教儀礼と茶―茶の湯前史―（東京例会 発表要旨 於五島美術館）『茶の湯文化学会・東京例会々報』97　pp.3　20.7
（3 論文）五百羅漢図の研究―清規の図像化―『鹿島美術研究』年報第37号別冊　pp.260-268　20.11
（4 編集）東京文化財研究所　研究報告書『売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望―売立目録の新たな活用を目指して―』　168p　21.3
（6 発表）『東京文化財研究所　研究報告書　売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望―売立目録の新たな活用を目指して―』（安永拓世、山口隆介、山下真由美、月村紀乃、中村節子、小山田智寛）　168p　東京文化財研究所　21.3
（7 所属学会）美学会、美術史学会、仏教芸術学会、三田芸術学会
（8 教育）清泉女子大学学芸員課程非常勤講師

前川 佳文　MAEKAWA Yoshifumi（文化遺産国際協力センター）
（2 報告）(Yoshifumi MAEKAWA, Stefania FRANCESCHINI, Guido BOTTICELLI, Monica M. CASTALDI, Luigi SOROLDONI) Casa di Apollo Project Report. *Progetto di studio e ricerca scientifica sulle metodologie di intervento per la conservazione, restauro e manutenzione di pitture murali e finiture di superficie nell'area Pompeiana, Novembre 2016-Dicembre 2019*, 85p, Grants-in-Aid for Scientific Research JAPAN, 20.8
（2 報告）Me-taw-ya Temple Project (No.1205). *Capacity Building; a Conservation Project for the Repair, Strengthening and Recovery of Temple 1205a Archaeological Area and Monuments of Bagan, Myanmar 2016–2020*, 197p, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, 21.3
（2 報告）Lokahteikpan Wall painting Project, pagoda 1580. *Capacity Building Report study, risk assessment and intervention proposal of the wall paintings decorating the southern wall of Lokahteikpan 'adorning the world from above' Pagoda 1580, Archaeological zone of Bagan, Myanmar*, 177p, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, 21.3
（3 論文）ミャンマー共和国バガン遺跡　ロカティーパン寺院壁画の保存修復と国際協力事業（前川佳文、Daniela M. MURPHY, Stefania FRANCESCHINI, Kyi LIN）『保存科学』60　pp.99-110　21.3
（5 学会発表）コンスウエムヘブ墓壁画の保存修復に向けた充填剤に関する研究（前川佳文、ダニエラ・マーフィー、ステファーニア・フランチェスキーニ、近藤二郎、河合望）　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10
（5 学会発表）ポンペイ遺跡「アポロの家」における壁画クリーニング法の施工実験（前川佳文、グイド・ボッティチェリ、ステファーニア・フランチェスキーニ、モニカ・マルテッリ・カスタルディ、ルイージ・ソロルドーニ）　日本文化財科学会第37回大会　Web開催　20.9.5-7
（6 講義）欧米諸国にみられる壁画の保存修復に係る報告書　国宝修理装潢師連盟「報告書」研修　東京文化財研究所　20.10.27
（7 所属学会）Associazione Bastioni、ICOMOS、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
（7 委員会等）金沢市石製文化財保存検討委員会委員

前原 恵美　MAEHARA Megumi（無形文化遺産部）
（2 報告）楽器を中心とした文化財保存技術調査報告４（前原恵美、橋本かおる）『無形文化遺産研究報告』15　pp.77-87　21.3
（2 報告）【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウィルス フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウィルス」報告書　97p　東京文化財研究所　21.3
（2 報告）無形文化財の保存・継承に関する調査研究プロジェクト報告書「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」をめぐる課題　41p　東京文化財研究所　21.3
（2 報告）目録（鎌田紗弓、曽村みずき、中川優子、前原恵美）『及川尊雄収集　紙媒体資料目録』　p.158　東京文化財研究所　21.3
（2 報告）無形文化財とコロナ禍　第15回無形民俗文化財研究協議会報告書『新型コロナ禍と民俗芸能』　pp.19-22　21.3
（3 論文）常磐津節《子宝三番叟》の音楽分析　『桐朋学園大学研究紀要』46　pp.1-17　桐朋学園大学　20.10
（3 論文）及川尊雄が収集した今村権七関係資料―楽器製作者の足跡　『及川尊雄収集　紙媒体資料目録』　pp.137-147　東京文化財研究所　21.3
（3 論文）伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響―調査研究とその課題―　『無形文化遺産研究報告』15　pp.5-11　21.3
（4 解説）日本の芸能を支える技Ⅵ　三味線　東京和楽器（前原恵美、橋本かおる）　8p　東京文化財研究所　20.12
（4 解説）日本の芸能を支える技Ⅶ　箏　国井久吉　pp.1-8　東京文化財研究所　21.3
（4 コラム）邦楽器糸のための原糸をつくる―邦楽器原糸製造技術―　無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書『絹織製作技術』　pp.22-25　東京文化財研究所　21.3
（4 エッセイ）音の浮世絵第13回（連載）『宮城會々報』l.234　pp.1-2　箏曲宮城會　20.6
（4 エッセイ）音の浮世絵第14回（連載）『宮城會々報』

l.235　pp.1-2　箏曲宮城會　21.1
（6 講演）「伝統芸能と新型コロナウイルス―数字と現状―」「株式会社 東京和楽器について」【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウィルス フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウィルス」　東京文化財研究所　20.9.25
（6 パネリスト）座談会（観世銕之丞、田村民子、奥田雅楽之一、小野木豊昭、光安慶太、前原恵美）【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウィルス フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウィルス」　東京文化財研究所　20.9.25
（6 発表）様々な竹材、代替材の使用感についての報告　第14回公開学術講座「日本の伝統的な管楽器と竹材」　東京文化財研究所　21.3.20
（6 パネリスト）「竹で拡がる、竹で深まる」（前原恵美、小峰幸夫、倉島玲央、亀川徹）　第14回公開学術講座「日本の伝統的な管楽器と竹材」　東京文化財研究所　21.3.20
（7 所属学会）楽劇学会、東洋音楽学会、文化財保存修復学会
（7 委員会等）文化庁文化財部伝統文化課芸能部門非常勤調査員、教科用図書検定調査審議会第 6 部会音楽小委員会委員、文化庁伝統芸能用具・原材料に関する調査委員
（8 教育）桐朋学園大学非常勤講師

牧野 真理子　MAKINO Mariko（アソシエイトフェロー）
（2 報告）「アンケート調査概要・中間集計結果（全体）」『文化遺産国際協力コンソーシアム　国際協力調査　海域交流ネットワークと文化遺産　令和2年度調査報告書』　pp.8-19　文化遺産国際協力コンソーシアム　21.33
（4 編集）『文化遺産国際協力コンソーシアム　国際協力調査　海域交流ネットワークと文化遺産　令和2年度調査報告書』　73p　文化遺産国際協力コンソーシアム　21.3
（4 編集）『第27回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「コロナ禍における文化遺産国際協力のあり方」報告書』　27p　文化遺産国際協力コンソーシアム　21.3

松保 小夜子　MATSUHO Sayoko（アソシエイトフェロー）
（3 論文）研究ノート：建築復元をめぐる国内外の近年の動向　『青山総合文化政策学』19　pp.95-107　21.3
（7 所属学会）日本生活学会

丸川 雄三　MARUKAWA Yuzo（客員研究員）
（1 公刊図書）「文化遺産オンライン試験公開版の構築」『アートシーンを支える』（デジタルアーカイブ・ベーシックス4、高野明彦 監修／嘉村哲郎 責任編集）勉誠出版　pp.233-248　20.12
（3 論文）研究資料デジタルアーカイブズの活用におけるウェブシステムの研究―身装画像データベース公開用ウェブAPIの設計と詳細　アート・ドキュメンテーション研究，27・28　pp.62-74　20.5
（6 講演）データベースと編集機能を用いた写真整理の支援　DiPLAS公開セミナー『埋もれた写真を掘り起こす―データベースを用いた整理術の開発と応用』　オンライン開催　20.5.17
（6 講演）デジタルアーカイブズの活用研究―テーマ型情報展示で広がる学びの可能性　シンポジウム『芸術文化資源デジタル・アーカイブの国際的共同利用―オンライン環境での知的生産システムとそのツール』（第31回アート・ドキュメンテーション学会年次大会）　オンライン開催　20.6.27
（5 学会発表）文化財デジタルアーカイブズの持続可能な発信環境の研究―文化遺産オンライン試験公開版の負荷分散システムを例に　第31回アート・ドキュメンテーション学会年次大会　オンライン開催　20.6.28
（6 講演）デジタル技術でみる「梅棹忠夫アーカイブズ」　みんぱくウィークエンド・サロン―研究者と話そう　国立民族学博物館　20.9.27
（6 発表）近代美術研究における関係資料の発信と活用　東京文化財研究所文化財情報資料部・令和2年度第4回研究会　東京文化財研究所　20.10.8
（8 教育）総合研究大学院大学比較文化学専攻担当教員

水谷 悦子　MIZUTANI Etsuko（文化財防災センター）
（3 論文）Influence of wall composition on moisture related degradation of the wall surfaces in Hagia Sophia, Istanbul (Etsuko Mizutani, Daisuke Ogura, Takeshi Ishizaki, Masaru Abuku, Juni Sasaki) *Journal of Building Physics*, 31p, https://doi.org/10.1177/1744259121996017, 21.3
（3 論文）Preliminary investigation of change of pore structure due to salt precipitation during evaporation in brick with X-ray computed tomography (Etsuko Mizutani, Daisuke Ogura, Masaru Abuku, Hannelore Derluyn) *Monument Future: Decay and Conservation of Stone*, pp.455-460, S. Siegesmund and B. Middendorf, 20.9
（4 編集）『保存科学』60　160p　21.3
（5 学会発表）Environmental Research on Conservation Conditions of the Hagia Sophia Part 2: Numerical Analyses of Heat and Moisture Transfer to Study Deterioration of Outer Walls (Etsuko Mizutani, Daisuke Ogura, Takeshi Ishizaki, Masaru Abuku, Juni Sasaki) International Hagia Sophia Symposium: Architecture and Preservation　オンライン　20.9.24-25
（5 学会発表）Environmental Research of Conservation Conditions of the Hagia Sophia Part 1: Field Survey of Environmental Conditions, Moisture Content and Salt Damage (Daisuke Ogura, Takeshi Ishizaki, Masaru Abuku,

Juni Sasaki, Etsuko Mizutani) International Hagia Sophia Symposium: Architecture and Preservation　オンライン　20.9.24-25
（5 学会発表）Environmental Research of Conservation Conditions of the Hagia Sophia Part 3: Numerical Analyses of Whole Building Heat and Moisture Transfer (Masaru Abuku, Takeshi Ishizaki, Daisuke Ogura, Juni Sasaki, Etsuko Mizutani) International Hagia Sophia Symposium: Architecture and Preservation　オンライン　20.9.24-25
（7 所属学会）日本建築学会、日本文化財科学会、ICOMOS (ISCS)

野城 今日子　YASHIRO Kyoko（アソシエイトフェロー）
（3 論文）小室達《伊達政宗騎馬像》の制作とその社会的背景をめぐって　『美術研究』431　pp.1-24　20.8
（2 報告）北村西望作《平和祈念像》にみる記念碑の戦後　『鹿島美術研究』37別冊　pp.574-581　20.11
（6 講演）北村西望と曠原社―北区との関わりを中心に―　北区文化振興財団アトリエ館公開見学会　（仮称）彫刻アトリエ館　20.10.3
（6 発表）曠原社に関する資料の紹介　屋外彫刻調査保存研究会研究例会　オンライン　20.12.13
（6 発表）屋外彫刻を中心とした「文化財」ならざるモノの保存状況についての報告と検討―シンポジウム開催を見据えて―　文化財情報資料部研究会　東京文化財研究所　20.12.21
（7 所属学会）美術史学会、明治美術学会、成城美学美術史学会、屋外彫刻調査保存研究会

安永 拓世　YASUNAGA Takuyo（文化財情報資料部）
（2 報告）「売立目録デジタルアーカイブの概要」『東京文化財研究所　研究報告書　売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望―売立目録の新たな活用を目指して―』　pp.7-15　東京文化財研究所　21.3
（2 報告）「江戸時代に用いられた特殊な支持体」『無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書　絹製作技術』　pp.80-83　東京文化財研究所　21.3
（3 論文）「「紀伊田辺の画家　真砂幽泉展」を観て―地域に還元される展覧会のあり方―」『美術研究』432　pp.57-69　20.12
（3 論文）「売立目録デジタルアーカイブから浮かび上がる近世絵画の諸問題」『東京文化財研究所　研究報告書　売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望―売立目録の新たな活用を目指して―』　pp.109-134　東京文化財研究所　21.3
（4 解説）「作品解説」『平成29年度　在外日本古美術品保存修復協力事業　林和靖・太公望図　曾我蕭白筆　インディアナポリス美術館（アメリカ合衆国）　紙本墨画　掛軸装　4幅』　pp.24-28　東京文化財研究所　21.3
（4 編集）『東京文化財研究所　研究報告書　売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望―売立目録の新たな活用を目指して―』（安永拓世、山口隆介、山下真由美、月村紀乃、中村節子、小山田智寛）　168p　東京文化財研究所　21.3
（5 学会発表）「呉春「白梅図」に使用された絵画基底材料と自然布系基底材に関する研究」（早川典子、安永拓世、菊池理予、仙海義之）　文化財保存修復学会第42回大会　紙上開催　20.7.10
（6 講演）「江戸中期の画壇と五十嵐浚明―上方と新潟の交流と往来―」　新潟市歴史博物館「生誕320年記念特別展五十嵐浚明―越後絵画のあけぼの―」特別講演会　新潟市歴史博物館　セミナー室　20.12.6
（6 発表）片野四郎旧蔵「羅漢図」の近代における一理解　令和2年度文化財情報資料部第8回研究会　東京文化財研究所　21.2.25
（7 所属学会）美術史学会、和歌山地方史研究会
（7 委員会等）八尾市史専門部会員
（8 教育）慶應義塾大学文学部非常勤講師

山田 大樹　YAMADA Hiroki（客員研究員）
（1 共著）「近代都市計画の狭間で」　鈴木薫、近藤二朗、赤堀雅幸（編）『中東・オリエント文化事典』丸善出版　pp.588-589　20.9
（2 報告）Japan's Support program and challenges to post-disaster reconstruction of Heritage and Historic settlements. *A Report of NEAJ Seminar on Post-Disaster Heritage Reconstruction and Resilient Society*, pp.12-25, Nepalese Engineers Association Japan, 20.9
（7 所属学会）ICOMOS、日本建築学会

ヤンセ ヘルガ　JANSE Helga（日本学術振興会特別研究員）
（3 論文）The Grey Area of Gender in Intangible Cultural Heritage: Analysis of Japan's Inscribed Elements on the Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity　New Approach to Cultural Heritage: Profiling Discourse Across Borders, edited by Le CHENG, Jianping YANG and Jianming CAI,　pp.123-151　Zhejiang University Press　20.11
（4 エッセイ）無形文化遺産保護制度のジェンダー問題を研究　コンニチハ！ニッポン，1　ウェブサイト　文化遺産の世界　21.3.3
（5 学会発表）無形文化遺産におけるジェンダーに基づく役割分担のダイナミクス―日本の山・鉾・屋台行事を事例として　文化資源学会第10回博士号取得者研究発表会　オンライン　20.12.19
（5 学会発表）Intangible cultural heritage as a mirror of societal gender structures: a discussion based on case studies　Association of Critical Heritage Studies 5th Biennial Conference (ACHS 2020: Futures)　オンライン　20.8.27
（6 発表）ユネスコ無形文化遺産保護条約とジェンダー

―日本の記載文化遺産を分析対象として　芸能文化研究会第15回研究会　オンライン　20.9.19
（7 所属学会）ICOMOS、ICOMOS International Committee on Intangible Cultural Heritage (ICICH)、Association of Critical Heritage Studies (ACHS)、文化資源学会
（7 委員会等）ACHS Intangible Cultural Heritage Network Committee

山梨 絵美子　YAMANASHI Emiko　（副所長）
（4 解説）春日権現験記絵巻を見るということ　『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 春日権現験記絵 巻九・巻十 光学調査報告書』　東京文化財研究所　21.3
（6 発表）葛飾北斎絵入り版本群・織田一磨文庫のオープンアクセス事業--ゲッティ研究所との協同による書誌情報国際発信の実践（古典籍書誌整備と資料保全）（橘川英規、田村彩子、阿部朋絵、江村知子、山梨絵美子）アートドキュメンテーション学会秋季大会　オンライン　20.11.28
（6 発表）ゲッティ研究所が所蔵する矢代幸雄と画商ジョセフ・デュヴィーンの往復書簡　文化財情報資料部研究会　東京文化財研究所地下セミナー室　20.8.25
（6 発表）白馬会の遺産としての『日本美術年鑑』　令和2年度第9回文化財情報資料部研究会　東京文化財研究所地下セミナー室　21.3.25
（7 委員会等）秋田市千秋美術館協議会美術作品等評価審査委員会委員、江戸東京博物館資料収蔵委員会委員、大分市美術館美術品収集委員会委員、迎賓館の改修に関する懇談会委員、東京都美術館運営委員会委員、千葉県文化財保護審議会委員日光市美術作品等収集審査会委員、文化庁文化審議会美術品補償制度部会委員、文化庁文化審議会文化財分科会委員、静岡県立美術館専門委員、横須賀市美術館美術品選定評議委員

5. 研究交流

令和２年度の研究交流の状況

本章には、例年は職員の海外渡航、所外の研究協力者の国内もしくは海外から海外への派遣、招へい研究員や海外研究者の来訪、施設見学といった研究交流の実績が記載されるが、本年度は新型コロナウイルス感染症拡大のためいずれも実施されなかった。

ただし、移動を伴わないウェブ会議等による国内外の専門家・専門機関との交流は実施されており、それらについては各プロジェクトの成果を参照されたい。

6. 資 料

1．主な所蔵資料 …… 159

1．図書資料 …… 159

2．その他 …… 160

2．研究所関係資料 …… 161

1．設立の経緯 …… 161

2．年代別重要事項 …… 161

3．歴代所長（昭和５年～令和２年度）…… 164

4．名誉研究員 …… 165

5．令和２年度予算等 …… 166

3．東京文化財研究所関係事業索引 …… 171

1．主な所蔵資料

1．図書資料

(1)　美術関係図書

日本・東洋・欧米の美術に関するものを中心に、各地方公共団体刊行の文化財関係調査報告書、展覧会の図録・目録類、売立目録など和文欧文あわせて 173,011 冊の図書に加え、和文 5,486 種、韓文 54 種、中文 153 種、欧文 507 種におよぶ美術関係雑誌 168,062 冊を所蔵している。
その他江戸期の写本版本をはじめ、明治大正期刊行の大型美術図録や美術雑誌、また明治から昭和初期に開催された各種博覧会展覧会資料など、多くの貴重書を所蔵している。

(2)　無形文化遺産関係図書

古典芸能・民俗芸能・寺事・伝統的な技術、その他我が国の無形文化遺産の研究に必要な図書 18,795 冊を所蔵している。そのなかには、雅楽画報・演劇画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第 1 次）・テアトロ（第 1 次）・新劇・上方・民俗芸能・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説など現在では入手しにくい雑誌、国立劇場ほかで行われる芸能公演の上演資料や声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本など、多くの貴重書を含んでいる。令和 2 年度は 314 冊を登録し、現在進行中である。

(3)　保存科学・修復技術関係図書

伝統的生産及び工芸技術書、技術史またはそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書及び化学・物理学・生物学部門の保存科学の関連和洋書、あわせて約 10,810 冊を所蔵している。

(4)　日本国外の文化遺産関係図書

文化遺産国際協力センターでは、海外の文化遺産や文化遺産保存、文化遺産国際協力や文化遺産保護制度に関する国内外の図書資料を約 14,000 点所蔵している。また、文化遺産保護関連機関のパンフレットなど図書以外の文献資料の収集、さらに国内外の文化遺産保護関連法令資料の収集を実施している。

令和 2 年度における収集数（韓文・中文図書は、和漢書として計上）

区　分	美術関係	無形文化遺産関係	保存修復関係	日本国外の文化遺産関係	計
和漢書	2,613 冊	311 冊	694 冊	72 冊	3,690 冊
洋　書	85 冊	3 冊	16 冊	61 冊	165 冊
合　計	2,698 冊	314 冊	710 冊	133 冊	3,855 冊

2．その他

(1)　美術関係資料

文化財情報資料部が管理している写真資料は、絵画・彫刻・工芸・建築等の台紙貼写真、売立目録カードなど総数約 26 万点である。写真原板は、モノクロ４×５フィルム約 49,740 点、カラー４×５フィルム約 8,980 点、半切ほかガラス乾板約 21,000 点をはじめとして、各種サイズのモノクロフィルム約 3,450 点、Ｘ線フィルム･赤外線フィルム約 3,300 点などを所蔵している。また、当研究所旧職員梅津次郎、秋山光和、久野健、中村傳三郎各氏寄贈研究資料を公開しているほか、田中一松、松島健、鈴木敬各氏旧蔵写真資料の整理を行っている。このほか、拓本類、作家伝記資料、落款印章資料、近現代作家・団体・画廊・作品資料、資料スクラップ等と図版カード、各種索引類などを管理している。

(2)　無形文化遺産関係資料

無形文化遺産部では、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能の技法を、録音・録画、写真撮影等の形で記録することを重要な業務としてきた。これまでに、現地での実況や所内の実演記録室等での演奏を記録したオープンリールテープ約 2,300 点、ビデオ 1,191 点、スチール写真は関連する文書の記録写真等も含め約 19 万点、CD はオープンリールテープをデジタル化した物を中心に 1,986 点、DVD3,839 点、BD752 点を作成してきた。令和 2 年度は、DVD10 点、BD1 点を登録した。また、市販された伝統芸能関係の資料の収集も進めている。ことに、1960（昭和35）年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションは、明治・大正・昭和 3 代にわたって発売された各種邦楽の SP レコードを網羅した約 6,000 枚の一大コレクションで、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。レコードの収集枚数は現在約 7,300 枚に及んでいる。その他これまでに、市販のビデオ 530 点、CD1,885 点、DVD1,486 点、BD7 点を収集してきた。うち令和 2 年度は、市販の CD1 点を登録した。なお SP レコードコレクションの詳細は『音盤目録Ⅰ～Ⅴ』（東京国立文化財研究所刊　1966～1996）で公表している。

(3)　保存科学・修復技術関係資料

保存科学研究センターでは、考古遺物や美術工芸品など、諸部門の文化財を撮影したＸ線フィルムを多数所蔵する。Ｘ線透過撮影は昭和20年代から力を注いで行っており、近年それらのデータをデジタル化し、整理する作業を進めている。

(4)　国際関係資料

文化遺産国際協力センターでは文化遺産保護に関する国際協力の分野で活躍した日本人専門家の資料を受け入れている。関野克氏旧蔵資料には、国際機関での会議や、個別の文化遺産保存に関わる記録が含まれている。特に、UNESCO の条約や勧告に関わる資料には、草案や日本政府の意見書なども含まれ、その成立の経緯や日本政府の関与なども知ることができる。また、千原大五郎氏旧蔵資料には、ボロブドゥール修復事業関連の会議録、書簡類、修復案、図面、オランダ統治時代の研究書や、その他の東南アジア諸国の遺跡に関する文献や図面、写真も数多く含まれる。さらに、野口英雄氏が収集した、文化遺産の危機管理やユネスコ日本信託基金による保存修復事業などに関する資料を受け入れている。

2．研究所関係資料

1．設立の経緯

東京文化財研究所は、2001（平成13）年4月1日に東京国立文化財研究所が独立行政法人化され独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となり、さらに2007（平成19）年4月1日に独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所となり、現在に至っている。その前身である東京国立文化財研究所は、1952（昭和27）年4月1日に発足し、その母体となったものは、1930（昭和5）年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、1924（大正13）年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選択を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鐐二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかって諸方面の意見を徴し、またわが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

(1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
(2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
(3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
(4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2．年代別重要事項

期　日	事　項
昭和元年12月25日	前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・同岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建物造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。
昭和2年 2月 1日	美術研究所準備事業を開始した。
同年10月28日	東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した（本館）。
昭和3年 9月	前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
昭和4年 5月29日	遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。
昭和5年 6月28日	勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。
同年10月17日	美術研究所開所式を挙行した。
昭和7年 1月 1日	美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。
同年 4月18日	株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。
同年 5月26日	帝国美術院はこの申出を受理した。 明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。
昭和9年10月18日	毎年10月18日を開所記念日と定めた。
昭和10年 1月28日	鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。

期　日	事　　項
昭和10年 4月	『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。
同年 6月 1日	勅令第 148 号により美術研究所官制が公布された。
	研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。
昭和12年 6月24日	勅令第 281 号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。
同年11月29日	美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。
昭和13年 2月12日	木造、平屋建、延面積 97㎡の写真室 1 棟が竣工した。
昭和19年 8月10日	黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。
昭和20年 5月28日	美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町 1 丁目本間家倉庫 3 棟に疎開した。
同年 7～8月	酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。
昭和21年 3月29日	酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。
同年 4月 4日	酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し、引揚げを完了した。
同年 4月16日	東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。
昭和22年 5月 3日	美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。 国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた（保存科学部の前身）。昭和 23 年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室（66㎡）に設けた。
昭和25年 8月29日	文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。
	文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。
昭和26年 1月31日	美術研究所組織規程が定められ、第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。
昭和27年 4月 1日	文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の 3 部 1 室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。 また文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。
同年 7月 1日	芸能部研究室として東京藝術大学音楽学部邦楽科教室 2 室を同大学から借用し、研究を開始した。
昭和28年 4月26日	保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫 132㎡を改造のうえ移転した。
昭和29年 7月 1日	東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。
昭和32年 3月22日	東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、 8 ㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。
同年11月30日	従来の 2 階建書庫の上にさらに 1 階を増築 3 階建とし、増築分延面積 71㎡が竣工した。
昭和34年 4月30日	東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。
昭和36年 9月16日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。
昭和37年 3月31日	東京国立博物館内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）として、鉄筋コンクリート造、2 階建、延面積 663㎡の建物 1 棟が竣工した。
同年 7月 1日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。
同年 7月20日	芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。
昭和43年 6月15日	文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。
昭和44年 8月23日	保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延 1,950.41㎡）の起工式が行われた。
昭和45年 3月25日	前記の別館が竣工したので、同年 5 月 26 日竣工式が行われた。芸能部は、別館 3 階に移転した。
同年 5月 8日	保存科学部は別館の地階～2 階に実験用機械類の移転据付を完了した。
同年 6月29日	保存科学部庁舎の 1 階の模様替工事に着手し、同年 10 月 15 日工事が完了した。
同年11月 2日	所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の 1 階に移転した（本館は、美術部庁舎となる）。これにより研究所の所在地表示は「12 番 53 号」から「13 番 27 号」に変更された。

期　日	事　　項
昭和46年 4月 1日	保存科学部庁舎及び別館の敷地 2,658㎡を東京国立博物館から所管換えされた。
昭和48年 4月12日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ４部１課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。
昭和52年 4月18日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により５部１課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。
昭和53年 3月20日	本館構内の写場等（木造、平屋建、延面積 144㎡）を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下１階、地上３階、延面積 569. 95㎡の建物が竣工した。
同年 4月 5日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。
昭和59年 6月28日	文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。
平成 2年10月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、５部１室１課となった。
平成 5年 4月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、アジア文化財保存研究室は、国際文化財保存修復協力室となった。
平成 7年 4月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力室が廃止され、新たに国際文化財保存修復協力センターが設置された。同センターには、企画室及び環境解析研究指導室が置かれ、１センター５部１課となった。 東京藝術大学と「東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の教育研究に対する連携・協力に関する協定書」が交わされ、連携併任分野として独立専攻大学院文化財保存学専攻（システム保存学）が設置された。
平成 9年10月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力センターに保存計画研究指導室が置かれた。
平成12年 2月 4日	新営庁舎として、鉄筋コンクリート造、地上４階地下１階、延面積 10,557. 99㎡（建築面積 2,258. 48㎡）が竣工した。
同年 2月21日	新営庁舎の竣工にともない、別館（庶務課・芸能部・保存科学部・修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）部分の移転が開始された。
同年 3月 6日	新営庁舎の竣工にともない、本館（美術部・情報資料部）の移転が開始された。
同年 3月22日	建設省関東地方建設局営繕部より、新営庁舎の外構工事、植栽等の引き渡しを受け、新営庁舎関係の工事が完了した。
同年 5月11日	新営庁舎の竣工を記念し、開所記念式典を挙行した。 この式典の挙行に際し、毎年５月 11 日を開所記念日と定めた。
平成13年 3月29日	黒田記念館改修工事が竣工し、展示スペースが黒田記念室及び展示室の２室になった。
同年 4月 1日	東京国立文化財研究所は、奈良国立文化財研究所と統合され、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となった。 この独立行政法人化にともない、東京文化財研究所は、管理部、協力調整官―情報調整室、美術部、芸能部、保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターの１センター５部１協力調整官―情報調整室となった。
平成15年 9月19日	黒田記念館にエレベーターを設置し、門扉、外構の改修工事を行った。
平成18年 4月 1日	文化財研究所組織規程の一部が改正されて、協力調整官―情報調整室は企画情報部に、芸能部は無形文化遺産部に、国際文化財保存修復協力センターは文化遺産国際協力センターとなった。
平成19年 4月 1日	独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所は、独立行政法人文化財研究所と独立行政法人国立博物館との統合により、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所となり、黒田記念館は、東京国立博物館に移管された。 この統合にともない、東京文化財研究所は、美術部を企画情報部に、保存科学部と修復技術部は保存修復科学センターに統合し、３部２センターとなった。
平成22年 4月 1日	国立文化財機構組織規程等の一部が改正されて、管理部は研究支援推進部となった。
平成28年 4月 1日	国立文化財機構組織規程等の一部が改正されて、企画情報部は文化財情報資料部に、保存修復科学センターは保存科学研究センターとなった。

3．歴代所長（昭和５年～令和２年度）

役　　職	氏　名	期　　間
主　　事	正木直彦	昭和　5. 6.28～昭和　6.11.24
主　　事	矢代幸雄	昭和　6.11.25～昭和 10. 5.31
所長事務取扱	和田英作	昭和 10. 6. 1～昭和 11. 6.21
所　　長	矢代幸雄	昭和 11. 6.22～昭和 17. 6.28
所長事務取扱	田中豊蔵	昭和 17. 6.29～昭和 22. 8.15
所　　長	田中豊蔵	昭和 22. 8.16～昭和 23. 5.10
所 長 代 理	福山敏男	昭和 23. 5.11～昭和 24. 8.30
所　　長	松本栄一	昭和 24. 8.31～昭和 27. 3.31
所長事務代理	矢代幸雄	昭和 27. 4. 1～昭和 28.10.31
所　　長	田中一松	昭和 28.11. 1～昭和 40. 3.31
所　　長	関野　克	昭和 40. 4. 1～昭和 53. 3.31
所　　長	伊藤延男	昭和 53. 4. 1～昭和 62. 3.31
所　　長	濱田　隆	昭和 62. 4. 1～平成　3. 3.31
所　　長	西川杏太郎	平成　3. 4. 1～平成　8. 3.31
所　　長	渡邊明義	平成　8. 4. 1～平成 13. 3.31
（独立行政法人文化財研究所　東京文化財研究所に移行）		
所　　長	渡邊明義	平成 13. 4. 1～平成 16. 3.31
所　　長	鈴木規夫	平成 16. 4. 1～平成 19. 3.31
（独立行政法人国立文化財機構　東京文化財研究所に移行）		
所　　長	鈴木規夫	平成 19. 4. 1～平成 22. 3.31
所　　長	亀井伸雄	平成 22. 4. 1～平成 30. 7.17
所長事務代理	山梨絵美子	平成 30. 7.18～平成 30.12.31
所　　長	齊藤孝正	平成 31. 1. 1～現在

4．名誉研究員

氏　名	退職時官職名	在所期間	名誉研究員発令年月日
江上　綏	情報資料部主任研究官	昭和 38. 5.18～昭和 59. 3.31	昭和 59.10.18
猪川和子	情報資料部文献資料研究室長	昭和 22. 6.27～昭和 60. 3.31	昭和 60.10.18
三隅治雄	芸能部長	昭和 27.10. 1～昭和 63. 3.31	昭和 63.10.18
濱田　隆	所長	昭和 62. 4. 1～平成 3. 3.31	平成 3.10.18
関口正之	美術部長	昭和 42. 2. 1～平成 3. 3.31	平成 3.10.18
佐藤道子	芸能部長	昭和 34. 4. 1～平成 4. 3.31	平成 4.10.18
馬淵久夫	保存科学部長	昭和 50.10. 1～平成 4. 3.31	平成 4.10.18
新井英夫	保存科学部長	昭和 45. 9. 1～平成 5. 3.31	平成 5. 4. 1
西川杏太郎	所長	平成 3. 4. 1～平成 8. 3.31	平成 8. 4. 1
三輪英夫	美術部第二研究室長	昭和 53. 8. 1～平成 8. 3.31	平成 8. 4. 1
蒲生郷昭	芸能部長	昭和 56. 4. 1～平成 10. 3.31	平成 10. 4. 1
中里壽克	修復技術部第一修復技術研究室長	昭和 39. 4. 1～平成 10. 3.31	平成 10. 4. 1
宮本長二郎	国際文化財保存修復協力センター長	平成 6. 4. 1～平成 11. 3.31	平成 11. 4. 1
羽田　昶	芸能部音楽舞踊研究室長	昭和 51. 4. 1～平成 12. 3.31	平成 12. 4. 1
中村茂子	芸能部民俗芸能研究室長	昭和 39. 7. 1～平成 13. 3.31	平成 13. 4. 1
増田勝彦	修復技術部長	昭和 48. 8. 1～平成 13. 3.31	平成 13. 4. 1
米倉迪夫	情報資料部長	昭和 50. 9. 1～平成 13. 3.31	平成 13. 4. 1
星野　紘	芸能部長	平成 10. 4. 1～平成 14. 3.31	平成 14. 4. 1
平尾良光	保存科学部化学研究室長	昭和 62. 4. 1～平成 15. 3.31	平成 15. 4. 1
井手誠之輔	協力調整官―情報調整室長	昭和 62. 7. 1～平成 16. 3.29	平成 16. 3.30
斎藤英俊	国際文化財保存修復協力センター長	平成 11. 4. 1～平成 16. 3.30	平成 16. 3.31
西浦忠輝	保存科学部長	昭和 50. 7. 1～平成 16. 3.31	平成 16. 4. 1
鈴木廣之	美術部日本東洋美術研究室長	昭和 54. 9. 1～平成 17.11.30	平成 17.12. 1
青木繁夫	文化遺産国際協力センター長	昭和 49. 7. 1～平成 19. 3.31	平成 19. 3.31
三浦定俊	副所長	昭和 48. 8. 1～平成 20. 3.31	平成 20. 4. 1
鎌倉惠子	無形文化遺産部無形文化財研究室長	昭和 63. 4. 1～平成 20. 3.31	平成 20. 4. 1
鈴木規夫	所長	平成 16. 4. 1～平成 22. 3.31	平成 22. 4. 1
中野照男	副所長	平成 4. 4. 1～平成 23. 3.31	平成 23. 4. 1
清水真一	文化遺産国際協力センター長	平成 19. 4. 1～平成 23. 3.31	平成 23. 4. 1
石﨑武志	副所長	平成 8.12. 1～平成 26. 9.30	平成 26.10. 1
田中　淳	副所長	平成 6.11. 1～平成 28. 3.31	平成 28. 4. 1
川野邊渉	文化遺産国際協力センター長	昭和 63.10. 1～平成 28. 3.31	平成 28. 4. 1
岡田　健	保存科学研究センター長	平成 4. 4. 1～平成 29. 3.31	平成 29. 4. 1
津田徹英	文化財情報資料部長	平成 11. 1. 1～平成 30. 3.31	平成 30. 4. 1
飯島　満	無形文化遺産部長	平成 16. 4.16～平成 31. 3.31	平成 31. 4. 1
中山俊介	文化遺産国際協力センター長	平成 18. 2. 1～平成 31. 3.31	平成 31. 4. 1
佐野千絵	保存科学研究センター長	平成 1. 4. 1～令和 2. 3.31	令和 2. 4. 1
山梨絵美子	副所長	昭和 59. 4. 1～令和 3. 3.31	令和 3. 4. 1
高桑いづみ	特任研究員	平成 4. 4. 1～令和 3. 3.31	令和 3. 4. 1

5．令和２年度予算等

（1） 予　算

（単位：千円）

事　　項	予算額
一般管理費	129,351
基礎研究事業費	62,162
応用研究事業費	67,598
国際遺産保護事業費	100,651
情報公開事業費	85,838
研修協力事業費	3,237
合　　計	448,837

予算とプロジェクトとの対応

文化財情報資料部

略番	分類項目	プロジェクト名	事業区分
シ 01	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究	情報公開事業費
シ 02	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	日本東洋美術史の資料学的研究	基礎研究事業費
シ 03	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	近・現代美術に関する調査研究と資料集成	基礎研究事業費
シ 04	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開	基礎研究事業費
シ 05	④情報収集・成果公開に関する事業	文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究	情報公開事業費
シ 06	④情報収集・成果公開に関する事業	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	情報公開事業費
シ 07	⑤刊行物に関する事業	平成29年版『日本美術年鑑』 刊行事業・出版事業『美術研究』	情報公開事業費
シ 08	④情報収集・成果公開に関する事業	平成30年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	情報公開事業費

無形文化遺産部

略番	分類項目	プロジェクト名	事業区分
ム 01	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	無形文化財の保存・継承に関する調査研究	基礎研究事業費
ム 02	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	基礎研究事業費
ム 03	③国際協力・交流等に関する事業	無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化	情報公開事業費
ム 04	⑤刊行物に関する事業	無形文化遺産部出版関係事業	情報公開事業費
ム 05	③国際協力・交流等に関する事業	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	国際遺産保護事業費

保存科学研究センター

略番	分類項目	プロジェクト名	事業区分
ホ 01	②保存修復に関する調査研究事業	文化財の生物劣化の現象解明と対策に関する研究	応用研究事業費
ホ 02	②保存修復に関する調査研究事業	保存と活用のための展示環境の研究	応用研究事業費
ホ 03	②保存修復に関する調査研究事業	文化財の材質・構造・状態調査に関する研究	応用研究事業費
ホ 04	②保存修復に関する調査研究事業	屋外文化財の劣化要因と保存対策に関する調査研究	応用研究事業費
ホ 05	②保存修復に関する調査研究事業	文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究	応用研究事業費
ホ 06	②保存修復に関する調査研究事業	近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究	応用研究事業費
ホ 07	⑤刊行物に関する事業	『保存科学』第60号の出版	情報公開事業費
ホ 08	⑥指導助言・研修等に関する事業	博物館・美術館等保存担当学芸員研修	研修協力事業費

文化遺産国際協力センター

略番	分　類　項　目	プロジェクト名	事 業 区 分
コ 01	④情報収集・成果公開に関する事業	文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信	情報公開事業費
コ 02	③国際協力・交流等に関する事業	アジア諸国等文化遺産保存修復協力	国際遺産保護事業費
コ 03	③国際協力・交流等に関する事業	保存修復技術の国際的応用に関する研究	国際遺産保護事業費
コ 04	③国際協力・交流等に関する事業	在外日本古美術品保存修復協力事業	国際遺産保護事業費
コ 05	③国際協力・交流等に関する事業	国際研修	国際遺産保護事業費

（2）　科学研究費助成事業交付一覧

（単位：千円）

研　究　課　題	研究代表者	交付額
基盤研究（A）		
アジア螺鈿文化交流史の構築―物質文化史の視点から―	小林公治	8,710
基盤研究（B）		
対外交流史の視点によるアジア螺鈿の総合的研究―大航海時代を中心に―	小林公治	300
日本美術の記録と評価についての研究－美術作品調書の保存活用	江村知子	7,280
白鳳時代の壁画の構造と材料に関する研究	犬塚将英	4,160
絵画に使用された絹・自然布の非破壊分析方法の開発と製法・修復に関する総合的調査	早川典子	2,340
ポンペイ遺跡壁画における無機物を主体とした保存修復材料による補強技法の確立	前川佳文	4,160
特別研究員奨励費（外国人）		
日本の無形文化遺産保護におけるジェンダーに関する研究	久保田裕道	100
基盤研究（C）		
常磐津節の音楽分析のための基盤研究	前原恵美	1,430
江戸時代の絵画における基底材に関する基礎的研究	安永拓世	1,300
ポスト1968年表現共同体の研究：松澤宥アーカイブズを基軸として	橘川英規	650
DNA 塩基配列情報に基づく文化財害虫の新規データベース構築	佐藤嘉則	1,300
博物館 IPM への ATP 拭き取り検査活用に向けた基礎的な研究	間渕創	520
白色 LED光照射に伴う蛍光性有機染料の変退色挙動とその抑制	吉田直人	650
鍾乳洞における照明植生を軽減する光環境に関する実験的研究	朽津信明	1,170
様々な文化財に使用された彩色材料への赤外線画像による画的調査の検討	秋山純子	1,040
地域文化の表象としての「箕」の形態に関する学際的研究	今石みぎわ	1,560
従属栄養性微生物による硫黄化合物の分解とそれに伴う腐食性ガス生成	片山葉子	1,690
若手研究		
マヤ地域の博物館における文化遺産保全と地域発展に向けた文化資源マネジメントの研究	五木田まきは	1,040
中世日本における中国美術の受容と羅漢の作例に関する調査研究	米沢玲	780
木材からの化学物質放散挙動の解明と博物館における選定指標の提案	古田嶋智子	1,950
古典的膠の製造方法と各用途適性の体系化	宇髙健太郎	1,300
南西諸島における風葬の定着過程に関する研究	牛窪彩絢	1,170
組積造建造物の通電による脱塩の適応可能性に関する検討	水谷悦子	1,430
研究活動スタート支援		
近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に向けた基礎的研究	金井健	1,430
歴史的煉瓦造建造物の保存に資する、煉瓦の電気的特性が塩類風化に及ぼす影響の解明	水谷悦子	1,430

（3） 受託調査研究一覧

（単位：千円）

研　究　課　題	依　頼　元	研究担当者	契約総額
国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務	文化庁	早川泰弘	36,857
特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務	文化庁	早川泰弘	18,606
被災資料有害物質発生状況調査業務	陸前高田市	早川泰弘	1,955
文化遺産国際協力コンソーシアム事業	文化庁	友田正彦	42,478
ブータン王国の歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業	文化庁	金井健	8,590
日本美術の魅力 （在外古美術品保存修復協力事業による修復作品里帰り展）	独立行政法人 日本芸術文化振興会	江村知子	8,894

（4） 共同研究等一覧

（単位：千円）

研　究　課　題	相　手　先	研究担当者	金　額
文化財修理に使用する膠の製造に関する技術開発、研究	一般社団法人国宝修理装潢師連盟	早川典子	150
航空資料保存の研究	一般財団法人日本航空協会	早川泰弘	400
ゲッティ・リサーチポータルへの明治期～昭和期（戦前）の展覧会資料（デジタル）の提供・公開について	ゲッティ研究所	江村知子	3,030 (8,208)

※複数年度にまたがる事業については括弧内に予算総額を記載

（5） 助成金一覧

（単位：千円）

研　究　課　題	助　成　元	研究代表者	助成額
近世の奄美・沖縄諸島における風葬の普及に関する文献史学的研究	公益財団法人髙梨学術奨励基金	牛窪彩絢	530*
北海道における災害リスクおよび減災に関するネットワーク構築と研修	文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）	林美木子	177
「鉄構造物の保存と修復」の英語版翻訳	公益財団法人東芝国際交流財団	中山俊介	1,450
山西省仏教彩塑像の制作材料と技法に関する調査 ―日中共同による保存修復に向けての基礎研究―	公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団	岡田健	500**
外国人研究者招致 （レミー・ドレフュス＝デュセーニュ氏）	公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団	早川典子	300**
無形文化遺産における木材の伝統的な利用技術および民俗知に関する調査研究	公益財団法人三菱財団	今石みぎわ	6,500
バガン遺跡群（ミャンマー）寺院祠堂壁画の保存修復	公益財団法人住友財団	前川佳文	3,550*
琉球国における中国式葬墓制の受容―殯を中心として―	学習院大学東洋文化研究所	牛窪彩絢	300

*新型コロナウイルス感染症拡大により実施不可のため次年度に繰越
**新型コロナウイルス感染症拡大により実施不可のため辞退

（6） 寄付金一覧

（単位：千円）

研　究　課　題	寄　付　者	担当部局	受入額
東京文化財研究所における研究事業の助成	株式会社東京美術倶楽部	文化財情報資料部	1,000
東京文化財研究所における研究成果の公表（出版事業）	東京美術商協同組合	文化財情報資料部	1,000

年度内主要事業一覧

期　　日	事　　業　　名
書面開催	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会研究所・センター調査研究等部会
書面開催	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会総会
書面開催	文化財防災に関する研究協議会
2 年 8 月 23 日	ハンズオン・セミナー「文化財写真入門―文化財の記録としての写真撮影実践講座」（上原美術館）
2 年 9 月　5 日	第 27 回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「コロナ禍における文化遺産国際協力のあり方」（オンライン）
2 年 9 月 25 日	【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム 1「伝統芸能と新型コロナウィルス」（オンライン併用）
2 年10月　5 日~15 日	博物館・美術館等保存担当学芸員研修
2 年10月 19 日	令和2 年度防災ネットワーク推進事業研修会「文化財防災と心理社会的支援」（国立アイヌ民族博物館）
2 年10月 30 日	第 54 回オープンレクチャー「かたちからの道、かたちへの道」
2 年11月 12 日, 25 日	オンライン国際研修「3 次元写真測量による文化遺産の記録」
2 年11月 21 日	研究会「東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理」（オンライン）
2 年12月　5 日~ 3 年 1 月 28 日	「箕のかたち―自然と生きる日本のわざ」展（ギャラリーウオーク）
2 年12月　4 日~11 日	国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」（オンライン）
2 年12月 14 日	文化財の材質・構造・状態調査に関する研究会「文化財に用いられている鉛の腐食と空気環境」
2 年12月 23 日	文化財の記録作成とデータベース化に関するセミナーシリーズ「ディジタル画像の圧縮～画像の基本から動画像まで～」
2 年12月 25 日 ~ 3 年 1 月 31 日	第 15 回無形民俗文化財研究協議会「新型コロナ禍における無形民俗文化財」（オンライン）
3 年 1 月 22 日	国別文化遺産保護研修（ブータン）「リビングヘリテージの側面に着目した伝統的民家の保存と修復」（オンライン）
3 年 1 月 31 日	第 28 回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産と SDGs Ⅲ　―地域社会における文化遺産の役割を考える―」（オンライン）
3 年 3 月　4 日	「保存と活用のための展示環境」に関する研究会－照明と色・見えの関係－（オンライン併用）
3 年 3 月 12 日	ハンズオン・セミナー「文化財写真入門―文化財の記録としての写真撮影実践講座」（東北歴史博物館）
3 年 3 月 20 日	第 14 回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座「日本の伝統的な管楽器と竹材」

3．東京文化財研究所関係事業索引

凡　例

(1) この索引は、令和2年度に東京文化財研究所が実施したすべての事業を、財源の種類を問わず網羅している。
(2) 事業は五十音順に配列し、各事業名称の末尾に次の略号を付すとともに、掲載頁を示した。

運営費交付金によるプロジェクト……【交付】
科学研究費助成事業……【科研】
受託調査研究……【受託】
共同研究……【共同】
助成金……【助成】
その他の調査研究……【その他】

(3) ＊は新型コロナウイルス感染症拡大により実施不可のため次年度に繰越したものを示す。
＊＊は新型コロナウイルス感染症拡大により実施不可のため辞退したものを示す。

あ　アジア諸国等文化遺産保存修復協力……【交付】 53
アジア螺鈿文化交流史の構築―物質文化史の視点から……【科研】 85
江戸時代の絵画における基底材に関する基礎的研究……【科研】 93
屋外文化財の劣化要因と保存対策に関する調査研究……【交付】 48

か　外国人研究者招致（レミー・ドレフュス=デュセーニュ氏）＊＊……【助成】
絵画に使用された絹・自然布の非破壊分析方法の開発製法・修復に関する総合的調査……【科研】 89
近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に向けた基礎的研究……【科研】108
近・現代美術に関する調査研究と資料集成……【交付】 41
近世の奄美・沖縄諸島における風葬の普及に関する文献史学的研究＊……【共同】122
近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究……【交付】 50
ゲッティ・リサーチポータルへのデジタル資料の提供・公開……【共同】121
航空資料保存の研究……【共同】120
国際研修……【交付】 56
国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務……【受託】113
古典的膠の製造方法と各用途適性の体系化……【科研】105

さ　在外日本古美術品保存修復協力事業……【交付】 55
様々な文化財に使用された彩色材料への赤外線画像による画的調査の検討……【科研】 99
山西省仏教彩塑像の制作材料と技法に関する調査―日中共同による保存修復に向けての基礎研究―＊＊……【助成】
従属栄養微生物による硫黄化合物の分解とそれに伴う腐食性ガス生成……【科研】101
鍾乳洞における照明植生を軽減する光環境に関する実験的研究……【科研】 98
専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充……【交付】 59
組積造建造物の通電による脱塩の適応可能性に関する検討……【科研】107

た　対外交流史の視点によるアジア螺鈿の総合的研究―大航海時代を中心に―……【科研】 86
地域文化の表象としての「箕」の形態に関する学際的研究……【科研】100
中世日本における中国美術の受容と羅漢の作例に関する調査研究……【科研】103
DNA塩基配列情報に基づく文化財害虫の新規データベース構築……【科研】 95
「鉄構造物の保存と修復」の英語版翻訳……【助成】124
東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進……【交付】 80
『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』……【交付】 70
常磐津節の音楽分析のための基盤研究……【科研】 92
特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務……【受託】114

な　南西諸島における風葬の定着過程に関する研究……【科研】106
日本東洋美術史の資料学的研究……【交付】40
日本の無形文化遺産保護におけるジェンダーに関する研究……【科研】91
日本美術の記録と評価についての研究ー美術作品調書の保存活用……【科研】87
日本美術の魅力(在外古美術品保存修復協力事業による修復作品里帰り展)……【受託】118

は　バガン遺跡群(ミャンマー)寺院祠堂壁画の保存修復*……【助成】126
白色LED光照射に伴う蛍光性有機染料の変退色挙動とその抑制……【科研】97
白鳳時代の壁画の構造と材料に関する研究……【科研】88
博物館IPMへのATP拭き取り検査活用に向けた基礎的な研究……【科研】96
博物館・美術館等保存担当学芸員研修……【交付】76
被災資料有害物質発生状況調査業務……【受託】115
美術館・博物館等の環境調査と援助・助言……【交付】79
美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開……【交付】42
ブータン王国の歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業……【受託】117
プロジェクトの一環として刊行された刊行物……【交付】70
プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等……【交付】63
文化遺産国際協力コンソーシアム事業……【受託】116
文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信……【交付】62
文化財修理に使用する膠の製造に関する技術開発、研究……【共同】119
文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究……【交付】49
文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究……【交付】57
文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究……【交付】39
文化財の材質・構造・状態調査に関する研究……【交付】47
文化財の材質・構造に関する調査・助言……【交付】79
文化財の収集・保管に関する指導助言……【交付】76
文化財の修復及び整備に関する調査・助言……【交付】78
文化財の生物劣化の現象解明と対策に関する研究……【交付】45
文化財の虫菌害に関する調査・助言……【交付】77
文化財防災ネットワーク推進事業……【その他】128
文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力……【交付】51
ポスト1968年表現共同体の研究：松澤宥アーカイブズを基軸として……【科研】94
『保存科学』第60号の出版……【交付】69
保存修復技術の国際的応用に関する研究……【交付】54
保存と活用のための展示環境の研究……【交付】46
北海道における災害リスクおよび減災に関するネットワーク構築と研修……【助成】123
ポンペイ遺跡壁画における無機物を主体とした保存修復材料による補強技法の確立……【科研】90

ま　マヤ地域の博物館における文化遺産保全と地域発展に向けた文化資源マネジメントの研究……【科研】102
無形文化遺産における木材の伝統的な利用技術および民俗知に関する調査研究……【助成】125
無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化……【交付】61
無形文化遺産に関する助言……【交付】77
無形文化遺産部出版関係事業……【交付】69
無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集……【交付】52
無形文化財の保存・継承に関する調査研究……【交付】43
無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究……【交付】44
木材からの化学物質放散挙動の解明と博物館における選定指標の提案……【科研】104

ら　琉球国における中国式葬墓制の受容―殯を中心として―……【助成】127
令和元年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業『美術研究』……【交付】69
令和2年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）……【交付】60
歴史的煉瓦造建造物の保存に資する、煉瓦の電気的特性が塩類風化に及ぼす影響の解明……【科研】109

独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所年報 2020

発行日：2021年6月30日

発行所：独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所

〒110-8713
東京都台東区上野公園13-43

TEL　03-3823-2241（番号案内）
FAX　03-3828-2434
https://www.tobunken.go.jp/
info@tobunken.go.jp

編　集：文化財情報資料部
制　作：CURIO EDITORS STUDIO（柴田 卓）
印　刷：ヨシミ工産株式会社

Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Heritage
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

ANNUAL REPORT 2020

Isuued on 30 June, 2021
Published by Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
13-43, Uenokoen, Taito-ku, Tokyo 110-8713, JAPAN

Edited by Department of Art Research, Archives and Information Systems
Designed and DTP by Curio Editors Studio（SHIBATA Takashi）
Printed by Yoshimi Kohsan Corporation

© Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, 2021